

平成25年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」

平成25年度
全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）
の結果を活用した
学力に影響を与える要因分析に関する
調査研究

国立大学法人お茶の水女子大学

平成26年3月28日

目 次

目次	i
序章 研究計画と本報告の構成	1
<第1部> 統計的分析	
第1章 家庭の社会経済的背景（SES）の尺度構成	13
第2章 家庭環境と子どもの学力	
(1) 家庭の教育投資・保護者の意識等と子どもの学力	16
(2) 保護者の関与・家庭の社会経済的背景・子どもの学力	42
第3章 社会経済的背景と子どもの学力	
(1) 家庭の社会経済的背景による学力格差　ー教科別・問題別・学校段階別の分析ー	57
(2) 地域の社会経済的背景による学力格差	71
第4章 家庭の社会経済的背景による不利の克服	
(1) 社会経済的背景別にみた、学力に対する学習の効果に関する分析	83
(2) 学校内学力格差が小さい学校の取組	109
第5章 児童生徒の意識・行動及び学校での学習指導と学力	
ー不利を克服している児童生徒に着目してー	119

＜第2部＞ 事例研究

第6章 高い成果を上げている学校の抽出	
.....	127

第7章 高い成果を上げている学校 一事例研究－	
.....	138

＜第3部＞ 補論

第8章 ウェイトづけ	
.....	146

第9章 学校の地域特性について	
.....	156

第10章 高い成果を上げている学校、教育委員会の訪問レポート	
.....	207

第11章 保護者調査単純集計結果	
.....	232

執筆者一覧	246
-------	-----

序章 研究計画と本報告の構成

耳塚寛明・浜野 隆

本研究は、家庭の経済状況等も含め、家庭・地域・学校・施策等の諸要因が児童生徒の学力等(学力や学習意欲)とどのように関係しているのかを総合的に分析するものである。これまで実施されてきた様々な調査研究においても、家庭・地域・学校・施策等が子どもの学力と一定の関係があることは指摘されてきた。たとえば文科省によるお茶の水女子大学への委託研究・補完調査(注)は、全国学力・学習状況調査のデータを、補完的に実施した保護者調査のデータと結合させ、家庭的背景による学力格差の状況を明らかにした嚆矢として位置づけられるが、調査対象が5政令都市の100校に限定されており、限界がある。ナショナル・サンプルにおいてそれが検証されるのは本研究が初めての試みであり、学術的にも政策・実践的にも歴史的な意義を有する。本研究においては、どのような要因が児童生徒の学力と関係が強いのか、家庭・地域・学校・施策に関わる諸要因のうちどの要素が学力と深い関係にあるのか、学力格差(家庭の経済状況等による学力差)を克服する手立てとして家庭・地域・学校・施策のいかなる要素が鍵となるのか、といった点について実証的に明らかにしていく。学力等との関係の分析にあたっては、問題内容、教科、学校段階別に分析を行う。

また、児童生徒の学力向上に高い成果を上げている学校を抽出し、そのような学校や学校を所管する教育委員会の特徴・取り組みについても明らかにし、学校現場での実践的課題を提示する。統計的分析と訪問調査の結果を照合しながら、実践的なインプリケーションを抽出していく。

(注) 次を参照。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/045/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2009/08/06/1282852_2.pdf

(1) 調査研究の内容

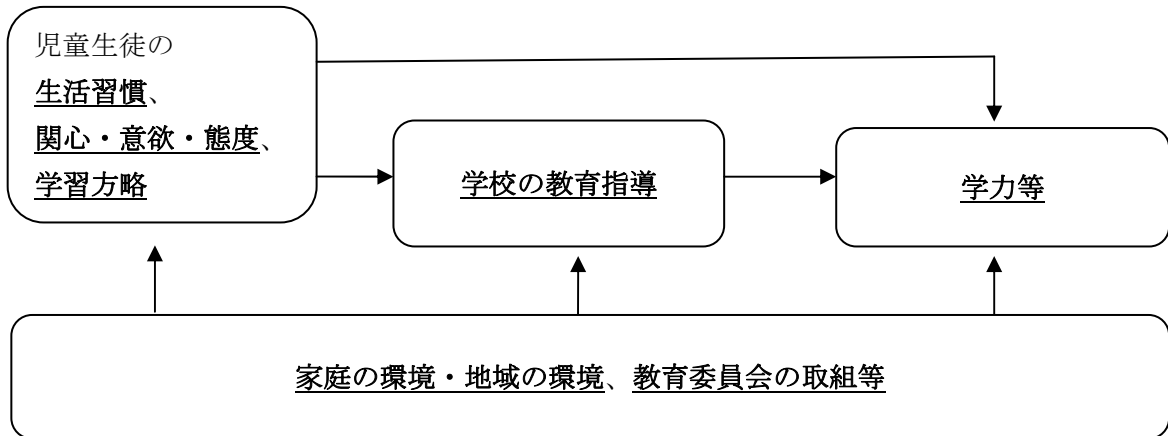
1 ウェイトに関する方針

本研究に関する実施委員会のメンバーである土屋准教授が作成したウェイトづけの手順によって行う(第8章)。

2 児童生徒の学力等に影響を与える要因分析

児童生徒の学力等に影響を及ぼす要因を分析する。分析にあたっては、子どもの学力等に影響する要因としての「家庭・地域の環境」「児童生徒の生活習慣や関心・意欲・態度」「学校の教育指導」「教育委員会の取組等」の関係構造を下記の図のようにとらえ、諸変数間の関係を検討する。具体的な分析課題は下記(a)～(f)に示すとおりである。

図表序-1 研究の枠組み



(a)家庭の社会経済背景の尺度構成

日本における教育調査は保護者調査を実施することが少なく（国際比較学力調査のTIMSS 及び PISA でも、保護者調査はオプションとしてあるが、日本では実施されていない）、且つ生徒調査でも家庭的背景に関する質問項目が限られていたり、代替指標を使っていることが多い。しかし家庭の社会経済背景による学力格差を正確に把握するためには、信頼性・妥当性の高い「家庭の社会経済背景」の指標を使うことが要となる。全国学力・学習状況調査票では保護者に直接家庭の社会経済背景を聞いているため信頼性がより高いと思われる。また複数の質問項目が含まれていることから、「家庭の社会経済背景」の合成変数を作ることが可能である。合成変数を作ることにより、家庭の社会経済背景を総体としてとらえ、家庭の社会経済背景のグループ間（例えば上位階層と下位階層）の比較が行えるため、解釈がより容易になる。またモデルも簡素化され、共線性の問題も軽減される。近年は米国の全国学力調査（NAEP）や国際比較学力調査（PISA）などでも、合成された指標 SES（Socio-Economic Status）が最初からデータに含まれている。

(b)家庭の社会経済背景と児童生徒の学力等の関係

1. 家庭の社会経済背景による学力格差の程度はどの問題において大きいのか

一般的には知識型の問題よりも活用型の問題の方が、応用力を問われるため、家庭の影響が大きくなると想定される。しかし、カリキュラムの習得を測る国際比較学力調査TIMSS と、知識の活用を問う国際比較学力調査 PISA でも、そのような違いが実証されているわけではない。全国学力・学習状況調査では、同一の生徒がA問題とB問題のテストを受けているため、それぞれのスコアを回帰分析の従属変数として、家庭の社会経済背景の標準化係数を比較することにより、どのような学力において、家庭の社会経済背景による学力の差異が最も大きいかを明らかにする。また、A問題・B問題の別のみならず、個別問題別にも、家庭の社会経済背景と正答率との関係を分析する。問題別に分析することにより、家庭の社会経済背景による差の大きな能力尺度はどのようなものなのかの検討が可能となる。

2. 家庭の社会経済背景による学力格差の程度は、どの教科で大きいのか

一般的に国語は、家庭の読書習慣が寄与するところが大きいため、家庭の社会経済背景

の影響が大きくなると想定される。全国学力・学習状況調査では、同一の生徒が算数と国語のテストを受けているため、それぞれのスコアを回帰分析の従属変数として、家庭の社会経済背景の標準化係数を比較することにより、どの教科において、家庭の社会経済背景による学力の差異が最も大きいかを明らかにする。

3. 家庭の社会経済背景による学力格差の程度は、どの学校段階で大きいのか

子どもの年齢が低いほど、保護者と過ごす時間が長いこと、発達上も保護者との愛着が強いことから、中等教育段階よりも初等教育段階の方が家庭の社会経済背景の影響が大きいと想定される。一方、中等教育段階の方が学校外教育の影響が蓄積しているため、学校外教育投資の規定要因である家庭の社会経済背景が学力に及ぼす影響が大きいと推測することも可能である。全国学力・学習状況調査は小学6年生と中学3年生で実施されているので、それぞれのサンプルで回帰分析を行い、家庭の社会経済背景の回帰係数を比較することにより、どの学校段階において家庭の社会経済背景による学力の差異が最も大きいかを明らかにする。

4. 家庭の社会経済背景による学力格差の程度は、どのような地域で大きいのか

家庭の社会経済背景による学力格差はどの地域でも一様に現れるものではなく、地域によってその現れ方が異なることが予想される。本研究では、地域別のクロス集計や地域別の回帰分析などを行い、地域要因が家庭の社会経済背景による学力格差とどのような関係にあるのかを検討する。

(c) 家庭の家庭の教育投資・保護者の意識等と子どもの学力の関係

保護者調査の結果をもとに、家庭環境と子どもの学力（特に、家庭の教育投資・保護者の意識等と子どもの学力）の関係を分析する。具体的には、保護者調査における次の項目について、子どもの学力との関係を見ていく：家庭の教育投資と子どもの学力、生活習慣に関する保護者の働きかけ、しつけや人間形成に関する保護者の働きかけ、本・新聞・絵本の読み聞かせ等、読書に関する働きかけ、学習・勉強に関する直接的な働きかけ、文化・芸術・自然体験に関する働きかけ、テレビゲームや携帯電話に関するルールの設定、子どもとの会話や一緒に過ごす時間、保護者が持つ学歴期待と教育意識、学校についての保護者の意識、保護者の社会関係と参加、保護者自身の行動、保護者の年齢・仕事・収入・学歴等。

(d) 家庭の社会経済背景が学力に影響を及ぼすメカニズム：家庭環境

下記の点について、家庭の社会経済背景による学力格差の背景について検討する。

1. 家庭の社会経済背景による学力格差は、保護者の子どもの接し方（家庭での規範、ルール、習慣）の差異により、説明されるか。

2. 家庭の社会経済背景による学力格差は、保護者の習慣や規範（保護者の教育方針）の差異により、説明されるか。

3. 家庭の社会経済背景による学力格差は、保護者の文化的資本（親子で行う文化的活動）の差異により、説明されるか。

4. 家庭の社会経済背景による学力格差は、家庭での児童生徒の取り組みや生活習慣によって説明されるか。これは、「早寝早起き朝ご飯」に象徴される、生活習慣が学力に与える

影響を分析し、家庭的背景を統制した上で本当に効果があるのかを検証することにもなる。

(e)不利な家庭状況にあるにも関わらず高い達成度を上げている児童生徒の分析

家庭的な背景が学力（学業成績）に大きな影響を与えることは、これまでも各種の調査で明らかにされてきたところである。他方で、学力を形成するうえで不利な家庭環境におかれていながらも、良好な成績をあげる子どもが存在することも事実である。近年は、困難な状況を乗り越える回復力・柔軟性を「レジリエンス」(Resilience) という鍵概念で把握し、不利な状況で成果をあげている事例を手がかりに、困難に打ち勝つ条件を探る研究が着目を集めている。PISA においても、社会経済背景を測定する指標 (ESCS) をもとに、不利な状況のなかでレジリエンスを発揮する生徒の割合の測定を試みている。

今回の分析では、家庭的背景から推計される得点よりも高い成績をあげた児童生徒を、「レジリエンスを発揮した事例」とみなし、どのような条件がかれらの好成績を可能にしているのかを探る。レジリエンスを発揮したケースのプロファイルを確認したうえで、上の図にもとづき、以下のような分析をおこなう

- (1)家庭環境がレジリエンスの有無に与える影響
- (2)学校要因がレジリエンスの有無に与える影響
- (3)本人の性格・生活習慣がレジリエンスの有無に与える影響（他の要因を媒介した効果も含む）

(f)児童生徒の生活習慣や関心・意欲・態度および学校での学習指導が学力等に与える影響の分析

家庭の社会経済的背景と子どもの学力との間には強い相関があるが、社会経済的背景が低いからといって、必ずしもすべての子どもの学力が低いわけではない。社会経済的背景が低くても高い学力をとっている子どもは一定数おり、それらの子どもがどのような特徴を持っているのかを明らかにすることに、学力格差緩和の鍵がある。全国学力・学習状況調査では、児童生徒質問紙で児童生徒の生活習慣や関心・意欲・態度・教科を学ぶときの理解の仕方や問題の解き方を把握するための項目、学校での学習指導に関する項目が設けられている。これらの回答結果を用いて、低い社会経済的背景にありながら高学力を達成している子ども（およびその保護者）の意識・行動、学校での学習指導の特徴を明らかにする。

3 高い成果を上げている学校の取組等に関する分析

ここまでの統計分析によって、学校に通う児童生徒の家庭や地域の環境がどの程度子どもの学力に影響するかが明らかにされよう。その推計式は、学校に通う児童生徒の家庭や地域の環境との関係から、その学校がどの程度の学力を達成すると予測されるか(推測値)の推計を可能にする。本研究では、その推測値と実際値の違いを見て、実際値が推測値を大きく上回る学校を「高い成果を上げている学校」とみなす。そして、実際値が推測値を特に大きく上回る学校を抽出し、地域的なバランス、学校段階、調査の実施可能性などを総合的に検討し、訪問調査の対象となる 8 校（小学校 4、中学校 4）を選定することにする。

る。その際、その学校を所管する教育委員会にも同時に調査を実施し、学校での学習指導と施策との関係についても検討する。（実際の訪問対象校は、調査拒否が 1 校よりあり、小学校 4、中学校 3 であった）

（２）事業の実施体制

お茶の水女子大学に「実施委員会」を設置して調査研究を実施する。実施委員会の構成員は、下表の通りである。

図表序-2 事業の実施体制	
氏名	所属・職位
耳塚寛明	お茶の水女子大学理事・副学長(教授)
浜野隆	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授
富士原紀絵	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授
中島ゆり	お茶の水女子大学総合学修支援センターリサーチフェロー
土屋隆裕	情報・システム研究機構統計数理研究所准教授
山田哲也	一橋大学大学院社会学研究科准教授
垂見裕子	早稲田大学高等研究所准教授
中西啓喜 *	お茶の水女子大学文教育学部研究員
* 研究補佐として参加	

（３）本報告の構成と結果の要約

本報告の構成ならびに主な知見は以下のとおりである。

＜第 1 部＞統計的分析

第 1 章 家庭の社会経済的背景（SES）の尺度構成

本研究では、複数の質問項目が含まれていることから、「家庭の社会経済的背景（SES）」の合成尺度を構成した。具体的には、三つの変数（家庭の所得、父親学歴、母親学歴）を合成し、得点化した。

保護者調査では、家庭の社会経済的背景に関しては、父親学歴、母親学歴、家庭の所得、父親職業、母親職業に関する 5 つの質問項目が含まれている。一般的には、社会経済的背景（SES）は、職業、学歴、所得の三つの要素から構成されるものとされてきたが、今回の調査の父親職業、母親職業に関しては、職業の中味よりも職業の形態（例えば「常勤職員」、「非常勤職員」、「自営業・家業手伝い」など）をたずねているため、職業威信スコアのように一定の序列を設定することが困難と判断した。よって、本研究の社会経済的背景の合成尺度には父親職業、母親職業は含めずに、家庭の所得、父親学歴、母親学歴のみを

合算した。

第2章 家庭環境と子どもの学力

(1) 家庭の教育投資・保護者の意識等と子どもの学力

保護者調査票の各項目と子どもの学力との関係をしらべた結果、次の点が明らかになった：①学校外教育支出と学力との関係は強く、学校外支出が多い家庭ほど子どもの学力も高い。世帯収入が高くなるにつれ学校外教育支出も多くなる傾向がある。負担感と学力との間には明確な関係は見られない。②生活習慣と学力との関係については、「子どもが決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている」「子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている」「毎日子どもに朝食を食べさせている」家庭の子どもの方が高い学力を示している。③しつけや人間形成に関する保護者の働きかけに関しては、「自分でできることは自分でさせている」「子どものプライバシーを尊重している」「子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている」に該当する家庭の子どもの方が学力が高い。④本や新聞を読むことに関する働きかけは、子どもの学力と非常に強い関係が見られる。⑤「普段、子どもの勉強をみている」「計画的に勉強するようにうながしている」「子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している」保護者の子どもほど概ね高学力の傾向が見られる。⑥子どもと一緒に「美術館や劇場に行く」「博物館や科学館に行く」「図書館に行く」家庭ほど子どもが高学力である。⑦「テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲームを含む）で遊ぶ時間を限定している」「携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている」または、それらを「持たせていない」家庭の方が子どもの学力が高い。⑧「子どもから学校での出来事について話を聞いている」「子どもと勉強や成績のことについて話をする」「子どもと将来や進路についての話をする」「子どもと友達のことについて話をする」「子どもと社会の出来事やニュースについて話をする」保護者の子どもほど学力が高い。⑨子どもに高い学歴を期待する保護者の子どもほど学力が高い。⑩「子どもが自立できるようにすること」「人の気持ちが分かる人間になること」「自分の意見をはっきり言えるようになること」「将来の夢や目標に向かって努力すること」を重視する保護者の子どもほど学力が高い。⑪「学校の教育目標やその達成に向けた方策を知っている」「学校や学級の教育活動に関する情報提供（学校のホームページ、学校だよりや学級だよりなど）は役に立っている」という保護者の子どもほど学力が高い。⑫「授業参観や運動会などの学校行事への参加」「ボランティアでの学校の支援」をよくする保護者の子どもほど学力が高い。⑬「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもの教育に関わってくれる人が多い」と感じている保護者の子どもほど学力が高い。⑭保護者自身の生活や行動は、子どもの学力と深く関係している。保護者自身が「規則正しい生活を心がけている」「地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がある」「本を読む」「テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る」「新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む」という家庭の子どもは学力が高い。⑮保護者の年齢が45～49歳の年齢層の子どもの学力が相対的に高い。⑯父親が常勤職員の子どもの学力が相対的に高い。⑰世帯収入が高いほど子どもの学力が高い。⑱保護者の最終学歴が高いほど子どもの学力が高い。⑲家庭の社会経済的背景（SES）が高いほど子どもの学力は高い。

(2) 保護者の関与・家庭の社会経済的背景・子どもの学力

本節では、保護者のどのような行動や子どもとの関わり方が、子どもの学力に強い影響力を及ぼすのかを検証した。SES の高い保護者ほど戦略的に子どもの教育に関わることが繰り返し実証されていることを踏まえ、SES との関連を考慮して分析を行った。主な知見は次の3点である。

第一に、家庭における読書活動、生活習慣に関する働きかけ、親子間のコミュニケーション、親子で行う文化的活動、いずれも学力に一定のプラスの影響がある中で、特に家庭における読書活動が子どもの学力に最も強い影響力を及ぼすことが明らかになった。家庭における読書活動を通して、子どもは、文脈の中の言語の価値を理解したり、読む習慣を身につけたり、新しいことを学んだり新しい情報を収集する力を習得していると推測される。

第二に、上記の保護者の行動・関わり方はいずれも SES を統制すると学力への影響力が縮小される。これは、SES の高い保護者ほど、このような行動・関わり方を積極的に行っていることに起因する。特に生活習慣や文化的活動の影響力の縮小率が大きかったことは、家庭教育を推進する上で、SES の低い保護者がこれらの面において不利であること（現状として SES の高い保護者と比べると、これらの行動や子どもとの関わり方を行っていない、行えない状況にあること）を考慮する必要がある。

第三に、小6と中3の横断的調査のデータを比較する限り、小学生の方が、子どもの学力が保護者の行動や関わり方に強く規定されることが明らかになった。このことは、特に幼少期の家庭教育の重要性を示唆している。

第3章 社会経済的背景と子どもの学力

(1) 家庭の社会経済的背景による学力格差 ―教科別・問題別・学校段階別の分析―

①保護者の社会経済的背景 (SES) は、学力テストの正答率と密接な関係を持っている。分析では、教科や問題の違いを問わず、小学校・中学校の両方で SES が高い保護者の子どもほど学力テストの正答率が高い傾向が認められた。

②分析モデルに変数を逐次追加することによる結果の変化を見る限りでは、SES が子どもの学力に影響を与える経路には、保護者の社会経済的な背景が直接的に影響する経路と、保護者の教育期待や子どもの学習時間を媒介した間接的な経路の双方があるように思われる。

③他方で、SES を統制した場合でも保護者の教育期待や子どもの学習時間は学力に対して統計的に有意な影響力が認められる。この結果は、保護者の社会経済的な背景とは独立した要因によって子どもの学力が形成されることを示唆している。しかしながら、先に述べたように SES は教育期待や学習時間を媒介して学力に影響を与えていることが予想されるため、教育期待や学習時間が持つ固有の効果を過度に期待することは難しいように思われる。

④回帰分析の予測値と実測値の当てはまりを示す修正済 R 二乗値はもっとも高いものでも 0.3 程度（全体の分散の 3 割を説明）であることにも留意する必要がある。今回の分析に用いたモデルでは想定していない要因が子どもの学力に影響を与えている可能性がある

ことを確認しておきたい。

⑤社会関係資本に関連すると思われる質問項目を独立変数に用いたところ、個人が保持する社会関係資本の代理指標として解釈できる「子育て・教育の悩みを相談する友人の数」については、有意かつ安定した効果が認められなかった。この質問項目は個々の保護者が社会関係資本をどの程度保持しているかを表すと解釈できる一方で、子どもが何らかの問題や課題を抱えている者ほど、相談する機会が多くなることも予想されるため、明確な結果が出なかったように思われる。

⑥社会関係資本に関連するもう一つの質問項目、子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うかどうかを尋ねた項目への回答結果は、ほとんどのモデルで統計的に有意な影響が認められた。この結果は、集合財としての社会関係資本が多いほど、子どもの学力が高くなる可能性を示唆している。ただし今回は個人レベルの回答結果を分析に用いていること、正答率を高める効果は他の変数と比べると小さい点に留意する必要がある。

⑦小学校と中学校を比べると、前者のほうが他の変数を統制した後も SES スコアの影響力が強く認められた。子どもの年齢が相対的に低いほうが、保護者の社会経済的な背景の影響が強いことを予想させる結果である。

⑧教科別に結果を比較すると、国語のほうが算数・数学よりも性差による影響が強い。全体的に男子児童生徒は女子よりも正答率が低くなる傾向があるが、国語ではよりその傾向が強まる。国語でこのような違いがなぜ生じるのかについては、今回のデータでは十分に明らかにすることができなかった。算数・数学で性差が小さい結果は、ジェンダー秩序が教科に対する選好に影響することで生じているのかもしれないが、この仮説を検証する作業は今後の課題としたい。

⑨国語では B 問題で性差がやや強まるなどの特徴が認められるが、A 問題・B 問題の違いに起因する系統的な差異は見いだせなかった。

⑩SES スコアが学力に対して直接に影響を与える経路には、どのような内実が伴っているのか、そのメカニズムを探るために、SES カテゴリ別に子どもとの接し方を比較した。その知見は以下の通りである。

- ・「人の気持ちが分かる人間になること」を重視する、「悪いことをしたらきちんと叱っている」、「自分でできることは自分でさせている」など、子どもが社会性を身につけ、自立するための教育的な関与のあり方を問うた項目については SES カテゴリによる差はそれほど大きくなく、どのカテゴリの平均値も高い。社会経済的な背景の違いを問わず、保護者たちが熱心に子育てを行う様子がこれらの結果から窺える。

- ・SES による違いが顕著な質問項目は、学歴に対する期待の高さや英語や外国の文化に親しませようとする姿勢、良い成績を取ることへのこだわり、活字文化に親しませよう働きかけの度合いに関するものであった。

- ・「子どもに『勉強しなさい』とよく言っている」かどうかを問うた質問には SES カテゴリ別の差はそれほど大きくない一方で、「計画的に勉強するようにうながしている」傾向は SES が高い保護者に顕著であった。

- ・子どもとの日常会話についても、普段の出来事に関する会話についてはそれほど大きな差が見られないが、「読んだ本の感想を話し合ったりしている」傾向は SES が高くなるにつれて強まり、平均の差も相対的に大きい（「社会の出来事やニュースについて

話をする」も中程度ではあるが、SES カテゴリによる違いが認められる項目である)。

(2) 地域の社会経済的背景による学力格差

本節では、地域 SES 区別に子どもの高い学力と関連のある学校の取り組み、地域のあり方を検討した。小学校では **Highest SES** の地域以外において、児童、保護者、教員の地域への関心と参加が児童の高い学力と相当に関連がある。その他、**Lowest SES** の地域と **Lower middle SES** の地域においては、読む・書く・聞くことを重視した学校の取り組みが高い学力と関連している。また、これらの地域ではコンピュータとインターネットの活用も高い学力と関連している。これは、学校の設備を整えることの重要性を示唆している。**Upper middle SES** の地域では、博物館・科学館、図書館を利用した授業、学力調査の結果の活用、地域の人の学校参加といった学校外の資源の活用が高い学力と関連していた。また、保護者への情報提供といった保護者と学校の良い関係性、経験年数 20 年以上の教員の比率が高いことも、この地域においては有効であった。**Highest SES** の地域に特徴的なのは少人数指導・習熟度別学習と補充的な学習サポートの有効性である。この地域の学校においては児童の家族 SES に主観的に大きな格差があるものと考えられる。このような場合、一斉授業よりも個別的な指導が必要で、かつ有効であると見られる。

中学校では、小学校の分析で見られた以上に、生徒、保護者の地域・学校への関心と参加が高い学力と関連していた。いずれの地域 SES 区分においても、生徒と保護者が地域と学校に関心をもち参加する、地域の人が学校に関わりをもつ、学校は保護者に情報を提供し良好な関係を形成する、といった相互の関わりがあるところで子どもの学力が高くなっている。**Lowest SES** と **Lower middle SES** の地域においては、まずは地域、学校、保護者、生徒の関係性の構築といった学習環境の整備が重要となり、**Upper middle SES** の地域ではそれに加えて宿題や補充的な学習サポートの充実、教職員同士の協力、学力調査の結果の利用など、学校内での学習環境を整備することがよい。**Highest** の地域では、思考力を高める指導や生徒の発言や活動の時間の確保など、生徒自身の能力を引き出す授業が高い学力に関連している。これは、他の地域 SES 区分よりも地域的な学習環境が整っているためと推測できよう。その他、小学校と同様に **Upper middle SES** の地域、さらに **Highest SES** の地域において経験年数 20 年以上の教員比率の高さが学力の高さに影響している。

第 4 章 家庭の社会経済的背景による不利の克服

(1) 社会経済的背景別にみた、学力に対する学習の効果に関する分析

本節では、①学力が社会経済的背景によって規定されていることを把握した上で、②児童生徒の学習時間や学習方法が、家庭環境の不利を克服することが可能かどうかについて分析した。主要な知見は以下の 4 点である。

第一に、学力は児童生徒の社会経済的背景および学習時間の量によって規定される。すなわち、社会経済的背景が有利なほど、また学習時間が多いほど学力が高いのである。

第二に、その一方で、社会経済的背景が **Lowest SES** グループの児童生徒が「3 時間以上」勉強して獲得する正答率の平均値は、**Highest SES** グループで「全く勉強しない」児童生徒が獲得する正答率の平均値よりも低い。ただし、箱ひげ図で社会経済的背景ごとに

学習時間が学力に与える効果の分布を確認した結果、両グループの学力の分布には重なりが見られたことに注意が必要である。

第三に、とはいえ、学力は社会経済的背景に規定されつつも、学習時間の多さが高い学力の獲得に対して独立した効果を持っている。確かに学習時間のみで、家庭背景の不利を克服（逆転）することは難しいかもしれないが、学習（＝努力）することが高い学力の獲得につながるのである。とりわけ、学力につながる学習時間のポイントが、小6時点では「30分以上」であり、中3時点では「全くしていないかどうか」という具合に異なるということは新たな知見だといえよう。

第四に、宿題をする児童生徒ほど高い学力を得ることができることが把握できた。これは、社会経済的背景や学習時間とは別に、学習方法が独立して学力に与えるポジティブな効果である。学力格差縮小には、宿題ないし家庭学習の取り組みの重要性が示唆される。むろん、単に宿題を多く出したりすれば良いということではない。宿題や家庭学習の重要性を教員団が共通に理解し、また適切なフィードバックを児童生徒に返すという一連の実践により、効果を発揮すると考えられる。

（２）学校内学力格差が小さい学校の取組

学力格差、またその是正策を考えるにあたっては、学校内格差と学校間格差を分けて考える必要がある。本節では、学校の中において、家庭の社会経済的背景が恵まれた子どもと、家庭の社会経済的背景が不利な子どもの学力の差異が小さい学校に注目し、それらの学校ではどのような取組が行われているのかを分析した。

その結果、まず大きな傾向として、大都市・中核市では学校内における子どものSESの影響度が学校によりばらつきがあるのに対して、小規模な市町村では学校ごとのばらつきが小さい点が明らかになった。留意しなければならないのは、小規模な市町村の学校では、子どものSESによる格差がないというわけではなく、あくまでもSESによる格差の程度が学校間で異ならないということである。子どものSESのばらつきも、学校のSESのばらつきも、大都市・中核市の方が小規模な市町村より大きいことが起因していると考えられる。また学校における取組も、大都市・中核市の方が概してばらつきが大きい傾向が認められた。

大都市・中核市の学校では、放課後の補充学習や習熟の遅いグループに対する少人数指導などを取り入れて、指導面で低学力層の底上げに力を入れている学校が、家庭背景による学校内学力格差を縮小させていることが明らかになった。また小中連携においても生活面での移行のみならず、教科の指導内容や指導方法において中学校と積極的に連携を行っている学校や、家庭学習においても与えるだけではなく、課題の与え方について校内の教職員で共通理解を図るなど、システムとして小中連携や家庭学習に取り組んでいる学校が、家庭背景の不利な子どもの学力を向上させていることが認められた。ただし、説明された分散が小さいことから、本節でとりあげた学校の取組以外に、学校のどのような要因が学校内の学力格差の縮小に寄与するのか、さらなる分析が必要である。

第5章 児童生徒の意識・行動及び学校での学習指導と学力

ー不利を克服している児童生徒に着目してー

小学校では、Lowest SES の 17.3%が算数 B の高学力層 (A 層)、中学校では Lowest SES の 12.1%が数学 B の高学力層 (A 層) に含まれる。本章では、このような、Lowest SES でかつ高学力を達成している子ども (および保護者) の意識・行動、学校での学習指導の特徴を分析した。

その結果、Lowest SES で学力 A 層の子どもには、次の 7 つの特徴が見られた：①朝食を毎日とり、同じくらいの時刻に寝る、同じくらいの時刻に起きる、テレビを見過ぎない、テレビゲームをやり過ぎない等、基本的な生活習慣・生活規律が確立している。②保護者が「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「子どもと一緒に図書館へ行く」など、読書に関する働きかけをしてきている。③保護者がふだん子どもと勉強や成績のことについて話をする。④保護者が子どもに対して高い学歴を期待し、学校外教育投資も行う。⑤保護者が授業参観や運動会など学校行事によく参加している。⑥児童生徒に家庭での学習習慣と学校規則を守る態度が身についている。⑦児童生徒が自分の考えを発表する機会が与えられていると感じている。

これらの結論はごく平凡な内容かもしれない。「ごく当たり前のこと」と言えないこともなかろう。確かに、基本的な生活習慣や学習習慣、保護者からの読書のすすめや絵本の読み聞かせなど、これまでも学力形成に重要とされてきたことがあらためて確認されたに過ぎない。しかしながら、これらの「ごく当たり前のこと」ができている児童生徒は意外に少ない。例えば、家で自分で計画を立てて勉強を「している」生徒は、数学 B の D 層においては 1 割にも満たない。本章でとりあげた「ごく当たり前のこと」が「できる」「できている」ということが、社会経済的背景による学力格差を克服するうえで鍵となることを、本章の分析結果は示唆しているといえよう。

<第 2 部>事例研究

第 6 章 高い成果を上げている学校の抽出

本章では、児童生徒の家庭の社会経済的背景から統計的に予測される学力を大きく上回る学校を「高い成果を上げている学校」と定義し、訪問調査の対象となる 8 校 (小学校 4 校・中学校 4 校) の選定プロセスを提示した。

児童生徒レベルで、学力を従属変数、上述の社会経済的背景 (SES) を独立変数とした回帰分析を行い、各児童生徒の残差 (推計式から算出される予測値と観測値の差) を算出した。それぞれの問題 (算数/数学 A、算数/数学 B、国語 A、国語 B) で、調整済み残差が最も大きい学校を 40 校抽出した上でそれらを順位づけし、3 つ以上の問題で上位だった学校を最終抽出校とした。その際に、小学校抽出にあたっては、結果の汎用性を考慮して、「学年学級数が 2 以上」の学校 (中大規模校) を抽出条件とした。(学年 1 学級の) 一人の担任の力による効果ではなく、学校の効果と解釈できることから、汎用性が高いであろうと判断した (ただし、上記の条件を設けることにより、対象校が 165 校と、全体の 42% の学校に大幅に絞られていることは、留意が必要である)。また、社会経済的背景 Lowest SES グループの学校に関しては、9 割強が小規模校で対象外となってしまうため、代わりに「学年児童数 20 名以上」を条件とした。一方で、中学校の抽出は、小学校と同様に、「学年学級数が 2 以上」かつ「第 3 学年の生徒数が 41 人以上」の学校 (中大規模校) を抽出

条件とした。中学校の場合は、この条件を満たす学校が全体の約 55%となった。以上の結果、最終的に小学校の場合は分析可能な 391 校中 41 校が、中学校の場合は分析可能な 387 校中 30 校が抽出された。

最終抽出訪問校を決定するにあたっては、小学校に関しては、多様な社会経済的背景の学校を抽出するために、4 つの問題を合成した全問題平均残差が最も高かった学校を、それぞれの社会経済的背景グループから 1 校ずつ抽出した。一方で、中学校の場合は、社会経済的背景 Lowest SES グループが、高い残差を記録することがきわめて難しかったため、全問題平均残差（調整値）の平均値の高さを優先しつつ、なるべく各社会経済的背景グループが分散するように対象校を抽出した。結果、小学校と中学校ともに、地域的なバランス、調査の実施可能性などを総合的に考慮して、それぞれ 4 校の訪問校を選定した。

第 7 章 高い成果を上げている学校 ―事例研究―

本章では高い成果を上げている小学校 4 校、中学校 3 校の学校の特徴や取り組みについて、学校への訪問調査と管轄市教育委員会のインタビュー調査をもとに分析を行った。その結果、高い効果を上げている学校に共通する特徴として次の 6 点を挙げた：①家庭学習の指導、②管理職のリーダーシップと同僚性の構築、実践的な教員研修の重視、③小中連携教育の推進、異学年交流の重視、④言語に関する授業規律や学習規律の徹底、⑤都道府県、市レベルの学力・学習調査の積極的な活用、⑥基礎・基本の定着の重視と少人数指導、少人数学級の効果。

<第 3 部> 補論

第 3 部では、補論として、以下の章を加えた。

第 8 章 ウェイトづけ

第 9 章 学校の地域特性について

第 10 章 高い成果を上げている学校、教育委員会の訪問レポート

第 11 章 保護者調査単純集計結果

（４）ウェイトづけの概要および使用ソフト

本研究においては、データの精度を高めるため、データにウェイトづけを行っている。保護者調査はサンプリング調査であるが、ウェイトづけによって、全国レベルでの推定ができるようになっている。本研究における保護者調査の回収状況、ウェイトの作成方法、ウェイトづけの詳細については第 8 章で説明されている。なお、分析にあたっては、統計ソフトウェア Stata および SPSS を使用した。

第1章 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度構成

垂見裕子

(1) 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度構成の背景

日本における教育調査では、これまで家庭の社会経済的背景に関する正確な情報を収集できないことが多かった。なぜなら、日本における学校を通じた教育調査は保護者調査を実施することが少ない。日本が参加している国際比較学力調査の PISA (Programme for International Student Assessment) 及び TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study) でも、保護者調査はオプションとしてあるが、日本では実施されていない。児童生徒調査で家庭背景に関する質問を尋ねている場合は、家庭における文化的環境などの代替指標を使っていることが多い。また親の学歴を尋ねている場合でも、小学生の場合は回答の信頼性が低いことが確認されている (耳塚寛明、「第 VII 章 学力達成の構造—JELS2003 と JELS2006 の比較を中心に—」、『JELS 第 11 集 A エリア Wave3 調査報告』、pp.105-121、お茶の水女子大学、2008 年)。しかし家庭背景による学力格差を正確に把握するためには、信頼性・妥当性の高い家庭の社会経済的背景 (SES) の指標を使うことが要となる。本調査では、保護者に直接、家庭の社会経済的背景に関する質問項目を尋ねているため、信頼性がより高い情報を収集することが可能となった。

本調査では、複数の質問項目が含まれていることから、「家庭の社会経済的背景 (SES)」の合成尺度を構成した。具体的には、三つの変数 (家庭の所得、父親学歴、母親学歴) を合成し、得点化した。指標値が高いほど、児童生徒の家庭の社会経済的背景が恵まれていることを現わす。変数を合成することにより、どのようなメカニズムが学力に影響を及ぼしているのか、例えば親の学歴のような文化的資本が重要なのか、収入のような経済的要因がより重要なのかということは明らかにできない。しかし本調査で家庭の社会経済的背景を合成した理由は四点ある。第一に、家庭の社会経済的背景を総体としてとらえることにより、家庭の社会経済的背景のグループ間 (例えば Highest SES と Lowest SES) の比較が行えるため、解釈がより容易になる。第二に、従来の日本の学力格差に関する研究は、一つの変数 (親の職業カテゴリーのみや、親の文化的資本のみ) を使用することが多かったが、二つ以上の変数を合成することにより、複合効果 (二重に有利、あるいは二重に不利な場合) を捉えることができる。第三に、モデルが簡素化され、共線性の問題も軽減される。第四に、因子分析で確認すると、三つの変数は相関が高く、例えば小 6 のデータでは、説明された分散 (60%) と α 係数 (0.66) が比較的高いことから (図表 1-1 参照)、合成することが妥当と判断した。なお近年は、米国の全国学力調査 (NAEP) や国際比較学力調査 (PISA) などでも、合成された家庭の社会経済的背景指標として、SES (Socio-Economic Status) が最初からデータに含まれているものが多い。

図表 1-1 家庭の社会経済的背景 (SES) の主成分分析の結果 (小 6)

説明された分散の合計							成分行列 ^a	
成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			成分	
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	1	
1	1.788	59.602	59.602	1.788	59.602	59.602	父親学歴	.808
2	.677	22.558	82.161				母親学歴	.779
3	.535	17.839	100.000				家庭所得	.727

因子抽出法: 主成分分析

因子抽出法: 主成分分析

(2) 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度の構成方法

本調査では、家庭の社会経済的背景に関しては、父親学歴、母親学歴、家庭の所得、父親職業、母親職業に関する 5 つの質問項目が含まれている。社会学では、社会経済的背景 (SES) は、職業、学歴、所得の三つの要素から構成されるものとされてきたが、本調査の父親職業、母親職業に関しては、職業の中味よりも職業の形態 (例えば「常勤職員」、「非常勤職員」、「自営業・家業手伝い」など) を聞いているため、職業威信スコアのように一定の序列を設定することが困難と判断した。よって、本研究の社会経済的背景の合成尺度には父親職業、母親職業は含めずに、家庭の所得、父親学歴、母親学歴のみを合算した。

具体的な尺度の構成方法は以下の手順を踏んだ。家庭の所得は各回答項目の中間値を用いた (例えば、「200 万円以上～300 万円未満」は 250 万円とした)。父親学歴、母親学歴はそれぞれ、最終学歴を尋ねているため、教育年数に換算した (例えば、「大学卒」は 16 年間とした)。次に、それぞれの変数を標準化 (平均との差を標準偏差で割り、z-score を算出) した上で、三つの変数の平均値を算出した。なお、いずれかの変数が欠損の場合も、残りの変数で算出することとした¹⁾。なお、本尺度を構成するにあたっては、主成分得点を使用する方法も検討したが、三つの内一つの変数が欠損だった割合が高かった (13.7%) ため、またそれぞれの因子負荷が比較的同程度 (例えば小学校の場合は、0.80、0.78、0.73) であったため、合成変数には平均値を利用した。最後に再度合成尺度を標準化しているため、児童生徒レベルの SES 尺度は平均が 0、標準偏差が 1 となっている。このように合成して作られた指標を四等分し、Highest SES、Upper middle SES、Lower middle SES、Lowest SES に分割した。それぞれのグループがどのような家庭背景の児童生徒から成るのかを比較したのが、図表 1-2、図表 1-3 である。

図表 1-2 児童の家庭の社会経済的背景 (SES) のグループ別記述統計 (小 6)

家庭の社会経済的背景 (SES)	家庭所得 平均	家庭所得 標準偏差	父親学歴平均 (年数)	父親大卒割合 (%)	母親学歴平均 (年数)	母親大卒割合 (%)
Lowest	3,477,810	1,346,799	11.32	0.68	11.66	0.00
Lower middle	4,961,449	1,889,837	12.60	3.90	12.94	1.07
Upper middle	6,401,696	2,145,436	14.21	39.36	13.61	7.20
Highest	9,185,851	2,927,281	15.97	89.22	14.93	47.07
全国平均	6,034,268	3,001,533	13.66	35.44	13.31	13.94

図表 1-3 生徒の家庭の社会経済的背景 (SES) のグループ別記述統計 (中 3)

家庭の社会経済的背景 (SES)	家庭所得 平均	家庭所得 標準偏差	父親学歴平均 (年数)	父親大卒割合 (%)	母親学歴平均 (年数)	母親大卒割合 (%)
Lowest	3,368,024	1,259,394	11.29	0.59	11.63	0.00
Lower middle	5,117,369	1,815,095	12.52	4.89	12.74	0.17
Upper middle	6,460,371	2,186,856	14.04	37.16	13.43	4.38
Highest	9,281,548	2,780,023	15.75	84.57	14.65	38.88
全国平均	6,043,604	2,981,128	13.53	33.83	13.12	10.82

<注>

- 1) 三つの変数（家庭所得、父親学歴、母親学歴）の一つにでも欠損がある場合には合成尺度の値を欠損とする方法も試してみたところ、欠損値が 2 割弱と多くなること、かつ不利な家庭環境にある層ほど欠損が生じる（例えば小 6 データでは、父親学歴の欠損は、父母ともに同居している家庭では 2%のみ生じ、父親が同居していない家庭では 64%生じる）ことが確認されたため、いずれかの変数が欠損でも合成尺度は欠損としない方法を取った。

第2章 家庭環境と子どもの学力

(1) 家庭の教育投資・保護者の意識等と子どもの学力

浜野 隆

本節（第2章第(1)節）では、保護者調査の結果をもとに、家庭環境と子どもの学力（特に、家庭の教育投資・保護者の意識等と子どもの学力）の関係を見ていきたい。次節（第2章第(2)節）は保護者の関与に焦点を当てているが、本節は、それにとどまらず、保護者の意識や保護者自身の行動など、保護者調査から得られたデータ全体をできる限り広くカバーし、学力との関係を見ていく。図表中、「国語 A」「国語 B」「算数（数学）A」「算数（数学）B」の列に各教科・問題の正答率を、「%」の列には構成比（総数に対する回答者の割合）を示す（なお、本節においては無回答や誤記入等は除外して集計したため、第11章の単純集計表とは必ずしも数値は一致しない）。また、本節の最後の項には、保護者の背景（保護者の年齢、仕事、学歴、世帯年収）と子どもの学力との関係も示す。

1. 家庭の教育投資と子どもの学力

図表2-1-1 家庭の「学校外教育支出」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
支出はまったくない	53.4	39.6	67.9	48.0	13.2	71.6	61.5	54.1	32.9	16.5
5千円未満	58.8	44.7	74.4	54.7	14.0	75.4	66.8	59.2	38.3	6.4
5千円以上1万円未満	61.3	47.6	76.2	56.4	23.5	77.5	69.5	63.5	42.4	12.4
1万円以上1万5千円未満	63.2	50.6	78.0	59.0	17.2	76.8	67.2	63.9	41.0	9.2
1万5千円以上2万円未満	64.0	52.0	79.5	60.9	11.0	75.5	66.6	64.4	41.3	10.5
2万円以上2万5千円未満	66.8	54.2	80.6	62.9	7.3	76.3	66.6	65.0	41.5	13.1
2万5千円以上3万円未満	69.2	56.7	84.2	64.9	4.5	77.1	68.0	66.9	44.2	12.7
3万円以上5万円未満	74.2	61.3	85.1	70.6	5.6	79.6	71.8	69.7	47.6	16.4
5万円以上	79.7	63.8	88.9	76.2	3.9	79.5	73.0	70.3	48.2	2.8
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-1は、家庭の「学校外教育支出」（調査対象となっている子ども1人について、学校以外の教育[学習塾や習い事]にかかる1か月あたりの平均の支出はどれくらいか）の状況と、子どもの学力との関係を見たものである。まず、学校外教育支出の分布を見ると、小学生については、「5千円以上1万円未満」という家庭が最も多く、次いで「1万円以上1万5千円未満」となっている。一方、中学生に関しては、「支出は全くない」（16.5%）と、「3万円以上5万円未満」（16.4%）という家庭が多く、小学生に比べばらつきが大きい。

学校外教育支出と学力との関係は強く、概ね学校外支出が多い家庭ほど子どもの学力も高いという傾向が見て取れる。ただ、中学生に関しては、「5千円以上1万円未満」が「1万円以上1万5千円未満」「1万5千円以上2万円未満」「2万円以上2万5千円未満」を上回る学力を達成しており、関係は必ずしも直線的とは言えない。中学生については、学校外教育支出5千円から2万5千円までの学力差は非常に小さい。

図表2-1-2は、学校外教育支出の負担感の状況と子どもの学力との関係を見たものである。「負担に感じる」割合は中学生の方が多くなっていることが分かる。ただ、負担感と学力との間には明確な関係は見られない。

図表2-1-2 「このアンケート用紙の調査対象となっているお子さん1人の教育にかかる支出が家計に与える負担はどれくらいですか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
とても負担に感じる	63.0	49.2	76.8	58.0	10.0	74.9	65.3	62.2	38.8	20.1
やや負担に感じる	63.2	50.1	77.8	58.8	38.7	76.3	67.4	64.1	41.9	43.4
あまり負担に感じない	63.0	49.6	77.4	58.8	39.1	77.7	69.4	65.1	43.4	27.7
全く負担に感じない	60.2	47.0	75.0	56.5	12.1	75.7	66.2	60.7	39.7	8.8
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-3 「世帯収入（税込年収）」と学校外教育支出の関係（小6）（単位：％）

	支出なし	5千円未満	5千～1万円	1万～1万5千円	1万5千～2万円	2万～2万5千円	2万5千～3万円	3万～5万円	5万円以上	合計
200万円未満	29.9	21.2	24.9	10.9	4.8	3.5	2.4	1.2	1.3	100.0
200万円～300万円	25.0	19.4	27.6	13.1	7.5	4.2	1.4	0.9	1.0	100.0
300万円～400万円	20.0	18.1	26.9	15.9	8.9	4.6	2.9	1.8	0.8	100.0
400万円～500万円	15.4	16.6	29.5	18.8	9.3	4.6	2.2	2.7	1.0	100.0
500万円～600万円	10.4	13.9	25.8	22.0	12.8	6.7	3.8	3.1	1.5	100.0
600万円～700万円	9.7	13.6	19.9	21.5	11.5	8.8	6.1	5.4	3.5	100.0
700万円～800万円	7.2	9.9	22.0	17.9	15.5	10.4	6.1	7.4	3.5	100.0
800万円～900万円	3.4	6.7	20.9	18.7	14.5	11.7	6.6	11.9	5.5	100.0
900万円～1000万円	5.1	10.0	16.8	15.3	13.1	10.4	10.0	10.9	8.5	100.0
1000万円～1200万円	5.0	8.7	14.3	13.5	14.1	11.3	9.4	12.8	11.0	100.0
1200万円～1500万円	4.7	3.4	11.5	13.6	9.2	13.8	8.0	18.2	17.6	100.0
1500万円以上	1.5	4.4	6.6	8.3	6.3	8.7	6.3	24.9	33.0	100.0

学校外教育支出と世帯年収との関係はどのようになっているのであろうか。図表2-1-3、図表2-1-4は、「世帯収入（税込年収）」と「学校外教育支出」の関係を示したものである（図表2-1-3が小6、図表2-1-4が中3）。これを見ると、世帯収入が高くなるにつれ学校外教育支出も多くなる傾向があることが分かる。小学生の場合、世帯年収200万円未満の約半数が学校外教育支出5千円未満であるのに対し、世帯年収1500万円以上の家庭では6割近くが3

万円以上の支出をしている。

図表2-1-4 「世帯収入（税込年収）」と学校外教育支出の関係（中3）（単位：％）

	支出 なし	5千円未 満	5千～1万 円	1万～1万5 千円	1万5千～2 万円	2万～2万5 千円	2万5千～3 万円	3万～5万 円	5万円 以上	合計
200万円未満	34.9	9.4	14.4	9.6	9.1	7.6	6.2	7.9	0.9	100.0
200万円～300万円	28.8	10.6	15.1	8.4	9.6	10.2	8.8	6.9	1.5	100.0
300万円～400万円	23.7	8.1	14.5	10.6	10.2	13.2	9.5	8.8	1.3	100.0
400万円～500万円	18.3	7.3	15.0	10.4	11.3	13.1	12.2	11.2	1.3	100.0
500万円～600万円	15.0	6.2	13.4	10.6	12.1	14.0	12.6	14.2	1.9	100.0
600万円～700万円	11.3	6.1	12.2	9.2	11.8	14.5	15.1	17.6	2.1	100.0
700万円～800万円	10.7	4.0	11.9	9.3	11.2	14.8	14.6	19.6	3.8	100.0
800万円～900万円	6.9	3.5	9.0	7.8	10.7	14.8	16.9	27.6	2.8	100.0
900万円～1000万円	6.9	4.1	9.4	6.2	10.5	15.7	16.0	25.5	5.7	100.0
1000万円～1200万円	5.4	3.1	8.0	6.9	8.4	13.0	17.1	30.5	7.5	100.0
1200万円～1500万円	5.6	5.1	6.9	8.6	5.7	9.9	16.5	32.1	9.5	100.0
1500万円以上	6.9	2.3	5.1	7.5	7.3	8.9	15.4	29.2	17.5	100.0

2. 保護者の意識等（意識・行動・子どもへの働きかけ）と子どもの学力

（1）生活習慣に関する働きかけ

図表2-1-5 「子どもが決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	63.4	50.2	77.6	59.0	73.8	76.8	67.9	64.2	42.0	68.2
どちらかといえばあてはまる	61.3	47.6	76.3	57.3	23.2	75.4	66.3	62.6	40.6	26.6
どちらかといえばあてはまらない	57.2	43.4	72.7	52.5	2.3	73.7	64.8	58.8	36.6	3.8
あてはまらない	56.1	39.3	71.4	48.9	0.7	72.7	64.6	59.1	36.6	1.4
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

子どもの生活習慣に対する保護者の関与は学力とどのように関係しているのだろうか。図表 2-1-5 から図表 2-1-8 は、子どもの起床や就寝、食事に関する習慣への働きかけの状況と子どもの学力との関係を見たものである。これらの図表から、「子どもが決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている」「子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている」「毎日子どもに朝食を食べさせている」「平日、夕食を一緒に食べている」、これらについてはいずれも、小6の家庭の方が「あてはまる」という家庭が多いことがわかる。また、学力との関係について見ると、「子どもが決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている」「子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている」「毎日子どもに朝食を食べさせ

ている」家庭の子どもの方が高い学力を示している（特に小学校ではその傾向が強い）。朝食（図表2-1-7）に関してみると、小6の家庭では89.8%、中3の家庭でも84.1%が「毎日子どもに朝食を食べさせている」と回答しており、それにあてはまらない家庭は少ない。ただ、「あてはまらない」とする家庭の子どもの学力は相対的に低くなっており、朝食を食べさせることと子どもの学力との間には一定の関係を確認することができる。

図表2-1-6 「子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	64.3	50.7	78.1	59.7	39.5	76.8	68.1	64.7	42.8	16.1
どちらかといえばあてはまる	62.8	49.4	77.7	58.6	42.5	77.0	67.9	64.7	42.6	41.4
どちらかといえばあてはまらない	59.5	46.9	74.1	55.7	15.5	75.5	66.5	62.2	40.0	32.3
あてはまらない	57.6	44.2	72.2	52.3	2.5	74.9	66.0	61.0	38.6	10.2
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-7 「毎日子どもに朝食を食べさせている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	63.7	50.5	78.2	59.6	89.8	77.4	68.7	65.2	43.1	84.1
どちらかといえばあてはまる	54.2	41.0	69.7	49.9	7.8	72.3	62.3	57.1	34.5	11.0
どちらかといえばあてはまらない	54.4	35.6	65.4	44.7	2.0	66.8	55.6	50.0	28.5	3.8
あてはまらない	41.8	31.1	55.3	36.8	0.4	67.2	55.8	50.8	27.7	1.1
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-8 「平日、夕食を一緒に食べている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	62.5	49.3	77.0	58.1	74.9	76.4	67.5	63.4	41.1	62.0
どちらかといえばあてはまる	63.4	49.6	78.1	59.5	16.9	76.3	67.1	64.4	42.3	25.2
どちらかといえばあてはまらない	62.5	48.1	76.9	59.1	5.8	75.5	67.1	62.9	41.3	9.8
あてはまらない	63.6	53.3	77.4	58.6	2.4	75.6	66.5	62.2	39.8	3.0
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(2) しつけや人間形成に関する働きかけ

次に、家庭でのしつけや子どもの人間形成に関する働きかけについてみてみよう（図表 2-1-9～図表 2-1-13）。「家事を手伝わせるなど家族の一員としての役割を与えている」については、小6の家庭では40.2%が「あてはまる」としているが、中3の家庭ではその割合は28.9%となる。「自分でできることは自分でさせている」、「子どものプライバシーを尊重している」、「子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている」、「子どもが悪いことをしたらきちんと叱っている」については、いずれもほとんどの家庭がそのような働きかけをしている（「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計が80%以上）。

学力との関係については次のような傾向がある：①「家事を手伝わせるなど家族の一員としての役割を与えている」については学力との間には明確な関係は見られない。②「自分でできることは自分でさせている」「子どものプライバシーを尊重している」「子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている」については、これらに該当する家庭の子どもの方が学力が高い。③「子どもが悪いことをしたらきちんと叱っている」については、「あてはまらない」家庭の子どもが相対的に低い。

図表2-1-9 「家事を手伝わせるなど家族の一員としての役割を与えている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	62.4	49.6	76.8	58.2	40.2	75.8	66.6	62.3	40.2	28.9
どちらかといえばあてはまる	63.1	49.5	77.6	58.5	38.0	76.4	67.7	63.8	41.5	35.0
どちらかといえばあてはまらない	62.9	48.9	77.5	58.9	18.5	76.7	67.7	64.4	42.3	28.9
あてはまらない	61.6	49.2	75.5	57.1	3.3	75.6	66.4	63.9	41.5	7.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-10 「自分でできることは自分でさせている」と学力の関係

	小6					中3				
	国A	国B	算A	算B	%	国A	国B	数A	数B	%
あてはまる	62.9	49.9	77.4	58.9	58.6	76.4	67.8	63.3	41.2	50.7
どちらかといえばあてはまる	62.4	48.7	76.9	57.8	36.5	76.5	67.2	64.2	42.0	40.2
どちらかといえばあてはまらない	62.4	47.9	76.3	57.6	4.7	74.8	65.1	62.0	39.8	8.4
あてはまらない	61.5	43.7	68.3	48.3	0.2	73.7	65.1	56.6	35.0	0.7
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-11 「子どものプライバシーを尊重している」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	62.9	50.5	77.1	59.2	28.6	76.9	68.5	63.5	41.7	32.4
どちらかといえばあてはまる	62.6	49.2	77.3	58.3	58.1	76.3	67.1	63.9	41.5	59.1
どちらかといえばあてはまらない	63.3	47.8	77.2	57.6	12.4	74.0	64.3	61.1	38.9	7.8
あてはまらない	58.2	42.9	72.4	49.7	0.9	71.7	62.6	61.0	39.4	0.6
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-12 「子どものよいところをはめるなどして自信を持たせるようにしている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	63.9	51.2	78.3	60.1	36.0	77.7	69.4	65.2	43.5	29.4
どちらかといえばあてはまる	62.2	48.7	76.7	57.7	53.9	76.2	67.1	63.4	41.1	56.5
どちらかといえばあてはまらない	61.2	46.6	76.2	55.9	9.7	74.2	64.6	61.1	38.4	13.3
あてはまらない	58.2	46.9	74.2	58.5	0.4	70.0	58.1	55.6	33.7	0.9
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-13 「子どもが悪いことをしたらきちんと叱っている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	62.8	49.6	77.2	58.5	78.2	76.3	67.4	63.6	41.4	71.0
どちらかといえばあてはまる	62.4	48.4	76.9	58.0	21.0	76.2	67.2	63.6	41.5	27.6
どちらかといえばあてはまらない	62.8	52.1	77.3	61.2	0.6	73.9	65.0	59.8	37.8	1.2
あてはまらない	64.6	52.0	75.6	60.8	0.2	73.7	62.0	60.0	37.0	0.2
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(3) 本・新聞・絵本の読み聞かせ

本や新聞を読むことに関する働きかけは、子どもの学力と非常に強い関係が見られる。「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」、「子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている」、「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」、これらの項目に「あてはまる」という家庭ほど子どもの学力が高い。特に注目されるのは、「子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている」家庭の子どもは、B問題の正答率が高いことである。「子ども

と読んだ本の感想を話し合ったりしている」に「あてはまる」家庭の小学生は、国語 B の正答率が 57.5%（平均は 49.4%）、算数 B の正答率は 64.9%（平均は 58.4%）となっている。中学生ではその傾向はより顕著で、国語 B では正答率が 76.3%（平均は 67.3%）、算数 B の正答率は 49.6%（平均は 41.4%）となっている。

図表2-1-14 「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	69.4	56.6	81.5	64.4	29.1	80.7	72.8	68.2	47.2	22.5
どちらかといえばあてはまる	62.5	49.3	77.5	58.6	40.3	77.2	68.4	65.2	43.0	39.6
どちらかといえばあてはまらない	57.1	43.4	73.1	53.1	25.7	73.4	63.7	59.9	37.1	30.5
あてはまらない	54.0	39.5	69.7	49.4	4.9	70.0	59.7	55.7	32.4	7.4
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-15 「子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	69.9	57.5	81.2	64.9	10.3	82.9	76.3	69.9	49.6	8.2
どちらかといえばあてはまる	65.9	53.3	79.1	61.5	28.5	79.8	72.5	67.1	45.8	21.8
どちらかといえばあてはまらない	61.1	47.4	76.3	56.9	45.0	75.4	66.0	62.6	40.2	46.2
あてはまらない	57.3	43.0	73.8	53.0	16.2	72.6	62.2	60.2	36.9	23.7
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-16 「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	67.3	55.2	80.5	63.6	39.8	79.9	71.8	67.2	45.8	40.0
どちらかといえばあてはまる	61.9	48.1	76.5	57.4	33.9	75.3	66.3	62.7	40.3	33.1
どちらかといえばあてはまらない	57.6	43.2	73.6	53.1	20.9	72.8	62.3	59.7	36.4	21.1
あてはまらない	53.8	39.3	70.1	47.4	5.4	69.9	60.8	57.0	34.6	5.7
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(4) 学習・勉強に関する働きかけ

図表 2-1-17 「普段、子どもの勉強をみている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
あてはまる	66.3	52.3	79.7	61.6	17.2	78.6	70.9	68.2	48.2	5.5
どちらかといえばあてはまる	63.2	49.8	77.3	58.7	42.0	78.1	69.5	66.3	44.4	21.8
どちらかといえばあてはまらない	60.9	48.0	76.1	57.0	33.5	75.7	66.6	62.7	40.4	48.5
あてはまらない	60.6	47.2	75.1	55.5	7.3	75.2	66.1	61.7	39.2	24.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-18 「子どもに「勉強しなさい」とよく言っている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
あてはまる	61.3	46.5	76.3	55.8	23.4	73.5	63.1	60.4	37.5	22.7
どちらかといえばあてはまる	62.6	49.2	77.3	58.1	36.4	75.9	66.6	63.0	40.4	37.6
どちらかといえばあてはまらない	63.1	50.6	77.2	59.6	28.7	77.5	69.5	65.1	43.6	27.7
あてはまらない	65.0	52.8	78.5	61.4	11.5	79.9	72.8	67.6	46.7	12.0
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-19 「計画的に勉強するようにうながしている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
あてはまる	67.0	53.4	80.7	62.4	23.0	78.4	69.8	66.8	44.6	20.9
どちらかといえばあてはまる	63.1	49.9	77.6	58.9	47.3	76.4	67.1	63.8	41.3	49.8
どちらかといえばあてはまらない	58.5	45.3	73.5	54.0	22.8	74.3	65.5	60.3	38.5	21.9
あてはまらない	60.2	46.8	74.7	57.0	6.9	75.4	67.3	62.4	41.1	7.4
合計	62.8	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

子どもの学習や勉強に直接働きかけることについてはどうであろうか。図表 2-1-17～図表 2-1-20 を見ると、「普段、子どもの勉強をみている」「計画的に勉強するようにうながしている」「子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している」保護者の子どもほど概ね高学力の傾向が見られる。「子どもに「勉強しなさい」とよく言っている」家庭ほど子ども

の学力は低くなるが、これは、子どもが低学力である結果、保護者が「勉強しなさい」というようになる傾向があることを反映したものと解釈できる。

図表2-1-20 「子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	67.8	55.1	80.6	63.8	16.5	80.9	73.3	69.9	48.8	9.9
どちらかといえばあてはまる	65.5	52.8	79.9	61.6	23.5	79.3	71.3	67.5	46.0	20.9
どちらかといえばあてはまらない	61.0	47.3	75.9	56.6	40.7	75.7	66.6	62.7	40.2	45.8
あてはまらない	58.7	44.7	73.5	53.9	19.3	72.8	62.6	59.0	36.3	23.4
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(5) 文化・芸術・自然体験に関する働きかけ

図表2-1-21 「子どもが自然に触れる機会をつくっている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	61.0	47.4	76.2	56.9	23.2	75.1	66.3	62.7	40.0	12.9
どちらかといえばあてはまる	63.4	50.0	78.0	59.0	38.9	76.1	66.9	63.5	41.4	32.1
どちらかといえばあてはまらない	64.0	51.5	77.8	60.0	27.1	77.0	68.4	64.4	42.5	37.5
あてはまらない	61.2	46.1	74.4	54.8	4.6	76.3	67.4	63.1	40.8	11.2
機会をつくらなくても触れている	61.0	47.0	75.6	56.7	6.2	75.1	64.9	61.3	38.4	6.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-22 「子どもに生き物や植物の世話をさせているか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
させている	61.4	48.3	76.0	56.6	27.9	74.8	65.9	60.8	38.0	20.2
時々させている	62.4	48.9	76.9	58.1	27.0	75.1	66.0	62.0	39.6	21.3
あまりさせていない	64.1	51.2	79.6	60.4	20.6	77.5	68.6	65.8	43.7	20.1
させていない	63.4	49.6	76.8	59.1	24.5	77.0	68.1	64.7	42.9	38.4
合計	62.8	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

文化・芸術・自然体験に関する働きかけの状況と子どもの学力との関係について見たのが、

図表 2-1-21～図表 2-1-26 である。文化・芸術体験については、子どもと一緒に「美術館や劇場に行く」「博物館や科学館に行く」「図書館に行く」家庭ほど子どもが高学力であることがわかる。自然体験に関する保護者の働きかけ（「子どもが自然に触れる機会をつくっている」「お子さんに生き物や植物の世話をさせていますか」）については、学力との明確な関係は見られない。「子どもへのお小遣いの渡しかた」については、「決まった額を定期的に渡す」家庭の子どもの学力がやや高い傾向があり、「学校の成績が良かったときやお手伝いをしてくれたときなどに、ごほうびとして渡している」家庭の子どもは平均正答率を下回っている。

図表2-1-23 「お子さんにお小遣いを渡していますか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
決まった額を定期的に渡している	64.0	51.3	78.3	60.1	35.5	77.2	68.3	65.1	43.0	49.8
必要なときに、必要な金額を渡している	61.7	48.6	76.3	57.3	40.8	75.3	66.2	61.7	39.4	41.7
学校の成績が良かったときやお手伝いをしてくれたときなどに、ごほうびとして渡している	61.7	47.0	76.1	56.5	13.5	75.7	67.4	63.8	41.5	3.9
現金を渡すことはない	64.8	50.2	78.8	60.8	5.8	74.5	65.5	62.3	39.6	1.8
その他	64.5	50.7	79.3	58.9	4.4	76.9	68.7	64.7	41.6	2.8
合計	62.7	49.4	77.3	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-24 「子どもと一緒に美術館や劇場にどれぐらい行くか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
月に1回以上	62.0	52.5	75.8	57.9	0.4	80.4	71.1	63.3	40.9	0.2
2～3カ月に1回程度	66.2	53.1	79.7	61.6	5.1	78.1	72.0	66.2	45.0	2.7
半年に1回程度	66.1	53.2	79.4	62.3	12.1	79.6	71.8	67.4	45.3	7.3
1年に1回程度	65.4	51.6	79.1	61.1	16.6	78.8	70.6	66.3	44.5	13.8
2～3年に1回程度	66.4	53.8	79.5	61.8	8.8	78.3	70.5	66.5	44.9	9.3
ほとんど行かない	61.2	48.4	76.6	57.6	33.3	76.0	66.9	63.7	41.5	39.9
行ったことがない	58.4	44.3	74.0	53.1	16.6	73.2	63.0	59.2	36.5	17.7
近隣にないため行くことができない	60.9	46.6	74.6	55.8	7.1	74.5	64.3	60.6	38.1	9.1
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-25 「子どもと一緒に博物館や科学館にどれぐらい行くか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
月に1回以上	65.1	56.1	83.9	65.3	0.3	79.5	67.4	66.2	46.8	0.1
2～3カ月に1回程度	69.5	56.6	82.2	65.8	3.9	79.8	74.6	69.3	48.1	0.6
半年に1回程度	67.5	54.1	81.2	64.2	11.2	78.9	70.9	67.5	45.8	3.3
1年に1回程度	65.8	52.0	79.8	61.7	22.9	79.8	71.7	67.4	46.8	11.7
2～3年に1回程度	62.8	49.5	77.7	58.7	15.9	78.7	70.8	67.5	45.8	15.8
ほとんど行かない	60.3	47.6	75.2	56.0	30.0	76.0	66.9	63.5	40.9	45.0
行ったことがない	55.8	41.8	71.3	50.6	8.9	71.9	61.9	57.1	34.1	12.7
近隣にないため行くことができない	60.5	46.5	73.9	54.7	6.9	74.4	64.5	60.2	37.9	10.7
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-26 「子どもと一緒に図書館にどれぐらい行くか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
月に1回以上	71.7	60.3	83.3	67.3	10.4	81.7	73.6	70.0	49.1	3.1
2～3カ月に1回程度	67.2	54.5	80.8	63.1	16.4	80.6	72.9	68.6	47.8	6.2
半年に1回程度	64.7	52.0	78.8	60.6	15.8	80.1	71.7	67.5	46.0	8.4
1年に1回程度	61.9	48.4	76.6	58.5	13.7	78.3	70.7	66.2	45.0	11.0
2～3年に1回程度	60.7	47.6	76.2	55.9	4.5	77.3	69.0	65.2	42.9	6.5
ほとんど行かない	59.1	45.2	74.8	54.7	29.0	75.7	66.5	63.2	40.7	50.4
行ったことがない	54.7	39.2	70.3	49.1	8.4	70.8	60.6	56.1	33.0	12.6
近隣にないため行くことができない	60.0	44.7	71.8	54.7	1.8	72.9	62.0	56.2	34.3	1.8
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-27 「テレビゲームで遊ぶ時間を限定している」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	67.4	54.1	80.8	63.2	25.0	79.3	71.0	67.2	45.5	13.8
どちらかといえばあてはまる	62.6	49.3	77.5	58.3	33.9	77.4	68.9	65.4	43.0	27.4
どちらかといえばあてはまらない	59.2	45.7	74.4	54.9	26.7	74.5	65.0	61.3	39.1	33.7
あてはまらない	57.9	44.6	72.8	52.6	9.6	74.4	64.9	60.8	38.7	17.4
持たせていない	68.9	56.1	79.9	65.4	4.8	78.6	70.4	66.1	44.1	7.8
合計	62.7	49.4	77.3	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(6) テレビゲームや携帯電話に関するルール

テレビゲームや携帯電話についての家庭での働きかけの状況と学力との関係を見たのが図表 2-1-27、図表 2-1-28 である。これを見ると、「テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲームを含む）で遊ぶ時間を限定している」「携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている」または、それらを「持たせていない」家庭の方が子どもの学力が相対的に高い傾向がみられる。

図表2-1-28 「携帯電話やスマートフォンの使い方についてのルールや約束」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	63.1	50.9	77.1	58.8	24.1	76.7	68.0	63.3	41.4	24.6
どちらかといえばあてはまる	62.0	48.5	76.2	57.0	15.0	75.4	67.0	62.6	39.9	28.4
どちらかといえばあてはまらない	60.6	48.8	76.4	56.9	4.1	74.4	65.2	61.7	39.0	10.8
あてはまらない	56.6	44.6	70.9	50.1	1.4	73.9	65.0	59.4	37.9	4.3
持たせていない	63.1	49.2	77.7	59.0	55.4	77.6	68.1	65.8	44.0	31.9
合計	62.8	49.4	77.3	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-29 「子どもから学校での出来事について話を聞いている」と学力の関係

	小6					中3				
	国A	国B	算A	算B	%	国A	国B	数A	数B	%
あてはまる	63.8	51.1	77.6	59.4	59.8	77.3	69.2	64.0	41.9	47.1
どちらかといえばあてはまる	61.5	47.2	76.7	57.5	34.9	75.8	66.1	63.5	41.3	41.4
どちらかといえばあてはまらない	58.4	44.2	75.2	54.3	4.8	73.9	64.5	61.7	39.4	10.3
あてはまらない	58.8	42.8	71.7	54.2	0.5	72.8	62.7	61.8	38.9	1.2
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(7) 子どもとの会話や一緒に過ごす時間

図表 2-1-29～図表 2-1-34 は、日頃の生活での子どもとの会話の状況および学力との関係を、そして図表 2-1-35 は平日、図表 2-1-36 は休日に保護者が子どもと一緒に過ごす時間と学力との関係を見たものである。これらの図表から、「子どもから学校での出来事について話を聞いている」「子どもと勉強や成績のことについて話をする」「子どもと将来や進路についての話をする」「子どもと友達のことについて話をする」「子どもと社会の出来事やニュースについて話をする」保護者の子どもほど学力が高い傾向が見られる。

図表2-1-30 「子どもと勉強や成績のことについて話をする」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	66.5	53.5	79.8	62.1	39.7	78.7	70.7	66.9	45.0	45.8
どちらかといえばあてはまる	61.0	47.7	76.1	56.8	45.9	75.1	65.4	61.9	39.4	45.9
どちらかといえばあてはまらない	57.9	43.6	73.3	53.6	13.3	70.0	59.6	54.6	32.7	7.5
あてはまらない	58.0	45.2	73.2	53.1	1.1	66.4	56.9	51.3	31.6	0.7
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-31 「子どもと将来や進路についての話をする」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	65.9	53.0	79.3	61.7	30.3	77.9	69.7	65.5	43.5	44.2
どちらかといえばあてはまる	63.0	49.8	77.4	58.7	45.1	75.4	65.9	62.6	40.2	47.1
どちらかといえばあてはまらない	58.7	44.9	74.5	54.6	22.3	73.1	63.1	59.6	37.6	8.2
あてはまらない	55.1	39.8	70.7	49.1	2.3	69.9	60.0	55.9	34.0	0.5
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-32 「子どもと友達のことについて話をする」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	63.8	51.0	77.9	59.4	55.8	77.1	68.6	63.9	41.8	45.0
どちらかといえばあてはまる	61.4	47.7	76.4	57.5	40.0	76.0	66.6	63.5	41.2	44.2
どちらかといえばあてはまらない	60.7	45.5	75.5	54.8	3.9	74.7	65.6	62.4	40.9	9.8
あてはまらない	56.2	42.1	70.5	50.1	0.3	72.3	63.3	61.9	40.1	1.0
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-33 「子どもと社会の出来事やニュースについて話をする」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	66.9	53.8	79.9	62.2	25.6	78.8	70.8	65.7	44.2	24.0
どちらかといえばあてはまる	63.0	49.9	77.6	59.1	48.3	77.1	68.3	64.6	42.4	48.6
どちらかといえばあてはまらない	58.5	44.7	74.0	54.1	23.1	73.1	63.2	60.4	37.7	24.5
あてはまらない	55.9	41.4	71.5	49.4	3.0	69.0	57.6	55.7	33.1	2.9
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-34 「子どもの心配事や悩み事の相談によく乗っている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	63.5	50.9	77.1	58.3	32.4	76.7	68.9	63.1	41.0	24.4
どちらかといえばあてはまる	62.5	49.0	77.2	58.7	51.0	76.6	67.3	63.7	41.3	48.6
どちらかといえばあてはまらない	61.8	47.5	77.2	58.2	15.0	75.5	65.9	63.7	41.8	24.2
あてはまらない	63.5	50.6	78.4	56.8	1.6	75.0	66.9	63.8	42.3	2.9
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-35 「子どもと一緒に何かをしたり、相手したりしている時間は、1日あたり平均すると、だいたいどれくらいになるか（平日）」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
0～15分未満	60.7	47.3	76.9	57.1	3.7	74.9	66.6	63.0	40.4	6.7
15分～30分未満	62.8	48.8	77.1	59.0	12.0	76.4	67.6	64.1	42.1	15.6
30分～1時間未満	62.6	49.3	77.9	59.2	23.2	76.8	67.5	64.3	42.2	27.3
1時間～2時間未満	62.3	50.4	78.0	59.0	26.1	77.1	68.4	64.4	42.7	26.8
2時間～3時間未満	62.0	49.1	76.7	58.0	18.1	75.5	66.3	62.3	39.8	14.2
3時間～4時間未満	61.1	48.6	75.2	56.6	9.7	75.8	66.6	61.6	39.0	5.8
4時間以上	62.9	50.0	76.5	57.5	7.2	73.6	64.7	58.8	36.1	3.7
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.4	63.5	41.4	100.0

図表2-1-36 「子どもと一緒に何かをしたり、相手したりしている時間は、1日あたり平均すると、だいたいどれくらいになるか（休日）」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
2時間未満	61.4	47.7	76.7	58.0	19.5	76.1	67.0	64.1	41.7	37.8
2時間～4時間未満	64.0	50.1	78.2	59.2	25.8	76.9	68.1	64.1	42.3	29.7
4時間～6時間未満	63.1	50.4	77.6	59.6	22.0	77.0	67.9	63.5	41.4	17.2
6時間～8時間未満	62.3	49.6	76.6	57.8	13.5	75.7	66.6	62.5	40.2	8.1
8時間～10時間未満	62.2	48.3	76.3	57.6	7.9	75.1	66.1	60.5	38.7	3.6
10時間以上	63.1	50.3	76.6	57.5	11.3	73.7	65.1	60.0	37.0	3.6
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.4	63.5	41.4	100.0

（８）学歴期待と教育意識

図表 2-1-37 は、保護者が子どもにどれくらいの学歴を期待するか（学歴期待）と子どもの学力との関係を見たものである。子どもに高い学歴を期待する保護者の子どもほど学力の傾向を示しており、例えば、中学では、「高校まで」と「大学まで」の間に数学 A、B とも約 25 ポイントの正答率の差が見られる。

図表 2-1-38～図表 2-1-44 は、子どもの教育について家庭で重視していることと子どもの学力との関係を見たものである。「子どもが自立できるようにすること」「人の気持ちが分かる人間になること」「自分の意見をはっきり言えるようになること」「将来の夢や目標に向かって努力すること」を重視する保護者の子どもほど学力が高いことが見て取れる。

図表2-1-37 学歴期待と子どもの学力との関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
中学校まで	51.5	37.9	59.2	29.8	0.1	77.5	70.9	58.3	37.6	0.1
高校まで	51.4	36.9	66.8	44.7	16.1	65.4	53.2	47.7	25.1	19.9
専門学校・各種学校 まで	56.9	43.4	71.4	50.5	15.4	71.2	61.1	54.2	30.4	16.9
短期大学・高等専門 学校まで	60.8	51.5	75.7	56.5	6.2	77.1	69.0	62.3	38.5	6.2
大学まで	67.7	54.3	81.9	64.6	54.5	81.7	74.3	72.6	51.2	50.5
大学院まで	75.4	62.3	88.0	74.4	1.9	87.4	80.6	81.8	65.5	1.7
その他	63.6	51.2	77.8	61.2	2.1	78.8	69.1	65.7	42.4	1.7
分からない	59.5	46.1	74.9	55.1	3.7	76.6	67.3	62.5	40.5	3.1
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.4	63.6	41.4	100.0

図表2-1-38 「学校生活を楽しめれば、良い成績をとることはこだわらない」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	56.7	43.4	71.6	52.1	13.4	71.5	61.5	55.5	33.9	8.7
どちらかといえばあてはまる	60.1	47.0	75.3	55.6	43.1	74.2	64.8	60.1	37.7	39.1
どちらかといえばあてはまらない	66.5	52.8	80.0	62.3	34.7	78.1	69.5	66.6	44.3	41.5
あてはまらない	70.2	57.2	83.5	66.6	8.8	80.7	73.1	71.3	50.2	10.7
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-39 「子どもの将来を考えると、学習塾や習い事に通わせないと心配である」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	62.9	48.3	76.8	57.1	19.3	75.2	65.7	63.5	40.6	22.8
どちらかといえばあてはまる	62.6	49.2	77.3	58.1	41.6	76.0	66.6	63.5	41.0	42.0
どちらかといえばあてはまらない	62.9	49.8	77.1	59.0	28.7	77.2	68.8	63.8	42.1	25.1
あてはまらない	62.4	51.0	77.5	60.5	10.4	77.7	70.3	63.8	43.3	10.0
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-40 「子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	68.7	55.0	82.4	65.1	16.5	80.9	73.3	71.8	50.9	15.2
どちらかといえばあてはまる	65.1	51.9	79.6	61.1	40.6	78.8	70.3	67.7	45.5	40.0
どちらかといえばあてはまらない	59.0	45.6	73.5	53.9	32.9	73.2	63.4	58.3	35.7	34.4
あてはまらない	55.8	42.6	70.7	51.5	10.0	70.3	60.4	53.4	31.0	10.4
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-41 「あなたのご家庭では、お子さんの教育について、次のことをどれくらい重視していますか：子どもが自立できるようにすること」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
重視している	63.6	50.4	78.1	59.4	61.6	77.0	68.1	64.4	42.4	61.3
どちらかといえば、重視している	61.4	47.9	75.9	57.0	35.7	75.3	66.2	62.4	39.9	35.9
どちらかといえば、重視していない	61.9	47.4	75.0	56.0	2.5	74.1	65.4	61.1	38.6	2.7
重視していない	47.6	32.0	58.8	41.6	0.2	72.5	57.8	54.3	34.8	0.1
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-42 「あなたのご家庭では、お子さんの教育について、次のことをどれくらい重視していますか：人の気持ちが分かる人間になること」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
重視している	63.0	49.9	77.3	58.7	81.0	76.7	67.8	63.8	41.6	76.5
どちらかといえば、重視している	61.8	47.5	76.7	57.4	18.7	75.2	66.1	62.8	40.9	22.8
どちらかといえば、重視していない	66.2	47.5	78.6	57.9	0.3	71.7	62.2	60.0	36.5	0.7
重視していない	56.7	40.1	72.3	57.6	0.0	62.0	53.1	43.4	29.3	0.0
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-43 「あなたのご家庭では、お子さんの教育について、次のことをどれくらい重視していますか：自分の意見をはっきり言えるようになること」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
重視している	62.8	49.7	77.3	58.5	63.9	76.4	67.3	63.6	41.4	57.9
どちらかといえば、重視している	62.7	48.9	77.1	58.4	34.2	76.2	67.6	63.6	41.6	39.3
どちらかといえば、重視していない	61.5	47.7	75.8	55.7	1.8	75.1	65.6	63.5	40.9	2.7
重視していない	52.4	41.0	64.0	54.8	0.1	70.5	58.5	55.1	41.4	0.1
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-44 「あなたのご家庭では、お子さんの教育について、次のことをどれくらい重視していますか：将来の夢や目標に向かって努力すること」と学力の関係

	小6					中3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
重視している	64.1	51.0	78.5	59.9	61.6	77.2	68.4	64.7	42.4	62.8
どちらかといえば、重視している	60.7	47.1	75.2	56.3	34.6	75.2	66.0	62.2	40.4	34.9
どちらかといえば、重視していない	59.2	45.3	74.9	53.5	3.6	69.5	60.0	55.3	33.0	2.2
重視していない	52.5	39.1	63.1	42.5	0.2	64.4	49.4	45.0	17.8	0.1
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(9) 学校についての意識

図表 2-1-45～図表 2-1-50 は、学校に関する保護者の意識と子どもの学力との関係を見たものである。「学校の教育目標やその達成に向けた方策を知っている」「学校や学級の教育活動に関する情報提供（学校のホームページ、学校だよりや学級だよりなど）は役に立っている」とする保護者の子どもほど高学力の傾向が見られる。

図表2-1-45 「学校の教育目標やその達成に向けた方策を知っているか」と子どもの学力との関係

	小6					中3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
知っている	63.7	50.6	78.4	59.8	59.9	77.5	69.0	65.1	43.3	51.4
知らない	61.3	47.6	75.4	56.3	40.1	75.0	65.5	61.9	39.4	48.6
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-46 「学校や学級の教育活動に関する情報提供（学校のホームページ、学校だよりや学級だよりなど）は役に立っている」と学力の関係

	小6					中3				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	%	国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	%
あてはまる	63.1	50.0	77.5	58.7	36.5	77.1	68.5	64.8	42.6	24.6
どちらかといえばあてはまる	63.2	49.9	77.7	59.2	50.0	76.7	68.0	64.1	42.1	53.6
どちらかといえばあてはまらない	60.6	46.6	74.9	55.4	11.5	74.5	64.8	61.3	38.7	18.1
あてはまらない	59.7	44.2	74.0	52.9	2.0	74.1	63.7	59.9	37.1	3.7
合計	62.8	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.4	63.5	41.4	100.0

図表2-1-47 「学校は、学力調査の結果などを使って、学校の学力の状況について説明してくれる」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	61.9	48.9	76.5	57.6	13.8	77.6	69.5	64.8	42.6	12.5
どちらかといえばあてはまる	62.3	48.8	76.6	57.8	42.6	76.6	67.6	63.7	41.6	47.5
どちらかといえばあてはまらない	63.1	49.6	77.8	58.8	34.5	75.5	66.2	63.1	40.8	33.1
あてはまらない	64.9	52.3	78.7	61.0	9.1	76.6	68.2	64.3	42.1	6.8
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.4	63.5	41.4	100.0

図表2-1-48 「学校は、家ででの学習の仕方を教えてくれる」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	59.9	46.9	75.0	55.8	6.4	76.4	67.8	63.2	40.7	4.0
どちらかといえばあてはまる	63.0	49.7	77.4	58.7	35.4	77.3	69.1	64.6	42.8	32.2
どちらかといえばあてはまらない	63.0	49.6	77.6	58.7	46.7	76.1	66.8	63.4	41.1	50.6
あてはまらない	63.1	49.5	76.9	58.5	11.5	75.0	65.5	62.2	39.9	13.2
合計	62.7	49.4	77.3	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-49 「学校は、保護者や地域の要望に適切に対応してくれる」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	60.9	47.6	75.9	56.9	11.7	75.8	65.5	62.4	39.5	6.8
どちらかといえばあてはまる	63.6	50.5	77.9	59.6	62.6	77.1	68.9	64.8	42.9	56.6
どちらかといえばあてはまらない	61.4	47.7	76.4	56.4	21.8	75.5	65.5	62.3	39.9	30.8
あてはまらない	62.6	48.0	76.3	56.9	3.9	73.1	64.6	60.0	37.4	5.7
合計	62.8	49.5	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-50 「子どもの教育について、学校の先生に相談したり、要望を伝えたりしやすい」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
あてはまる	61.4	48.3	75.9	56.9	18.1	74.8	65.7	61.3	39.4	10.1
どちらかといえばあてはまる	63.5	50.4	77.9	59.8	49.7	76.8	68.2	64.4	42.3	44.6
どちらかといえばあてはまらない	62.8	48.8	77.2	57.7	26.2	76.5	67.3	63.8	41.5	35.9
あてはまらない	60.9	47.6	75.0	55.0	6.0	74.6	65.1	61.4	38.5	9.4
合計	62.8	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-51 「保護者が授業参観や運動会などの学校行事への参加をどの程度しているか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
よくする	63.6	50.4	78.0	59.4	80.0	78.0	69.2	66.2	44.3	49.3
時々する	59.3	45.6	74.1	54.8	17.1	75.1	66.1	61.8	39.4	36.4
あまりしない	58.4	44.1	72.5	51.8	2.7	73.8	64.9	59.5	36.9	11.9
まったくしない	47.4	31.4	60.4	41.1	0.2	71.3	61.1	56.0	34.0	2.4
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-52 「保護者がボランティアでの学校の支援をどの程度しているか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
よくする	66.0	53.2	79.9	61.9	12.9	78.8	69.9	66.7	45.5	8.7
時々する	63.9	50.6	78.6	60.3	37.2	77.8	69.3	66.0	44.2	31.1
あまりしない	61.7	48.3	76.2	56.9	37.8	75.7	66.6	62.7	40.3	41.8
まったくしない	58.7	45.1	72.9	53.4	12.1	73.9	64.5	60.0	37.4	18.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.6	41.4	100.0

(10) 保護者の社会関係と参加

図表 2-1-51～図表 2-1-53 は、保護者が学校や地域の行事等にどの程度参加しているかと子どもの学力との関係を見たものである。「授業参観や運動会などの学校行事への参加」「ボランティアでの学校の支援」をよくする保護者の子どもほど高学力の傾向が確認できる。

図表 2-1-54 は、「子育てや教育についての悩みを相談できる友人・知人がいるかどうか」図表 2-1-55 は、「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもたちの教育に関わってくれる人が多い」と思うかどうかと子どもの学力との関係を見たものである。「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもたちの教育に関わってく

れる人が多い」と思っている保護者の子どもほど高学力の傾向を見て取ることができる。

図表2-1-53 「保護者が地域の行事に子どもとどの程度参加しているか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
よく参加している	63.4	50.2	78.7	59.4	22.9	77.0	67.6	63.9	42.5	8.8
時々参加している	63.6	50.5	77.8	59.4	43.2	76.9	67.9	64.2	42.1	30.6
あまり参加してしない	62.0	48.5	76.3	57.7	25.3	76.5	67.6	64.1	42.0	39.2
まったく参加してしない	58.6	44.2	72.2	52.8	8.6	74.7	65.8	61.4	38.8	21.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.6	41.4	100.0

図表2-1-54 「子育てや教育についての悩みを相談できる友人・知人がいるか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
たくさんいる	61.6	48.0	77.1	57.9	16.2	75.3	66.6	63.6	40.3	13.6
ある程度いる	63.4	50.2	77.7	59.4	67.8	76.8	67.7	64.2	42.2	67.7
あまりいない	61.0	47.5	75.3	55.2	14.3	75.7	67.1	62.1	40.1	16.4
まったくいない	60.0	44.1	71.4	50.4	1.7	72.0	61.7	56.6	34.8	2.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.6	41.4	100.0

図表2-1-55 「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもたちの教育に関わってくれる人が多いと思うか」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
そう思う	64.5	51.7	78.6	60.8	24.1	78.2	69.8	66.4	44.4	14.3
どちらかといえ ば、そう思う	62.9	49.5	77.2	58.6	52.4	76.7	67.9	64.1	42.0	49.8
どちらかといえ ば、そう思わない	61.3	47.2	76.4	56.1	19.8	75.5	66.3	62.4	40.2	30.2
そう思わない	57.3	44.1	72.2	52.8	3.7	72.4	62.5	58.2	35.8	5.6
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.6	41.5	100.0

(11) 保護者自身の行動

図表 2-1-56～図表 2-1-60 は、保護者自身の生活や行動と子どもの学力との関係を見たものである。保護者自身の生活や行動は、子どもの学力と深く関係している。保護者自身が「規則正しい生活を心がけている」「地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がある」「本を読む」「テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る」「新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む」という家庭の子どもは学力が高いという傾向が見られる。

図表2-1-56 「保護者が規則正しい生活を心がけているか」と子どもの学力との関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
心がけている	64.6	51.2	78.8	60.5	38.1	77.4	68.8	65.6	43.3	38.6
どちらかといえば、心がけている	61.9	48.7	76.5	57.4	53.2	76.1	66.9	63.0	40.9	52.5
どちらかといえば、心がけていない	59.5	46.1	74.7	55.9	7.5	72.7	62.8	58.0	35.8	7.8
心がけていない	58.3	42.8	72.2	53.0	1.2	72.4	64.4	59.3	38.1	1.1
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.6	41.4	100.0

図表2-1-57 「保護者が地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心があるか」と子どもの学力との関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
関心がある	64.1	50.9	78.2	59.9	38.3	77.3	68.9	65.2	43.0	37.4
どちらかといえば、関心がある	62.3	48.9	76.9	58.0	53.3	76.1	66.8	63.2	41.1	53.8
どちらかといえば、関心がない	59.7	46.2	75.0	55.2	7.7	73.3	64.1	59.2	36.9	8.0
関心がない	54.2	38.8	67.4	46.0	0.7	70.6	60.5	53.7	32.1	0.8
合計	62.7	49.4	77.2	58.4	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-58 「保護者がどの程度本を読むか（漫画や雑誌は除く。「本」には電子書籍も含む）」と子どもの学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
よくする	66.9	54.0	79.8	62.5	18.9	80.0	72.1	67.5	46.0	19.2
時々する	63.6	50.6	78.1	59.5	35.0	76.6	67.8	64.0	42.1	34.6
あまりしない	60.9	47.3	76.1	56.6	34.6	75.1	65.6	62.5	40.1	33.7
まったくしない	59.0	44.7	73.8	54.5	11.6	73.4	64.0	59.8	36.4	12.5
合計	62.8	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-59 「保護者がどの程度テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見るか」と子どもの学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
よくする	64.7	51.0	78.3	60.2	47.9	77.5	68.9	65.2	43.0	47.0
時々する	61.3	48.4	76.4	57.5	40.3	75.9	66.8	63.1	41.1	40.7
あまりしない	59.9	46.5	75.7	55.8	10.1	73.7	64.4	60.1	37.4	10.3
まったくしない	56.6	42.4	72.5	51.5	1.7	69.0	57.6	54.1	32.5	2.0
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-60 「保護者がどの程度新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読むか」と子どもの学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
よくする	66.4	52.9	79.8	62.1	25.3	78.8	70.4	67.2	45.5	26.4
時々する	63.2	49.6	77.6	58.8	37.0	76.8	67.7	64.3	42.0	38.6
あまりしない	60.3	47.2	75.7	56.2	25.6	74.5	65.4	61.1	38.7	24.5
まったくしない	59.2	46.1	73.9	55.0	12.1	72.4	62.7	57.7	35.7	10.4
合計	62.8	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

(12) 保護者の年齢・仕事・収入・学歴と子どもの学力

図表 2-1-61 「父親の年齢」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
29歳以下	51.2	37.4	66.7	40.7	0.4	66.4	60.1	50.0	30.9	0.1
30～34歳	54.1	39.8	70.2	47.4	4.4	69.7	61.7	52.6	30.2	1.2
35～39歳	60.5	46.9	75.6	56.1	21.2	72.0	61.8	57.6	34.4	9.5
40～44歳	64.3	51.3	78.7	60.3	37.5	75.9	66.4	63.6	41.0	31.0
45～49歳	65.6	53.0	79.5	62.5	24.7	78.7	70.2	67.3	45.4	34.0
50～59歳	64.3	49.9	78.7	60.0	10.7	78.0	70.0	66.0	44.2	22.4
60歳以上	62.6	44.5	73.2	54.6	1.0	72.7	63.4	56.2	34.7	1.7
合計	63.3	50.0	77.8	59.2	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-61～図表 2-1-62 は、保護者の年齢と子どもの学力との関係を見たものである。これを見ると、保護者の年齢が 45～49 歳の子どもの学力が（小・中とも）最も高いことが分かる（父親についても、母親についても同じ傾向が見られる）。図表 2-1-63 は「父親の現在の仕事」と学力の関係、図表 2-1-64 は「母親の現在の仕事」と学力の関係を見たものである。父親が常勤職員の子どもの学力が最も高いが、母親については明確な関係は

見られない。

図表2-1-62 「母親の年齢」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
29歳以下	46.1	32.6	63.5	42.5	0.6	64.1	53.7	44.5	14.4	0.1
30～34歳	56.1	41.0	70.4	49.6	7.4	66.6	57.7	49.4	27.5	1.9
35～39歳	60.7	47.3	75.9	56.4	29.9	72.3	62.2	57.7	35.0	16.0
40～44歳	64.6	51.6	78.9	60.7	41.5	76.7	67.8	64.7	42.3	42.0
45～49歳	65.8	52.6	79.5	61.9	17.4	78.5	70.2	66.7	44.8	30.5
50～59歳	64.2	52.1	77.9	60.6	3.1	78.2	69.7	65.3	43.7	9.1
60歳以上	57.5	44.1	68.2	51.6	0.3	69.0	56.3	49.7	28.3	0.4
合計	62.9	49.6	77.3	58.7	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-63 「父親の現在の仕事」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
常勤職員	64.3	51.2	78.7	60.3	79.8	77.7	69.1	65.9	43.7	78.9
非常勤職員	53.2	38.1	65.3	46.9	1.2	73.5	66.4	58.9	35.7	1.1
自営業・家事手伝い	60.1	46.3	75.2	56.1	16.3	74.3	64.5	61.0	38.4	16.8
パート・アルバイト	56.0	42.3	73.2	49.8	1.0	71.7	60.3	54.1	35.2	1.1
無職	57.0	45.9	72.3	53.0	1.0	69.4	60.1	53.5	31.2	1.2
その他	59.6	44.7	71.8	55.9	0.8	71.1	57.8	56.2	35.5	0.9
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-64 「母親の現在の仕事」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
常勤職員	63.1	49.0	77.9	58.8	22.2	76.7	67.6	64.1	41.7	22.7
非常勤職員	66.2	52.7	79.8	62.3	3.8	77.5	69.6	66.0	44.3	4.2
自営業・家事手伝い	62.3	48.3	77.1	58.3	8.0	75.3	66.1	62.2	40.2	8.5
パート・アルバイト	61.5	48.5	76.4	57.1	43.5	76.2	66.9	63.4	41.0	47.1
無職	65.0	52.1	78.3	61.3	21.8	77.4	69.7	65.5	44.1	16.7
その他	67.7	50.7	79.5	64.5	0.8	74.2	62.1	58.7	35.8	0.8
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-65は「世帯収入」と子どもの学力の関係を、図表2-1-66～図表2-1-67は保護者の学歴と子どもの学力との関係を見たものである。第3章においては、回帰分析という手法によってこれらの要因が子どもの学力と強い関係にあることが示されるが、ここでは回帰分析ではなく、集計表という形で示しておく。図表2-1-65からは、概ね世帯収入が高いほど子

どもの学力が高い傾向が見られるが、その関係は必ずしも直線的ではなく、中学の国語A、数学A、Bについては、1500万円以上の世帯よりも1200～1500万円の世帯の方が生徒の学力が高い。保護者の最終学歴については、学歴が高いほど子どもの学力が高い傾向が見られる。父学歴と比較すると、母学歴のほうがより強く子どもの学力に関係している。例えば、数学Bについてみると、父親の最終学歴が「高等学校」だと正答率が37.6%、「大学」になると51.4%となる。それに対し、母親の最終学歴が「高等学校」だと正答率が36.6%、「大学」になると58.1%であり、その差は父学歴による差よりも大きい。

最後に、世帯収入と保護者の学歴の合成変数であるSES（社会経済背景）と子どもの学力との関係を図表2-1-68に示す。ここまでの分析から明らかなように、SESが高いほど子どもの学力は高い。Highest SESとLowest SESとの間には最大で正答率23.9ポイントの差（数学B）がある。

図表2-1-65 「世帯収入（税込年収）」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
200万円未満	53.0	39.0	67.2	45.7	6.7	69.1	58.6	51.5	30.0	7.5
200万円～300万円	56.8	42.7	70.4	50.8	8.2	71.2	60.9	55.2	33.1	8.6
300万円～400万円	58.4	45.0	73.6	53.3	12.6	73.9	63.4	58.4	35.5	11.8
400万円～500万円	60.6	47.0	75.1	56.2	14.9	74.8	65.2	60.6	37.9	13.3
500万円～600万円	62.7	48.8	77.6	57.9	14.0	76.6	67.6	63.6	40.4	13.7
600万円～700万円	64.8	52.5	80.1	61.3	11.9	77.6	69.2	66.6	43.5	12.1
700万円～800万円	64.9	52.4	79.7	62.2	10.4	78.7	70.9	68.6	46.6	10.2
800万円～900万円	69.6	57.6	83.2	66.0	6.3	79.7	71.8	69.6	48.1	7.0
900万円～1000万円	69.3	55.1	82.7	66.4	5.0	80.9	73.3	71.6	49.9	5.5
1000万円～1200万円	69.6	55.5	83.9	67.9	5.3	81.8	73.9	72.8	52.6	6.0
1200万円～1500万円	70.8	59.4	84.5	67.1	2.6	83.0	75.8	75.1	54.7	2.8
1500万円以上	75.5	61.5	85.6	71.5	2.1	81.8	75.9	73.4	53.4	1.4
合計	62.8	49.5	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-66 「父親の最終学歴」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
小学校・中学校	51.4	38.7	67.2	46.4	6.1	68.0	55.7	50.2	27.0	6.1
高等学校	59.4	45.1	74.4	54.4	40.5	74.2	64.6	60.5	37.6	44.4
専門学校・各種学校	61.0	47.7	76.4	56.3	14.1	75.7	67.2	62.6	40.2	12.1
短期大学・高等専門学校	63.9	51.2	79.0	60.6	3.8	78.3	69.8	66.7	44.1	3.6
大学	70.1	57.7	83.6	67.4	31.9	81.9	74.4	72.5	51.4	31.5
大学院	77.4	66.0	88.5	75.2	3.5	85.6	79.2	79.6	62.7	2.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表2-1-67 「母親の最終学歴」と学力の関係

	小6					中3				
	国語A	国語B	算数A	算数B	%	国語A	国語B	数学A	数学B	%
小学校・中学校	50.7	37.9	64.9	45.0	3.3	66.0	54.6	46.9	25.7	3.7
高等学校	58.3	44.6	73.2	52.9	40.8	73.7	63.9	59.5	36.6	46.0
専門学校・各種学校	61.8	47.6	77.0	57.2	18.3	75.8	67.7	63.1	40.2	17.5
短期大学・高等専門学校	66.6	53.8	81.1	63.4	23.7	80.4	72.2	70.3	48.3	22.0
大学	74.2	62.2	86.2	72.5	13.3	84.6	77.9	76.4	58.1	10.5
大学院	80.5	68.2	87.6	74.4	0.7	87.1	79.5	79.6	62.4	0.3
合計	62.7	49.4	77.2	58.5	100.0	76.3	67.3	63.5	41.4	100.0

図表 2-1-68 家庭の社会経済的背景(SES)と子どもの学力

	小6				中3			
	国語A	国語B	算数A	算数B	国語A	国語B	数学A	数学B
Lowest	53.9	39.9	68.6	47.7	70.7	59.8	54.4	31.5
Lower Middle	60.1	46.1	75.2	55.1	75.2	66.0	62.0	38.8
Upper Middle	63.9	51.4	79.2	60.3	78.6	70.3	67.5	44.9
Highest	72.7	60.0	85.4	70.3	83.6	76.7	75.5	55.4

第2章 家庭環境と子どもの学力

(2) 保護者の関与・家庭の社会経済的背景・子どもの学力

垂見裕子

1. 背景

近年、家庭環境の多様化から、日本の教育施策でも「家庭教育」および「家庭教育支援」が重要視されている。子どもの教育においては、保護者の収入や学歴などのような構造的な要因だけではなく、保護者がどのように、どの程度、子どもと関わるかといったプロセスも強い影響力を及ぼすことが明らかにされている。本章は、どのような保護者の行動や子どもとの関わり方が、子どもの学力に強い影響力を及ぼすのかを検証することが目的である。一方、家庭の社会経済的背景が有利な保護者ほど、子どもの教育に戦略的にかかわっていることも明らかにされていることから(片岡栄美、「教育達成家庭における家族の教育戦略—文化的資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に—」『教育学研究 68(3)』、pp.259-273、2001年; Lareau, A., 2003, “Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life”, University of California Press)、保護者の関与と子どもの学力の関係を分析する上では、家庭のSESによる差異を考慮することが重要である。

2. 分析課題

本章では、以下の課題を検証する。

- (1) どのような保護者の関与が、学力に強い影響力を及ぼすのか。
- (2) 保護者のSESを統制しても、学力に強い影響力を及ぼす保護者の関与は何か。
- (3) 個々の保護者の関与を総合化すると、学力に最も強い影響力を及ぼす要因は何か。
- (4) 学習意欲や学校肯定観に最も強い影響力を及ぼす要因は何か。

3. 保護者の関与に関する概念と変数

本章では、保護者の指針や考え方のような規範ではなく、保護者の具体的な行動や子どもとの関わり方を現わす変数、また学力との関連が強いと想定される変数という二つの基準で、保護者の関与に関する変数を選出した。その上で、主成分分析により、グループ化した。具体的に分析に使用する概念・変数は次に示すとおりである。

(1) 読書活動

- ① 小さいころ絵本を読み聞かせした
- ② 子どもに本や新聞を読むようにすすめている
- ③ 子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている
- ④ 子どもと一緒に図書館に行く
- ⑤ 保護者が本を読む
- ⑥ 保護者が新聞の政治や社会問題に関する記事を読む

(2) 生活習慣

- ① 子どもが決まった時刻に起きるよう(起こすよう)にしている

- ② 子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている
- ③ 毎日子どもに朝食を食べさせている
- ④ テレビゲームで遊ぶ時間を限定している
- ⑤ 保護者が規則正しい生活を心がけている

(3) 親子間の信頼関係・コミュニケーション

- ① 子どもから学校での出来事について話を聞いている
- ② 子どもと勉強や成績のことについて話をする
- ③ 子どもと将来や進路についての話をする
- ④ 子どもと友達のことについて話をする
- ⑤ 子どもと社会の出来事やニュースについて話をする
- ⑥ 子どもの心配ごとや悩み事の相談によく乗っている

(4) 文化的活動

- ① 子どもと美術館や劇場によく行く
- ② 子どもと博物館や科学館によく行く

(5) 勉強への働きかけ

- ① 普段子どもの勉強をみている
- ② 子どもに「勉強しなさい」とよく言っている
- ③ 計画的に勉強するよう子どもにうながしている

4. 従属変数

本章の中心的な従属変数である学力には、国語 A 問題の正答率を用いる。幼少期の言語活動は家庭環境により大きな差異があることが明らかにされていることから (Hart, B. & Risley, T., 1995, “Meaningful Differences in the Everyday Experience of Young American Children”, Brooks Publishing)、読解力において家庭の影響力が最も強いと想定されること、実際にそれぞれの問題で回帰分析を行ったところ、本章の分析では総じて国語 A の係数が大きかったことが理由である。

保護者の関与と子どもの学習意欲や学習肯定観との関連も検証するが、学習意欲には、保護者質問紙の「保護者が言わなくても、自分から勉強している」、学校肯定観には、保護者質問紙の「学校に行くことを楽しみにしている」を用いる。

5. 保護者の関与・SES・学力の関連 (小学校)

まず、学力との関連をみる前に、それぞれの行動・関わり方を積極的に行っている保護者の割合を、図表 2-2-1 で確認してみよう^{1) 2) 3)}。

図表 2-2-1 保護者の関与の割合（全体・SES 別）と学力との関連（小 6）

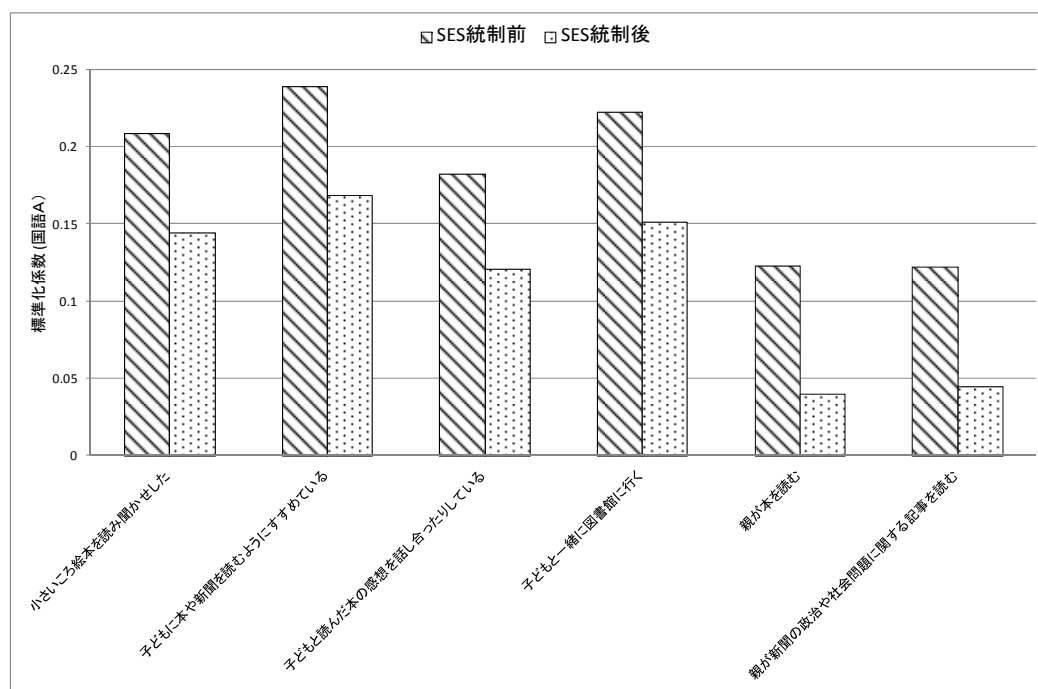
	割合						学力との関連					
	全体の中で 行っている割合			Highest SESの中で 行っている割合			Lowest SESの中で 行っている割合			SES統制前		
	割合	SE		割合	SE		割合	SE		非標準化 係数	SE	SES統制後 非標準化 係数
【読書活動】												
小さいころ絵本を読み聞かせた	73.7%	(0.005)		83.0%	(0.008)		64.2%	(0.012)		4.74	(0.284)	3.26 (0.263)
子どもに本や新聞を読むようにすすめている	69.3%	(0.006)		81.5%	(0.009)		58.2%	(0.011)		5.70	(0.291)	4.02 (0.260)
子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている	38.8%	(0.007)		51.4%	(0.012)		30.9%	(0.011)		4.32	(0.293)	2.86 (0.268)
子どもと一緒に図書館に行く	56.4%	(0.010)		68.7%	(0.014)		42.2%	(0.013)		2.38	(0.120)	1.65 (0.121)
親が本を読む	53.9%	(0.007)		68.4%	(0.011)		41.4%	(0.010)		2.72	(0.286)	0.89 (0.289)
親が新聞の政治や社会問題に関する記事を読む	62.3%	(0.008)		75.0%	(0.010)		50.0%	(0.012)		2.59	(0.237)	0.94 (0.232)
【生活習慣】												
子どもが決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている	97.0%	(0.002)		98.0%	(0.003)		95.0%	(0.006)		2.41	(0.450)	1.33 (0.408)
子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている	82.0%	(0.005)		86.3%	(0.007)		76.7%	(0.011)		2.21	(0.303)	1.34 (0.292)
毎日子どもに朝食を食べさせている	97.6%	(0.002)		99.2%	(0.002)		94.8%	(0.005)		7.07	(0.634)	4.57 (0.596)
テレビゲームで遊ぶ時間を限定している	61.9%	(0.006)		71.4%	(0.011)		51.8%	(0.012)		3.47	(0.260)	2.18 (0.217)
親が規則正しい生活を心がけている	91.4%	(0.003)		94.6%	(0.004)		86.4%	(0.008)		2.51	(0.393)	0.93 (0.359)
【親子間の信頼関係・コミュニケーション】												
子どもから学校での出来事について話を聞いている	94.7%	(0.003)		95.3%	(0.005)		93.2%	(0.006)		2.44	(0.446)	1.95 (0.411)
子どもと勉強や成績のことについて話をする	85.6%	(0.005)		89.4%	(0.007)		80.8%	(0.009)		4.37	(0.351)	3.02 (0.334)
子どもと将来や進路のことについての話をする	75.4%	(0.007)		83.0%	(0.011)		69.2%	(0.011)		3.60	(0.325)	2.44 (0.294)
子どもと友達のことについて話をする	95.8%	(0.002)		96.3%	(0.004)		95.0%	(0.005)		2.14	(0.368)	1.68 (0.332)
子どもと社会の出来事やニュースについて話をする	73.9%	(0.006)		81.0%	(0.010)		67.0%	(0.012)		4.05	(0.293)	2.95 (0.278)
子どもの心配事や悩み事の相談によく乗っている	83.4%	(0.004)		84.5%	(0.008)		81.4%	(0.009)		0.72	(0.322)	0.42 (0.305)
【文化的活動】												
子どもと美術館や劇場によく行く	34.3%	(0.007)		46.9%	(0.014)		25.4%	(0.009)		1.73	(0.163)	0.80 (0.134)
子どもと博物館や科学館によく行く	38.2%	(0.009)		54.8%	(0.013)		25.6%	(0.012)		2.64	(0.186)	1.33 (0.184)
【勉強への働きかけ】												
普段子どもとの勉強をみている	59.1%	(0.006)		68.2%	(0.009)		50.9%	(0.012)		2.20	(0.300)	0.91 (0.263)
こどもに「勉強しなさい」とよく言っている	59.9%	(0.006)		64.9%	(0.011)		55.4%	(0.012)		-1.07	(0.281)	-1.61 (0.284)
計画的に勉強するよう子どもにうながしている	70.2%	(0.006)		80.3%	(0.009)		58.8%	(0.011)		3.23	(0.286)	1.69 (0.258)

図表 2-2-1 から、生活習慣や親子間の信頼関係・コミュニケーションに関する項目は、読書活動、文化的活動、勉強への働きかけに関する項目に比べて、積極的に行っている保護者の割合が総じて高いことが確認できる。また、家庭の社会経済的背景の有利な層

(Highest SES) と不利な層 (Lowest SES) それぞれの割合の差に注目すると、差が特に大きい項目 (20%以上の差がある項目) は、「子どもと博物館や科学館によく行く」「保護者が本を読む」「子どもと一緒に図書館に行く」「保護者が新聞の政治や社会問題に関する記事を読む」「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」「子どもと美術館や劇場によく行く」「計画的に勉強するよう子どもにうながしている」「子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている」である。例えば、保護者の収入と学歴が高い家庭の内 68.7%の保護者は子どもと一緒に図書館に行くが、保護者の収入と学歴が低い家庭の内子どもと一緒に図書館に行く保護者は、42.2%にとどまる。

では、どのような保護者の関与が、学力に強い影響力を及ぼすのか。また、家庭の社会経済的背景 (SES) を統制しても、学力に特に強い影響力を及ぼす保護者の関与は何かをみてみよう。このセクションでは、学力を従属変数とした回帰分析を用いて、最初のモデルでは独立変数として保護者の関与の変数のみを入れ、次のモデルで保護者の SES を加えた。二つのモデルの非標準化係数は図表 2-2-1 に示したが、変数間の相対的な影響力の大きさを比較するめに、図表 2-2-2 から 2-2-9 では、二つのモデルにおける保護者の関与の変数の標準化係数 (ベータ) の値をグラフで示す。

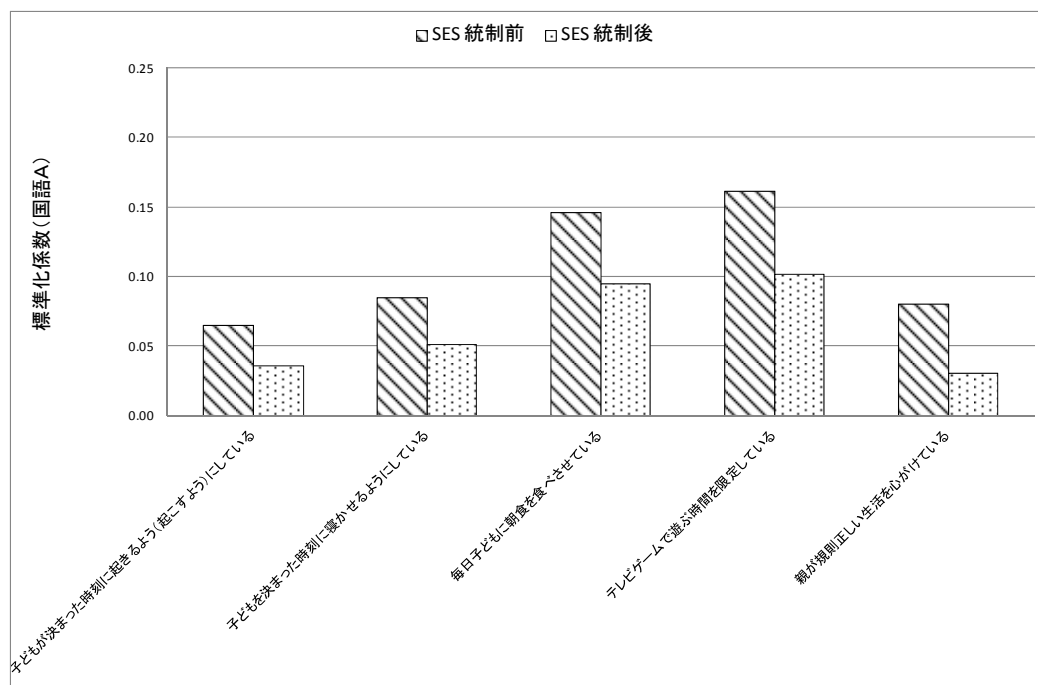
図表 2-2-2 家庭における読書活動と学力の関連 (小 6)



図表 2-2-2 から、読書に関する行動や関わり方はいずれも学力と強い関連があるとともに、SES を統制すると、その影響力が縮小することが確認できる。なぜなら、図表 2-2-1 で確認したように、SES の高い保護者が、SES の低い保護者よりも、このような行動を積極的に行っているからである。一方、家庭の社会経済的背景の差異を考慮しても、これらの行動が子どもの学力に強い固有の影響力を及ぼしていることも確認できる。読書に関する活動の中で、学力に最も強い影響力を及ぼしているのは、「子どもに本や新聞を読むよう

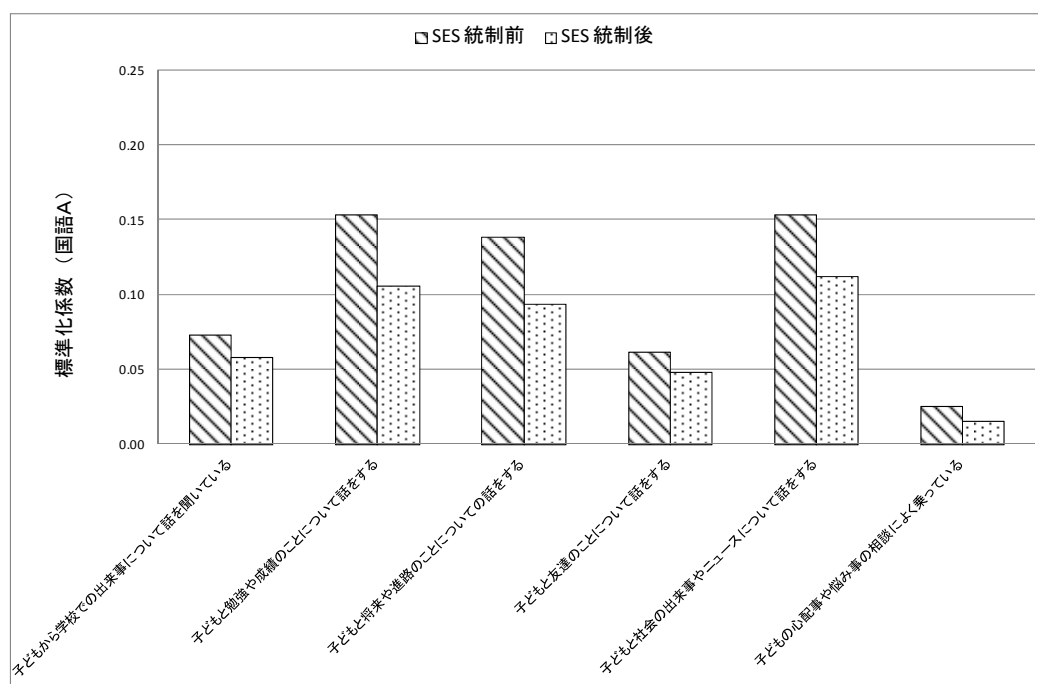
にすすめている」「子どもと一緒に図書館に行く」「小さいころ絵本を読み聞かせした」であることが確認できる。

図表 2-2-3 家庭における生活習慣と学力の関連（小 6）



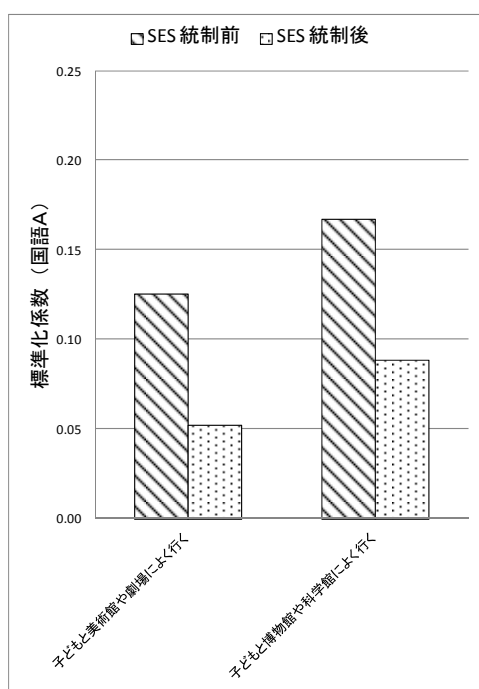
図表 2-2-3 から、生活習慣の中で、家庭の社会的・経済的背景の差異を考慮しても、学力に最も強い影響力を及ぼしているのは、「テレビゲームで遊ぶ時間を限定している」「毎日子どもに朝食を食べさせている」であることが分かる。一方、読書に関する行動や関わり方の影響力に比べて、総じて影響力が小さいことも認められる。

図表 2-2-4 親子間の信頼関係・コミュニケーションと学力の関連（小 6）



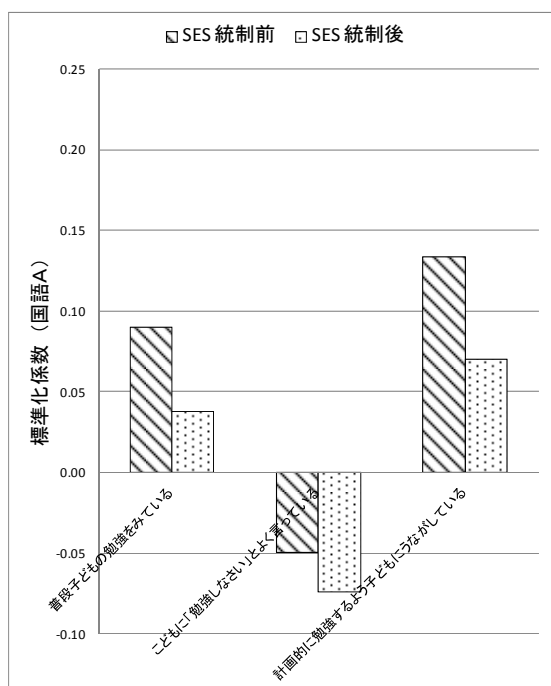
図表 2-2-4 から、親子間の信頼関係や情報提供などのような家庭における社会関係資本の要素をみてみると、学力に最も強い影響力を及ぼしているのは、「子どもと社会の出来事やニュースについて話をする」「子どもと勉強や成績のことについて話をする」「子どもと将来や進路のことについて話をする」である。これらの項目は、図表 2-2-1 で、「子どもから学校での出来事について話を聞いている」や「子どもと友達のことについて話しをする」に比べると、SES の高い保護者と SES の低い保護者で積極的に行っている割合の差が大きかった項目であることから、SES 統制後の縮小率が他の項目より大きいことも確認できる。

図表 2-2-5 家庭における文化的活動と学力の関連（小 6）



図表 2-2-5 から、「美術館や劇場によく行く」「博物館や科学館によく行く」は、学力との関連が強いが、図表 2-2-1 で確認したとおり SES との関連も強いいため、統制後はその影響力が大幅に縮小されるのが確認できる。これらの行動は、学力に固有の影響を及ぼす面もあるが、それと同じくらい、あるいはそれ以上に家庭背景の疑似相関の面もあることを示唆している。

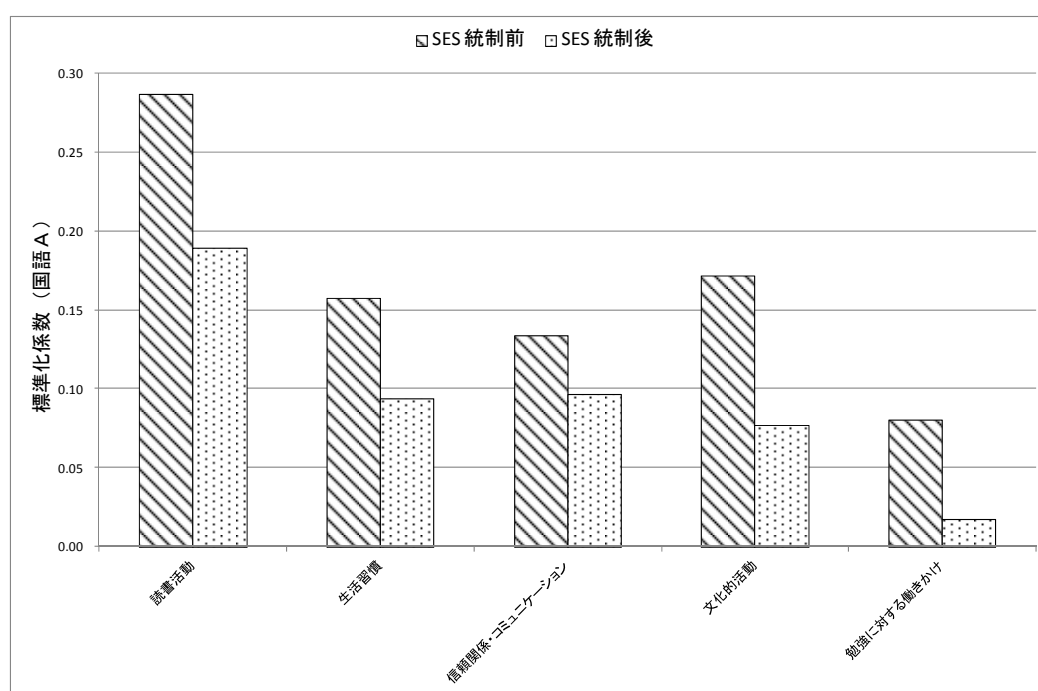
図表 2-2-6 家庭における勉強に対する働きかけと学力の関連（小 6）



図表 2-2-6 から、勉強への働きかけも、SES 統制後の縮小率大きいことが確認できる。また「子どもに勉強しなさいとよく言っている」が学力と負の関連があるのは、子どもの学力が低い保護者ほど、子どもに「勉強しなさい」と言う傾向がある、つまり逆方向の関連を現わしていると推測される。

では、個々の保護者の行動や関わり方を総合化してみると、学力に最も強い影響力を及ぼす要因は何か。このセクションでは、保護者の行動や関わり方の変数から6つの合成尺度（「読書活動」「生活習慣」「信頼関係・コミュニケーション」「文化的活動」「勉強への働きかけ」）を構成した。合成した理由は、（1）グループ化することにより、どの要因が最も影響力が大きいかを比較するため、（2）複数の行動の相乗効果、つまり読書活動でも様々なアプローチ実践している保護者の子どもほど学力が高い（例えば、保護者が「子どもに本や新聞を読むようすすめている」のみよりも、すすめるとともに「子どもと一緒に図書館に行く」方が効果的である）ことが想定されるためである。変数を合成するにあたっては、主成分分析を行い、主成分得点を値として使用した。

図表 2-2-7 保護者の関与と学力の関連（小6）

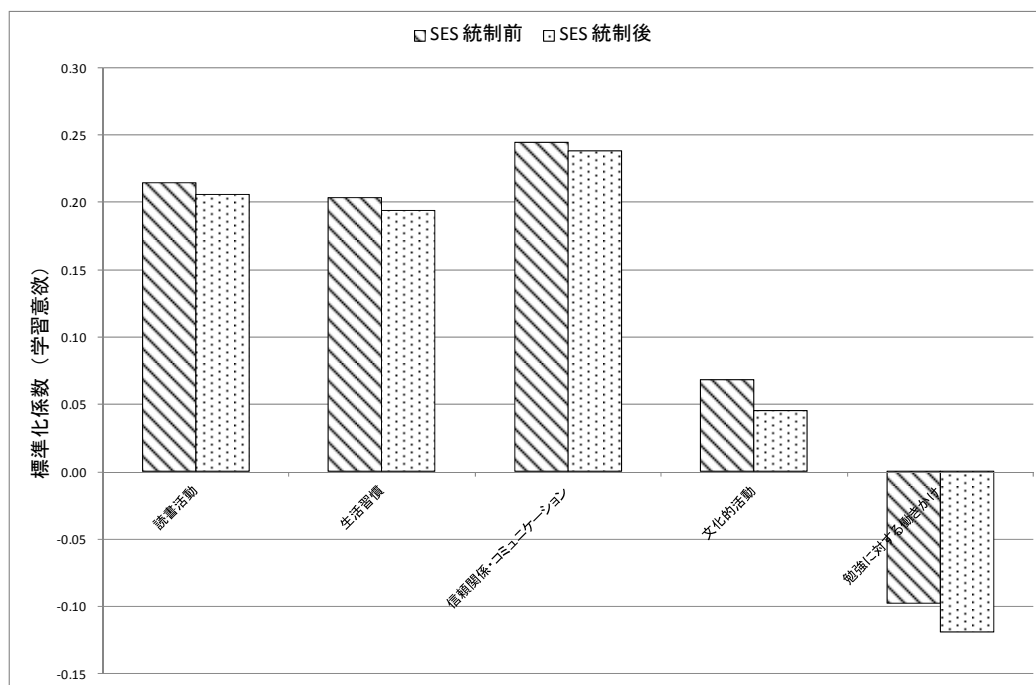


	SES 統制前	SES 統制後	SES導入による係数の縮小率
読書活動	0.29	0.19	34%
生活習慣	0.16	0.09	41%
信頼関係・コミュニケーション	0.13	0.10	28%
文化的活動	0.17	0.08	55%
勉強に対する働きかけ	0.08	0.02	79%

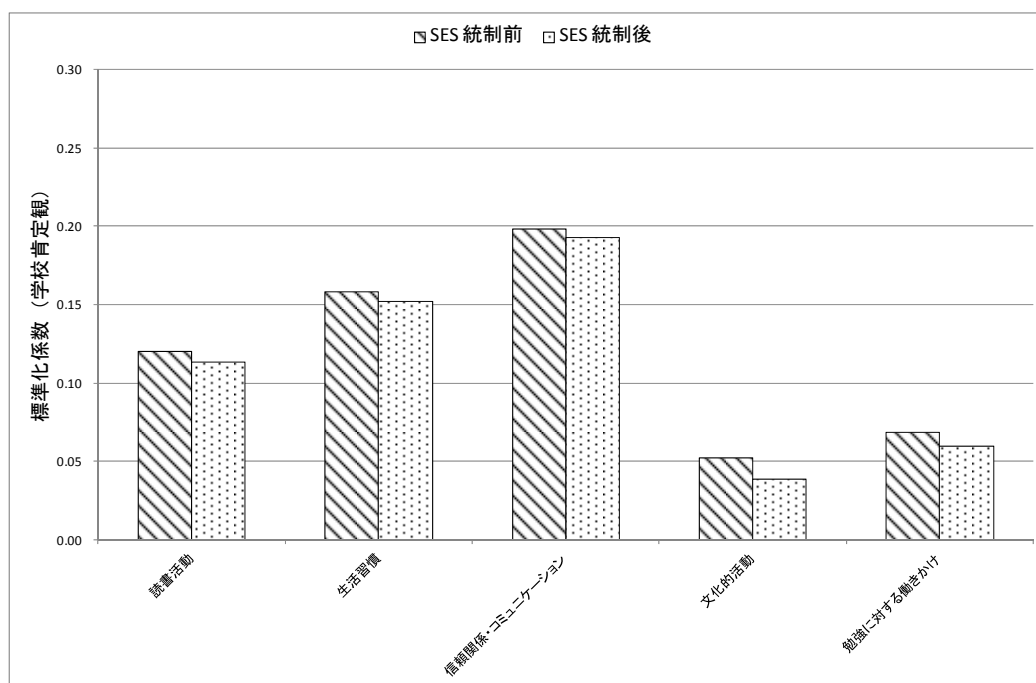
図表 2-2-7 から、家庭の社会経済的背景（SES）統制後に学力との関連が最も強い要因は、家庭における読書活動であることが明らかである。また、家庭における文化的活動や生活習慣は学力との関連が強いが、家庭の社会経済的背景を統制した後、その関連は大幅に縮小される（それぞれ 41%、55%）。つまり、それ自体が学力に影響力を及ぼす側面もあるが、家庭の社会経済的背景（SES）による疑似相関、つまり家庭背景の高い層がそれらの行動をより積極的に行っていることにより学力との関連がみられる側面も高いことを現わしている。

次に、子どもの学習意欲や学校肯定観とこれらの保護者の行動や関わり方の関連を見てみよう。同じように、SES 統制前と SES 統制後の保護者の関与の標準化係数の値を比べてみる。

図表 2-2-8 保護者の関与と学習意欲の関連（小 6）



図表 2-2-9 保護者の関与と学校肯定観の関連（小 6）



図表 2-2-8、2-2-9 から、SES 統制後の係数の縮小率が、学力を従属変数とした場合に比べて、小さいことが確認できる。これは、学力は SES との相関が強い（相関係数が.33）のに対して、学習意欲と学校肯定観は SES との関連が比較的弱い（相関係数が統計的に有意であるが、それぞれ .08、.07）からである。また学力に比べて、生活習慣や信頼関係・

コミュニケーションに関する保護者の関与の影響力が大きいことが確認できる。規則正しい生活を整え、親子間の信頼関係を構築し、様々な情報やアドバイスを提供している家庭ほど、子どもが自分から勉強し、学校に楽しく行く傾向が強いことを示唆している。

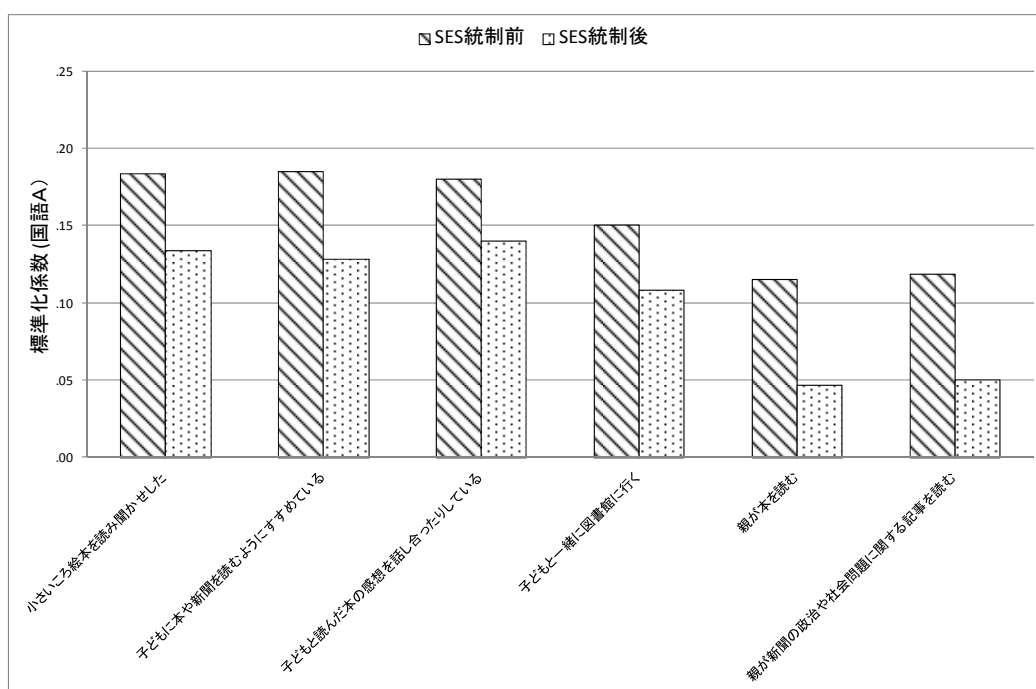
6. 保護者の関与・SES・学力の関連（中学校）

では、中3データでも同様に、まずこれらの保護者の行動や子どもとの関わり方を積極的に行っている割合、家庭背景の異なる層で積極的に行っている割合の差を確認した後に、これらの保護者の関与と子どもの学力の関連、家庭の社会経済的背景を統制した上での学力との関連、最後に学習意欲、学校肯定観との関連をみてみよう。

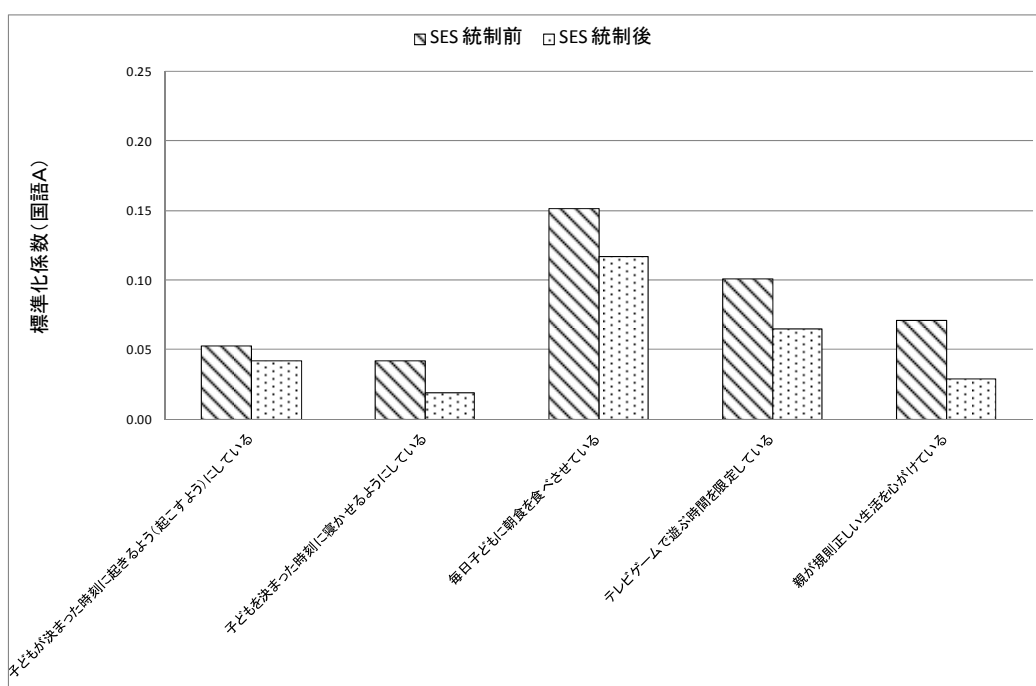
図表 2-2-10 保護者の関与の割合（全体・SES 別）と学力との関連（中 3）

	割合				学力との関連			
	全体の中で 行っている割合		Highest SESの中で 行っている割合		Lowest SESの中で 行っている割合		Highest SESの割合と Lowest SESの割合の差	
	割合	SE	割合	SE	割合	SE	非標準化 係数	SE
【読書活動】								
小さいころ絵本を読み聞かせた	73.1%	(0.005)	82.4%	(0.006)	63.6%	(0.008)	18.8%	(0.010)
子どもに本や新聞を読むようにすすめている	62.0%	(0.006)	75.4%	(0.009)	50.2%	(0.010)	25.2%	(0.013)
子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている	30.0%	(0.005)	39.0%	(0.008)	23.9%	(0.008)	15.1%	(0.010)
子どもと一緒に図書館に行く	28.7%	(0.007)	36.2%	(0.009)	22.1%	(0.010)	14.1%	(0.012)
親が本を読む	53.8%	(0.008)	69.3%	(0.009)	42.0%	(0.010)	27.3%	(0.011)
親が新聞の政治や社会問題に関する記事を読む	65.0%	(0.006)	77.6%	(0.007)	52.1%	(0.010)	25.5%	(0.011)
【生活習慣】								
子どもが決まった時刻に起きるよう（起こすよう）にしている	94.8%	(0.002)	95.7%	(0.003)	92.8%	(0.004)	2.9%	(0.005)
子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている	57.5%	(0.005)	62.4%	(0.007)	52.9%	(0.008)	9.5%	(0.010)
毎日子どもに朝食を食べさせている	95.0%	(0.002)	97.2%	(0.002)	91.8%	(0.005)	5.5%	(0.006)
テレビゲームで遊ぶ時間を限定している	44.6%	(0.006)	53.6%	(0.009)	36.3%	(0.008)	17.3%	(0.012)
親が規則正しい生活を心がけている	91.1%	(0.003)	95.0%	(0.003)	86.4%	(0.006)	8.7%	(0.006)
【親子間の信頼関係・コミュニケーション】								
子どもから学校での出来事について話を聞いている	88.5%	(0.003)	89.0%	(0.006)	87.2%	(0.005)	1.8%	(0.007)
子どもと勉強や成績のことについて話をする	91.7%	(0.003)	94.2%	(0.004)	88.7%	(0.006)	5.5%	(0.006)
子どもと将来や進路のことについての話をする	91.3%	(0.003)	92.8%	(0.005)	89.1%	(0.005)	3.7%	(0.007)
子どもと友達のことについて話をする	89.2%	(0.003)	89.6%	(0.005)	88.0%	(0.005)	1.6%	(0.007)
子どもと社会の出来事やニュースについて話をする	72.6%	(0.005)	78.6%	(0.007)	66.6%	(0.008)	12.0%	(0.009)
子どもの心配事や悩み事の相談によく乗っている	72.9%	(0.005)	71.4%	(0.009)	72.1%	(0.008)	-0.8%	(0.012)
【文化的活動】								
子どもと美術館や劇場によく行く	24.0%	(0.005)	33.8%	(0.010)	16.9%	(0.007)	16.9%	(0.012)
子どもと博物館や科学館によく行く	15.8%	(0.006)	24.5%	(0.011)	8.9%	(0.005)	15.7%	(0.011)
【勉強への働きかけ】								
普段子どもへの勉強をみている	27.3%	(0.004)	36.3%	(0.007)	20.5%	(0.007)	15.9%	(0.009)
子どもに「勉強しなさい」とよく言っている	60.3%	(0.004)	62.7%	(0.007)	57.2%	(0.010)	5.4%	(0.012)
計画的に勉強するよう子どもにうながしている	70.7%	(0.005)	79.6%	(0.008)	62.0%	(0.010)	17.6%	(0.011)
							1.46	(0.210)
							0.53	(0.212)

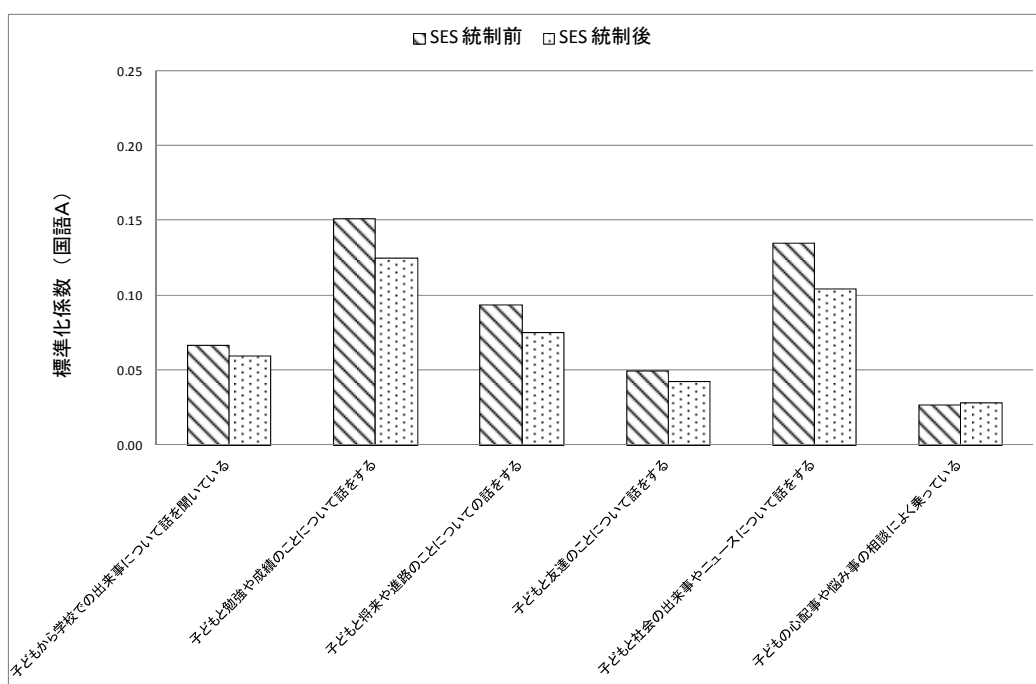
図表 2-2- 11 家庭における読書活動と学力の関連（中 3）



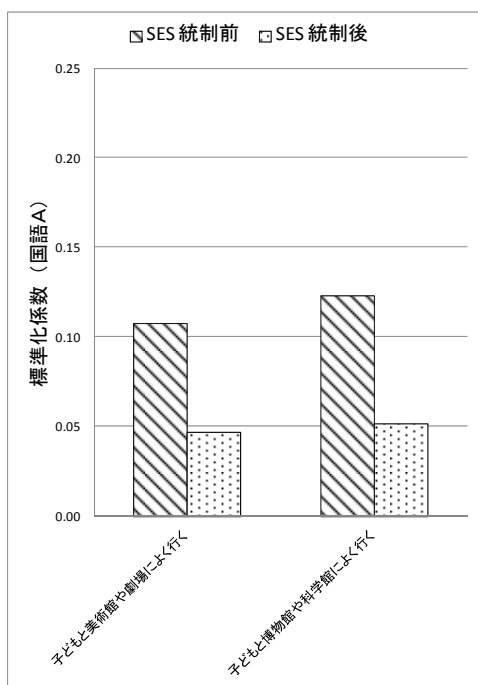
図表 2-2- 12 家庭における生活習慣と学力の関連（中 3）



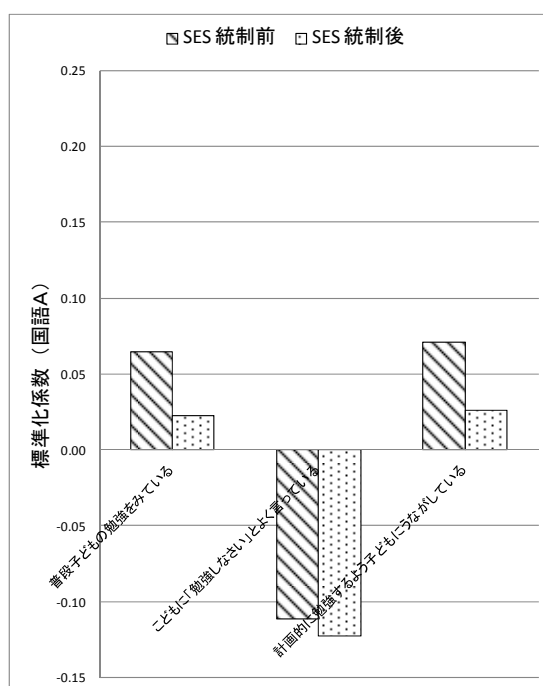
図表 2-2-13 親子間の信頼関係・コミュニケーションと学力の関連（中 3）



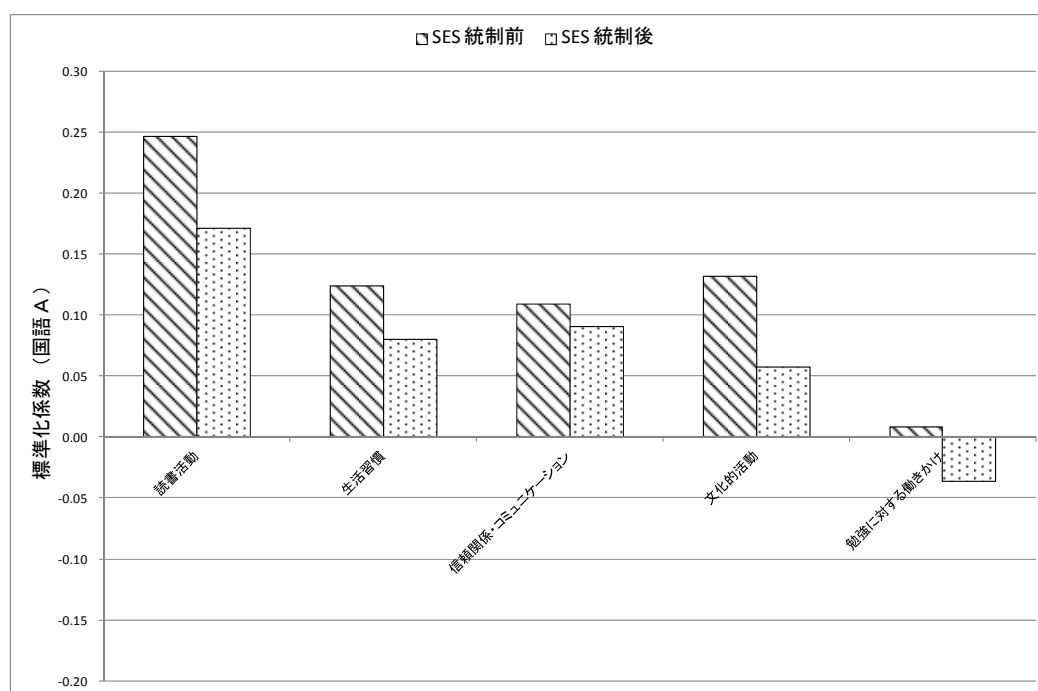
図表 2-2-14 家庭における文化的活動と学力の関連（中 3）



図表 2-2-15 家庭における勉強に対する働きかけと学力の関連（中 3）

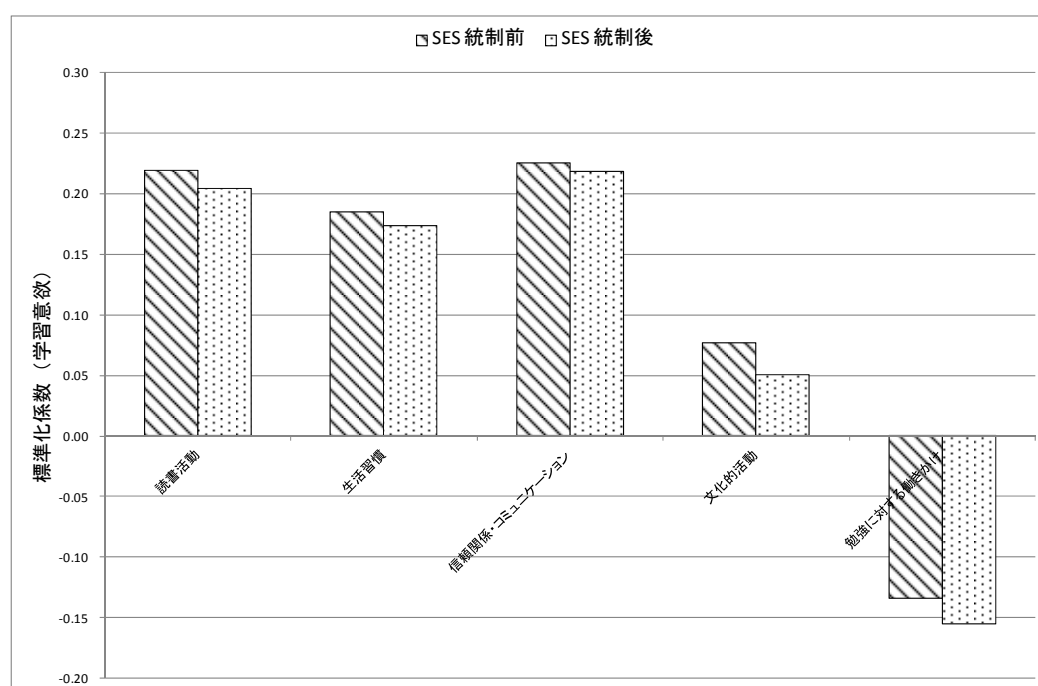


図表 2-2- 16 保護者の関与と学力の関連（中 3）

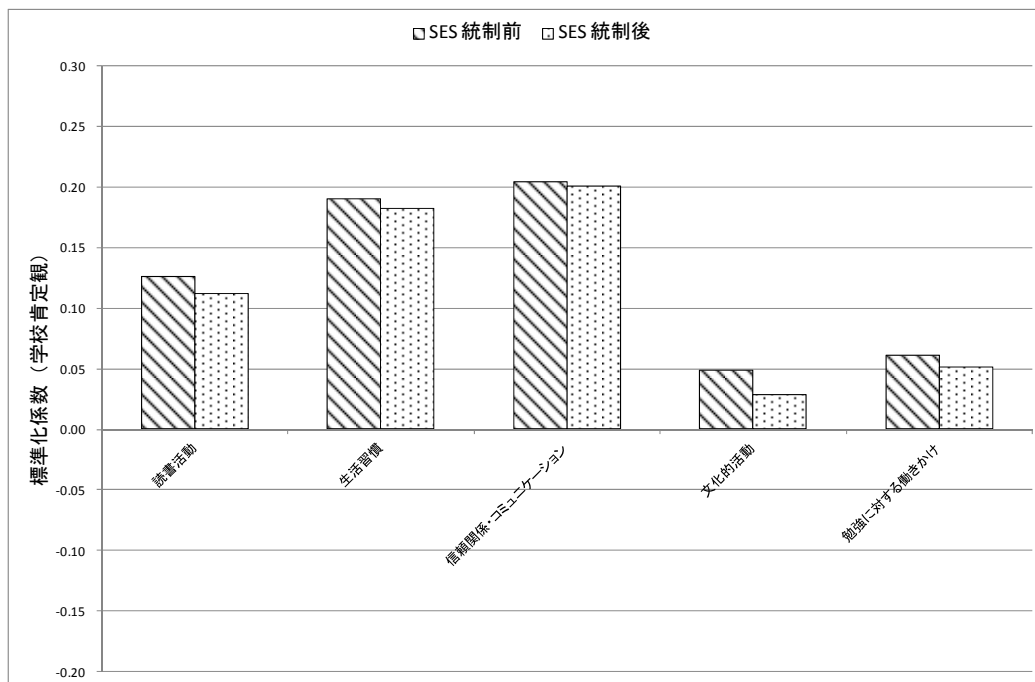


	SES 統制前	SES 統制後	SES導入による 係数の縮小率
読書活動	0.25	0.17	30%
生活習慣	0.12	0.08	35%
信頼関係・コミュニケーション	0.11	0.09	17%
文化的活動	0.13	0.06	57%
勉強に対する働きかけ	0.01	-0.04	n.a.

図表 2-2- 17 保護者の関与と学習意欲の関連（中 3）



図表 2-2-18 保護者の関与と学校肯定観の関連（中3）



図表 2-2-10（中3）を 2-2-1（小6）と比較してみると、ほとんどの項目において、小6より中3で、積極的に関わる保護者の割合が減っていることが確認できる。小6より中3の方が割合の大きい項目は、「子どもと勉強や成績のことについて話をする」「子どもと将来や進路のことについて話をする」の二つのみである。家庭背景による差異も小6より中3の方が、小さい傾向がみられる。保護者の関わり方と学力の関連を、図表 2-2-1 と 2-2-10 の非標準化係数の値の比較でみると、どの項目も小6より中3の方が小さいことから、子どもが小学生の時の方が、保護者がどの程度積極的に子どもと関わるかにより、子どもの学力に差異が生まれることを示唆している。（SES 統制後の非標準化係数から、中3の方が影響力の大きい項目は、「子どもと勉強や成績のことについて話しをする」「子どもの心配事や悩み事の相談によく乗っている」の二つのみであることが分かる。）図表 2-2-11 から 2-2-18 では相対的に学力に強い影響力を及ぼす項目および要因は、小6と中3では同じ傾向がみられる。学習意欲や学校肯定観においては、生活習慣と親子間の信頼関係やコミュニケーションの影響力が大きいという結果も小6と同様である。

7. 考察

本章では、保護者のどのような行動や子どもとの関わり方が、子どもの学力に強い影響力を及ぼすのかを検証した。SES の高い保護者ほど戦略的に子どもの教育に関わることが繰り返し実証されていることを踏まえ、SES との関連を考慮して分析を行った。主な知見は次の3点である。

第一に、家庭における読書活動、生活習慣に関する働きかけ、親子間のコミュニケーション、親子で行う文化的活動、いずれも学力に一定のプラスの影響がある中で、特に家庭における読書活動が子どもの学力に最も強い影響力を及ぼすことが明らかになった。家庭における読書活動を通して、子どもは、文脈の中の言語の価値を理解したり、読む習慣

を身につけたり、新しいことを学んだり新しい情報を収集する力を習得していると推測される。PISA の保護者質問紙を実施している 13 カ国の分析でも同様の結果が示されている (OECD, 2012, “Let’s Read Them a Story! The Parent Factor in Education”, PISA, OECD Publishing)。家庭教育の推進にあたっては、早寝早起きなどの生活習慣のみならず、家庭における読書活動をいかに充実させていくかが重要であると思われる。

第二に、本章でとりあげている保護者の行動・関わり方はいずれも SES を統制すると学力への影響力が縮小されることは、SES の高い保護者ほど、このような行動・関わり方を積極的に行っていることに起因する。特に生活習慣や文化的活動の影響力の縮小率が大きかったことは、家庭教育を推進する上で、SES の低い保護者がこれらの面において不利であること（現状として SES の高い保護者と比べると、これらの行動や子どもとの関わり方を行っていない、行えない状況にあること）を考慮する必要がある。

第三に、本調査は縦断的調査ではないが、小 6 と中 3 の横断的調査のデータを比較する限り、小学生の方が、子どもの学力が保護者の行動や関わり方に強く規定されることが明らかになったことは、特に幼少期の家庭教育の重要性を示唆している。

<注>

- 1) 図表 2-2-1、2-2-10 では、解釈を容易にするために、それぞれの保護者の関与の変数をダミー変数化して、割合を示した。「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を「行っている (1)」とし、「どちらかといえば、あてはまらない」「あてはまらない」を「行っていない (0)」とした。なお、「子どもと美術館や劇場によく行く」「子どもと博物館や科学館によく行く」「子どもと一緒に図書館に行く」の 3 つの変数に関しては、「月に 1 回以上」「2～3 カ月に 1 回程度」「半年に 1 回程度」「一年に 1 回程度」を「よく行く (1)」とし、「2～3 年に 1 回」「ほとんど行かない」「行ったことがない」「近隣にないため、行くことができない」を「よく行かない (0)」とした。
- 2) 回帰分析（図表 2-2-1、2-2-10 の非標準化係数）では、独立変数の分散を最大限に使用するために、保護者の関与の変数はダミー変数化せず、「あてはまる」に 4 点、「どちらかといえばあてはまる」に 3 点、「どちらかといえば、あてはまらない」に 2 点、「あてはまらない」に 1 点を割り当てた。なお、「子どもと美術館や劇場によく行く」「子どもと博物館や科学館によく行く」「子どもと一緒に図書館に行く」の 3 つの変数に関しては、「月に 1 回以上」に 7 点、「2～3 カ月に 1 回程度」に 6 点、「半年に 1 回程度」に 5 点、「一年に 1 回程度」に 4 点、「2～3 年に 1 回」に 3 点、「ほとんど行かない」に 2 点、「行ったことがない」および「近隣にないため、行くことができない」に 1 点を割り当てた。
- 3) 図表 2-2-1、2-2-10 の標準誤差を推計するにあたっては、反復ウェイト（ジャックナイフ法）を用いた。

第3章 社会経済的背景と子どもの学力

(1) 家庭の社会経済的背景による学力格差：教科別・問題別・学校段階別の分析

山田哲也

1 収入と保護者の学歴が子どもの学力に与える影響

第1章で算出された保護者のSES（社会経済的背景）尺度スコアは、子どもたちの学力にどのような影響を与えているのだろうか。

本章ではこの点について教科別・問題別・学校段階別に分析を行い、保護者の社会経済的背景が学力格差に及ぼす影響について検討を加えるが、その前の基礎的な作業として、SES尺度を構成する「家庭の所得」と「保護者の最終学歴」の2つの変数が学力に与える影響を確認しておきたい。

すでに論じられているように、今回実施された保護者調査では、家庭の所得と学歴に関するデータが得られている。第1章で示した尺度構成の手続きと同様に、家庭の所得は回答選択肢の中間値（単位は万円）、学歴は最終学歴を教育年数に換算して分析を行うが、結果の解釈を容易にするために変数は標準化していない。

分析に用いる変数の記述統計は図表3-1-1に示す通りである。なお、分析を行う際には母集団の特徴を推計するためにサンプルにウェイトづけをしている¹⁾。

図表 3-1-1 分析に用いる変数（収入・学歴が子どもの学力に与える影響の検討）

小学校6年生		平均値	標準偏差	最小値	最大値
学力テストデータ	算数正答率（総計）	69.56	19.42	0	100
	算数正答率（A問題）	77.16	18.41	0	100
	算数正答率（B問題）	58.40	24.65	0	100
	国語正答率（総計）	57.97	20.39	0	100
	国語正答率（A問題）	62.71	20.54	0	100
	国語正答率（B問題）	49.39	25.50	0	100
保護者質問紙データ	保護者の所得（単位：万円）	603.43	300.14	200	1500
	父親の学歴（教育年数）	13.66	2.21	9	18
	母親の学歴（教育年数）	13.31	1.62	9	18
中学校3年生		平均値	標準偏差	最小値	最大値
学力テストデータ	数学正答率（総計）	56.71	21.84	0	100
	数学正答率（A問題）	63.52	21.78	0	100
	数学正答率（B問題）	41.35	25.10	0	100
	国語正答率（総計）	74.31	17.84	0	100
	国語正答率（A問題）	76.26	17.32	0	100
	国語正答率（B問題）	67.30	25.05	0	100
保護者質問紙データ	保護者の所得（単位：万円）	604.36	298.11	200	1500
	父親の学歴（教育年数）	13.53	2.17	9	18
	母親の学歴（教育年数）	13.12	1.57	9	18

次頁の図表3-1-2と図表3-1-3は、算数・数学と国語の正答率（先の図表でグレーで網掛けしている部分）を従属変数に、保護者の所得と学歴を独立変数に設定して回帰分析を

行った結果を示したものである 2)。

図表 3-1-2 保護者の収入・学歴が学力に与える影響（小 6）

算数問題正答率（総計）の規定要因（社会経済的背景の影響力）																			
モデル1				モデル2				モデル3				モデル4				モデル5（学歴にダミー変数【大卒以上＝1】を使用）			
B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ	
定数（切片）	59.469	0.548	***	34.223	1.452	***		22.753	2.025	***		17.949	1.915	***		61.254	0.588	***	
収入（単位：万円）	0.017	0.001	0.261 ***									0.008	0.001	0.117 ***		0.009	0.001	0.139 ***	
父親教育年数				2.643	0.099	0.300 ***						1.548	0.114	0.176 ***		7.203	0.446	0.177 ***	
母親教育年数								3.532	0.146	0.294 ***		1.990	0.171	0.166 ***		6.899	0.664	0.123 ***	
調整済みR二乗値	0.068			0.093				0.087				0.131				0.114			

国語問題正答率（総計）の規定要因（社会経済的背景の影響力）																			
モデル1				モデル2				モデル3				モデル4				モデル5（学歴にダミー変数【大卒以上＝1】を使用）			
B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ	
定数（切片）	47.972	0.001	***	20.312	1.662	***		9.981	2.120	***		3.148	2.369	***		49.427	0.598	***	
収入（単位：万円）	0.017	0.595	0.246 ***									0.007	0.001	0.107 ***		0.008	0.001	0.124 ***	
父親教育年数				2.804	0.113	0.303 ***						1.731	0.116	0.187 ***		8.008	0.465	0.186 ***	
母親教育年数								3.618	0.154	0.287 ***		2.047	0.179	0.162 ***		8.099	0.733	0.138 ***	
調整済みR二乗値	0.060			0.093				0.083				0.128				0.117			

* p.<0.1 ** p.<0.05 ***p.<0.01（以下の図表も同様）

図表 3-1-3 保護者の収入・学歴が学力に与える影響（中 3）

数学問題正答率（総計）の規定要因（社会経済的背景の影響力）																			
モデル 1				モデル 2				モデル 3				モデル 4				モデル 5（字間にダミー変数【大以上＝1】を使用）			
B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ	
定数（切片）	44.111	0.591	***	14.517	1.724	***		1.487	1.823			-5.485	1.836	***		45.786	0.641	***	
収入（単位：万円）	0.021	0.001	0.287 ***									0.011	0.001	0.151 ***		0.013	0.001	0.181 ***	
父親教育年数				3.196	0.120	0.318 ***						1.880	0.116	0.187 ***		8.516	0.515	0.184 ***	
母親教育年数								4.238	0.135	0.304 ***		2.349	0.121	0.169 ***		7.322	0.628	0.104 ***	
調整済みR二乗値	0.083			0.103				0.093				0.150				0.125			

国語問題正答率（総計）の規定要因（社会経済的背景の影響力）																			
モデル 1				モデル 2				モデル 3				モデル 4				モデル 5（字間にダミー変数【大以上＝1】を使用）			
B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ		B	SE	ベータ	
定数（切片）	66.890	0.418	***	47.190	1.149	***		38.763	1.398	***		33.684	1.436			67.828	0.471		
収入（単位：万円）	0.012	0.001	0.207 ***									0.006	0.001	0.097		0.007	0.001	0.122 ***	
父親教育年数				2.049	0.083	0.249 ***						1.313	0.094	0.160		5.777	0.413	0.163 ***	
母親教育年数								2.725	0.104	0.240 ***		1.506	0.108	0.132		4.691	0.412	0.082 ***	
調整済みR二乗値	0.043			0.064				0.058				0.091				0.074			

これらの図表では、回帰分析を行い、子どもたちの学力に保護者の学歴と所得がどの程度の影響を与えるのかを推計した結果が示されている。図表中の「B」（非標準化回帰係数）は、独立変数が 1 単位変化した時のテストの正答率の変化を推計した値である。

図表 3-1-2 のモデル 1 を例にとると、収入の B の値 0.017 は保護者の収入が 1 万円増えると算数の正答率が 0.017%ポイント増加する（100 万円では 1.7%ポイントの増加）、そのような関係が二つの変数にあると推計されたことを意味する。

また、モデル 4 のように複数の独立変数を投入した重回帰分析では、分析に用いた他の変数の影響を統制した場合のそれぞれの独立変数と従属変数との関係が推計される。独立変数は単位が異なる場合が多いため、重回帰分析において独立変数が学力に与える影響を比較する際には標準化回帰係数（ベータ）の値を参照することが多い。ベータの絶対値は学力（正答率）に与える影響力の度合いを表し、値が正の場合は正答率を押し上げる方向に、負の場合は逆の影響が認められることを意味する。

図表 3-1-2、図表 3-1-3 に整理したベータの値をみると、学校種別や教科の違いを問わず、父親の教育年数が学力を規定する影響力が最も強い。保護者の社会経済的な背景を構成する変数ごとに単回帰分析を行った結果（モデル 1～3）においても、各変数を同時に投入した重回帰分析（モデル 4・5）においても、他の変数と比較して、父親の学歴（教育年数）のベータの値が最も大きい（図表中の下線を参照）。

そもそも収入と父母の教育年数の 3 つの変数には相関関係があるために多重共線性に留

意する必要があるが、この問題を回避するために父母学歴にダミー変数を用いたモデル 5 においても父学歴の影響力が最も強いと推計される。

ただし、ベータの値を見る限りでは他の変数にも一定程度の影響力が認められ、父学歴の値は高いものの、それだけが突出しているわけではない。社会経済的背景の尺度を構成するそれぞれの変数（収入と保護者の学歴）はそれぞれに子どもの学力に影響を与えており、このことは 3 つの変数を総合した SES 尺度の妥当性を裏付けているといえよう。

2 他の変数を統制した SES の規定力の検討・小学校

SES スコアを構成する変数が学力に与える影響力を確認したうえで、家庭の社会経済的背景と、それ以外で学力に影響を与えると想定される諸変数を用いた分析を行った。具体的には、はじめに SES スコアを用いた単回帰分析を行い、諸変数を逐次追加して重回帰分析を行うことで、社会経済的背景の影響力を検討した。本章の冒頭で図表 3-1-1 に示した変数以外に、以下の分析で用いる変数の記述統計は下記の通りである（図表 3-1-4）。共線性の問題を回避するため、教育期待（子どもに期待する学歴を教育年数に換算した）については大卒以上を 1、それ以外に 0 を割り当てたダミー変数を分析に用いている。

図表 3-1-4 分析に用いる変数（SES スコアが子どもの学力に与える影響の検討）

小学校 6 年生（保護者調査データ [学習時間は児童質問紙]）	平均値	標準偏差	最小値	最大値
SES スコア	0.00	1.00	-3.35	3.34
性別ダミー（男子＝1）	0.51	0.50	0	1
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）	0.39	0.49	0	1
学習時間（選択肢の中央値を分に換算し平日と週末を合算）	182.49	119.42	0	480
教育期待ダミー（大卒以上＝1）	0.60	0.49	0	1
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）	2.99	0.61	1	4
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）	2.97	0.77	1	4
中学校 3 年生（保護者調査データ [学習時間は児童質問紙]）	平均値	標準偏差	最小値	最大値
SES スコア	0.00	1.00	-3.31	4.01
性別ダミー（男子＝1）	0.51	0.50	0	1
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）	0.24	0.43	0	1
学習時間（選択肢の中央値を分に換算し平日と週末を合算）	204.24	120.80	0	480
教育期待ダミー（大卒以上の学歴を期待＝1）	0.53	0.50	0	1
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）	2.93	0.62	1	4
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）	2.73	0.77	1	4

テストの正答率を従属変数に、上記の変数を独立変数に用いた回帰分析の結果は、図表 3-1-5・図表 3-1-6・図表 3-1-7・図表 3-1-8（次頁以降）に示す通りである。結果の解釈にあたっては、モデル 1 から変数を逐次追加する際の回帰係数と調整済み R 二乗値の変化の度合いに留意しつつ、すべての変数を投入した「モデル 7」の結果を参照している。なお、独立変数を追加する際に生じる数値の変化を見やすくするために、SES スコアの影響力を表す「ベータ」を示したセルに網掛けをしている。

図表 3-1-5 SES スコアとその他の変数による学力の規定力 (小6: 従属変数は算数)

算数問題正答率 (総計) の規定要因																						
モデル1			モデル2			モデル3			モデル4			モデル5			モデル6			モデル7				
B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ		
定数 (切片)	69.583	0.270	***	70.787	0.347	***	70.754	0.489	***	66.174	0.615	***	62.657	0.660	***	59.675	1.313	***	57.665	1.440	***	
SESスコア	7.175	0.197	0.369 ***	7.184	0.197	0.370 ***	7.180	0.198	0.370 ***	6.320	0.221	0.325 ***	4.640	0.229	0.239 ***	4.607	0.232	0.237 ***	4.560	0.238	0.235 ***	
性別ダミー (男子 = 1)																						
都市規模ダミー (大都市・中核市 = 1)										-1.888	0.412	-0.049 ***	-3.423	0.422	-0.068 ***	-3.443	0.425	-0.089 ***	-3.387	0.425	-0.087 ***	
学習時間 (平日と週末の値を合算)							0.085	0.036	0.002	-0.137	0.672	-0.003	-0.633	0.670	-0.016	-0.584	0.678	-0.015	-0.607	0.679	-0.015	
教育期待ダミー (大卒以上 = 1)										0.024	0.002	0.150 ***	0.020	0.002	0.122 ***	0.020	0.002	0.122 ***	0.020	0.002	0.123 ***	
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人 (4段階)													9.018	0.479	0.228 ***	8.987	0.488	0.227 ***	9.032	0.496	0.228 ***	
子ども・教育に関わる地域住民が多いと思うか (4段階)																0.990	0.356	0.031 ***	0.953	0.364	0.020 *	
調整済みR二乗値	0.136			0.140			0.140			0.160			0.202			0.202			0.998	0.312	0.039 ***	
算数問題正答率 (A問題) の規定要因																						
モデル1			モデル2			モデル3			モデル4			モデル5			モデル6			モデル7				
B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ		
定数 (切片)	77.167	0.315	***	77.630	0.358	***	77.745	0.505	***	73.607	0.613	***	70.698	0.676	***	68.166	1.331	***	66.725	1.434	***	
SESスコア	6.288	0.191	0.341 ***	6.292	0.192	0.342 ***	6.306	0.196	0.342 ***	5.532	0.215	0.300 ***	4.108	0.221	0.223 ***	4.077	0.222	0.221 ***	4.048	0.228	0.220 ***	
性別ダミー (男子 = 1)																						
都市規模ダミー (大都市・中核市 = 1)										-0.302	0.374	-0.024 **	-0.473	0.372	-0.013	-1.851	0.383	-0.051 ***	-1.824	0.383	-0.050 ***	
学習時間 (平日と週末の値を合算)							-0.297	0.700	-0.008	-0.506	0.695	-0.013	-0.954	0.689	-0.025	-0.915	0.695	-0.024	-0.936	0.696	-0.025	
教育期待ダミー (大卒以上 = 1)										0.022	0.002	0.143 ***	0.018	0.002	0.116 ***	0.018	0.002	0.117 ***	0.018	0.002	0.117 ***	
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人 (4段階)													7.687	0.469	0.205 ***	7.655	0.475	0.204 ***	7.705	0.489	0.205 ***	
子ども・教育に関わる地域住民が多いと思うか (4段階)																0.839	0.344	0.028 **	0.597	0.358	0.020 *	
調整済みR二乗値	0.117			0.117			0.117			0.136			0.169			0.169			0.721	0.296	0.030 **	
算数問題正答率 (B問題) の規定要因																						
モデル1			モデル2			モデル3			モデル4			モデル5			モデル6			モデル7				
B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ	B	SE	ベータ		
定数 (切片)	58.444	0.271	***	60.728	0.398	***	60.471	0.526	***	55.216	0.727	***	50.818	0.770	***	47.184	1.520	***	44.350	1.682	***	
SESスコア	8.493	0.241	0.345 ***	8.509	0.242	0.345 ***	8.478	0.241	0.344 ***	7.483	0.262	0.304 ***	5.445	0.281	0.221 ***	5.413	0.287	0.220 ***	5.339	0.292	0.217 ***	
性別ダミー (男子 = 1)																						
都市規模ダミー (大都市・中核市 = 1)										-3.922	0.551	-0.080 ***	-5.666	0.575	-0.115 ***	-5.701	0.583	-0.116 ***	-5.618	0.586	-0.114 ***	
学習時間 (平日と週末の値を合算)							0.683	0.755	0.013 ***	0.422	0.751	0.008	-0.125	0.758	-0.002	-0.064	0.768	-0.001	-0.085	0.768	-0.002	
教育期待ダミー (大卒以上 = 1)										0.028	0.002	0.136 ***	0.023	0.002	0.110 ***	0.023	0.002	0.111 ***	0.023	0.002	0.112 ***	
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人 (4段階)													10.925	0.592	0.217 ***	10.894	0.605	0.217 ***	10.933	0.610	0.217 ***	
子ども・教育に関わる地域住民が多いと思うか (4段階)																1.211	0.446	0.030 ***	0.740	0.452	0.018	
調整済みR二乗値	0.119			0.127			0.127			0.144			0.182			0.183			1.394	0.396	0.043 ***	

図表 3-1-6 SES スコアとその他の変数による学力の規定力 (小 6 : 従属変数は国語)

国語問題正答率 (総計) の規定要因

	モデル 1		モデル 2		モデル 3		モデル 4		モデル 5		モデル 6		モデル 7	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
定数 (切片)	57.991	0.258	***	61.526	0.331	***	61.595	0.538	***	62.579	0.719	***	49.932	1.627
SESスコア	7.285	0.223	***	7.315	0.221	***	7.323	0.215	***	7.323	0.229	***	4.633	0.245
性別ダミー (男子=1)			0.357				-6.899	0.398	***	-7.801	0.399	***	-7.756	0.408
都市規模ダミー (大都市・中核市=1)					-0.169	***	-0.180	0.831	-0.004	-0.955	0.801	-0.023	-0.953	0.800
学習時間 (平日と週末の値を合算)							-0.449	0.802		0.025	0.002	0.147	0.025	0.002
教育期待ダミー (大卒以上=1)							0.029	0.002	0.172	***	8.817	0.466	8.799	0.473
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人 (4段階)											-0.071	0.359	-0.534	0.355
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか (4段階)													1.415	0.333
調整済みR二乗値	0.127			0.156						0.219			0.223	

国語問題正答率 (A問題) の規定要因

	モデル 1		モデル 2		モデル 3		モデル 4		モデル 5		モデル 6		モデル 7	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
定数 (切片)	62.733	0.293	***	64.882	0.369	***	65.034	0.590	***	55.836	0.771	***	53.823	1.671
SESスコア	7.070	0.230	***	7.088	0.228	***	7.107	0.223	***	4.430	0.241	***	4.376	0.239
性別ダミー (男子=1)			0.314				-4.195	0.431	-0.102	***	-5.061	0.452	-5.024	0.456
都市規模ダミー (大都市・中核市=1)					-0.102	***	-0.392	0.916	-0.009	-1.176	0.891	-0.028	-1.171	0.884
学習時間 (平日と週末の値を合算)							0.032	0.002	0.183	***	0.027	0.002	0.027	0.002
教育期待ダミー (大卒以上=1)										8.467	0.521	0.202	8.469	0.529
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人 (4段階)										8.438	0.524	0.201	8.469	0.529
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか (4段階)										-0.190	0.362	-0.006	-0.600	0.364
調整済みR二乗値	0.118			0.129						0.193			0.192	

国語問題正答率 (B問題) の規定要因

	モデル 1		モデル 2		モデル 3		モデル 4		モデル 5		モデル 6		モデル 7	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
定数 (切片)	49.402	0.232	***	55.463	0.336	***	55.367	0.537	***	46.736	0.751	***	42.541	1.880
SESスコア	7.628	0.283	***	7.676	0.278	***	7.664	0.275	***	4.981	0.323	***	4.844	0.330
性別ダミー (男子=1)			0.269				-11.836	0.473	-0.252	***	-12.815	0.467	-12.777	0.465
都市規模ダミー (大都市・中核市=1)					-0.232	***	0.246	0.833	0.005	-0.452	0.807	-0.009	-0.449	0.817
学習時間 (平日と週末の値を合算)							0.054	0.804	0.001	0.021	0.002	0.099	0.021	0.002
教育期待ダミー (大卒以上=1)							0.025	0.002	0.118	***	9.475	0.585	9.540	0.607
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人 (4段階)										0.310	0.464	0.007	-0.227	0.468
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか (4段階)													1.616	0.401
調整済みR二乗値	0.089			0.143						0.182			0.185	

図表 3-1-5 は、小学校・算数の正答率を従属変数にした分析の結果である。学力に強く影響を与える変数は、SES スコア、保護者の教育期待、学習時間である。いずれの変数もそれが高いほど正答率が上がる傾向が認められる。モデル 7 のそれぞれの変数のベータの値を比較すると、SES スコアと教育期待は同程度の影響力を有し、学習時間がそれに続く。性別ダミー変数はどのモデルでもベータの値が負で、男子児童ほど正答率が低くなる傾向にある。都市規模ダミーは有意な影響が認められなかった。

社会関係資本とみなすことができる変数に着目すると、「教育に関わる地域住民」が多いと答える保護者の子どもほど正答率が高くなる傾向がある。子育てや教育の悩みを相談できる友人・知人についても、算数B問題以外ではその数が多いと回答する者ほど正答率が高くなる傾向が有意であったが、これらの変数は SES スコア・教育期待・学習時間に関する変数と比べるとベータの値が小さく、モデルの当てはまりを示す調整済み R 二乗値も変数を追加した際にそれほど増加していないことから社会関係資本の影響力は限定的であるとみてよいだろう。ただし、これらの変数が社会関係資本を表す変数として妥当なのかについては議論の余地があり、その点に留意する必要がある。

国語でも SES スコア・保護者の教育期待・学習時間の 3 つの変数が学力を規定していた（図表 3-1-6）。SES と教育期待は同程度の影響力を有するが、B 問題では学習時間の影響力が弱まる。なお、国語では 3 つの変数に加え性別による差が顕著で、男子は女子と比べて正答率が低い（算数も同様だが、国語の影響力がより強い）。この傾向は国語の B 問題で顕著である。社会関係資本の影響力は算数と同じく限定的で、悩みを相談できる友人数は A 問題のモデル 7 以外では有意な影響が認められない（このモデルでは友人数が多いほど正答率が下がる傾向があり、算数とは逆の結果が出ている）。

3 他の変数を統制した SES の規定力の検討・中学校

図表 3-1-7（次頁）は、中学校・数学の正答率を従属変数にした分析結果である。学力を規定する力の強い変数は、保護者の教育期待、SES スコア、学習時間で、この結果は小学校とほぼ同様である。ただし中学校では教育期待の影響力が SES スコアよりも学力に与える影響が強い点が特徴的である。

社会関係資本とみなすことができる変数の影響力が限定的なのは小学校と同様であったが（子どもの教育に係わる地域住民が多いと正答率が上がる傾向があるが、ベータの値が小さい）、相談する友人数の影響については有意な差が認められた場合でも問題の種別やモデルによって標準化回帰係数の正負の値が異なり、安定的な結果が見いだせなかった。

最後に中学校の国語の正答率を用いた分析結果を検討してみたい（図表 3-1-8：次々頁）性別の影響力が強まるほかは、中学校数学と同様の結果が認められる。数学と同様に国語でも SES スコアよりも保護者の教育期待の影響力が強く、こちらは教科を問わず中学校に共通する特徴のようである（ただし国語のほうが数学よりも回帰係数の値が小さく、モデルの当てはまりを表す R 二乗値の値が小さい）。社会関係資本に関連する変数は、友人関係の数は有意な影響が認められず、子どもの教育に関わる地域住民の数についても、多いと答える保護者の子どもほど正答率が高い傾向が有意だがベータの値が小さく、生徒の性別や学習時間、保護者の社会経済的背景と比べるとその影響力は限定的である。

図表 3-1-7 SESスコアとその他の変数による学力の規定力（中3：従属変数は数学）

数学問題正答率（総計）の規定要因

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4		モデル5		モデル6		モデル7	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
定数（切片）	56.792	0.259	***	57.812	0.277	***	57.744	0.401	***	45.629	0.525	***	44.718	0.942
SESスコア	8.606	0.211	0.394	8.612	0.213	0.394	8.612	0.214	0.394	5.018	0.204	0.230	5.015	0.206
性別ダミー（男子＝1）				-1.617	0.439	-0.037	-1.615	0.438	-0.037	-3.024	0.405	-0.069	-3.027	0.403
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）							0.163	0.713	0.004	-0.406	0.667	-0.009	-0.413	0.666
学習時間（平日と週末の値を合算）							0.033	0.002	0.182	0.026	0.002	0.143	0.026	0.002
教育期待ダミー（大卒以上＝1）										14.692	0.446	0.336	14.697	0.443
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）														
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）														
調整済みR二乗値	0.155		0.157		0.157		0.188		0.283		0.284		0.285	

数学問題正答率（A問題）の規定要因

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4		モデル5		モデル6		モデル7	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
定数（切片）	63.599	0.250	***	64.711	0.261	***	64.640	0.372	***	52.611	0.491	***	51.072	0.894
SESスコア	8.303	0.211	0.381	8.299	0.213	0.381	8.295	0.215	0.381	4.747	0.206	0.218	4.736	0.208
性別ダミー（男子＝1）				-1.791	0.416	-0.041	-1.789	0.414	-0.041	-3.175	0.390	-0.073	-3.199	0.388
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）							0.170	0.686	0.004	-0.419	0.642	-0.009	-0.425	0.641
学習時間（平日と週末の値を合算）							0.033	0.002	0.184	0.026	0.002	0.145	0.026	0.002
教育期待ダミー（大卒以上＝1）										14.417	0.450	0.330	14.420	0.448
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）														
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）														
調整済みR二乗値	0.146		0.147		0.147		0.179		0.271		0.272		0.273	

数学問題正答率（B問題）の規定要因

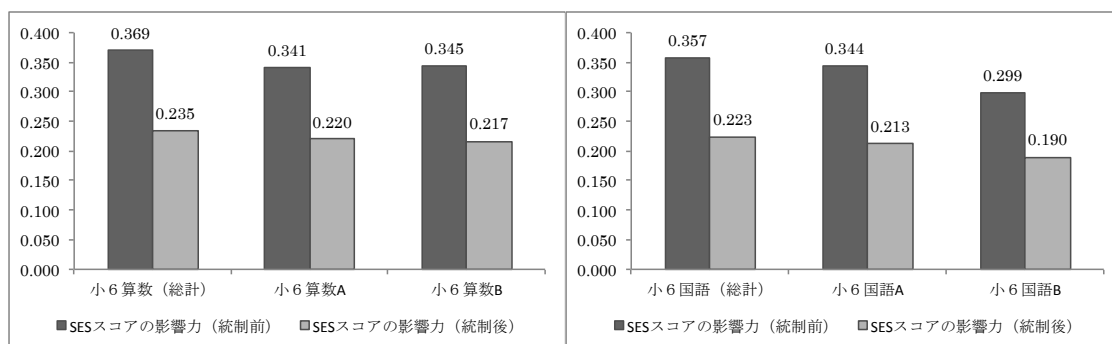
	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4		モデル5		モデル6		モデル7	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
定数（切片）	41.447	0.278	***	42.276	0.334	***	42.217	0.494	***	29.915	0.674	***	28.342	1.155
SESスコア	9.287	0.234	0.370	9.322	0.024	0.371	9.319	0.234	0.371	5.628	0.240	0.224	5.663	0.238
性別ダミー（男子＝1）				-1.218	0.048	-0.024	-1.217	0.540	-0.024	-2.689	0.503	-0.054	-2.664	0.504
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）							0.138	0.835	0.003	-0.385	0.794	-0.007	-0.489	0.792
学習時間（平日と週末の値を合算）							0.033	0.002	0.157	0.025	0.002	0.122	0.025	0.002
教育期待ダミー（大卒以上＝1）										15.313	0.513	0.304	15.380	0.503
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）														
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）														
調整済みR二乗値	0.137		0.138		0.138		0.161		0.239		0.239		0.241	

図表 3-1-8 SES スコアとその他の変数による学力の規定力 (中 3 : 従属変数は国語)

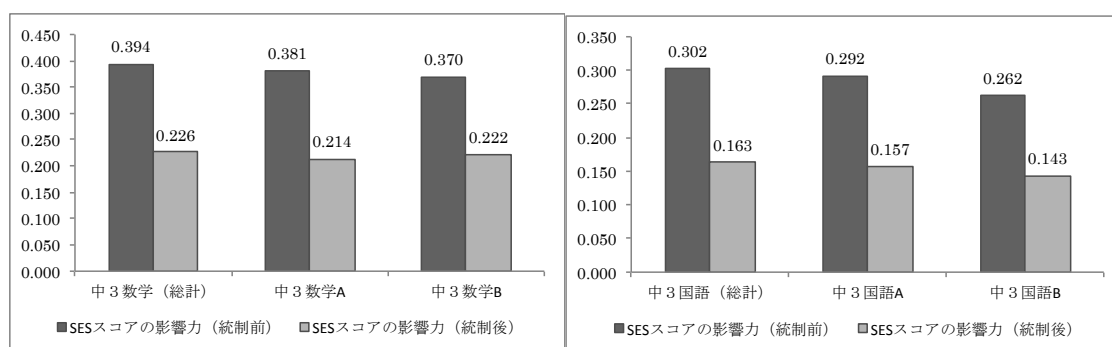
国語問題正答率（総計）の規定要因														
モデル1		モデル2		モデル3		モデル4		モデル5		モデル6		モデル7		
B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	
定数（切片）	74.360	0.166	77.914	0.212	78.011	0.296	73.948	0.441	70.312	0.435	70.359	0.758	68.757	0.906
SESスコア	5.384	0.173	5.419	0.173	5.425	0.173	4.814	0.159	2.955	0.154	2.866	0.151	2.910	0.151
性別ダミー（男子＝1）														
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）														
学習時間（平日と週末の値を合算）														
教育期待ダミー（大卒以上＝1）														
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）														
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）														
調整済みR ² 乗値	0.091		0.126		0.126		0.142		0.214		0.214		0.216	
国語問題正答率（A問題）の規定要因														
モデル1		モデル2		モデル3		モデル4		モデル5		モデル6		モデル7		
B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	
定数（切片）	76.316	0.156	79.390	0.214	79.483	0.291	75.551	0.413	72.124	0.410	72.171	0.728	70.723	0.870
SESスコア	5.055	0.165	5.085	0.166	5.091	0.166	4.524	0.153	2.757	0.150	2.771	0.148	2.722	0.147
性別ダミー（男子＝1）														
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）														
学習時間（平日と週末の値を合算）														
教育期待ダミー（大卒以上＝1）														
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）														
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）														
調整済みR ² 乗値	0.086		0.113		0.113		0.129		0.195		0.196		0.197	
国語問題正答率（B問題）の規定要因														
モデル1		モデル2		モデル3		モデル4		モデル5		モデル6		モデル7		
B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	
定数（切片）	67.362	0.202	72.635	0.246	72.769	0.361	68.275	0.645	63.900	0.652	63.907	1.066	61.731	1.268
SESスコア	6.565	0.229	6.617	0.225	6.625	0.226	5.995	0.211	3.670	0.212	3.670	0.207	3.588	0.211
性別ダミー（男子＝1）														
都市規模ダミー（大都市・中核市＝1）														
学習時間（平日と週末の値を合算）														
教育期待ダミー（大卒以上＝1）														
子育て・教育の悩みを相談できる友人・知人（4段階）														
子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うか（4段階）														
調整済みR ² 乗値	0.089		0.108		0.108		0.118		0.173		0.173		0.175	

これまで示した分析結果をもとに、他の変数を統制する前（モデル 1）と統制後（モデル 7）の標準化回帰係数の変化を図表 3-1-9・図表 3-1-10 に整理した。

図表 3-1-9 SES スコアの影響力（変数統制前・統制後の変化：小 6）



図表 3-1-10 SES スコアの影響力（変数統制前・統制後の変化：中 3）



図表 3-1-9 は小学校、図表 3-1-10 は中学校で教科別・問題別に標準化回帰係数の値を示したものである。左側の図が算数・数学、右側が国語の結果を図示したものである。SES スコアのみを用いて単回帰分析を行った結果と比べて、学習時間や教育期待など学力に影響を与える諸変数を統制するといずれの学校種別・教科においても回帰係数の値が減少する。教科・問題によって多少の違いはあるが、統制後の係数の値は小学校で統制前の 6 割強（64.4%～61.9%）、中学校では 5 割強～約 6 割（59.9%～53.9%）に減少する。とはいえ、変数を統制した後も、SES スコアが直接学力を規定する影響力が一定程度認められる。

これまでの分析で確認してきたように、小学校では SES スコアがほとんどの教科で最も影響力の強い変数である。中学校では教育期待が学力に与える影響が最も強くなるが、それでも SES は標準化回帰係数の絶対値が 2 番目（国語は性差が強まるため 3 番目になる）に大きい変数である。

一般的に、家庭的な背景が学力に与える影響には、SES が直接的に正答率を規定する経路と、SES が教育期待や学習時間など他の変数を媒介として正答率に影響を与える間接的な経路の両方を想定できる。今回の分析では、回帰分析のモデルを構築する際に教育期待や学習時間を独立変数として追加すると SES の回帰係数の値が減少し、投入した変数（教育期待・学習時間）が有意に正答率を高める効果が認められた。これらの変数を追加すると R 二乗値も増加し、モデルの当てはまりも改善されている。

他の章においても明らかにされているように、今回のデータからは SES が高いほど教育期待が高く・学習時間も長くなる傾向が認められる。この結果は重回帰分析が仮定する説明変数間の独立性から逸脱しており、多重共線性の問題に留意する必要があるが、学習時間・教育期待に関する変数を追加する前後のモデルの分析結果を比較する限りでは、保護者の SES は直接的・間接的な経路の両方から学力(正答率)を規定していると解釈できる。

これまでの分析で明らかになったことがらを、ここで整理しておくことにしたい。

- ・保護者の社会経済的背景 (SES) は、学力テストの正答率と密接な関係を持っている。分析では、教科や問題の違いを問わず、小学校・中学校の両方で SES が高い保護者の子どもほど学力テストの正答率が高い傾向が認められた。
- ・分析モデルに変数を逐次追加することによる結果の変化を見る限りでは、SES が子どもの学力に影響を与える経路には、①保護者の社会経済的な背景が直接的に影響する経路と、②保護者の教育期待や子どもの学習時間を媒介した間接的な経路の双方があるように思われる。
- ・他方で、SES を統制した場合でも保護者の教育期待や子どもの学習時間は学力に対して統計的に有意な影響力が認められる。この結果は、保護者の社会経済的な背景とは独立した要因によって子どもの学力が形成されることを示唆している。しかしながら、先に述べたように SES は教育期待や学習時間を媒介して学力に影響を与えていることが予想されるため、教育期待や学習時間が持つ固有の効果を過度に期待することは難しいように思われる。
- ・回帰分析の予測値と実測値の当てはまりを示す修正済 R 二乗値はもっとも高いものでも 0.3 程度（全体の分散の 3 割を説明）であることにも留意する必要がある。今回の分析に用いたモデルでは想定していない要因が子どもの学力に影響を与えている可能性があることを確認しておきたい。
- ・社会関係資本に関連すると思われる質問項目を独立変数に用いたところ、個人が保持する社会関係資本の代理指標として解釈できる「子育て・教育の悩みを相談する友人の数」については、有意かつ安定した効果が認められなかった。この質問項目は個々の保護者が社会関係資本をどの程度保持しているかを表すと解釈できる一方で、子どもが何らかの問題や課題を抱えている者ほど、相談する機会が多くなることも予想されるため、明確な結果が出なかったように思われる。
- ・社会関係資本に関連するもう一つの質問項目、子どもの教育に関わる地域住民が多いと思うかどうかを尋ねた項目への回答結果は、ほとんどのモデルで統計的に有意な影響が認められた。この結果は、集合財としての社会関係資本が多いほど、子どもの学力が高くなる可能性を示唆している。ただし今回は個人レベルの回答結果を分析に用いていること、正答率を高める効果は他の変数と比べると小さい点に留意する必要がある。

ある。

- ・小学校と中学校を比べると、前者のほうが他の変数を統制した後も SES スコアの影響力が強く認められた。子どもの年齢が相対的に低いほうが、保護者の社会経済的な背景の影響が強いことを予想させる結果である。
- ・教科別に結果を比較すると、国語のほうが算数・数学よりも性差による影響が強い。全体的に男子児童生徒は女子よりも正答率が低くなる傾向があるが、国語ではよりその傾向が強まる。国語でこのような違いがなぜ生じるのかについては、今回のデータでは十分に明らかにすることができなかった。算数・数学で性差が小さい結果は、ジェンダー秩序が教科に対する選好に影響することで生じているのかもしれないが、この仮説を検証する作業は今後の課題としたい。
- ・国語ではB問題で性差がやや強まるなどの特徴が認められるが、A問題・B問題の違いに起因する系統的な差異は見いだせなかった。

4 SESの違いが子どもとの接し方に与える影響

SES スコアが学力に対して直接に影響力を与える経路には、どのような内実が伴っているのだろうか。そのメカニズムを探るために、本節の最後では、SES カテゴリ別に子どもとの接し方を比較してみた。

図表 3-1-11（小学校）と図表 3-1-12（中学校）は、SES スコアをもとに保護者の社会経済的な背景を 4 つのカテゴリに区分し、それぞれのカテゴリごとに、子どもに対する接し方・将来に対する期待に関する質問への回答結果の平均値を示したものである³⁾。

これらの図表では、社会経済的な背景が最も厳しい **Lowest SES** に区分される保護者と、最もゆとりのある **Highest SES** に区分される保護者の平均値の差を取り、その絶対値が大きな項目ほど上に来るように項目を並べなおしている。結果の解釈を容易にするために、**Highest-Lowest** の絶対値が 0.3 ポイント以上の項目、すなわち SES による差が大きい項目に薄い網掛けを、0.1 ポイント未満の項目（差が小さい項目）に濃い網掛けをしている。

図表 3-1-11 SES カテゴリ別・子どもとの接し方／子どもへの期待（小学校）

	Lowest SES	(SE)	Lower middle SES	(SE)	Upper middle SES	(SE)	Highest SES	(SE)	Highest- Lowest
問9の3子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい	2.34	(0.022)	2.50	(0.020)	2.68	(0.020)	2.99	(0.018)	0.66
問3の18子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している	2.07	(0.022)	2.25	(0.024)	2.48	(0.021)	2.69	(0.024)	0.62
問3の12子どもに本や新聞を読むようにすすめている	2.69	(0.021)	2.85	(0.020)	2.96	(0.020)	3.22	(0.022)	0.53
問3の14子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	2.84	(0.024)	2.99	(0.017)	3.15	(0.021)	3.34	(0.019)	0.50
問9の1学校生活が楽しければ、良い成績をとることはこだわらない	2.82	(0.020)	2.70	(0.020)	2.56	(0.021)	2.37	(0.018)	-0.45
問3の17計画的に勉強するようにうながしている	2.65	(0.020)	2.79	(0.019)	2.92	(0.018)	3.09	(0.019)	0.44
問3の13子どもと読んだ本の感想を話合ったりしている	2.14	(0.021)	2.26	(0.018)	2.33	(0.020)	2.58	(0.023)	0.44
問3の15普段、子どもの勉強をみている	2.52	(0.022)	2.64	(0.018)	2.72	(0.019)	2.88	(0.018)	0.36
問5の3子どもと将来や進路についての話をする	2.91	(0.022)	2.97	(0.021)	3.06	(0.018)	3.20	(0.022)	0.29
問5の5子どもと社会の出来事やニュースについて話をする	2.84	(0.020)	2.94	(0.018)	2.96	(0.020)	3.13	(0.019)	0.28
問5の2子どもと勉強や成績のことについて話をする	3.12	(0.017)	3.19	(0.019)	3.27	(0.014)	3.39	(0.016)	0.27
問9の2子どもの将来を考えると、学習塾や習い事に通わせないと心配である	2.55	(0.024)	2.67	(0.025)	2.73	(0.022)	2.81	(0.024)	0.26
問3の2子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている	3.06	(0.022)	3.17	(0.019)	3.23	(0.018)	3.30	(0.015)	0.24
問10の1子どもの教育で重視すること：子どもが自立できるようにすること	3.51	(0.014)	3.55	(0.010)	3.59	(0.012)	3.70	(0.012)	0.19
問3の16子どもに「勉強しなさい」とよく言っている	2.63	(0.026)	2.68	(0.021)	2.72	(0.023)	2.82	(0.020)	0.19
問3の3毎日子どもに朝食を食べさせている	3.77	(0.014)	3.87	(0.010)	3.90	(0.008)	3.94	(0.007)	0.17
問10の4子どもの教育で重視すること：将来の夢や目標に向かって努力すること	3.50	(0.015)	3.55	(0.012)	3.58	(0.011)	3.68	(0.014)	0.18
問3の1子どもが決まった時刻に起きるよう（起こすよう）にしている	3.61	(0.015)	3.69	(0.011)	3.73	(0.012)	3.76	(0.009)	0.14
問3の10子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている	3.22	(0.015)	3.24	(0.017)	3.25	(0.016)	3.31	(0.015)	0.10
問3の4平日、夕食と一緒に食べている	3.64	(0.017)	3.69	(0.013)	3.67	(0.014)	3.56	(0.020)	-0.09
問5の1子どもから学校での出来事について話を聞いている	3.51	(0.014)	3.54	(0.014)	3.55	(0.015)	3.58	(0.013)	0.07
問3の20子どもに生き物や植物の世話をさせている	2.54	(0.030)	2.59	(0.028)	2.59	(0.031)	2.61	(0.031)	0.07
問5の6子どもの心配事や悩み事の相談によく乗っている	3.11	(0.017)	3.15	(0.017)	3.14	(0.015)	3.18	(0.017)	0.07
問5の4子どもと友達のことについて話をする	3.49	(0.013)	3.50	(0.013)	3.51	(0.015)	3.56	(0.012)	0.06
問3の11子どもが悪いことをしたらきちんと叱っている	3.75	(0.011)	3.77	(0.009)	3.78	(0.010)	3.79	(0.010)	0.04
問3の5家事を手伝わせるなど家族の一員としての役割を与えている	3.11	(0.024)	3.16	(0.021)	3.16	(0.022)	3.15	(0.021)	0.04
問10の2子どもの教育で重視すること：人の気持ちが分かる人間になること	3.79	(0.010)	3.80	(0.009)	3.81	(0.009)	3.83	(0.010)	0.03
問10の3子どもの教育で重視すること：自分の意見をはっきり言えるようになるこ	3.63	(0.014)	3.59	(0.013)	3.61	(0.011)	3.65	(0.010)	0.02
問3の19子どもが自然に触れる機会をつくっている	2.97	(0.024)	2.99	(0.022)	3.01	(0.023)	2.99	(0.023)	0.02
問3の7子どものプライバシーを尊重している	3.15	(0.018)	3.16	(0.014)	3.13	(0.016)	3.13	(0.013)	-0.02
問3の6自分でできることは自分でさせている	3.53	(0.016)	3.56	(0.015)	3.52	(0.015)	3.52	(0.012)	-0.01

図表 3-1-12 SES カテゴリ別・子どもとの接し方／子どもへの期待（中学校）

	Lowest SES	(SE)	Lower middle SES	(SE)	Upper middle SES	(SE)	Highest SES	(SE)	Highest- Lowest
問9の3子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい	2.33	(0.018)	2.48	(0.016)	2.64	(0.016)	2.94	(0.014)	0.61
問3の18子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している	1.94	(0.017)	2.08	(0.015)	2.21	(0.020)	2.47	(0.017)	0.54
問3の12子どもに本や新聞を読むようにすすめている	2.56	(0.018)	2.71	(0.017)	2.80	(0.016)	3.03	(0.015)	0.47
問3の14子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	2.86	(0.017)	3.01	(0.014)	3.14	(0.015)	3.32	(0.014)	0.46
問9の1学校生活が楽しければ、良い成績をとることはこだわらない	2.63	(0.018)	2.51	(0.015)	2.43	(0.017)	2.24	(0.014)	-0.39
問3の17計画的に勉強するようにうながしている	2.69	(0.018)	2.80	(0.014)	2.88	(0.017)	3.02	(0.015)	0.33
問3の13子どもと読んだ本の感想を話合ったりしている	2.01	(0.018)	2.09	(0.015)	2.16	(0.014)	2.34	(0.014)	0.33
問3の15普段、子どもの勉強をみている	1.95	(0.015)	2.02	(0.014)	2.11	(0.015)	2.28	(0.014)	0.33
問9の2子どもの将来を考えると、学習塾や習い事に通わせないと心配である	2.64	(0.021)	2.77	(0.020)	2.80	(0.023)	2.87	(0.021)	0.23
問5の5子どもと社会の出来事やニュースについて話をする	2.83	(0.016)	2.91	(0.015)	2.97	(0.014)	3.04	(0.014)	0.21
問3の2子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている	2.55	(0.015)	2.60	(0.016)	2.65	(0.017)	2.73	(0.014)	0.18
問5の2子どもと勉強や成績のことについて話をする	3.29	(0.012)	3.35	(0.012)	3.40	(0.013)	3.46	(0.010)	0.17
問3の3毎日子どもに朝食を食べさせている	3.68	(0.014)	3.77	(0.011)	3.81	(0.010)	3.86	(0.008)	0.18
問10の1子どもの教育で重視すること：子どもが自立できるようにすること	3.50	(0.010)	3.55	(0.011)	3.61	(0.009)	3.67	(0.010)	0.17
問10の4子どもの教育で重視すること：将来の夢や目標に向かって努力すること	3.54	(0.009)	3.58	(0.008)	3.62	(0.009)	3.67	(0.009)	0.14
問3の16子どもに「勉強しなさい」とよく言っている	2.65	(0.021)	2.71	(0.017)	2.72	(0.021)	2.76	(0.016)	0.11
問5の3子どもと将来や進路についての話をする	3.30	(0.013)	3.34	(0.012)	3.38	(0.013)	3.40	(0.012)	0.10
問3の4平日、夕食と一緒に食べている	3.48	(0.018)	3.52	(0.016)	3.47	(0.016)	3.38	(0.019)	-0.10
問3の5家事を手伝わせるなど家族の一員としての役割を与えている	2.91	(0.019)	2.86	(0.018)	2.83	(0.017)	2.83	(0.019)	-0.09
問3の1子どもが決まった時刻に起きるよう（起こすよう）にしている	3.56	(0.014)	3.63	(0.012)	3.65	(0.012)	3.63	(0.012)	0.07
問10の2子どもの教育で重視すること：人の気持ちが分かる人間になること	3.72	(0.008)	3.75	(0.008)	3.78	(0.009)	3.79	(0.010)	0.06
問3の10子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている	3.12	(0.011)	3.13	(0.012)	3.15	(0.011)	3.18	(0.013)	0.06
問3の20子どもに生き物や植物の世話をさせている	2.25	(0.026)	2.24	(0.024)	2.26	(0.027)	2.19	(0.023)	-0.05
問5の1子どもから学校での出来事について話を聞いている	3.32	(0.012)	3.35	(0.012)	3.36	(0.014)	3.36	(0.019)	0.05
問3の6自分でできることは自分でさせている	3.43	(0.013)	3.41	(0.013)	3.40	(0.013)	3.39	(0.013)	-0.04
問5の4子どもと友達のことについて話をする	3.32	(0.012)	3.34	(0.011)	3.34	(0.013)	3.35	(0.012)	0.03
問3の11子どもが悪いことをしたらきちんと叱っている	3.68	(0.010)	3.70	(0.009)	3.70	(0.009)	3.70	(0.007)	0.03
問3の7子どものプライバシーを尊重している	3.25	(0.010)	3.22	(0.012)	3.23	(0.013)	3.22	(0.013)	-0.03
問3の19子どもが自然に触れる機会をつくっている	2.64	(0.025)	2.64	(0.020)	2.68	(0.022)	2.66	(0.021)	0.02
問5の6子どもの心配事や悩み事の相談によく乗っている	2.93	(0.015)	2.96	(0.013)	2.97	(0.017)	2.93	(0.015)	-0.01
問10の3子どもの教育で重視すること：自分の意見をはっきり言えるようになるこ	3.56	(0.010)	3.53	(0.009)	3.55	(0.010)	3.55	(0.011)	-0.00

細かく見るといくつか違いがあるものの、小学校・中学校ともおおむね同様の結果が認められた。ふたつの表からは、次のような特徴を読み取ることができる。

- ・「人の気持ち分かる人間になること」を重視する、「悪いことをしたらきちんと叱っている」、「自分でできることは自分でさせている」など、子どもが社会性を身につけ、自立するための教育的な関与のあり方を問うた項目については SES カテゴリによる差はそれほど大きくなく、どのカテゴリの平均値も高い。社会経済的な背景の違いを問わず、保護者たちが熱心に子育てを行う様子がこれらの結果から窺える。
- ・SES による違いが顕著な質問項目は、学歴に対する期待の高さや英語や外国の文化に親しませようとする姿勢、良い成績を取ることにこだわりの度合い、活字文化に親しませるような働きかけの度合いに関するものであった。
- ・「子どもに『勉強しなさい』とよく言っている」かどうかを問うた質問には SES カテゴリ別の差はそれほど大きくない一方で、「計画的に勉強するようにうながしている」傾向は SES が高い保護者に顕著であった。
- ・子どもとの日常会話についても、普段の出来事に関する会話についてはそれほど大きな差が見られないが、「読んだ本の感想を話し合ったりしている」傾向は SES が高くなるにつれて強まり、平均の差も相対的に大きい（「社会の出来事やニュースについて話をする」も中程度ではあるが、SES カテゴリによる違いが認められる項目である）。

これらの結果を踏まえつつ、SES が直接的に学力を規定する背景にはどのようなメカニズムがあるのか、いくつかの仮説を提示してみたい。

第一に、学歴期待と教育戦略の違いが学力に影響を与える可能性を指摘することができる。先にみたように、SES が相対的に高い保護者は、子どもが良い成績を取り、より高い学歴を取得することを願う傾向が顕著であった。子どもへの期待を実際の成果につなげるための具体的な関与がある点も、SES の高い保護者に見られる特徴である。「勉強しなさい」と言うだけではなく、計画的に勉強するよう促す、あるいは学校文化と親和性の高い活字文化に親しませるように働きかけるなどの関わりが、SES の高い保護者の子どもたちの学業成績を押し上げる効果を発揮しているように思われる。

なお、回答の形式が異なるために図表には示していないが⁴⁾、小学校・中学校ともに SES の高い保護者ほどテレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲームを含む）で遊ぶ時間を限定する、携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくる傾向がみられた。SES が相対的に高い保護者は、そもそもゲームや携帯を持たせない者も多い。これらの結果からは、教育的な配慮のもとで戦略的に子どもの生活時間を構造化してゆく保護者の姿勢を見ることができる。

第二に、個別の質問項目で把握できる具体的な関わり方だけでなく、その背後にある保護者と子どもとのコミュニケーション様式に違いがあり、そのことが学力の差につながっているように思われる。

先に述べたように、子どもとの会話の内容について、SES カテゴリによる違いが大きい項目とそうでない項目を見てみると、学校の出来事や子どもの友達について話をするかどうか、心配や悩み事の相談によく乗るかどうかについてはカテゴリによる差は小さいが、

日常の文脈を越えた内容について子どもと会話する傾向は、SES の高い保護者の特徴であった。

学校における教育活動は「いま・ここ」の文脈に依存しなくとも伝達可能な形式と内容をもつコミュニケーションを基盤に展開する（バジル・バーンステイン著『〈教育〉の社会学理論』（久富善之ほか訳）法政大学出版局、2000 年）。SES が相対的に高い保護者の子どもたちの好成績は、家庭におけるコミュニケーション様式が、学校教育のそれと親和的であることに起因しているのではないだろうか。質問紙によって家庭内のコミュニケーション様式を詳細に把握することは困難なので、これはあくまでも一つの仮説に過ぎないが、SES カテゴリ別に子どもとの接し方を比較する際に認められる違いは、保護者と子どもとのコミュニケーション様式の違いを一定程度反映しているように思われる。

<注>

- 1) 重み付けの方法に関する詳細は第 8 章に記載されている。
- 2) 標準誤差（SE）はジャックナイフ法を用いて推計した。なお、重回帰分析で用いる変数のなかに一定の相関関係が認められるものがあるが、VIF（1.5 以下）と条件指数の値（一部のモデルでは 17～18、その他は 15 以下）を参照し、多重共線性によって推計結果が不安定になる問題を回避できることを確認したうえで分析結果を示している。
- 3) 分析に用いた 32 項目の質問では「あてはまる」～「あてはまらない」（問 10 は「重視している」～「重視していない」）の 4 段階の選択肢の 1 つに○をつける形式で回答を求めている。図表 3-1-11 と 3-1-12 では「あてはまる」（重視している）と回答した者に 4 点、「どちらかといえば、あてはまる」（どちらかといえば、重視している）に 3 点、「どちらかといえば、あてはまらない」（どちらかといえば、重視していない）に 2 点、「あてはまらない」（重視していない）に 1 点を割り当てて平均値を算出した。平均値の数値が大きいほど質問内容を肯定する傾向が強いことを表している。
- 4) ゲームと携帯の使い方を尋ねた質問（2 項目）は、「あてはまる」～「あてはまらない」の 4 件法に加え「持たせていない」という第 5 の選択肢が設けられていたために、他の項目と平均値を単純に比較することができない。

第3章 社会経済的背景と子どもの学力

(2) 地域の社会経済的背景による学力格差

中島ゆり

地域の社会経済的背景によって子どもの学習と生活環境が変わり、それは学力をも規定する。本項では、地域の社会経済的背景をふまえ、どのような学校の教育実践や地域のあり方が子どもの学力を高めるのかについて分析する。

(1) 地域の社会経済的背景（地域 SES）尺度の構成

本項では、地域の社会経済的背景（以下、地域 SES）を定めるため、国勢調査情報から得た学校区における男性の大学卒業者比率、女性の大学卒業者比率、男性の管理職比率を使用する（保護者調査の標本学校の地域特性については「第9章 学校の地域特性について」を参照のこと）。具体的には、すべての調査協力小学校および中学校の“地域”における男性の大卒比率、女性の大卒比率、男性の管理職比率をそれぞれZ得点化し、三者の平均をとって地域 SES を定めた。さらに、地域 SES を四分位で分け、Lowest SES、Lower middle SES、Upper middle SES、Highest SES の4つの地域に区分した。

各区分における男性の大卒比率、母親の大卒比率、父親の管理職比率は図表 3-2-1 の通りである。Lowest SES の地域における男性大卒者比率は平均 11%、Lower middle SES は 16%、Upper middle SES は 22%、Highest SES は 35%、女性大卒者比率は Lowest SES の地域で 8%、Lower middle SES で 6%、Upper middle SES で 8%、Highest SES で 15-16%であった。また、男性管理者比率については、Lowest SES、Lower middle SES 両方の地域で平均 3%、Upper middle SES で 4%、Highest SES で 5%であった。

図表 3-2-1 地域 SES 別の男性大卒者比率、女性大卒者比率、男性管理者比率（小6、中3）

		小6			中3		
		学校数	平均値	標準偏差	学校数	平均値	標準偏差
Lowest	男性大卒者比率	5068	0.11	0.033	2365	0.11	0.034
	女性大卒者比率	5068	0.04	0.014	2365	0.04	0.014
	男性管理者比率	5068	0.03	0.007	2365	0.03	0.006
Lower middle	男性大卒者比率	5068	0.16	0.037	2365	0.16	0.037
	女性大卒者比率	5068	0.06	0.017	2365	0.06	0.017
	男性管理者比率	5068	0.03	0.008	2365	0.03	0.007
Upper middle	男性大卒者比率	5069	0.22	0.045	2366	0.22	0.044
	女性大卒者比率	5069	0.08	0.023	2366	0.08	0.022
	男性管理者比率	5069	0.04	0.010	2366	0.04	0.009
Highest	男性大卒者比率	5068	0.35	0.090	2365	0.35	0.087
	女性大卒者比率	5068	0.16	0.058	2365	0.15	0.055
	男性管理者比率	5068	0.05	0.018	2365	0.05	0.016

注）平成 25 年度 全国学力・学習状況調査全対象校

保護者調査対象校のうち Lowest SES の地域に区分される小学校は 130 校、Lower middle SES は 108 校、Upper middle SES は 89 校、Highest SES は 63 校、中学校については Lowest SES が 127 校、Lower middle SES は 108 校、Upper middle SES は 80 校、Highest SES の地域は 72 校となった。下記では保護者調査対象校のみを分析に加える。

(2) 地域 SES 区分の背景

1 地域 SES 区分と都市規模との関係

地域 SES 区分と都市規模の関係は図表 3-2-2 のようである。Lowest SES、Lower middle SES の地域は「その他の市」、「町村」が多く、Upper middle SES は「その他の市」、「町村」も多いものの「中核市」、「大都市」に分類されるところも 1～2 割ある。Highest SES の地域は「大都市」に偏っており「町村」は 1 割程度となっている。

このように、地域 SES 区分と都市規模にはある程度関連が見られるが、大都市であれば必ず Highest SES の地域であるというような強い相関は見られない。これはすなわち都市規模別の考察と地域 SES 別の考察にずれが生じるということを意味する。

図表 3-2-2 地域 SES と都市規模との関係 (小 6、中 3)

		大都市	中核市	その他の市	町村	合計	学校数
小 6	Lowest	2.3%	11.5%	41.2%	45.0%	100.0%	131
	Lower middle	9.3%	13.0%	28.7%	49.1%	100.0%	108
	Upper middle	11.2%	24.7%	32.6%	31.5%	100.0%	89
	Highest	41.3%	27.0%	20.6%	11.1%	100.0%	63
中 3	Lowest	5.5%	15.0%	41.7%	37.8%	100.0%	127
	Lower middle	5.6%	12.0%	25.0%	57.4%	100.0%	108
	Upper middle	15.0%	16.3%	32.5%	36.3%	100.0%	80
	Highest	37.5%	20.8%	27.8%	13.9%	100.0%	72

2 地域 SES 区分と就学援助との関係

地域 SES 区分別に就学援助を受けている児童・生徒の割合を見てみると(図表 3-2-3)、地域 SES が Highest であるところでは、就学援助を受けている者が「在籍していない」と回答した学校が、その他の地域 SES 区分に比べて極めて少ない。地域 SES が高いところでは、その地域の学校に在籍している多くの家庭の SES は高いが、当然、経済的に困窮した家庭も存在する。地域 SES の高い地域では、学校内の家族 SES の格差が大きい可能性がある。

しかし、ここで留意しなければならないのは、就学援助の利用率は必ずしも経済的困窮者の割合を示したものではないという点である。各地域の就学援助の利用率は、準要保護者の認定基準と援助内容、学校や家庭への告知・広報の程度によって左右され、現に東京 23 区の受給率が 20%を超えて高い一方、全国の町村の受給率は 10%に満たないという地域間格差が指摘されている(白川優治、2014、「教育格差と福祉」耳塚寛明編『教育格差の社会学』有斐閣、pp. 199-228)。本分析において Highest SES の地域で就学援助を受けている児童・生徒が「在籍していない」と回答した学校が少ないのは、このためでもある

と考えられる。

とはいえ、ある地域における受給者と非受給者との間の経済格差は存在し、相対的な貧困状態にある者が **Highest SES** の地域に多いことも確かであろう。

図表 3-2-3 就学援助を受けている児童・生徒の割合（小 6、中 3）

		在籍していない	5%未満	5%以上、 10%未満	10%以上、 20%未満	20%以上、 30%未満	30%以上、 50%未満	50%以上	合計	学校数
小 6	Lowest	35.4%	7.7%	13.8%	17.7%	13.1%	3.8%	8.5%	100.0%	130
	Lower middle	30.8%	9.3%	12.1%	19.6%	11.2%	11.2%	5.6%	100.0%	107
	Upper middle	22.5%	20.2%	13.5%	23.6%	13.5%	6.7%	.0%	100.0%	89
	Highest	4.9%	16.4%	29.5%	32.8%	11.5%	4.9%	.0%	100.0%	61
中 3	Lowest	16.7%	9.5%	25.4%	20.6%	11.9%	10.3%	5.6%	100.0%	126
	Low middle	19.8%	7.5%	14.2%	25.5%	23.6%	4.7%	4.7%	100.0%	106
	Upper middle	6.3%	7.6%	16.5%	34.2%	22.8%	12.7%	.0%	100.0%	79
	Highest	4.2%	6.9%	19.4%	34.7%	12.5%	20.8%	1.4%	100.0%	72

3 地域 SES 区分と家族の社会経済的背景（家族 SES）との関係

地域 SES 区分と保護者調査における家族の社会経済的背景（以下、家族 SES）との関係を見たのが図表 3-2-4 である。世帯収入、父親の教育年数、母親の教育年数、これらの変数を統合して作成した家族 SES¹⁾、学校以外の教育（学習塾・習い事）にかかる支出はいずれも **Lowest SES** の地域で低く、**Highest SES** の地域で高くなっている。たとえば、**Lowest SES** の地域と **Highest SES** の地域で世帯収入は 100 万円以上異なり、学校外教育支出は約 2 倍異なる。

図表 3-2-4 地域 SES と保護者調査における家族の社会経済的地位との関係（小 6、中 3）

		小 6		中 3	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
Lowest	世帯収入	5195300	2548440	5403200	2753040
	父教育年数	12.84	1.960	12.75	1.927
	母教育年数	12.92	1.446	12.72	1.421
	家族SES	-0.37	0.824	-0.34	0.863
	学校以外の教育（学習塾・習い事）にかかる支出（月）	9407.44	9428.251	13113.01	12083.792
Lower middle	世帯収入	5491600	2710790	5629000	2802420
	父教育年数	13.15	2.095	13.08	2.075
	母教育年数	13.03	1.569	12.85	1.475
	家族SES	-0.246	0.901	-0.22	0.902
	学校以外の教育（学習塾・習い事）にかかる支出（月）	11195.70	10075.020	16007.82	13457.839
Upper middle	世帯収入	5862500	2789390	5775200	2822910
	父教育年数	13.53	2.128	13.44	2.122
	母教育年数	13.22	1.555	13.02	1.544
	家族SES	-0.07	0.935	-0.08	0.954
	学校以外の教育（学習塾・習い事）にかかる支出（月）	12134.48	10510.337	18119.03	14145.240
Highest	世帯収入	6876100	3326960	6620600	3129830
	父教育年数	14.42	2.213	14.04	2.189
	母教育年数	13.74	1.681	13.43	1.611
	家族SES	0.37	1.067	0.27	1.045
	学校以外の教育（学習塾・習い事）にかかる支出（月）	18128.00	14484.171	22021.88	14446.735

4 地域 SES 区分と児童・生徒調査における勉強時間と学力との関係

地域 SES 区分別に平均勉強時間（週）²⁾を見ると（図表 3-2-5）、Lowest SES、Upper middle SES ではそれほど変わらず、Lower middle SES で少し短くなっている。Highest SES の地域では平均勉強時間がもっとも長くなっている。

図表 3-2-5 地域 SES 別の平均勉強時間（週）（小 6、中 3）

	小 6		中 3	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
Lowest	595.86	322.437	684.38	360.347
Lower middle	575.34	344.585	641.17	377.464
Upper middle	605.84	340.466	672.68	384.513
Highest	685.13	397.847	721.62	377.044

つぎに地域 SES 区分別に全国学力調査の結果を見ると、小学校 6 年生の国語 A、算数 A、算数 B、中学校 3 年生の国語 A において、Lowest SES の地域より Lower middle SES の地域のほうが平均点が低くなっているのが分かるが、この一部の例外を抜かすと、地域 SES が高くなるほど学力調査の点数も高くなるという結果が見られた。

図表 3-2-6 地域 SES 別の学力（小 6、中 3）

		小 6		中 3	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
Lowest	国語 A	61.01	20.532	75.32	17.268
	国語 B	45.82	25.031	65.16	25.564
	算数 A／数学 A	75.60	19.007	61.00	21.812
	算数 B／数学 B	54.60	24.011	38.60	24.258
Lower middle	国語 A	59.86	20.206	74.69	17.323
	国語 B	46.08	25.288	65.75	24.914
	算数 A／数学 A	74.72	18.453	61.48	21.682
	算数 B／数学 B	54.34	24.487	38.81	24.334
Upper middle	国語 A	62.48	20.054	75.66	17.351
	国語 B	49.18	25.167	66.96	25.004
	算数 A／数学 A	77.70	18.182	61.82	21.908
	算数 B／数学 B	59.08	24.366	39.43	24.541
Highest	国語 A	65.36	20.902	77.69	17.216
	国語 B	53.09	25.673	68.96	24.854
	算数 A／数学 A	78.74	18.182	66.40	21.396
	算数 B／数学 B	61.73	24.738	44.68	25.706

以上、地域 SES 区分別に都市規模、就学援助、家族 SES、勉強時間、学力との関係を見た。このような地域 SES 区分の背景をふまえ、以下では地域 SES 別に、学校のどのような取り組みや地域のあり方が子どもの学力を伸ばすのかを検討していく。

（3）地域 SES 別に見る学力が高い学校の取り組み

以下の分析では、地域 SES 別に、学力調査結果の学校平均を高めるのは、どのような学

校の取り組みと地域のあり方であるかを重回帰分析によって検討していく³⁾。従属変数に算数B／数学Bの得点（学校平均）、独立変数に学校の各取り組み、地域の教育力（保護者調査および児童・生徒調査の質問項目の学校平均）、経験年数が20年以上の教員割合、経験年数が5年未満の教員割合を一つ一つ重回帰分析のモデルに入れて分析した⁴⁾。

これまでの研究において、学力を上げる要因の一つとして小規模学校が指摘されているため（たとえば、舞田敏彦、2008、「地域の社会経済特性による子どもの学力の推計——学力の社会的規定性を克服する教育条件の探究」『教育社会学研究』第82集、pp. 165-184）、本分析では、学校の児童・生徒数を統制して検討することで児童・生徒人数以外の学力を高める要因を探る。

また、学力向上には当然、勉強時間の長さが影響するが、本分析では児童・生徒個々人の「努力」の影響を排除して学校の取り組みの影響を考察したい。さらに、大都市には塾が多く、それによって勉強時間が長くなり学力が向上するという学校の取り組み以外の規定要因も本分析では排除する必要がある。このため、本分析モデルでは、子どもの勉強時間と塾にかける費用を統制して検討する。

下記では、学力を規定する学校の取り組みと地域のあり方のみに焦点をあてて結果を報告する。

1 小学校において高い学力と関連のある学校の取り組み

下記の一連の図表は、地域SES別に行った重回帰分析の結果のうち、標準化係数 β の大きいものから順にTop 15を並べて見たものである。

図表 3-2-7 Lowest SES の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み (Top15)

Lowest SES	β
学校質問紙_039／第6学年の児童に対して、前年度までに、児童に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか	.295
学校質問紙_052／第6学年の児童に対して、前年度までに、情報通信技術を活用し、協働学習や課題発見・解決型の指導を行いましたか	.281
児童質問紙_051／地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか（学校平均）	.272
学校質問紙_079／第6学年の児童に対する算数の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか	.264
学校質問紙_045／第6学年の児童に対して、前年度までに、資料を使って発表ができるよう指導しましたか	.254
学校質問紙_046／第6学年の児童に対して、前年度までに、児童が自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしましたか	.240
学校質問紙_073／第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、目的や相手に応じて話したり聞いたりする授業を行いましたか	.221
学校質問紙_080／第6学年の児童に対する算数の指導として、前年度までに、実生活における事象との関連を図った授業を行いましたか	.220
学校質問紙_047／第6学年の児童に対して、前年度までに、総合的な学習の時間で、課題の設定から始まる探求の過程を意識した指導をしましたか	.218
学校質問紙_072／第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか	.195
学校質問紙_075／第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、様々な文章を読む習慣を付ける授業を行いましたか	.193
学校質問紙_090／職場見学や職場体験活動を行っていますか	.192
学校質問紙_056／第6学年の児童に対して、前年度に、算数の授業において、発表などする際に児童がコンピュータを使う活動を行いましたか	.184
学校質問紙_053／第6学年の児童に対して、前年度に、国語の授業において、普通教室でのインターネットを活用した授業を行いましたか	.184
学校質問紙_094／教職員は、勤務している学校の地域や住んでいる地域の活動や行事に参加していますか	.183

注) 数値は標準化係数 β

まず、Lowest SES の地域において高い学力と関連のある取り組みを見ると（図表 3-2-7）、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導や職場見学・職場体験活動といったキャリ

ア教育、協働学習や課題発見・解決型の指導や総合的な学習の時間といった課題解決型の学習方法、目的や相手に応じて話したり聞いたりすることを指導する国語の授業、算数・国語の発展的な学習、コンピュータとインターネットの活用、子どもと教職員の地域への参加や関心が上位にあがった。本分析における学力とは算数Bの結果であるが、Lowest SES の地域では、算数というよりも、むしろ国語の指導による影響が大きいようである。

つぎに Lower middle SES の地域のように見ると（図表 3-2-8）、子どもと保護者の地域・学校への参加が Top15 に多く見られる。具体的には、「地域の大人から注意されたことや、友達や他の子どもが注意されているのを見たことがありますか（児童調査学校平均）」、「普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいること（保護者調査学校平均）」として「自治会・子ども会・青少年健全育成などの地域活動」、「PTA 活動などの学校に関わる活動」、「授業参観や運動会などの学校行事への参加」、「今住んでいる地域の行事への参加（児童調査学校平均）」、「保護者や地域の人の学校支援ボランティア活動の学校の教育水準の向上への影響（学校調査）」があがっている。

その他、国語・算数の宿題、資料を使った発表、自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導、調べたり文章を書いたりする宿題、目的や相手に応じて話したり聞いたりする授業、本とインターネットの利用、言語活動が児童の高い学力と関連している。ただし、Lower middle SES の地域では、全体的に標準化係数 β が小さいため、関連している程度は小さい。

図表 3-2-8 Lower middle SES の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み (Top15)

Lower middle SES	β
児童質問紙_057/地域の大人（学校や塾・習い事の先生除く）から注意されたことや、友達や他の子どもが注意されているのを見たことがありますか（学校平均）	.394
保護者質問紙_問16の1の2/普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか：自治会・子ども会・青少年健全育成などの地域活動（学校平均）	.170
保護者質問紙_問16の1の1/普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか：PTA活動などの学校に関わる活動（学校平均）	.167
学校質問紙_104/第6学年の児童に対して、前年度までに、家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えましたか（国・算共通）	.158
学校質問紙_095/第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、家庭学習の課題（宿題）を与えましたか	.154
学校質問紙_045/第6学年の児童に対して、前年度までに、資料を使って発表ができるよう指導しましたか	.153
保護者質問紙_問14の1 あなたは、次のようなことをどの程度していますか。授業参観や運動会などの学校行事への参加（学校平均）	.151
児童質問紙_049/今住んでいる地域の行事に参加していますか（学校平均）	.150
学校質問紙_046/第6学年の児童に対して、前年度までに、児童が自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしましたか	.126
学校質問紙_055/第6学年の児童に対して、前年度に、算数の授業において、普通教室でのインターネットを活用した授業を行いましたか	.124
学校質問紙_103/第6学年の児童に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりする宿題を出しましたか（国・算共通）	.123
学校質問紙_073/第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、目的や相手に応じて話したり聞いたりする授業を行いましたか	.114
学校質問紙_044/第6学年の児童に対して、前年度までに、本やインターネットなどの資料の調べ方が身に付くよう指導しましたか	.111
学校質問紙_115/言語活動に重点を置いた指導計画を作成していますか	.103
学校質問紙_093/保護者や地域の人の学校支援ボランティア活動は、学校の教育水準の向上に効果がありましたか	.102

注) 数値は標準化係数 β

つぎに Upper middle SES の地域を見ると（図表 3-2-9）、先ほどの Lower middle SES の地域と同様、保護者と児童の地域への参加と関心が Top15 の中に多く見られる。また、

Top1 は保護者に子育てや教育についての悩みを相談できる友人・知人がいることであるが、保護者のネットワークがうまく形成されているかも、子どもの学習環境をよくする一因となっているものと推測できる。

その他、国語・算数の家庭学習の課題についての評価・指導、授業研究を伴う校内研修、博物館・科学館、図書館を利用した授業、学習規律の維持の徹底、学力調査の結果の活用、学校からの保護者への情報提供、地域の人々の学校参加、自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書く指導、20年以上の教員の比率と高い学力との関連が見られた。

図表 3-2-9 Upper middle SES の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み (Top15)

Upper middle SES	β
保護者質問紙_問15の2/子育てや教育についての悩みを相談できる友人・知人はいますか (学校平均)	.543
児童質問紙_052/地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか (学校平均)	.402
児童質問紙_055/地域の大人 (学校や塾・習い事の先生除く) に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか (学校平均)	.370
児童質問紙_050/地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか (学校平均)	.315
学校質問紙_098/第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、家庭学習の課題 (長期休業の課題除く) について、評価・指導しましたか	.307
保護者質問紙_問16の3/地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がありますか (学校平均)	.285
学校質問紙_111/授業研究を伴う校内研修を前年度に何回実施しましたか	.262
学校質問紙_102/第6学年の児童に対する算数の指導として、前年度までに、家庭学習の課題 (長期休業の課題除く) について、評価・指導しましたか	.256
学校質問紙_088/第6学年の児童に対して、前年度までに、博物館や科学館、図書館を利用した授業を行いましたか	.237
学校質問紙_040/第6学年の児童に対して、前年度までに、学習規律 (私語をしない、聞き手に向かって話をするなど) の維持を徹底しましたか	.227
保護者質問紙_問13の2/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。学校は、学力調査の結果などを使って、学校の学力の状況について説明してくれる (学校平均)	.225
保護者質問紙_問13の1/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。学校や学級の教育活動に関する情報提供 (学校のホームページ、学校だよりや学級だよりなど) は役に立っている (学校平均)	.218
保護者質問紙_問15の3/地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どものための教育に関わってくれる人が多いと思いますか (学校平均)	.199
学校質問紙_046/第6学年の児童に対して、前年度までに、児童が自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしましたか	.199
学校質問紙/20年以上の教員の比率	.194

注) 数値は標準化係数 β

Highest SES において高い学力と関連のある学校の取り組みを見ると (図表 3-2-10)、少人数指導・習熟度別学習、児童と保護者の地域・学校への関心と参加、近隣の中学校との連携、学校による家庭学習のサポート、国語・算数における補充的な学習サポート、保護者のネットワーク、キャリア教育、国語の発展的な学習指導が高い学力と関連しているのが分かる。上記で見てきた他の地域 SES 区分とは異なり、少人数教育・習熟度別学習と補充的な学習サポートに関わる項目が多く見られる。これは先に見たように、Highest SES の地域では、家族 SES の高い児童と低い児童の格差が大きく、児童全員が一緒に学習するよりも個別的な対応が求められており、それが結果として、全体的な学力を引き上げることにもつながっているものと推測できる。

図表 3-2-10 Highest SES の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み
(Top15)

Highest SES	β
学校質問紙_061/第6学年の児童に対して、前年度に、算数の授業において、習熟の遅いグループに少人数指導を行い、習得できるようにしましたか	.360
児童質問紙_050/地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか(学校平均)	.349
保護者質問紙_問16の1の1/普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか:P T A活動などの学校に関わる活動(学校平均)	.341
学校質問紙_062/第6学年の児童に対して、前年度に、算数の授業において、習熟の早いグループに発展的な内容について少人数指導を行いましたか	.330
学校質問紙_065/第6学年の児童に対して、第4学年のときに、算数の授業において習熟の遅いグループに少人数指導で習得できるようにしましたか	.323
学校質問紙_085/教科の指導内容や指導方法について近隣の中学校と連携(教師の合同研修、教師の交流、教育課程の接続など)を行っていますか	.315
学校質問紙_066/第6学年の児童に対して、第4学年のときに、算数の授業において、習熟の早いグループに発展的な内容の少人数指導を行いましたか	.310
保護者質問紙_問13の3/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。学校は、家での学習の仕方を教えてくれる(学校平均)	.307
学校質問紙_032/第6学年の児童に対して、前年度に、放課後を利用した補充的な学習サポートを実施しましたか	.305
学校質問紙_071/第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行いましたか	.299
保護者質問紙_問15の2/子育てや教育についての悩みを相談できる友人・知人はいますか(学校平均)	.291
学校質問紙_039/第6学年の児童に対して、前年度までに、児童に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか	.279
学校質問紙_078/第6学年の児童に対する算数の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行いましたか	.276
保護者質問紙_問13の5/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。子どもの教育について、学校の先生に相談したり、要望を伝えたりしやすい(学校平均)	.269
学校質問紙_072/第6学年の児童に対する国語の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか	.261

注) 数値は標準化係数 β

2 中学校において高い学力と関連のある学校の取り組み

つぎに中学校において高い学力と関連のある学校の取り組みと地域のあり方を見る。

図表 3-2-11 Lowest SES の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み(Top15)

Lowest	β
保護者質問紙_問15の1/地域の行事にお子さんと一緒に参加していますか(学校平均)	.418
保護者質問紙_問13の2/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。学校は、学力調査の結果などを使って、学校の学力の状況について説明してくれる(学校平均)	.308
保護者質問紙_問13の1/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。学校や学級の教育活動に関する情報提供(学校のホームページ、学校だよりや学級だよりなど)は役に立っている(学校平均)	.261
学校質問紙_076/第3学年の生徒に対して、前年度までに、地域の人材を外部講師として招聘した授業を行いましたか	.244
保護者質問紙_問16の1の3/普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか:1・2以外のボランティア活動(学校平均)	.241
保護者質問紙_問14の2/あなたは、次のようなことをどの程度していますか。ボランティアでの学校の支援	.237
学校質問紙_071/第3学年の生徒に対する数学の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか(学校平均)	.233
生徒質問紙_059/地域の大人(学校や塾・習い事の先生除く)から褒められたことがありますか(学校平均)	.218
保護者質問紙_問14の1 あなたは、次のようなことをどの程度していますか。授業参観や運動会などの学校行事への参加(学校平均)	.218
学校質問紙_038/第3学年の生徒に対して、前年度までに、本やインターネットなどの資料の調べ方が身に付くよう指導しましたか	.213
保護者質問紙_問15の3 地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもの教育に関わってくれる人が多いと思いますか	.208
学校質問紙_033/第3学年の生徒に対して、前年度までに、生徒に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか(学校平均)	.203
保護者質問紙_問15の2/子育てや教育についての悩みを相談できる友人・知人はいますか(学校平均)	.190
学校質問紙_092/第3学年の生徒に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりする宿題を出しましたか(国・数共通)	.189
生徒質問紙_056/地域の大人(学校や塾・習い事の先生除く)に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか(学校平均)	.177

注) 数値は標準化係数 β

Lowest SES の地域(図表 3-2-11)では、保護者の地域・学校への参加と関心、学力調

査の結果や教育活動についての学校からの情報提供、地域の人々の学校参加、数学の発展的な学習、本やインターネットを用いた資料の調べ方についての指導、キャリア教育、保護者のネットワーク、調べたり文章を書いたりする宿題と高い学力とに関連が見られた。

Lower middle SES の地域も同様に、保護者と生徒の地域への参加・関心と高い学力に関連がありそうである（図表 3-2-12）。また、家庭学習についての教示、学校からの情報提供、保護者と学校との良好な関係が高い学力と関連がある。

図表 3-2-12 Lower middle の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み
(Top15)

Lower middle	B
生徒質問紙_058/地域の大人（学校や塾・習い事の先生除く）から注意されたことや、友達や他の子どもが注意されているのを見たことがありますか（学校平均）	.643
保護者質問紙_問14の2/あなたは、次のようなことをどの程度していますか。 ボランティアでの学校の支援（学校平均）	.468
生徒質問紙_051/地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか（学校平均）	.413
保護者質問紙_問15の1/地域の行事にお子さんと一緒に参加していますか（学校平均）	.389
生徒質問紙_059/地域の大人（学校や塾・習い事の先生除く）から褒められたことがありますか（学校平均）	.387
保護者質問紙_問16の3/地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がありますか（学校平均）	.380
保護者質問紙_問13の3/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。 学校は、家での学習の仕方を教えてくれる（学校平均）	.372
保護者質問紙_問13の1/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。 学校や学級の教育活動に関する情報提供（学校のホームページ、学校だよりや学級だよりなど）は役に立っている（学校平均）	.356
生徒質問紙_050/今住んでいる地域の行事に参加していますか（学校平均）	.351
生徒質問紙_052/地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか（学校平均）	.341
保護者質問紙_問13の5/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。 子どもの教育について、学校の先生に相談したり、要望を伝えたりしやすい（学校平均）	.334
保護者質問紙_問16の1の2/普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか；自治会・子ども会・青少年健全育成などの地域活動（学校平均）	.308
保護者質問紙_問16の1の3/普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか；1・2以外のボランティア活動（学校平均）	.293
保護者質問紙_問13の4/お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。 学校は、保護者や地域の要望に適切に対応してくれる（学校平均）	.279
学校質問紙_080/P T Aや地域の人が学校の諸活動にボランティアとして参加してくれますか	.269

注）数値は標準化係数β

Upper middle SES の地域においても（図表 3-2-13）、保護者の地域・学校参加と高い学力に関連がある。また、経験 20 年以上の教員の比率、国語の家庭学習の課題についての評価・指導、学力調査の結果の利用、学習指導と学習評価の計画にあたっての教職員同士の協力、国語の宿題、調べたり文章を書いたりする宿題、家庭学習についての教示、補充的な学習サポート、一斉読書の時間が Top 15 に入っていた。

図表 3-2-13 Upper middle SES の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み
(Top15)

Upper middle	8
保護者質問紙_問16の1の1／普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか：PTA活動などの学校に関わる活動（学校平均）	.429
保護者質問紙_問13の4／お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。学校は、保護者や地域の要望に適切に対応してくれる（学校平均）	.357
保護者質問紙_問15の3／地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもたちの教育に関わってくれる人が多いと思いますか（学校平均）	.283
学校質問紙_019／経験年数20年以上の教員の比率	.261
保護者質問紙_問16の3／地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がありますか（学校平均）	.245
学校質問紙_087／第3学年の生徒に対する国語の指導として、前年度までに、家庭学習の課題（長期休業の課題除く）について、評価・指導しましたか	.244
保護者質問紙_問14の2／あなたは、次のようなことをどの程度していますか。ボランティアでの学校の支援（学校平均）	.234
学校質問紙_050／平成24年度全国学力・学習状況調査や独自の調査等の結果を利用し、具体的な教育指導の改善等を行いましたか	.228
学校質問紙_102／学習指導と学習評価の計画の作成にあたっては、教職員同士が協力し合っていますか	.218
学校質問紙_084／第3学年の生徒に対する国語の指導として、前年度までに、家庭学習の課題（宿題）を与えましたが	.215
学校質問紙_092／第3学年の生徒に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりする宿題を出しましたか（国・数共通）	.207
保護者質問紙_問13の5／お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。子どもの教育について、学校の先生に相談したり、要望を伝えたりしやすい（学校平均）	.204
学校質問紙_093／第3学年の生徒に対して、前年度までに、家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えましたか（国・数共通）	.200
学校質問紙_027／第3学年の生徒に対して、前年度に、土曜日を利用した補充的な学習サポートを実施しましたか	.187
学校質問紙_024／第3学年の生徒に対して、前年度に、「朝の読書」などの一斉読書の時間を設けましたか	.181

注）数値は標準化係数 β

Highest SES の地域においては（図表 3-2-14）、地域の大人や年の異なる友だちとの良好な関係、保護者の学校参加、生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導、学校の家庭学習についての教示、生徒の発言や活動の時間の確保、実践的な研修と校内研修、経験年数 20 年以上の教員比率、コンピュータの操作、学級で話し合う活動、ノートのとりかたなど学習方法の指導、情報通信技術を活用した協働学習や課題発見・解決型の指導、数学・国語の宿題が高い学力と強く関連があった。

図表 3-2-14 Highest SES の地域において高い学力と関連のある学校の取り組み (Top15)

Highest	8
生徒質問紙_056／地域の大人（学校や塾・習い事の先生除く）に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか（学校平均）	.687
生徒質問紙_057／年上や年下の友達と一緒に遊んだり、勉強したりすることがありますか（学校平均）	.593
保護者質問紙_問14の1／あなたは、次のようなことをどの程度していますか。授業参観や運動会などの学校行事への参加（学校平均）	.391
学校質問紙_031／第3学年の生徒に対して、前年度までに、生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしましたか	.320
保護者質問紙_問13の3／お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。学校は、家での学習の仕方を教えてくれる（学校平均）	.316
学校質問紙_032／第3学年の生徒に対して、前年度までに、生徒の発言や活動の時間を確保して授業を進めましたか	.314
学校質問紙_098／模擬授業や事例研究など、実践的な研修を行っていますか	.312
学校質問紙_019／経験年数20年以上の教員の比率	.311
学校質問紙_044／第3学年の生徒に対して、前年度までに、コンピュータ等の基本的な操作を身に付ける指導を行いましたか	.298
学校質問紙_037／第3学年の生徒に対して、前年度までに、学級やグループで話し合う活動を授業などで行いましたか	.280
学校質問紙_100／授業研究を伴う校内研修を前年度に何回実施しましたか	.267
学校質問紙_035／第3学年の生徒に対して、前年度までに、学習方法（適切にノートをとるなど）に関する指導をしましたか	.258
学校質問紙_045／第3学年の生徒に対して、前年度までに、情報通信技術を活用し、協働学習や課題発見・解決型の指導を行いましたか	.253
学校質問紙_088／第3学年の生徒に対する数学の指導として、前年度までに、家庭学習の課題（宿題）を与えましたが	.248
学校質問紙_084／第3学年の生徒に対する国語の指導として、前年度までに、家庭学習の課題（宿題）を与えましたが	.235

注）数値は標準化係数 β

(4) まとめ

本項では、地域 SES 区別に子どもの高い学力と関連のある学校の取り組み、地域のあり方を検討してきた。

小学校では **Highest SES** の地域以外において、児童、保護者、教員の地域への関心と参加が児童の高い学力と相当に関連がある。その他、**Lowest SES** の地域と **Lower middle SES** の地域においては、読む・書く・聞くことを重視した学校の取り組みが高い学力と関連している。また、これらの地域ではコンピュータとインターネットの活用も高い学力と関連している。これは、学校の設備を整えることの重要性を示唆している。**Upper middle SES** の地域では、博物館・科学館、図書館を利用した授業、学力調査の結果の活用、地域の人の学校参加といった学校外の資源の活用が高い学力と関連していた。また、保護者への情報提供といった保護者と学校の良い関係性、経験年数 20 年以上の教員の比率が高いことも、この地域においては有効であった。**Highest SES** の地域に特徴的なのは少人数指導・習熟度別学習と補充的な学習サポートの有効性である。先に述べたように、この地域の学校においては児童の家族 SES に主観的に大きな格差があるものと考えられる。このような場合、一斉授業よりも個別的な指導が必要で、かつ有効であると見られる。

中学校では、小学校の分析で見られた以上に、生徒、保護者の地域・学校への関心と参加が高い学力と関連していた。いずれの地域 SES 区分においても、生徒と保護者が地域と学校に関心をもち参加する、地域の人々が学校に関わりをもつ、学校は保護者に情報を提供し良好な関係を形成する、といった相互の関わりがあるところで子どもの学力が高くなっている。**Lowest SES** と **Lower middle SES** の地域においては、まずは地域、学校、保護者、生徒の関係性の構築といった学習環境の整備が重要となり、**Upper middle SES** の地域ではそれに加えて宿題や補充的な学習サポートの充実、教職員同士の協力、学力調査の結果の利用など、学校内での学習環境を整備することがよい。**Highest** の地域では、思考力を高める指導や生徒の発言や活動の時間の確保など、生徒自身の能力を引き出す授業が高い学力に関連している。これは、他の地域 SES 区分よりも地域的な学習環境が整っているためと推測できよう。その他、小学校と同様に **Upper middle SES** の地域、さらに **Highest SES** の地域において経験年数 20 年以上の教員比率の高さが学力の高さに影響している。

以上、地域の社会経済的背景別に子どもの高い学力と関連のある学校の取り組みと地域のあり方を見てきた。学校の取り組みは、どの学校にも一律に有効であるというわけではなく、地域の状況によって異なる。より適切な学校の取り組みは地域に根ざしたものである必要があり、そのような取り組みを検討するためには学校は置かれている地域の状況をきちんと把握する必要がある。保護者・学校・地域の良好な関係が保たれている地域においては、子どもの学力が高いことが本項で明らかとなった。学校と地域の関係づくりをたすける方策が求められている。

<注>

- 1) 家族 SES については「第 1 章 家庭の社会経済的背景 (SES) の尺度構成」を参照のこと。
- 2) 勉強時間には学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含ん

でいる。本分析では、勉強時間は「4 時間以上」を「240 分」、「3 時間以上、4 時間より少ない」を「210 分」、「2 時間以上、3 時間より少ない」を「150 分」、「1 時間以上、2 時間より少ない」を「90 分」、「30 分以上、1 時間より少ない」を「45 分」、「30 分より少ない」を「15 分」、「全くしない」を「0 分」と置き換え、平日の勉強時間×5 日＋土曜日や日曜日の勉強時間×2 日として週の勉強時間を算出した。

- 3) 本分析で使用するのは保護者調査対象校のデータベースをもとに作成した学校単位のデータベースである。保護者調査対象校ごとの保護者の回答の平均値、児童・生徒の回答の平均値、学校調査の回答を各小学校・中学校を単位とした新しいデータベースを作成し、それをもとに分析した。保護者調査データベースで平均値を算出した際には、全サンプルウェイトを用いた。
- 4) 学校の取り組みについては学校質問紙を参照した。「よく行った」、「そう思う」、「よく参加してくれる」、「当てはまる」などの肯定的な回答に 4 点（または 3 点）から「全く行っていない」、「ほとんど行っていない」、「そう思わない」、「全く参加してくれない」、「当てはまらない」などの否定的な回答に「1 点」をつけ点数化した。また、『『朝の読書』などの一斉読書の時間を設けましたか』といった頻度を尋ねる質問については頻度の高いものに 5 点（または 4 点）、低いものに 1 点をつけ、「行っていない」は「0 点」とした。例外として、「長期休業日を利用した補充的な学習サポートを実施しましたか」という質問については「延べ 13 日以上」を「13 日」、「延べ 9 日から 12 日」は「10.5 日」、「延べ 5 日から 8 日」は「6.5 日」、「1 日から延べ 4 日」は「2.5 日」、「行っていない」は「0 日」とした。少人数学習集団の編成と使った教材についての質問は分析に加えなかった。また、「授業研究を伴う校内研修を前年度に何回実施しましたか」という質問については「年間 15 回以上」は「15 回」、「年間 13 回から 14 回」は「13.5 回」、「年間 11 回から 12 回」は「11.5 回」、「年間 9 回から 10 回」は「9.5 回」、「年間 7 回から 8 回」は「7.5 回」、「年間 5 回から 6 回」は「5.5 回」、「年間 3 回から 4 回」は「3.5 回」、「年間 1 回から 2 回」は「1.5 回」、「全く実施していない」は「0 回」とした。

第4章 家庭の社会経済的背景による不利の克服

(1) 社会経済的背景別にみた、学力に対する学習の効果 に関する分析

耳塚寛明・中西啓喜

(1) はじめに

本章では、不利な家庭環境であるにもかかわらず、高い学力を獲得している児童生徒の特徴を明らかにすることを目的としている。具体的には、①学力が社会経済的背景によって規定されていることを把握した上で、②児童生徒の学習時間や学習方法が、家庭環境の不利を克服することが可能かどうかについて分析していく。

近年、不利な家庭環境にあるにもかかわらず、それを克服して高い学力を獲得している児童生徒が「レジリエンス (resilience)」という概念で説明され始めている (OECD 2011, *Against the Odds: Disadvantaged Students Who Succeed in School*, OECD Publishing)。当該文献によれば、彼ら・彼女らは、授業への準備を高い水準でこなすなど勤勉であり、自尊感情や自己有用性が高いという。本章では、児童生徒の学習時間と学習方法に着目しつつ、不利な家庭環境にもかかわらず、高い学力の児童生徒 (resilient student) の特徴を明らかにするため、以下の4つの分析を行う。

第一に、児童生徒の社会経済的背景と学力の関連を分析する。これについては、第2章および第3章で詳細に分析しているが、ここでも確認し、後の分析の準備をする。

第二に、児童生徒の学習時間と学力の関連を分析する。学習時間が多いほど学力が高いことは経験的に知られているが、本データにおいてその関連性が裏付けられるかをここでは示しつつ、以下の分析に備える。

第三に、児童生徒の社会経済的背景別に、学習時間と学力の関連を示す。とりわけ、家庭環境の不利を克服には、どのくらい勉強する必要があるのかを明らかにする。先に述べた通り、社会経済的背景および学習時間が学力に影響することはよく知られている。しかし、日本ではしばしば個人の「頑張り／努力」が強調され、子どもの家庭背景による学力格差を問題視することが避けられてきた (荻谷剛彦 1995『大衆教育社会のゆくえ：学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社)。それゆえ本章では、家庭背景が不利な児童生徒が、どのくらいの時間勉強すれば (頑張れば)、恵まれた家庭背景の子どもと同等の学力を獲得することができるのかを分析しつつ、個人の努力の効果とその限界を検討する。

以上に加えて、第四に、学習時間とは独立して、学力に対してポジティブな効果を与える学習方法を探索的に分析する。この分析によって効果的な学習方法が明らかになれば、他の章における知見と合わせつつ、不利な家庭背景の児童生徒にどのような支援が有効かを提言できるかもしれない。

（２）本章で用いる変数

本章で用いる変数は、次の通りである。まず、学力スコアは国語と算数／数学のＡ問題およびＢ問題の正答率である。この変数を従属変数として、以下の分析を展開していく。

学力の分散を説明するための変数は、①社会経済的背景（SES）の４カテゴリー（「Lowest SES」、「Lower middle SES」、「Upper middle SES」、「Highest SES」）②児童生徒の普段（月～金曜日）の学習時間（学習塾や家庭教師含む）を用いる。③学習方法については、「自分で計画を立てて勉強をしている」、「学校の宿題をしている」、「学校の授業の予習をしている」、「学校の授業の復習をしている」、「苦手な教科の勉強をしている」、「テストで間違えた問題について勉強している」の６つの変数のうち、最も学力に対して効果的な変数を探索的に分析する。

（３）分析１：社会経済的背景と学力（各正答率）の関連

図表 4-1-1（小 6）および図表 4-1-2（中 3）には、社会経済的背景別の国語 A・B、算数／数学 A・B の正答率の平均値を示した。これらの結果を見ると、学年段階や教科などに関わらず、社会経済的背景が高い児童生徒ほど各正答率が高いことがわかる。例えば、図表 4-1-1 の国語 A では、Lowest SES=53.9、Lower middle SES=60.1、Upper middle SES=63.9、Highest SES=72.7 となっている。これらの結果より、社会経済的背景が恵まれた児童生徒の方が、高い学力を獲得していることがわかる。

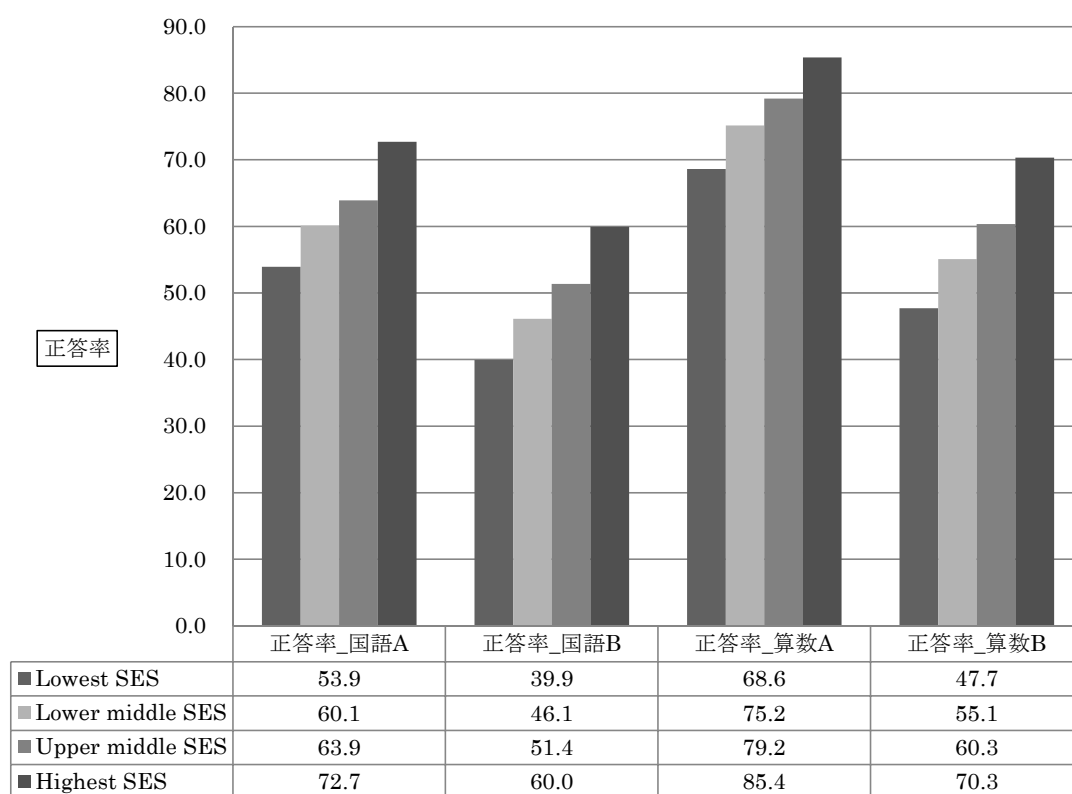
（４）分析２：学習時間と学力（各正答率）の関連

次に、学習時間と国語 A・B、算数／数学 A・B の正答率の関連を図表 4-1-3（小 6）および図表 4-1-4（中 3）に示した。これらを見ると、学習時間が長い児童生徒ほど高い学力を獲得していることがわかる。

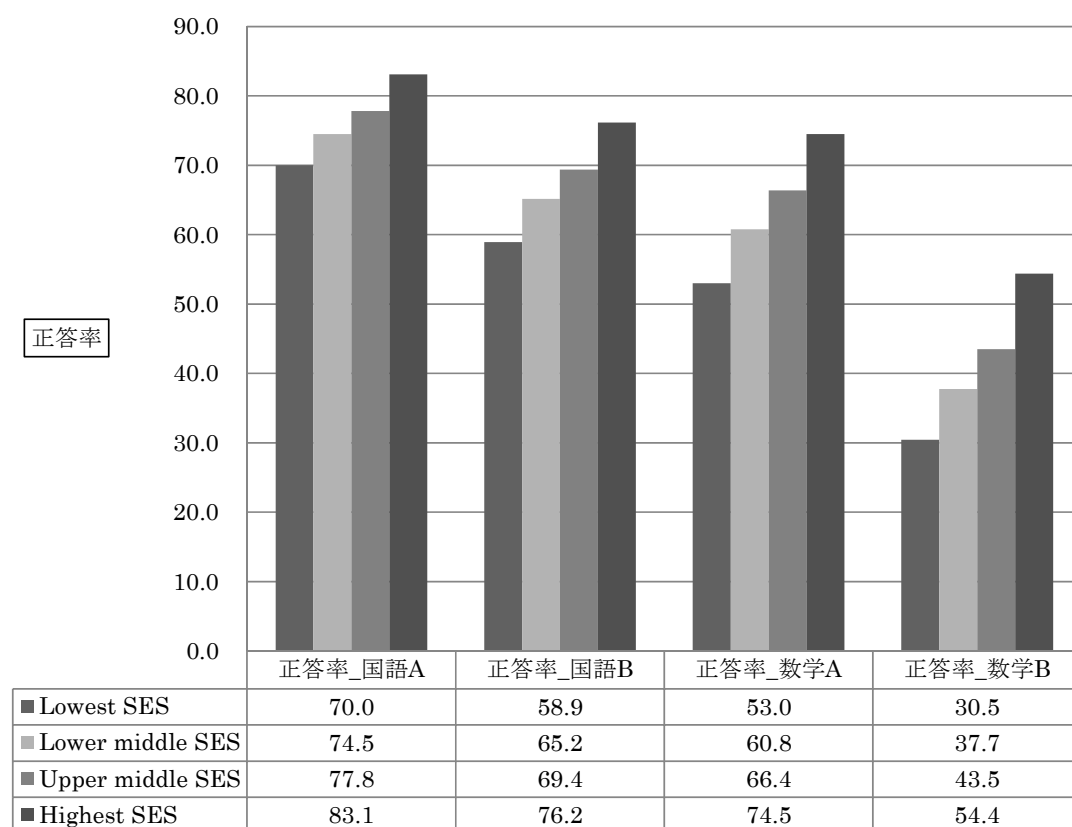
詳細に結果を見てみよう。まず小 6 では、学習時間について「3 時間以上」と「全くしない」と回答した児童の間には、各正答率において約 20 ポイント正答率に差があることがわかる。次に中 3 の結果を見ると、学習時間について「3 時間以上」と「全くしない」と回答した生徒の間の正答率の差は、「A 問題」では約 12 ポイント、「B 問題」では約 15 ポイントから 20 ポイントの差が見られる。

それでは次に、家庭環境の不利は学習時間によって克服することが可能であるかを分析する。具体的には、各社会経済的背景グループの児童生徒はどのくらい勉強すれば、最も高い社会経済的背景グループの児童生徒が全く勉強していない場合の正答率を上回ることができるのかを分析する。このような極端なケースにおける分析により、学力の獲得に対する、家庭背景や学習時間（努力）の重要性とそれらの限界を明らかにすることができる。

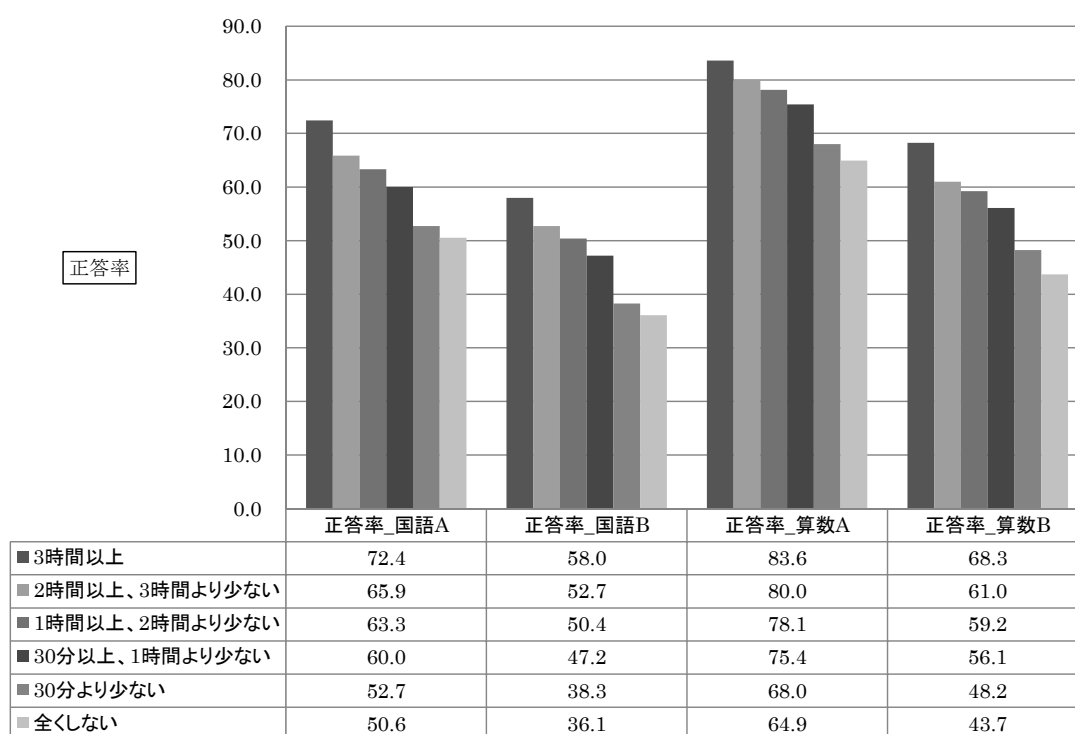
図表 4-1-1 社会経済的背景と各正答率（小 6）



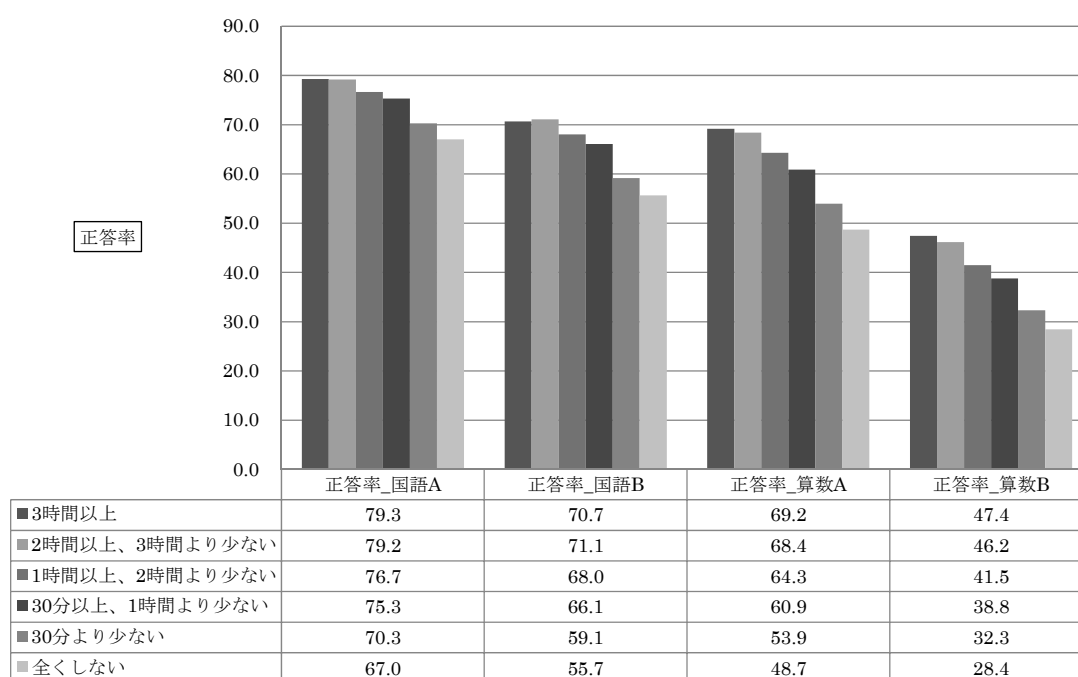
図表 4-1-2 社会経済的背景と各正答率（中 3）



図表 4-1-3 平日の学習時間と各正答率（小 6）



図表 4-1-4 平日の学習時間と各正答率（中 3）



（５）分析３：社会経済的背景別に見た学習時間と学力（各正答率）の関連

１ 正答率の平均値から見る学習時間の効果

ここでは、社会経済的背景別に学習時間と学力（各正答率）の平均値を分析する。小６の分析結果を図表 4-1-5、4-1-6、4-1-7、4-1-8 に、中３の分析結果を図表 4-1-9、4-1-10、4-1-11、4-1-12 に示した。詳細な結果は各棒グラフを参照されたいが、全体的な傾向として把握できることをまとめていこう。

まず、学習時間が学力に与える影響としてはポジティブな効果が確認される。どの社会経済的背景のカテゴリーに属した児童生徒であっても、学習時間が多いほど高い正答率となっている。

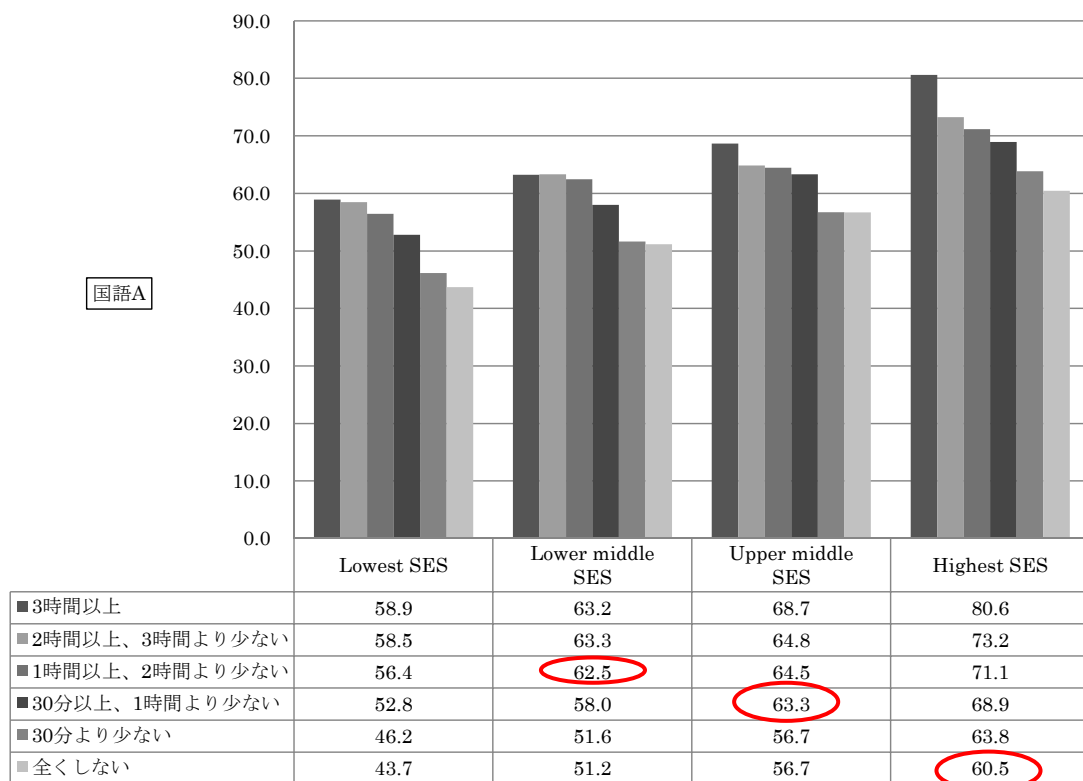
次に、「家庭環境の不利を克服には、どのくらい勉強する必要があるのか」について平均値の比較から確認しよう。極端な例として、最も高い社会経済的背景グループ（**Highest SES**）の児童生徒が全く勉強していない場合、他のグループがどのくらい勉強すれば同程度の正答率を獲得できるのかを示す。図中の○は、**Highest SES** の児童生徒が全く勉強していない場合の正答率を、他のグループが同等以上の正答率を獲得する学習時間にマークしている。

この点について、小学６年生の結果を見ると、最も高い社会経済的背景グループの児童が全く勉強していない場合、他のグループが約「１時間～２時間」程度勉強すると正答率を追い越すことができる。ただし、最も低い社会経済的背景グループでは、「３時間以上」勉強しても追い越せない場合がほとんどである（国語 B だけ追い越せる可能性がある）。

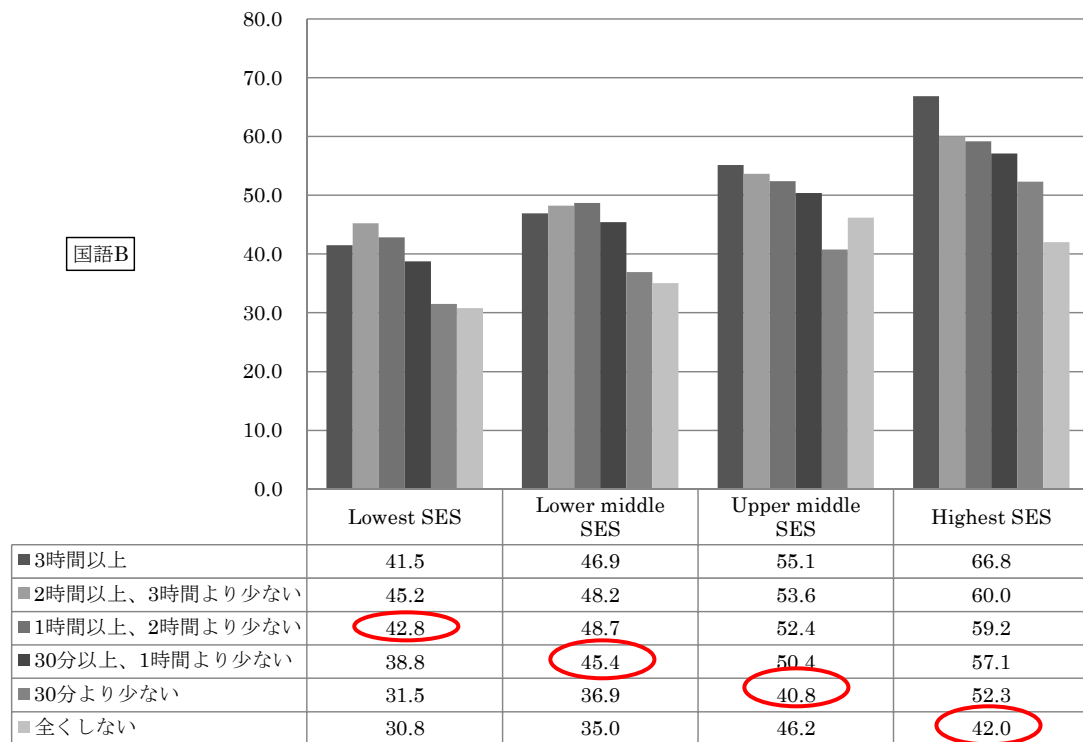
さらに、中学３年生の結果を見ると、最も高い社会経済的背景グループの生徒が全く勉強していない場合、**Lower middle SES** グループの生徒は、およそ「２時間以上」は勉強する必要がある。その点において、学習時間と学力の関連の格差は学年が向上するほど広がっているといえるかもしれない。

加えて、小６年時点と同様に、最も低い社会経済的背景の生徒は、「３時間以上」勉強しても、最も高い社会経済的背景グループの生徒が全く勉強していない場合の正答率を平均値で追い抜くことができない。これらの結果から、家庭背景の不利を児童生徒個人の学習時間でのみ克服することはきわめて難しいことが示唆される¹⁾。

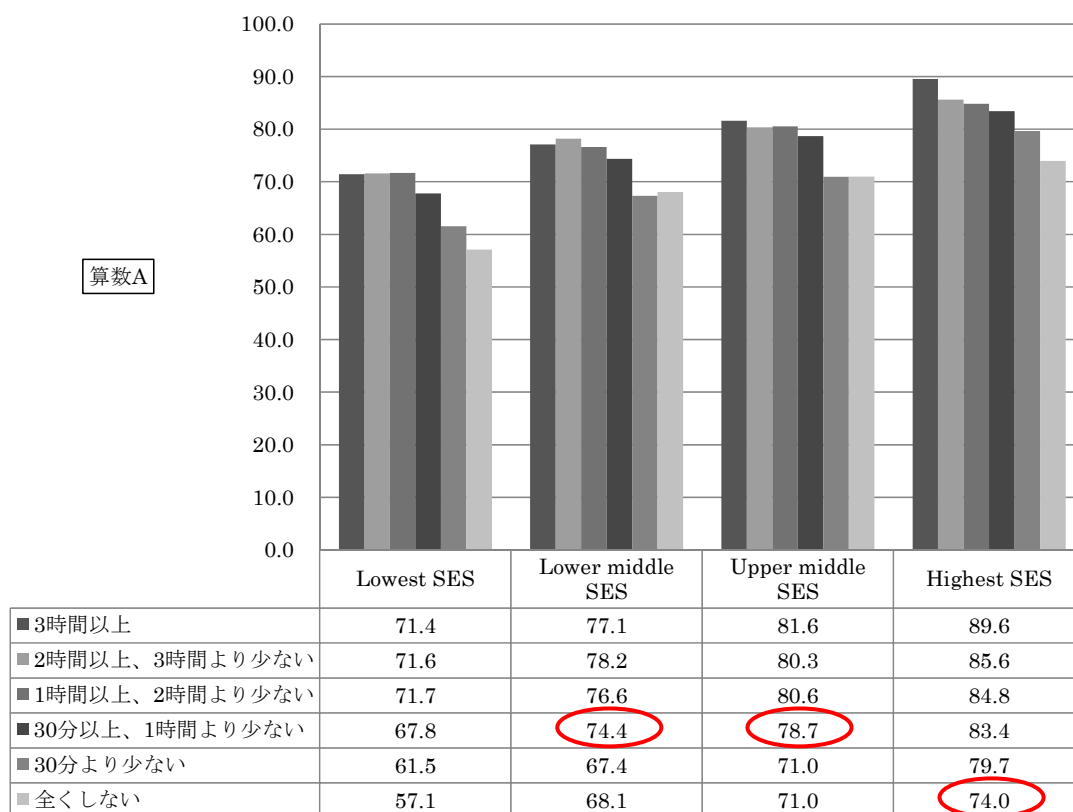
図表 4-1-5 社会経済的背景別、学習時間と国語 A 正答率の平均値（小 6）



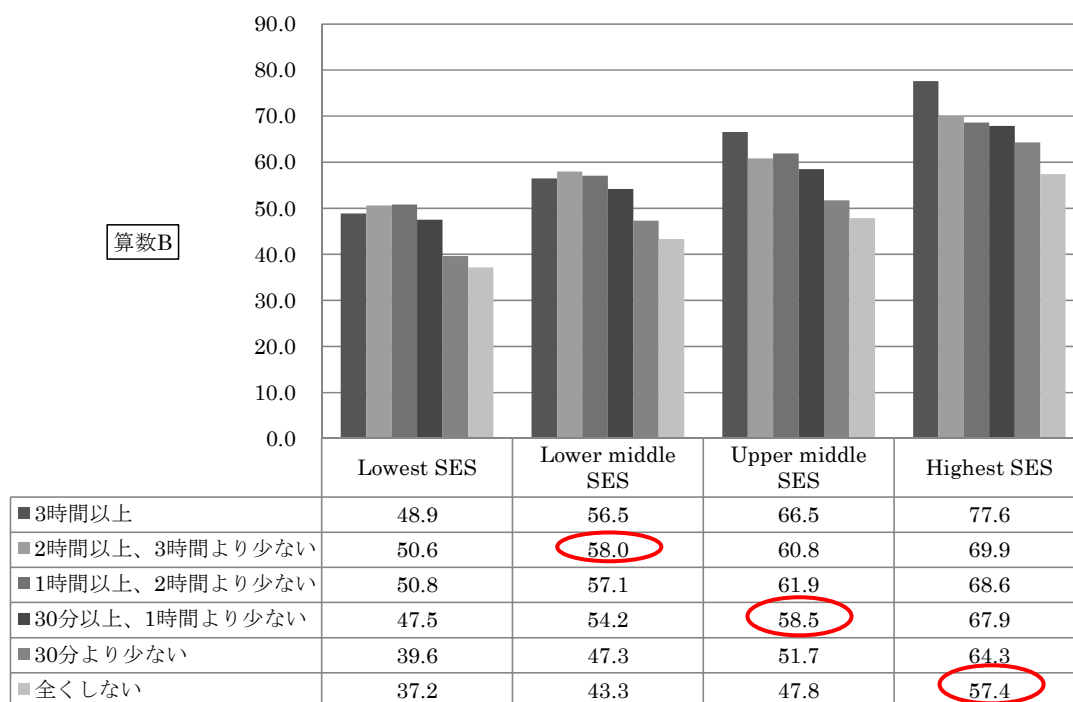
図表 4-1-6 社会経済的背景別、学習時間と国語 B 正答率の平均値（小 6）



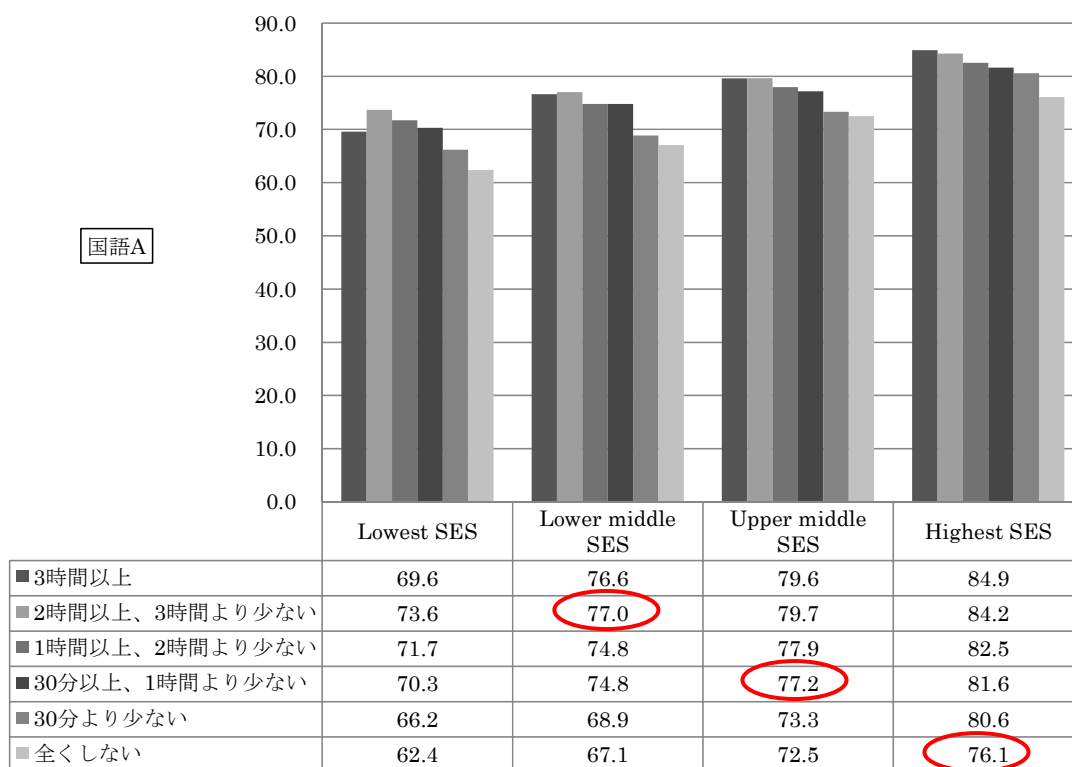
図表 4-1-7 社会経済的背景別、学習時間と算数 A 正答率の平均値（小 6）



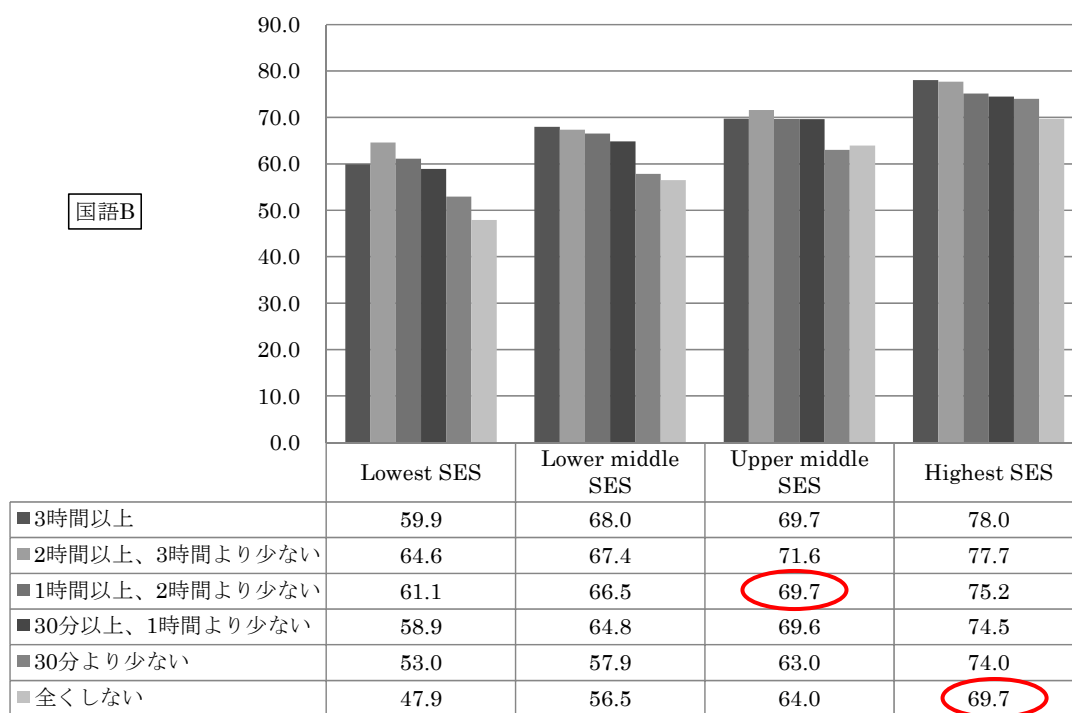
図表 4-1-8 社会経済的背景別、学習時間と算数 B 正答率の平均値（小 6）



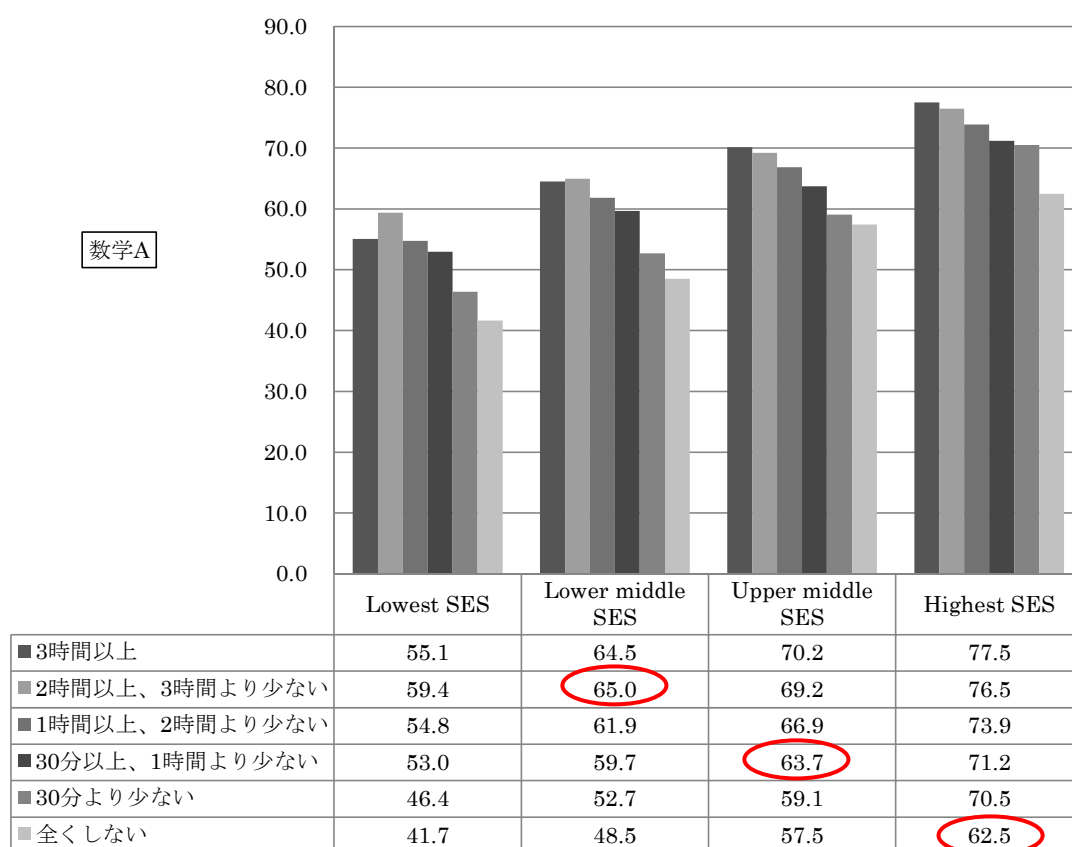
図表 4-1-9 社会経済的背景別、学習時間と国語 A 正答率の平均値 (中 3)



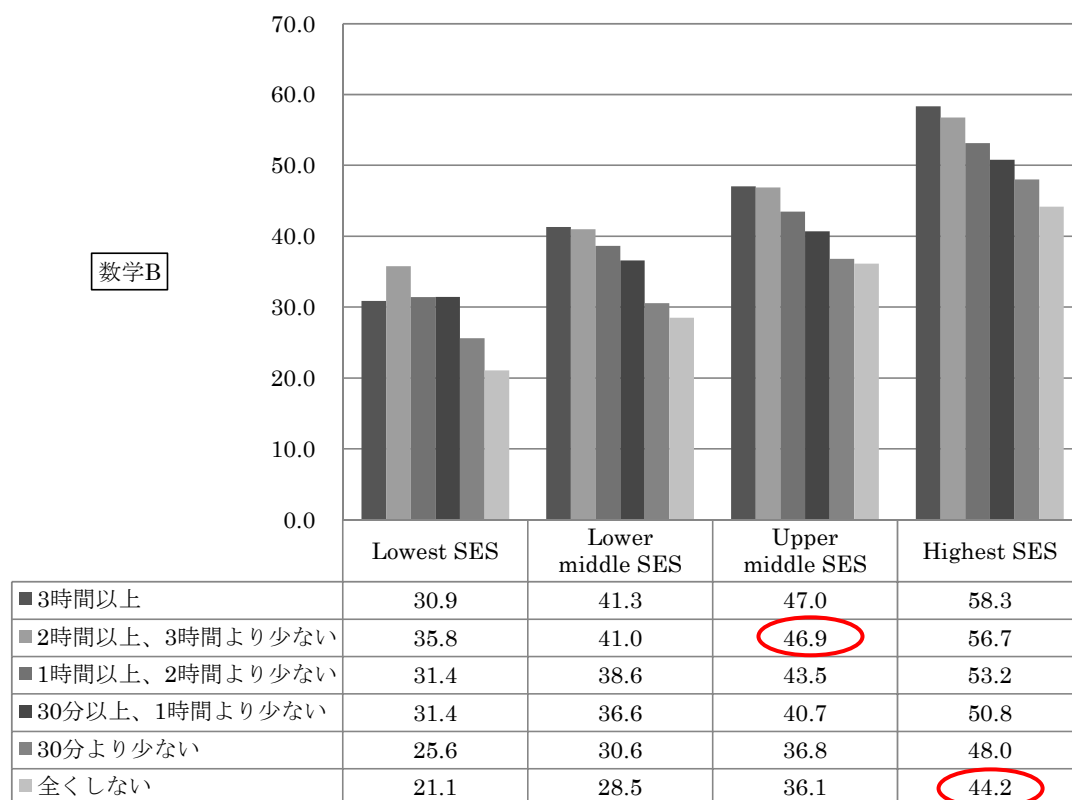
図表 4-1-10 社会経済的背景別、学習時間と国語 B 正答率の平均値 (中 3)



図表 4-1-11 社会経済的背景別、学習時間と数学 A 正答率の平均値（中 3）



図表 4-1-12 社会経済的背景別、学習時間と数学 B 正答率の平均値（中 3）



2 正答率の分布から見る学習時間の効果

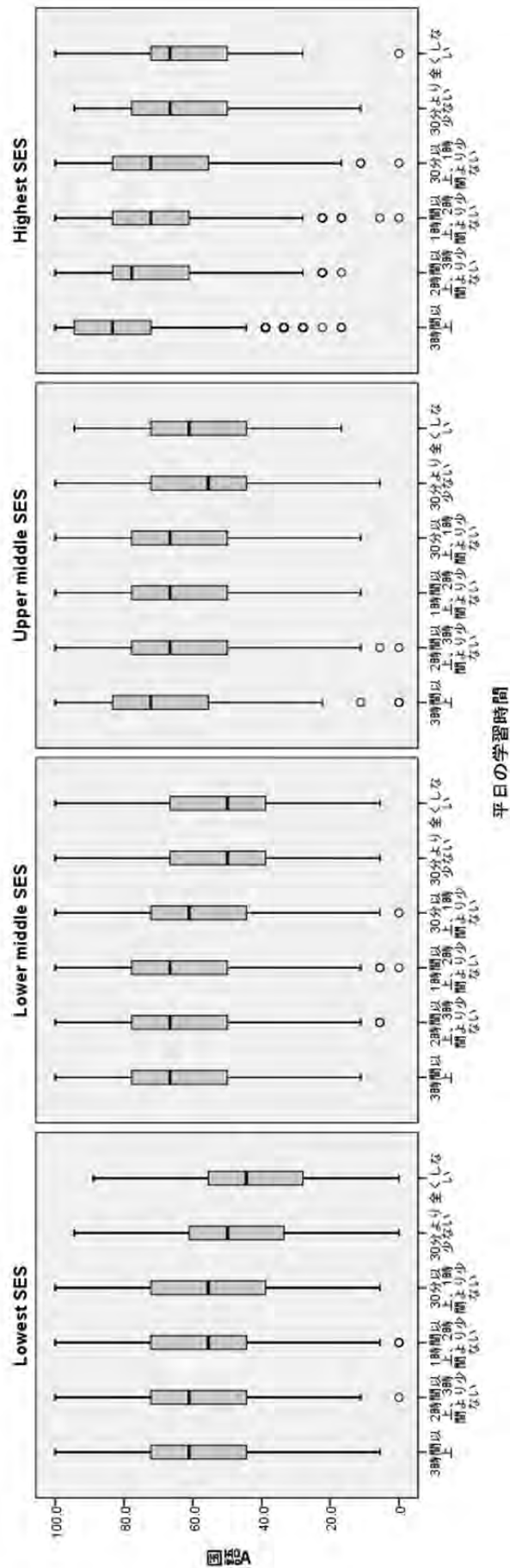
以上の分析結果は、あくまで学習時間による効果を平均値から見ているに留まる。そこで、引き続き箱ひげ図を用いて、学習時間の効果を確認していく。箱ひげ図は、最小値、最大値、中央値、四分位を用いてデータの散らばりを視覚的にとらえることを容易にするものである。四分位とは、データを昇順に並べて4等分したものであり、小さい値から数えて、総数の1/4番目の値が第1四分位、真ん中の値が第2四分位（＝中央値）、3/4番目の値が第3四分位となる。

図表 4-1-13～図表 4-1-20 は、社会経済的背景（SES）別学習時間別に、学力の分布を箱ひげ図で示したものである。学校段階別教科別に結果を示した。箱ひげ図から次のことがわかる。

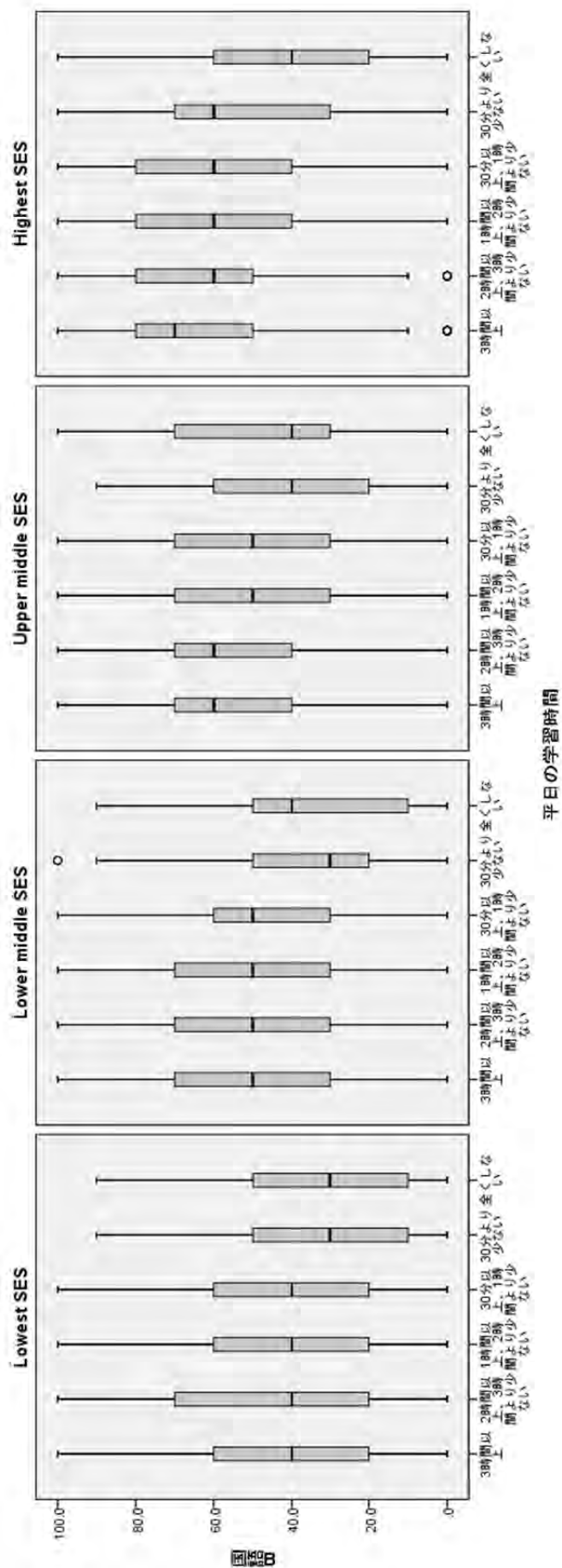
社会経済的背景別学習時間別に示された「箱」は縦に長い。すなわち同じSESグループに分類され同じような学習時間の子どもで、学力の散らばりが一定程度存在する。先に平均値をもとに「社会経済的背景がLowest SESの児童生徒が3時間以上勉強して獲得する学力の平均値は、Highest SESでまったく勉強しない児童生徒の学力の平均値よりも低い」という知見を提示した。しかし、両グループの学力に散らばりが存在し、また箱に重なっている範囲が存在することは、先の知見が「社会経済的背景がLowest SESで3時間以上勉強しているすべての児童生徒の学力が、Highest SESでまったく勉強しないすべての児童生徒の学力を下回っている」ことを意味するわけではない。

学習時間の長さが高い学力の獲得に対して、社会経済的背景から独立した効果を持っているという事実を、あらためて確認しておく必要がある。

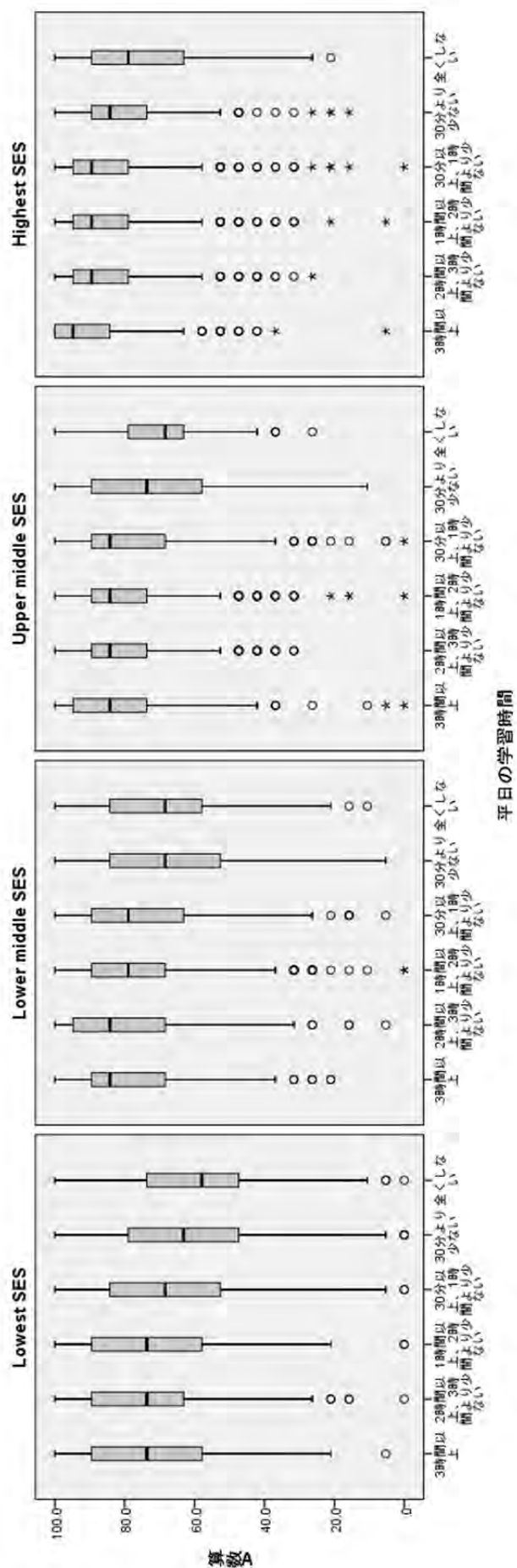
図表 4-1-13 社会経済的背景別、学習時間と国語A 正答率の箱ひげ図（小6）



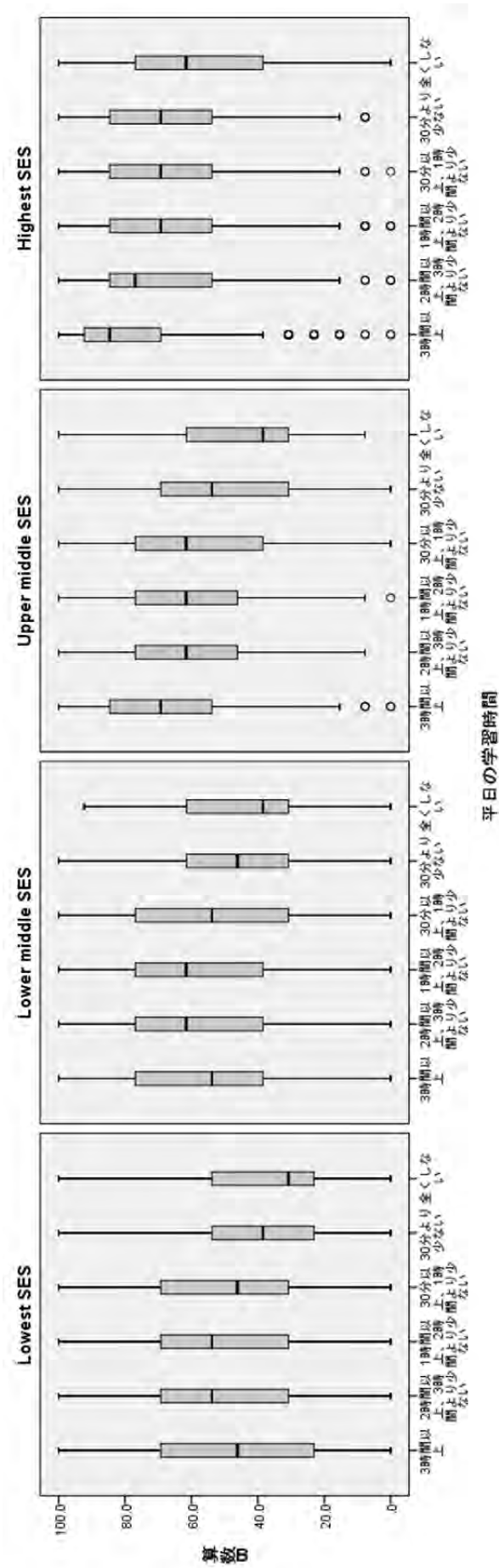
図表 4-1-14 社会経済的背景別、学習時間と国語 B 正答率の箱ひげ図 (小 6)



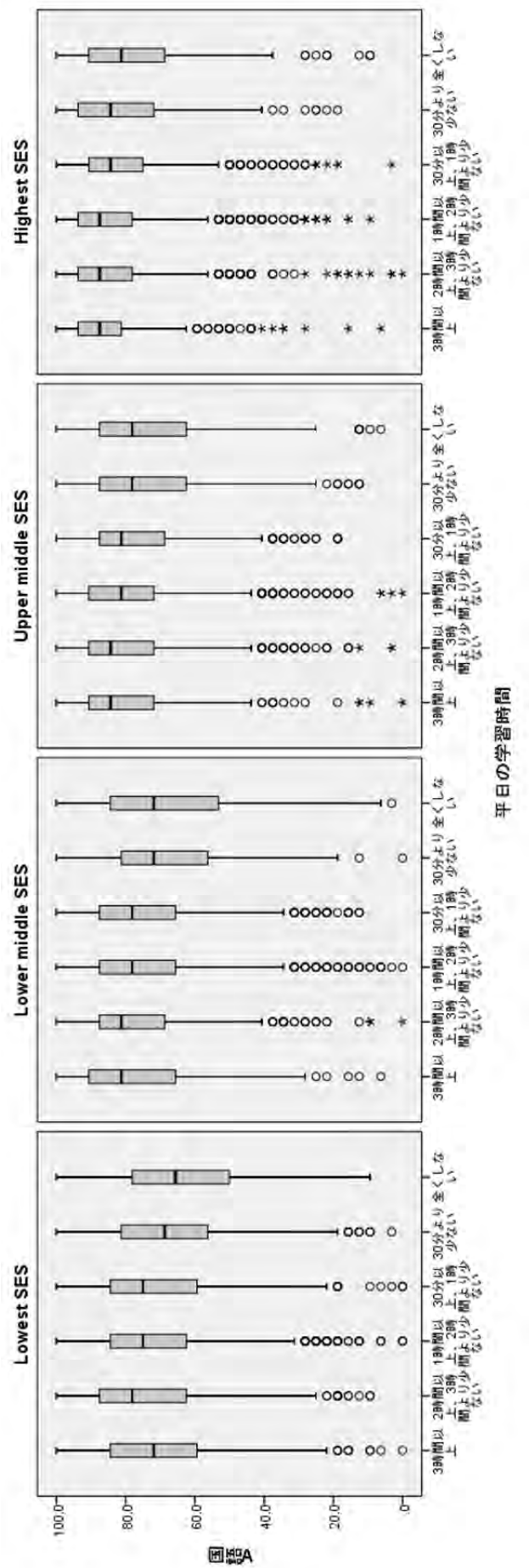
図表 4-1-15 社会経済的背景別、学習時間と算数 A 正答率の箱ひげ図 (小 6)



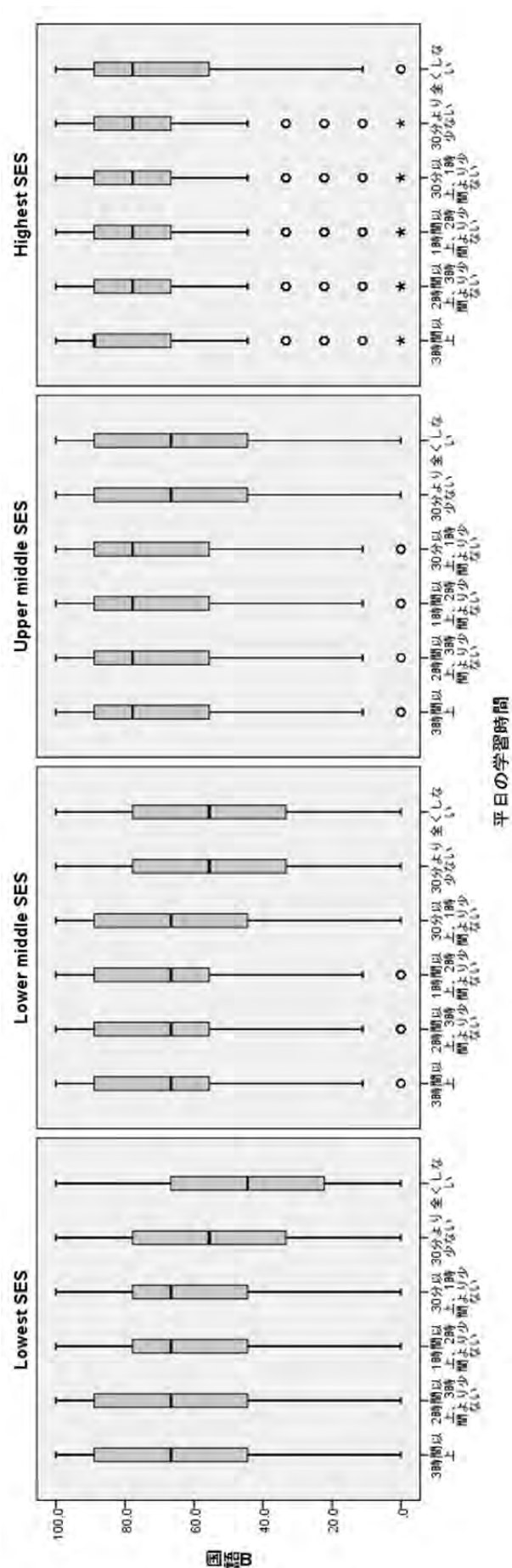
図表 4-1-16 社会経済的背景別、学習時間と算数 B 正答率の箱ひげ図 (小 6)



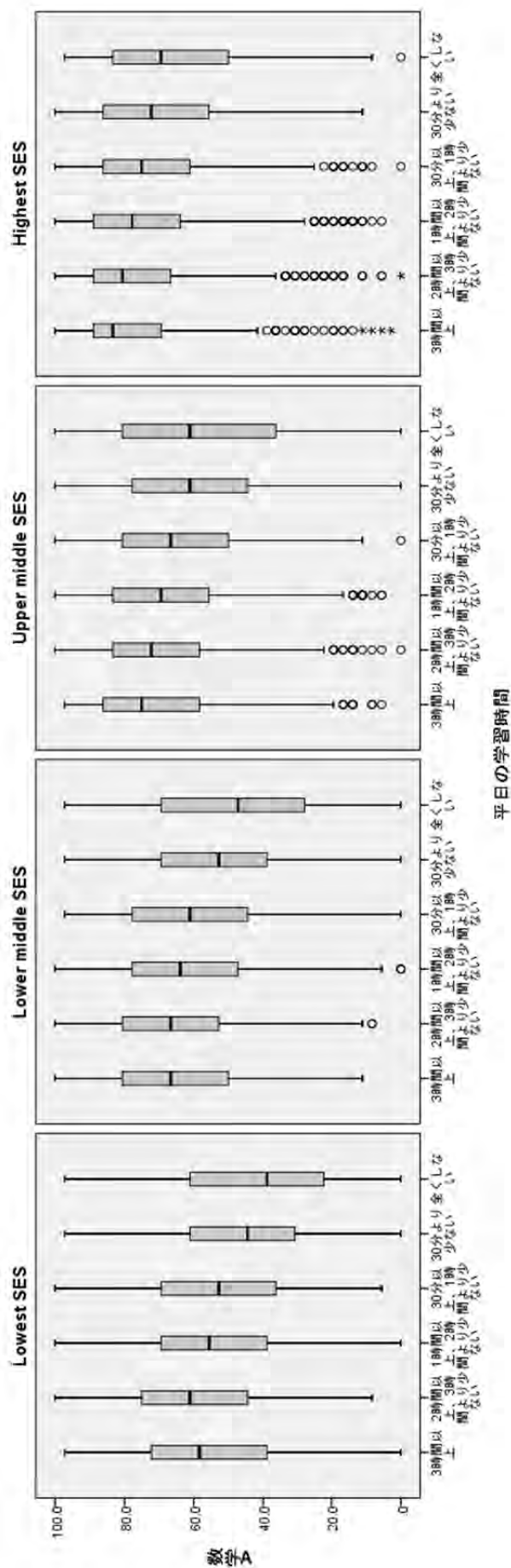
図表 4-1-17 社会経済的背景別、学習時間と国語 A 正答率の箱ひげ図 (中 3)



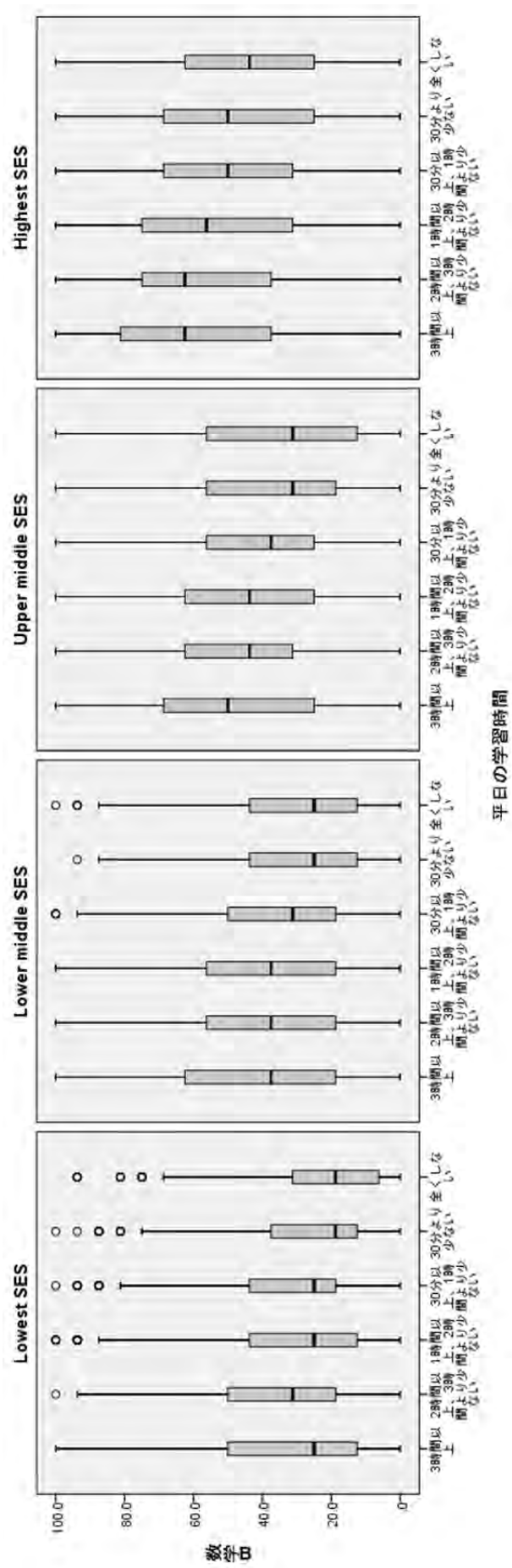
図表 4-1-18 社会経済的背景別、学習時間と国語B 正答率の箱ひげ図（中3）



図表 4-1-19 社会経済的背景別、学習時間と数学 A 正答率の箱ひげ図 (中 3)



図表 4-1-20 社会経済的背景別、学習時間と数学 B 正答率の箱ひげ図 (中 3)



3 社会経済的背景を統制した学習時間の効果

それでは、社会経済的背景を統制した学習時間の効果を重回帰分析によって確認していこう。この手法を用いることで、社会経済的背景を考慮した上での学習時間の独立した効果が把握できる。つまり、家庭背景とは別に、子どもがどれだけ勉強すれば、どれくらい学力（得点）が向上するのかを推測することができるのである。

まずは小6の結果を、国語Aについて見ていこう（図表4-1-21）。第一に、「男子ダミー」が負で有意である。係数が -3.512 ということは、女子に比べて男子の方が約 -3.5 ポイント低い（＝女子の方が約 3.5 ポイント高い）ことを意味している。第二に、社会経済的地位の3カテゴリーが全て有意である。これらが意味するのは、社会経済的背景がLowest SESの児童と比べると、Lower middle SESの児童は約 5.6 ポイント、Upper middle SESの児童は約 8.8 ポイント、Highest SESの児童は約 16.6 ポイント高い学力を獲得しているということである。第三に、平日の学習時間であるが、係数が意味するのは、平日学習を「全くしない」児童との対比において、「30分以上、1時間より少ない」児童は約 7.7 ポイント、「1時間以上、2時間より少ない」児童は約 10.4 ポイント、「2時間以上、3時間より少ない」児童は約 11.2 ポイント、「3時間以上」の児童は約 15.9 ポイント高い学力を獲得していることを指し示す。児童の性別や社会経済的地位といった要因を考慮しても、学習時間が多い児童ほど、高い学力を得るという学習時間の独立した効果を確認することができるのである。

次に中3の結果も国語Aから確認しよう（図表4-1-22）。第一に、「男子ダミー」が負で有意である。係数を見ると、女子に比べて男子の方が約 -5.3 ポイント低い（＝女子の方が約 5.3 ポイント高い）ことを意味している。第二に、社会経済的地位の3カテゴリーが全て有意である。係数が意味するのは、社会経済的背景がLowest SESの生徒との対比において、Lower middle SESの生徒は約 3.8 ポイント、Upper middle SESの生徒は約 7.2 ポイント、Highest SESの生徒は約 11.8 ポイント高い学力を獲得しているということである。第三に、平日の学習時間は、平日学習を「全くしない」生徒との対比において、「30分より少ない」生徒は約 2.9 ポイント、「30分以上、1時間より少ない」生徒は約 6.6 ポイント、「1時間以上、2時間より少ない」生徒は約 7.3 ポイント、「2時間以上、3時間より少ない」生徒は約 8.8 ポイント、「3時間以上」の生徒は約 8.2 ポイント高い学力を獲得していることを意味している。

小6と中3の結果を比較してみると、最も大きな違いは、平日の学習時間が「30分より少ない」と回答した児童生徒である（算数Bを除く）。小6では、少なくとも「30分以上」は勉強していないと学習時間が学力につながらない。一方で、中3では平日の学習時間が「30分より少ない」と回答していても学力に対してポジティブな効果がある。つまり、学力につながる学習時間のポイントは、小6時点では「30分以上」であり、中3では「全くしていないかどうか」だということがわかる。

図表 4-1-21 社会経済的背景を統制した学習時間の効果（重回帰分析）（小 6）

	国語A		国語B		算数A		算数B	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
性別（基準：女子）								
男子	- 3.512	0.437 ***	- 11.173	0.453 ***	- 0.237	0.369	- 3.800	0.543 ***
社会経済的背景（基準：Lowest SES）								
Lower middle SES	5.632	0.612 ***	5.725	0.777 ***	6.014	0.703 ***	6.806	0.778 ***
Upper middle SES	8.841	0.604 ***	10.375	0.826 ***	9.672	0.630 ***	11.504	0.749 ***
Highest SES	16.646	0.668 ***	18.434	0.823 ***	15.135	0.604 ***	20.686	0.733 ***
平日の学習時間（基準：全くしない）								
30分より少ない	1.573	1.491	0.841	2.101	2.407	1.549	3.661	1.659 *
30分以上、1時間より少ない	7.747	1.523 ***	8.222	2.043 ***	8.843	1.381 ***	10.192	1.661 ***
1時間以上、2時間より少ない	10.468	1.419 ***	10.375	2.048 ***	11.240	1.440 ***	12.593	1.543 ***
2時間以上、3時間より少ない	11.261	1.542 ***	10.076	2.146 ***	11.612	1.428 ***	12.278	1.721 ***
3時間以上	15.987	1.571 ***	13.920	1.938 ***	13.458	1.438 ***	17.114	1.526 ***
定数	47.184	1.439 ***	37.349	1.935 ***	59.626	1.419 ***	39.227	1.530 ***
R-squared	0.152	***	0.153	***	0.138	***	0.140	***

p. * < .05 ** < .01 *** < .001

図表 4-1-22 社会経済的背景を統制した学習時間の効果（重回帰分析）（中3）

	国語A		国語B		数学A		数学B	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
性別（基準：女子）								
男子	- 5.387	0.370 ***	- 9.585	0.475 ***	- 1.099	0.440 *	- 0.572	0.564
社会経済的背景（基準：Lowest SES）								
Lower middle SES	3.854	0.480 ***	5.667	0.638 ***	6.809	0.548 ***	6.434	0.535 ***
Upper middle SES	7.207	0.389 ***	9.931	0.599 ***	11.932	0.472 ***	11.997	0.501 ***
Highest SES	11.821	0.500 ***	15.850	0.608 ***	19.188	0.589 ***	21.877	0.688 ***
平日の学習時間（基準：全くしない）								
30分より少ない	2.953	0.940 **	2.792	1.262 *	4.230	0.896 ***	2.968	0.947 **
30分以上、1時間より少ない	6.625	0.957 ***	7.761	1.278 ***	9.310	1.024 ***	7.512	1.034 ***
1時間以上、2時間より少ない	7.304	0.823 ***	8.600	1.243 ***	11.850	0.897 ***	9.285	0.898 ***
2時間以上、3時間より少ない	8.843	0.916 ***	10.261	1.174 ***	14.790	0.939 ***	12.606	0.936 ***
3時間以上	8.225	0.857 ***	9.152	1.381 ***	14.494	1.011 ***	12.393	1.086 ***
定数	66.623	0.885 ***	56.641	1.196 ***	43.768	0.972 ***	22.822	0.932 ***
R-squared	0.120 ***		0.113 ***		0.164 ***		0.140 ***	

p. *<.05 **<.01 ***<.001

(7) 分析 4：学習方法が学力に与える効果

最後に、社会経済的背景と学習時間を統制した上で、児童生徒がどのような学習方法をとれば、それが独立して学力にポジティブな影響を与えているかについて分析を行う。分析には、「自分で計画を立てて勉強をしている」、「学校の宿題をしている」、「学校の授業の予習をしている」、「学校の授業の復習をしている」、「苦手な教科の勉強をしている」、「テストで間違えた問題について勉強している」の 6 つの変数のうち、全ての学年段階、教科に対してまんべんなく学力に対して効果的な変数を探索する。その結果、最も普遍的に学力に対してポジティブな効果のある学習方法は、「学校の宿題」であった。結果は、図表 4-1-23 (小 6) および図表 4-1-24 (中 3) に示した。

まずは小 6 の結果を、国語 A から見ていこう (図表 4-1-23)。第一に、「男子ダミー」が負で有意である。係数が -2.599 ということは、女子に比べて男子の方が約 -2.5 ポイント低い (=女子の方が約 2.6 ポイント高い) ことを意味している。第二に、社会経済的地位の 3 カテゴリーが全て有意である。これらが意味するのは、社会経済的背景が **Lowest SES** の児童との対比において、**Lower middle SES** の児童は約 5.2 ポイント、**Upper middle SES** の児童は約 8.3 ポイント、**Highest SES** の児童は約 15.9 ポイント高い学力を獲得しているということである。第三に、平日の学習時間であるが、係数が意味するのは、平日学習を「全くしない」児童との対比において、「30 分以上、1 時間より少ない」児童は約 6.0 ポイント、「1 時間以上、2 時間より少ない」児童は約 8.4 ポイント、「2 時間以上、3 時間より少ない」児童は約 9.2 ポイント、「3 時間以上」の児童は約 14.1 ポイント高い学力を獲得していることを指し示す。児童の性別や社会経済的地位といった要因を考慮しても、学習時間が多い児童ほど、高い学力を得るという学習時間の独立した効果を確認することができるのである。そして第四に、学校の宿題についての係数を見ると、学校の宿題を「していない」と答えた児童との対比において、「している」と答えた児童は約 13.8 ポイント高い学力をマークしている。この宿題の効果は、性別、社会経済的背景、学習時間といった要因を統制した、学習方法の独立した効果なのである。

続いて、中 3 の結果も国語 A から確認しよう (図表 4-1-24)。変数の効果に関する結果はほとんど小 6 と同じであるが、第一に、「男子ダミー」が負で有意である。係数を見ると、女子に比べて男子の方が約 -4.8 ポイント低い (=女子の方が約 4.8 ポイント高い) ことを意味している。第二に、社会経済的地位の 3 カテゴリーが全て有意である。係数が意味するのは、社会経済的背景が **Lowest SES** の生徒との対比において、**Lower middle SES** の生徒は約 3.6 ポイント、**Upper middle SES** の生徒は約 6.9 ポイント、**Highest SES** の生徒は約 11.5 ポイント高い学力を獲得しているということである。第三に、平日の学習時間は、平日学習を「全くしない」生徒との対比において、「30 分以上、1 時間より少ない」生徒は約 3.3 ポイント、「1 時間以上、2 時間より少ない」生徒は約 3.6 ポイント、「2 時間以上、3 時間より少ない」生徒は約 5.1 ポイント、「3 時間以上」の生徒は約 4.4 ポイント高い学力を獲得していることを意味している。第四に、学校の宿題は、学校の宿題を「していない」と答えた生徒との対比において、「あまりしていない」生徒は約 4.1 ポイント、「どちらかといえばしている」生徒は約 6.1 ポイント、「している」と答えた生徒は約 9.7 ポイント正答率が高い。宿題をすることが独立して学力にポジティブな効果を与えているのである。

図表 4-1-23 社会経済的背景を統制した学習時間と宿題の効果（重回帰分析）（小6）

	国語A		国語B		算数A		算数B	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
性別（基準：女子）								
男子	- 2.599	0.427 ***	- 9.975	0.443 ***	0.701	0.364	- 2.596	0.541 ***
社会経済的背景（基準：Lowest SES）								
Lower middle SES	5.282	0.589 ***	5.275	0.744 ***	5.654	0.671 ***	6.400	0.749 ***
Upper middle SES	8.301	0.593 ***	9.661	0.806 ***	9.118	0.601 ***	10.836	0.732 ***
Highest SES	15.977	0.645 ***	17.565	0.805 ***	14.457	0.568 ***	19.833	0.695 ***
平日の学習時間（基準：全くしない）								
30分より少ない	0.751	1.547	- 0.294	2.153	1.549	1.577	3.023	1.735
30分以上、1時間より少ない	6.093	1.510 ***	5.988	2.055 **	7.084	1.342 ***	8.436	1.647 ***
1時間以上、2時間より少ない	8.478	1.385 ***	7.690	2.048 ***	9.138	1.407 ***	10.371	1.542 ***
2時間以上、3時間より少ない	9.244	1.522 ***	7.337	2.157 **	9.482	1.382 ***	10.016	1.712 ***
3時間以上	14.118	1.561 ***	11.379	1.962 ***	11.476	1.387 ***	15.044	1.536 ***
宿題（基準：していない）								
あまりしていない	4.944	3.748	6.822	3.488	5.371	4.011	2.692	4.595
どちらかといえば、している	5.572	3.188	8.596	2.991 **	6.823	3.861	4.057	4.499
している	13.802	3.165 ***	19.111	2.938 ***	14.922	3.687 ***	15.010	4.307 **
定数	36.204	3.010 ***	22.002	2.858 ***	47.633	3.952 ***	27.509	4.322 ***
R-squared	0.171	***	0.174	***	0.163	***	0.164	***

p. *<.05 **<.01 ***<.001

図表 4-1-24 社会経済的背景を統制した学習時間と宿題の効果（重回帰分析）（中3）

	国語A		国語B		数学A		数学B	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
性別（基準：女子）								
男子	- 4.865	0.358 ***	- 8.842	0.479 ***	- 0.316	0.441	0.231	0.569
社会経済的背景（基準：Lowest SES）								
Lower middle SES	3.628	0.458 ***	5.361	0.623 ***	6.512	0.546 ***	6.159	0.522 ***
Upper middle SES	6.947	0.373 ***	9.555	0.583 ***	11.575	0.473 ***	11.649	0.483 ***
Highest SES	11.567	0.483 ***	15.494	0.578 ***	18.824	0.597 ***	21.519	0.678 ***
平日の学習時間（基準：全くしない）								
30分より少ない	0.791	0.946	- 0.103	1.326	1.508	0.899	0.235	1.008
30分以上、1時間より少ない	3.326	0.934 ***	3.200	1.360 *	4.904	1.039 ***	3.094	1.075 **
1時間以上、2時間より少ない	3.692	0.826 ***	3.536	1.321 **	6.893	0.908 ***	4.272	0.910 ***
2時間以上、3時間より少ない	5.118	0.917 ***	5.053	1.215 ***	9.674	0.957 ***	7.442	0.958 ***
3時間以上	4.470	0.869 ***	3.874	1.435 **	9.309	1.087 ***	7.150	1.147 ***
宿題（基準：していない）								
あまりしていない	4.149	1.105 ***	3.803	1.516 *	3.621	1.193 **	3.516	1.322 **
どちらかといえば、している	6.171	1.057 ***	7.777	1.449 ***	6.636	1.352 ***	6.142	1.185 ***
している	9.790	1.095 ***	12.917	1.515 ***	12.514	1.388 ***	12.534	1.216 ***
定数	61.897	1.264 ***	50.894	1.530 ***	38.439	1.342 ***	17.633	1.190 ***
R-squared	0.139 ***		0.133 ***		0.190 ***		0.161 ***	

p. * < .05 ** < .01 *** < .001

(8) まとめ

以上の分析より、本章の知見は以下の4点にまとめられる。

第一に、学力は児童生徒の社会経済的背景および学習時間の量によって規定される。すなわち、社会経済的背景が有利なほど、また学習時間が多いほど学力が高いのである。

第二に、その一方で、社会経済的背景が **Lowest SES** グループの児童生徒が「3 時間以上」勉強して獲得する正答率の平均値は、**Highest SES** グループで「全く勉強しない」児童生徒が獲得する正答率の平均値よりも低い。ただし、箱ひげ図で社会経済的背景ごとに学習時間が学力に与える効果の分布を確認した結果、両グループの学力の分布には重なりが見られたことに注意が必要である。

第三に、とはいえ、学力は社会経済的背景に規定されつつも、学習時間の多さが高い学力の獲得に対して独立した効果を持っている。確かに学習時間のみで、家庭背景の不利を克服（逆転）することは難しいかもしれないが、学習（＝努力）することが高い学力の獲得につながるのである。とりわけ、学力につながる学習時間のポイントが、小6 時点では「30 分以上」であり、中3 時点では「全くしていないかどうか」という具合に異なるということとは新たな知見だといえよう。

第四に、宿題をする児童生徒ほど高い学力を得ることができることが把握できた。これは、社会経済的背景や学習時間とは別に、学習方法が独立して学力に与えるポジティブな効果である。この第四の知見は重要である。それというのも、本章では児童生徒がとっている学習方法に焦点を合わせたが、次章ではどのような学校の取り組みが学力格差を縮小するかを分析している。その結果が示すのは、教員間で「家庭学習の共通理解」をしている学校ほど児童生徒の学力格差が小さいということである（詳細は、第4 章（2））。また、事例研究のインタビュー調査においても、家庭学習や宿題を教員がきちんと確認し、児童生徒にフィードバックすることの重要性が指摘されている（詳細は、第7 章）。これらの結果と本章の分析を合わせれば、学力格差縮小には、宿題ないし家庭学習の取り組みの重要性が示唆されるということである。むろん、単に宿題を多く出したりすれば良いということではない。宿題や家庭学習の重要性を教員団が共通に理解し、また適切なフィードバックを児童生徒に返すという一連の実践により、効果を発揮する学習方法なのであろう。

本章では、「レジリエンス」という概念を手がかりとして、不利な家庭環境にあるにもかかわらず、努力（＝学習時間）によってそれを克服して高い学力を獲得することが可能かどうかを分析してきた。その意味において、強調しておくべき知見は次の2 点である。

- ① 努力の成果は、限界があるものの、努力が社会経済的背景から受ける制約を補償することができる。
- ② 一方で、学力の社会経済的格差は、児童生徒個人の学習時間だけで縮小させることには限界がある。

不利な家庭環境に置かれた児童生徒のレジリエンスが発揮されるためには、彼ら・彼女ら自身の努力（学習）に加え、本章や他の章でも指摘しているように、家庭学習など学校教育によるサポートが必要となるのかもしれない。

<注>

- 1) 児童生徒の社会経済的背景と学習時間の関連については図表 4-1-25 および図表 4-1-26 に示した。必要に応じて参照されたい。

図表 4-1-25 社会経済的背景と学習時間の関連（小 6）

	SES				Total
	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
3時間以上	5.8%	7.0%	11.5%	23.2%	11.9%
2時間以上、3時間より少ない	10.6%	14.8%	17.0%	18.9%	15.3%
1時間以上、2時間より少ない	39.1%	39.7%	39.4%	32.3%	37.6%
30分以上、1時間より少ない	27.3%	26.4%	22.2%	18.6%	23.6%
30分より少ない	12.1%	8.8%	7.9%	5.2%	8.5%
全くしない	5.2%	3.3%	2.1%	1.8%	3.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

図表 4-1-26 社会経済的背景と学習時間の関連（中 3）

	SES				Total
	Lowest	Lower middle	Upper middle	Highest	
3時間以上	6.5%	8.3%	10.7%	15.6%	10.2%
2時間以上、3時間より少ない	20.3%	25.7%	28.0%	33.2%	26.8%
1時間以上、2時間より少ない	30.7%	34.1%	33.8%	31.5%	32.5%
30分以上、1時間より少ない	20.0%	16.7%	15.4%	13.2%	16.3%
30分より少ない	12.7%	9.1%	8.4%	4.2%	8.6%
全くしない	9.8%	6.1%	3.7%	2.4%	5.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

第4章 家庭の社会経済的背景による不利の克服

(2) 学校内学力格差が小さい学校の取組

垂見裕子

1 背景

本章では、学校の中において、家庭の社会経済的背景が恵まれた子どもと、家庭の社会経済的背景が不利な子どもの学力の差異が小さい学校に注目し、それらの学校ではどのような取組が行われているのかを明らかにする。学力格差、またその是正策を考えるにあたっては、学校内格差と学校間格差を分けて考えることが必要である。学校内格差とは、生徒が通う学校の中において、家庭の社会経済的背景の恵まれた子どもと不利な子どもの学力に、どれほど差異があるかということである。つまり、生徒自身の家庭の社会経済的背景（SES）による格差である。学校間格差とは、家庭の社会経済背景が同一の二人の内、一人が家庭の社会経済背景の恵まれた子どもが多く通う学校に、もう一人が家庭の社会経済背景が不利な子どもが多く通う学校に通った場合に、二人の学力にどれほど差異があるかということである。つまり、生徒がどの学校に通うかによる格差である。本章では、前者の学校内学力格差に注目し、第6章、第7章では、後者の学校間学力格差に注目する。

2 分析手法

上述のように、家庭の社会経済的背景（SES）による学力格差を生徒レベルと学校レベルに分けるために、マルチレベル分析（Hierarchical Linear Modeling（階層線形モデル））を用いる。分析は以下の手順を踏んでいく。

（1）学力の学校内・学校間分散の確認

（2）家庭の社会経済的背景（SES）による学校内・学校間学力格差の程度の確認

（3）家庭の社会経済的背景（SES）による学校内学力格差を縮小する学校の取組の探求

分析にあたっては、以下の変数を用いた。学力スコアは、算数／数学A問題、算数／数学B問題、国語A問題、国語B問題の正答率を用いた。生徒の家庭の社会経済的背景には、第1章で紹介したSES得点を用いた。学校の社会経済的背景には、その学校に通う生徒のSES得点の平均値を用いた。

3. 分析結果

（1）学力の学校内・学校間分散

まず、学力の分散の内、どの程度が学校間にあるのかを確認する。

図表 4-2-1 学力の学校内・学校間分散（小6）

	算数A	算数B	国語A	国語B
全分散	343.63	613.91	428.92	657.46
学校間分散	20.70	31.98	35.08	33.43
学校内分散	322.93	581.93	393.83	624.03
学校間の分散の割合（ICC）	6%	5%	8%	5%

図表 4-2-2 学力の学校内・学校間分散（中 3）

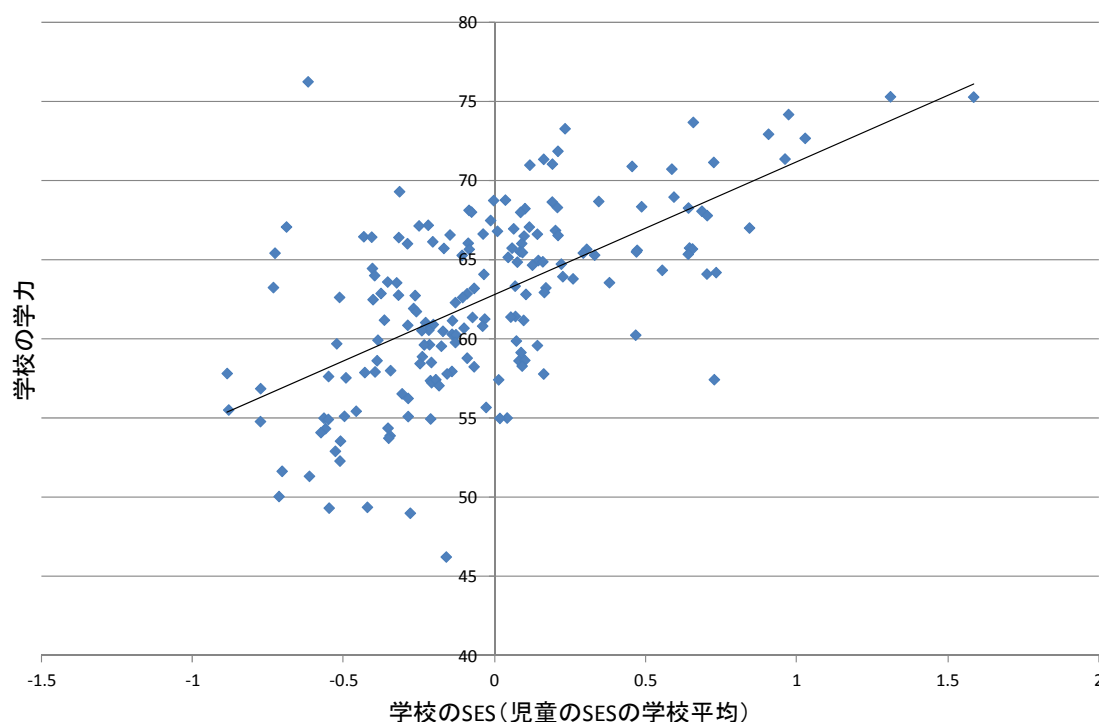
	数学A	数学B	国語A	国語B
全分散	482.52	640.23	303.32	634.37
学校間分散	38.32	49.77	15.12	27.30
学校内分散	444.20	590.46	288.20	607.07
学校間の分散の割合 (ICC)	8%	8%	5%	4%

図表 4-2-1、図表 4-2-2 から、小 6、中 3 とともに、ICC（学校間の分散を全分散で割った値）が、5～8%程度であることが確認できる。この値が大きければ大きいほど、学校により、学力に大きな違いがあるということになる。この値は、外国では約 10～40%（Mortimore, P., 1997, “Can Effective Schools Compensate for Society?”, in Hasley, A. H ed., *Education: Culture, Economy, and Society*, Oxford University Press）、日本の高校では 50%を超えること（OECD, 2013, *PISA 2012 Results: Excellence through Equity: Giving Every Student the Chance to Succeed (Volume II)*, OECD Publishing）と比較すると、日本の小学校・中学校は学力の面において学校間の差が小さいことを示唆している。算数・数学においては、中 3 の方が学校間の学力分散が大きい。また全分散はどの学年、どの教科においても、A 問題より B 問題で大きいことが認められる。

（2）家庭の社会経済的背景（SES）による学校内・学校間学力格差

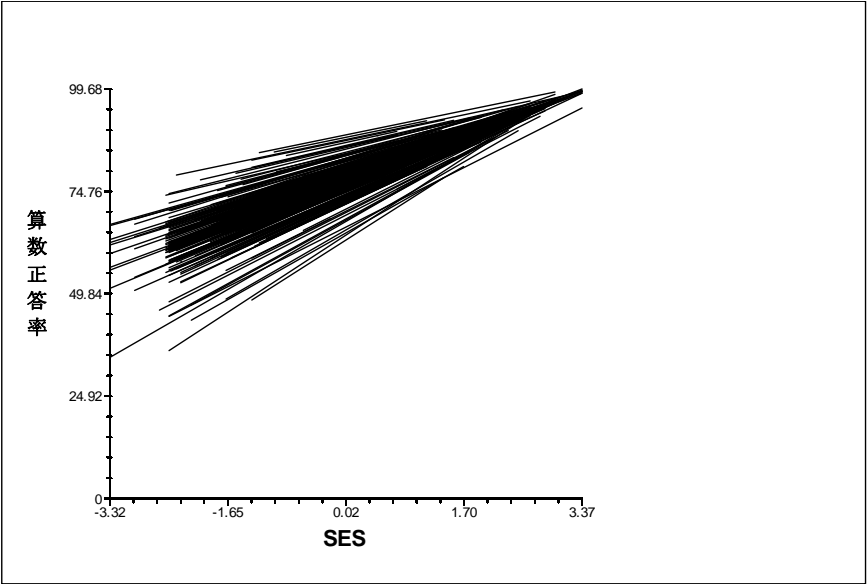
次に、家庭の社会経済的背景（SES）による学校内学力格差と学校間学力格差の違いをビジュアルに示そう。学校間格差は、図表 4-2-3 によって現わされる。各点が学校を現わし、線は学校の SES（家庭の社会経済的背景の学校平均）と学校の学力（正答率の学校平均）の関連を示す。傾きが高い程、SES による学校間学力格差が高いということになる。

図表 4-2-3 家庭の社会経済的背景（SES）による学校間学力格差



それに対して、学校内格差は、図表 4-2-4 で現わされる。ここでは各線が学校を現わし、それぞれの学校の中で、児童生徒の SES と児童生徒の学力の関連を示している。SES による学校内学力格差は、各学校の標本サイズによる重みづけを行いながら、すべての線（学校）の傾きの平均をとった値である。

図表 4-2-4 家庭の社会経済的背景（SES）による学校内学力格差



では、実際に小 6、中 3 における、SES による学校内・学校間学力格差の程度をみてみよう。

図表 4-2-5 家庭の社会経済的背景（SES）による学校内学力格差・学校間学力格差（小 6）

	算数A		算数B		国語A		国語B	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
Level 1								
児童のSES	6.44	(0.22)	8.30	(0.26)	7.02	(0.23)	7.35	(0.28)
Level 2								
切片	77.33	(0.36)	58.48	(0.38)	62.80	(0.45)	49.26	(0.42)
学校のSES	5.01	(1.01)	9.30	(1.03)	6.75	(1.32)	8.88	(1.11)
Level 1の説明された分散	11%		10%		11%		7%	
Level 2の説明された分散	18%		47%		18%		40%	

図表 4-2-6 家庭の社会経済的背景 (SES) による学校内学力格差・学校間学力格差 (中 3)

	数学A		数学B		国語A		国語B	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
Level 1								
生徒のSES	7.89	(0.20)	8.74	(0.22)	4.86	(0.17)	6.25	(0.23)
Level 2								
切片	63.84	(0.33)	41.82	(0.39)	76.58	(0.23)	67.59	(0.33)
学校のSES	10.53	(0.70)	12.22	(0.87)	6.02	(0.55)	8.56	(0.80)
Level 1の説明された分散	13%		11%		6%		6%	
Level 2の説明された分散	50%		51%		48%		48%	

図表 4-2-5、4-2-6 から、家庭の社会経済的背景 (SES) による学校内学力格差も、学校間学力格差も、A 問題より B 問題で大きいことが分かる。また、算数・数学は、特に学校間学力格差が、小 6 より中 3 で大きくなる。一方、国語は、特に学校内学力格差が、小 6 より中 3 で小さくなる。また、全問題において、学校の SES により説明された学校間の学力分散は小 6 より中 3 で大きくなることが認められる。

(3) 家庭の社会経済的背景 (SES) による学校内学力格差を縮小する学校の取組

では何故、学校により家庭の社会経済的背景 (SES) が学力に及ぼす影響度が違うのか。図表 4-4 の回帰線の傾きがフラットな学校はどのような取組を実施しているのかに注目する。

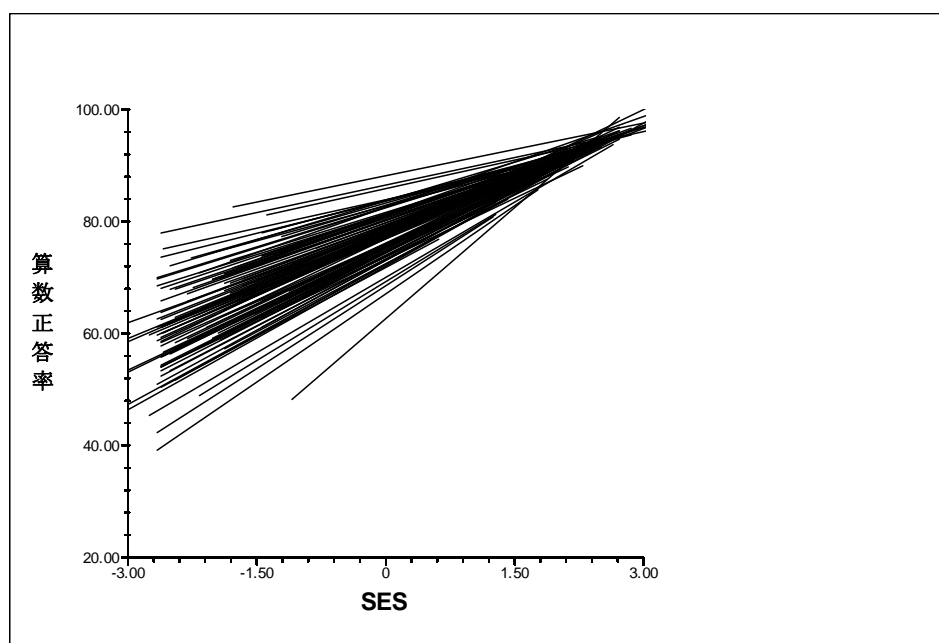
このセクションの分析では、小 6 データに限定し、学力には算数 A 問題の正答率を用いた。4 つの問題の中で、学校内の SES の傾き（各学校内で生徒の家庭の社会経済的背景が学力に及ぼす影響度）に最もばらつきがあったからである。また、分析にあたっては、都市規模を考慮し、大都市・中核市と、その他の市・町村を分けて分析した。なぜなら、大都市・中核市と小規模な市町村では、学校外の環境（特に親の学校外教育投資の対象の有無）が異なる、ゆえに家庭の社会経済的背景による格差のあり方や、その格差を縮小する取組も異なってくることが想定されるからである。都市規模別に、家庭の社会経済的背景による学校内学力格差、学校間学力格差を示したのが図表 4-7 である。

図表 4-2-7 家庭の社会経済的背景による学校内・学校間学力格差（地域規模別）

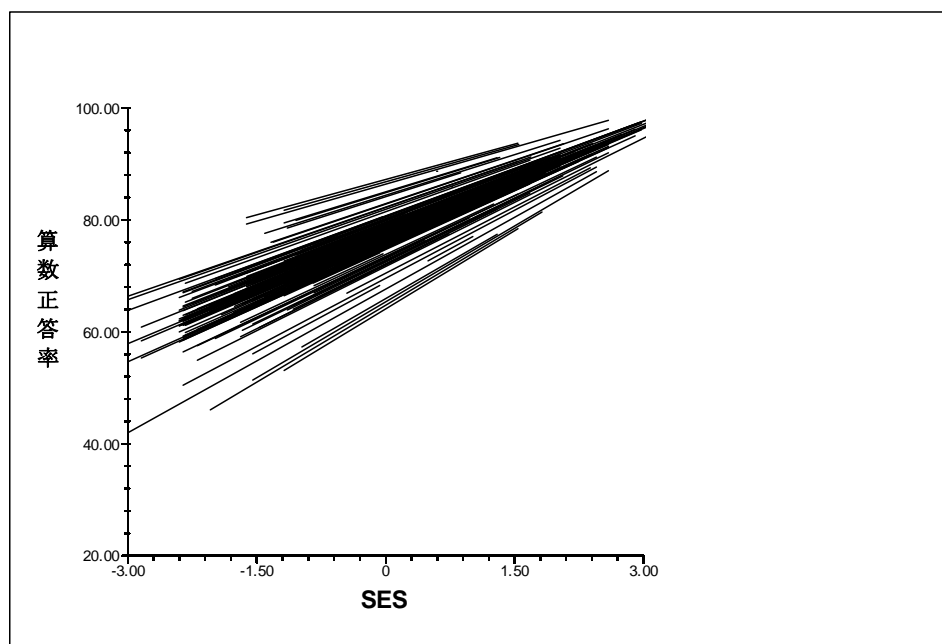
	大都市・中核市			その他の市・町村		
	B	SE		B	SE	
Fixed Effect						
Level 1						
児童のSES	6.44	(0.433)	***	6.35	(0.300)	***
Level 2						
切片	76.62	(0.517)	***	77.52	(0.470)	***
学校のSES	6.66	(0.717)	***	4.18	(1.228)	***
	分散		Reliability	分散		Reliability
Random Effect						
学校内分散	278.21	***		288.99	***	
学校間 SES傾きの分散	5.64	***	0.46	1.03		0.04
学校間 切片の分散	13.35	***	0.66	20.21	***	0.41

図表 4-2-7 から、SES による学校内学力格差の傾きの大きさは二つのグループで同じだが（児童の SES の非標準化係数が 6.44 と 6.35）、大都市・中核市ではその傾きが学校によりばらつきがある（分散が 5.64）のに対して、その他の市・町村ではばらつきがない（分散が 1.03）ことが分かる。この違いをビジュアルに示したのが図表 4-2-8、4-2-9 であり、大都市・中核市（図表 4-2-8）の方が、フラットな線と急な線が混ざっているのが分かる。その他の市・町村（図表 4-2-9）では、SES 傾きのばらつきが少ないため、この後の分析は大都市・中核市のみで行った²⁾。また、図表 4-2-7 からもう一つ明らかな点は、SES による学校間格差は、大都市・中核市の方が、その他の市・町村より大きいことである（それぞれ学校の SES の非標準化係数が 6.66 と 4.18）。つまり大都市・中核市の方が学校の SES と学校の学力の関連が強いということを示唆している。

図表 4-2-8 大都市・中核市における家庭の社会経済的背景(SES)による学校内学力格差



図表 4-2-9 その他の市・町村における家庭の社会経済的背景(SES)による学校内学力格差



大都市・中核市の学校のどのような取り組みが、家庭の社会経済的背景（SES）が不利な生徒の底上げに成功しているのかを探るために、学校の学力（水準）の規定要因としてのみならず、学校の学力格差（SES の傾き）の規定要因として、様々な学校の取組を、一つ一つモデルに追加した。学校の取組で、統計的に有意であったもののみ、図表 4-2-10 に示した。

図表 4-2-10 家庭の社会経済的背景 (SES) による学校内学力格差を縮小する学校の取組 (小6・大都市／中核市)

	Model 1		Model 2		Model 3		Model 4		Model 5						
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE					
Fixed Effect															
Level 1															
児童のSES	6.44	(0.433)	***	7.32	(0.650)	***	7.80	(0.907)	***	10.06	(1.762)	***	8.41	(1.249)	***
Level 2															
切片	76.62	(0.517)	***	76.29	(0.791)	***	74.84	(1.108)	***	73.83	(2.265)	***	72.07	(1.548)	***
学校のSES	6.66	(0.717)	***	6.55	(0.695)	***	6.71	(0.696)	***	6.81	(0.735)	***	6.66	(0.712)	***
放課後の補充学習				0.14	(0.244)										
SES*放課後の補充学習				-0.40	(0.182)	*									
習熟の遅いグループに対する少人数指導							0.68	(0.308)	*						
SES*習熟の遅いグループに対する少人数指導							-0.52	(0.249)	*						
教科の指導に関する小中連携										0.95	(0.697)				
SES*教科の指導に関する小中連携										-1.24	(0.518)	*			
家庭学習の教員共通理解													1.45	(0.443)	***
SES*家庭学習の教員共通理解													-0.63	(0.362)	p=0.085
Random Effect															
学校内分散	278.21			278.11			278.17			278.02			278.21		
学校間 SES傾きの分散	5.64			5.40	4%		4.98	12%		5.11	9%		5.42	4%	
学校間 切片の分散	13.35			13.29			12.19			12.68			12.11		
*p<.05, **p<.01, ***p<.001															

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

【学校の取組に関する質問項目】

放課後の補充学習：放課後を利用した補充的な学習サポートを実施しましたか

(行っていない、年に数回行った、週に1回行った、週に2~3回行った、週に4回以上行った)

習熟の遅いグループに対する少人数指導：算数の授業において、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにした

(行っていない、年間の授業の内1/4未満、1/4~1/2、1/2~3/4、3/4以上行った)

教科の指導に関する小中連携：教科の指導内容や指導方法について近隣の中学校と連携を行っていますか

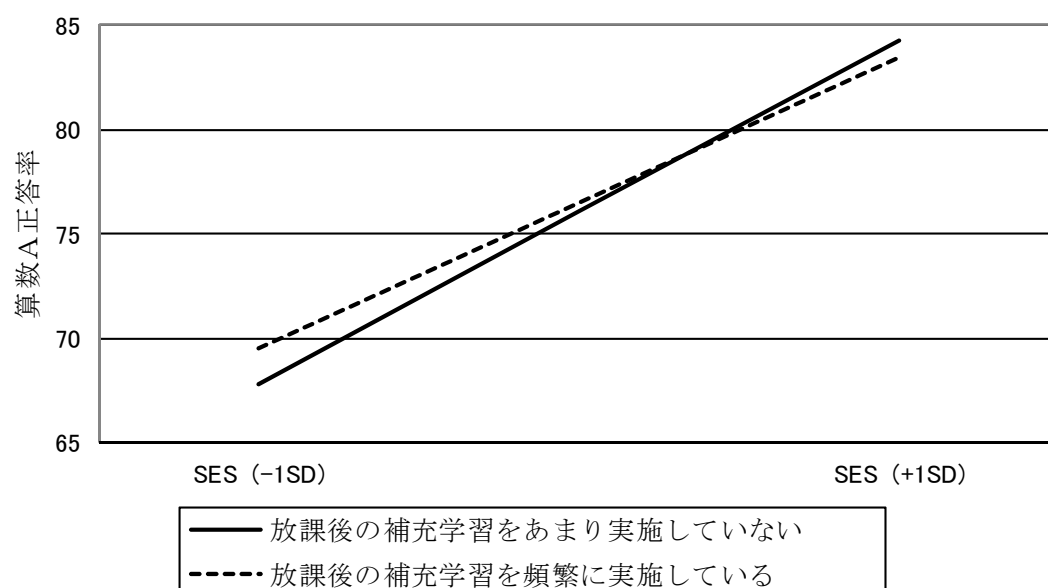
(全く行っていない、あまり行っていない、どちらかといえば行っていない、よく行った)

家庭学習の教員共通理解：家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図っていますか

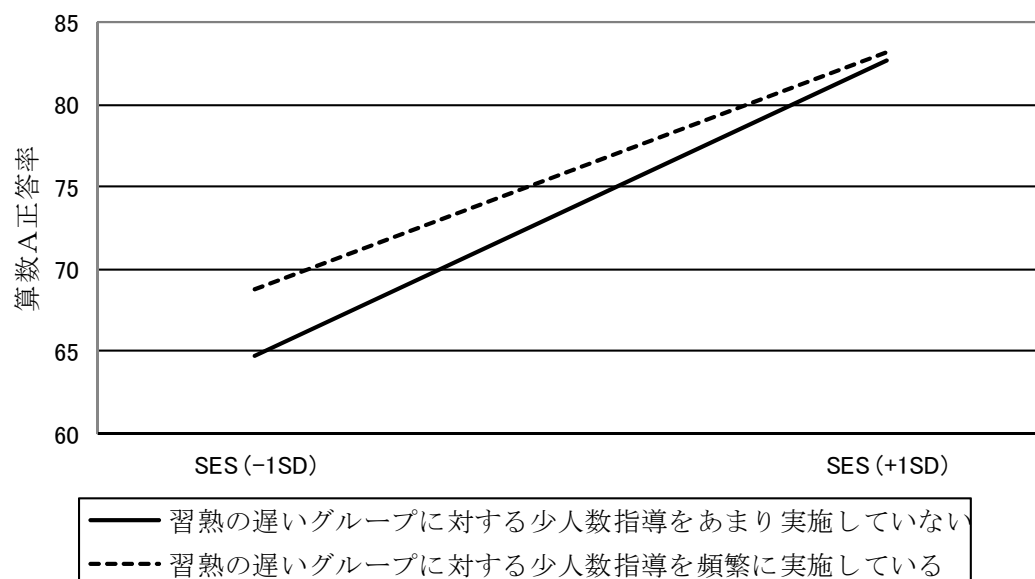
(全く行っていない、あまり行っていない、どちらかといえば行っていない、よく行った)

図表 4-2-10 から、「放課後の補充学習」「習熟の遅いグループに対する少人数指導」「教科の指導に関する小中連携」「家庭学習の教員共通理解」の4つの要因は、児童のSESとの交互作用の値がマイナスで統計的に有意であることが確認できる。放課後の補充学習を頻繁に実施している学校は、放課後の補充学習をあまり実施していない学校に比べて、学校内の学力格差が小さいことを意味する。それぞれの交互作用の効果を、図表 4-2-11 から 4-2-14 で、ビジュアルに示す。

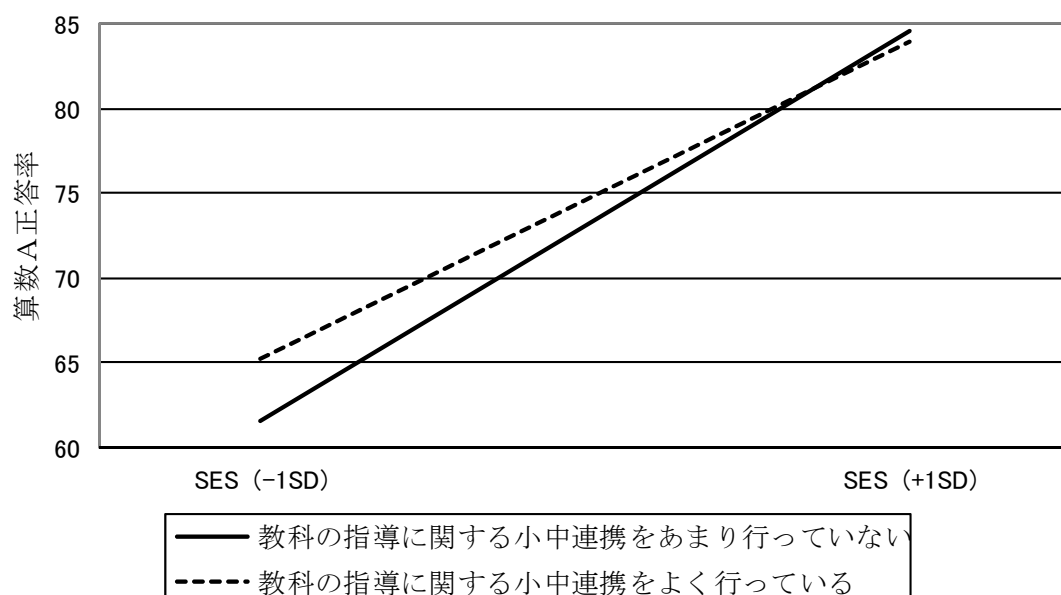
図表 4-2-11 家庭の社会経済的背景による学校内学力格差：
放課後の補充学習の実施度合い別（大都市・中核市）



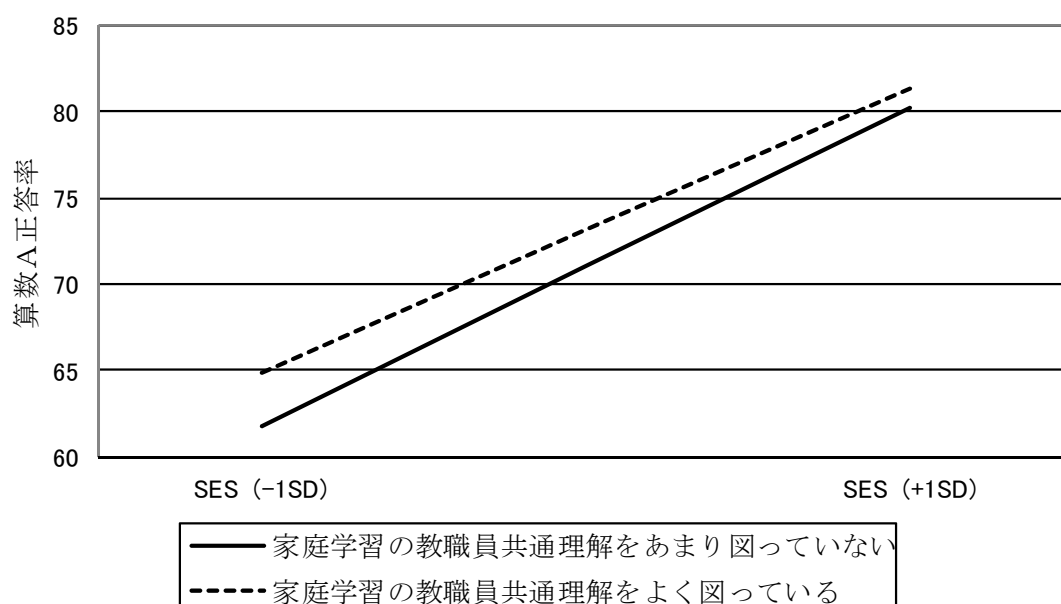
図表 4-2-12 家庭の社会経済的背景による学校内学力格差：
習熟の遅いグループに対する少人数指導の実施度合い別（大都市・中核市）



図表 4-2-13 家庭の社会経済的背景による学校内学力格差：
教科の指導に関する小中連携の実施度合い別（大都市・中核市）



図表 4-2-14 家庭の社会経済的背景による学校内学力格差：
家庭学習の教職員共通理解の実施度合い別（大都市・中核市）



図表 4-2-11 から 4-2-14 では、点線はそれぞれの取組を頻繁に実施している（+1 標準偏差）学校、実線はそれぞれの取組をあまり実施していない（-1 標準偏差）学校の場合を現わしている。例えば、図表 4-2-12 から、習熟の遅いグループに対して少人数指導を頻繁に行っている学校ほど、学校内の児童の家庭の社会経済的背景と学力の関連が低い（SES の傾きがフラットである）ことを意味する。また、家庭の社会経済的な背景が厳しい児童が算数の習熟別指導を頻繁に実施している学校に通った場合と、あまり実施していない学校に通った場合では、算数の正答率に 4%差があると解釈できる。つまり、これらの取組は

軽微ではあるが、家庭の社会経済的背景が不利な子どもの底上げに無視できない影響力があることを示唆している。

4. 考察

本章では、家庭の社会経済的背景が恵まれた子どもと不利な子どもの学力の差異が比較的小さい学校に注目し、どのような取組が学校内の格差縮小に寄与しているのかを探った。まず大きな傾向として、大都市・中核市では学校内における子どもの SES の影響度が学校によりばらつきがあるのに対して、小規模な市町村では学校ごとのばらつきが小さい点が明らかになった。留意しなければならないのは、小規模な市町村の学校では、子どもの SES による格差がないというわけではなく、あくまでも SES による格差の程度が学校間で異なるということである。子どもの SES のばらつきも、学校の SES のばらつきも、大都市・中核市の方が小規模な市町村より大きいことが起因していると考えられる。また学校における取組も、大都市・中核市の方が概してばらつきが大きい傾向が認められた。

大都市・中核市の学校では、放課後の補充学習や習熟の遅いグループに対する少人数指導などを取り入れて、指導面で低学力層の底上げに力を入れている学校が、家庭背景による学校内学力格差を縮小させていることが明らかになった。また小中連携においても生活面での移行のみならず、教科の指導内容や指導方法において中学校と積極的に連携を行っている学校や、家庭学習においても与えるだけでなく、課題の与え方について校内の教職員で共通理解を図るなど、システムとして小中連携や家庭学習に取り組んでいる学校が、家庭背景の不利な子どもの学力を向上させていることが認められた。ただし、説明された分散が小さいことから、本章でとりあげた学校の取組以外に、学校のどのような要因が学校内の学力格差の縮小に寄与するのか、さらなる分析が必要である。

<注>

- 1) 本章の分析では、反復ウエイト（ジャックナイフ法）は使用せず、全サンプルウエイトのみ使用した。
- 2) その他の市・町村では SES 傾きの分散が有意でなく、且つ Reliability 係数も低いことは、SES 傾きを従属変数としてモデルすることが不適切であることを意味する。

第5章 児童生徒の意識・行動及び学校での学習指導と学力

ー不利を克服している児童生徒に着目してー

浜野 隆

これまでの章で明らかにされているように、家庭の社会経済的背景と子どもの学力との間には極めて強い相関がある。しかしながら、社会経済的背景が低いからといって、必ずしもすべての子どもの学力が低いわけではない。社会経済的背景が低くても高い学力をとっている子どもは一定数おり、それらの子どもがどのような特徴を持っているのかを明らかにすることに、学力格差緩和の鍵があると思われる。小学校では、Lowest SESの17.3%が算数Bの高学力層（A層）、中学校ではLowest SESの12.1%が数学Bの高学力層（A層）に含まれる。本章では、このような、Lowest SESでかつ高学力を達成している子ども（および保護者）の意識・行動、学校での学習指導の特徴を明らかにすることを目的としたい。本章では、Lowest SESの児童・生徒のみを対象に、学力差の大きい算数・数学B問題の学力層別に集計した。Lowest SESかつA層の児童・生徒はそれ以外の学力層の子どもたちと何が違うのか、に注目していきたい。

（1）生活習慣

図表5-1 は、Lowest SESの児童生徒について、学力層別に保護者が「毎日子どもに朝食を食べさせている」かどうかを見たものである。これを見ると、Lowest SESかつ学力A層では、「毎日子どもに朝食を食べさせている」家庭が多いことがわかる。

図表5-1 「毎日子どもに朝食を食べさせている」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
あてはまる	91.2	85.2	82.5	76.0	87.6	82.4	76.3	70.1
どちらかといえば、あてはまる	7.1	10.6	12.4	16.3	8.5	13.4	15.6	16.3
どちらかといえば、あてはまらない	1.3	3.3	4.5	5.6	3.6	3.3	6.6	10.8
あてはまらない	0.4	0.9	0.5	2.1	0.3	0.9	1.5	2.8
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

児童・生徒質問紙の回答でも、Lowest SESかつ高学力層は朝食をとっていることが確認できる。この傾向は特に中学校において顕著であり、Lowest SESの学力A層とD層を比べると、朝食をとっている割合が20ポイント以上の差がある（図表5-2）。

図表5-2 「朝食を毎日食べているか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
している	90.0	87.9	80.8	77.6	89.4	85.7	78.6	68.1
どちらかといえばしている	7.0	9.5	13.1	12.6	8.7	8.8	13.3	17.0
あまりしていない	2.3	2.5	5.4	7.1	1.7	3.9	5.9	9.5
全くしていない	0.6	0.2	0.7	2.6	0.3	1.5	2.2	5.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

ただ、ここで強調したいのは、朝食というひとつの習慣だけではない。朝食も含め、生活全般の規則正しさ、生活規律がどの程度確立されているかである。Lowest SESかつ高学力層は、朝食のみならず、同じくらいの時刻に寝ている、同じくらいの時刻に起きている、テレビを見過ぎない、テレビゲームをやり過ぎない等、基本的な生活習慣・生活規律が確立している（図表5-3～図表5-6）。例えば、中学校においてLowest SES のA層においてはテレビ視聴時間（平日）が3時間以上という生徒は29.3%であるが、D層は45.1%である。また、テレビゲームをする時間（平日、中学生）に関しても、A層においては3時間以上という生徒は11.5%なのに対し、D層ではそれが28.9%にもなる。このように、Lowest SESにおいて、朝食や起床・就寝、テレビやテレビゲームの時間を含めた家庭での生活習慣と学力が強く関係していることが示唆される

図表5-3 「毎日、同じくらいの時刻に寝ているか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
している	41.4	34.8	32.9	29.1	31.4	30.0	28.6	22.4
どちらかといえばしている	40.3	43.0	40.6	34.2	50.0	45.6	41.9	42.6
あまりしていない	16.6	19.8	20.4	27.0	15.6	20.7	23.7	24.9
全くしていない	1.8	2.4	6.1	9.7	3.0	3.7	5.8	10.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-4 「毎日、同じくらいの時刻に起きているか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
している	60.9	55.3	55.3	50.6	62.3	57.8	58.6	49.7
どちらかといえばしている	33.7	36.1	30.8	31.0	32.6	38.1	32.1	38.4
あまりしていない	4.8	7.3	11.0	12.7	4.7	3.6	8.0	7.9
全くしていない	0.6	1.2	2.9	5.7	0.4	0.5	1.3	4.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-5 「普段（月～金曜日）１日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりするか（テレビゲーム除く）」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
４時間以上	21.9	26.4	27.9	28.4	13.0	15.2	20.4	26.7
３時間以上，４時間より少ない	26.2	20.4	20.9	20.2	16.3	20.1	19.3	18.4
２時間以上，３時間より少ない	24.2	22.4	20.0	18.9	25.5	28.0	25.8	24.4
１時間以上，２時間より少ない	17.4	20.3	22.4	19.6	29.2	24.6	24.0	17.4
１時間より少ない	9.6	9.8	7.2	10.4	14.2	11.1	9.7	10.5
全く見たり，聞いたりしない	0.6	0.8	1.6	2.5	1.8	0.9	0.8	2.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-6 「普段（月～金曜日），１日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム，携帯式のゲーム含む）をするか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
４時間以上	6.5	9.2	9.9	15.9	5.1	6.2	11.3	18.6
３時間以上，４時間より少ない	7.4	7.2	9.7	13.7	6.4	7.0	7.7	10.3
２時間以上，３時間より少ない	14.8	17.2	14.8	15.7	13.9	14.7	14.9	15.6
１時間以上，２時間より少ない	24.5	22.8	24.8	20.6	21.4	18.9	20.7	17.0
１時間より少ない	33.9	33.2	28.8	22.1	30.3	32.1	24.2	22.1
全く見たり，聞いたりしない	12.8	10.3	12.1	12.0	23.0	21.1	21.2	16.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（２）読書や読み聞かせに関する保護者の働きかけ

Lowest SESの高学力層の特徴としては、家庭での生活習慣とともに、保護者の子どもへの働きかけ、とりわけ、読書や読み聞かせに関する働きかけの強さがあげられる。Lowest SESかつ学力A層の家庭では、保護者が「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「子どもと一緒に図書館へ行く」傾向がある（図表5-7～図表5-9）。

図表5-7 「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
あてはまる	25.7	22.2	20.3	16.8	21.1	18.9	15.2	13.3
どちらかといえば、あてはまる	40.1	38.5	37.4	36.1	38.5	36.2	33.8	30.6
どちらかといえば、あてはまらない	28.1	32.0	33.6	35.3	33.3	35.9	38.7	39.9
あてはまらない	6.1	7.3	8.7	11.8	7.1	9.0	12.3	16.2
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-8 「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
あてはまる	36.1	32.0	28.9	23.4	35.6	35.4	27.4	24.6
どちらかといえば、あてはまる	37.0	33.8	35.1	35.0	35.7	34.8	33.5	33.7
どちらかといえば、あてはまらない	20.0	27.4	26.8	29.6	21.8	23.2	29.3	30.1
あてはまらない	6.9	6.8	9.2	12.0	6.9	6.6	9.8	11.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-9 「子どもと一緒に図書館にどれくらい行くか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
月に1回以上	8.7	8.4	6.9	4.4	3.5	3.5	1.9	2.1
2～3カ月に1回程度	10.6	10.0	8.1	9.3	5.2	4.4	4.2	3.8
半年に1回程度	15.6	13.0	12.6	9.7	8.3	7.7	6.2	4.9
1年に1回程度	15.2	14.1	13.9	13.0	13.5	9.4	8.4	7.4
2～3年に1回程度	4.6	5.4	5.3	5.5	6.1	6.4	5.9	4.9
ほとんど行かない	31.0	33.6	34.6	36.9	46.4	50.1	49.3	48.7
行ったことがない	11.2	14.1	15.4	17.0	14.4	15.9	21.7	24.7
近隣に図書館がないため行くことができない	3.0	1.3	3.2	4.3	2.5	2.7	2.4	3.4
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（３）勉強や成績に関する会話・学歴期待・学校外教育投資

図表5-10 「子どもと勉強や成績のことについて話をする」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
あてはまる	40.5	34.0	31.7	28.9	48.5	43.2	40.3	36.1
どちらかといえば、あてはまる	45.1	49.0	47.7	49.2	44.2	48.9	48.0	48.8
どちらかといえば、あてはまらない	13.1	16.0	18.9	20.3	6.9	7.2	10.5	13.3
あてはまらない	1.2	1.0	1.6	1.6	0.4	0.7	1.2	1.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Lowest SESかつ学力A層の家庭では、Lowest SESの他の学力層に比べ、保護者が「子どもと勉強や成績のことについて話をする」割合が高く、子どもに対して高い学歴を期待する保護者が多い（図表5-10～図表5-11）。また、学校外教育支出についてみると、「支出は全くない」という回答は他の学力層に比べて少なく、全体的に学校外教育支出が多い傾向がある（図表5-12）。

図表5-11 学歴期待と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
中学校まで	0.0	0.3	0.0	0.4	0.0	0.2	0.2	0.5
高校まで	22.1	28.5	38.4	47.4	18.9	32.6	48.5	58.5
専門学校・各種学校まで	20.4	27.5	21.1	21.7	16.3	24.2	24.3	22.0
短期大学・高等専門学校まで	6.3	7.6	6.7	3.8	6.3	7.9	6.4	3.4
大学まで	44.1	30.2	26.5	20.4	55.1	32.6	18.9	13.6
大学院まで	0.4	0.7	0.3	0.3	1.3	0.8	0.3	0.5
その他	1.3	1.4	2.2	1.2	2.1	1.6	1.3	1.4
分からない	5.4	3.7	4.9	4.7	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-12 「学校外教育支出」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
支出はまったくない	20.6	22.0	29.1	34.3	23.9	27.0	32.5	34.9
5千円未満	18.1	21.7	19.2	17.9	9.3	8.9	9.5	8.5
5千円以上1万円未満	25.3	28.3	24.5	27.2	17.5	16.1	14.1	13.0
1万円以上1万5千円未満	16.8	15.1	13.9	9.8	13.2	11.8	9.7	8.6
1万5千円以上2万円未満	8.3	7.4	7.4	5.5	9.6	10.4	8.7	8.3
2万円以上2万5千円未満	5.8	2.6	2.8	2.5	10.6	8.9	10.9	10.0
2万5千円以上3万円未満	1.9	1.2	1.9	1.6	6.0	8.8	8.2	7.5
3万円以上5万円未満	2.2	1.5	0.7	1.0	8.5	6.9	6.1	8.2
5万円以上	1.2	0.2	0.6	0.0	1.4	1.2	0.4	0.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（４）保護者自身の行動

図表5-13 「保護者が授業参観や運動会などの学校行事にどの程度参加するか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
よくする	80.4	77.2	74.8	70.2	46.9	42.6	41.0	36.4
時々する	18.3	18.4	23.0	23.2	36.9	36.7	39.2	41.2
あまりしない	1.1	4.4	2.0	6.0	13.6	17.0	16.9	17.3
まったくしない	0.1	0.1	0.4	0.6	2.6	3.8	3.0	5.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Lowest SESで学力A層では、Lowest SESの他の学力層に比べ、「授業参観や運動会など学校行事への参加を「よくする」と保護者が多い。中学校では授業参観や運動会など学校行事への参加を「よくする」という保護者は全体として少なくなるものの、学力A層の保護者の参加率は相対的に高い（図表5-13）。

（５）児童生徒の学習習慣と学校規則への態度

図表5-14 「家で、自分で計画を立てて勉強をしているか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（％）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
している	27.9	20.3	20.1	16.1	16.8	12.7	10.4	9.0
どちらかといえば、している	35.8	34.4	30.3	28.4	34.4	31.7	25.2	20.9
あまりしていない	28.4	35.2	32.2	33.7	32.0	40.1	40.8	37.6
全くしていない	7.9	10.1	17.5	21.8	16.7	15.4	23.6	32.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-15 「家で、学校の宿題をしているか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（％）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
している	91.4	85.7	83.1	70.6	70.8	65.0	53.9	41.5
どちらかといえば、している	6.6	10.9	12.2	22.4	19.3	24.2	28.6	30.1
あまりしていない	1.8	3.0	3.9	5.7	7.6	8.7	12.5	18.1
全くしていない	0.2	0.5	0.8	1.3	2.2	2.1	4.9	10.3
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表5-16 「学校の規則を守っているか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（％）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
当てはまる	44.3	38.2	36.3	34.6	58.4	53.6	44.9	36.6
どちらかといえば、当てはまる	48.2	53.1	52.8	50.8	39.1	41.1	46.9	44.0
どちらかといえば、当てはまらない	6.6	8.6	9.9	12.5	2.0	4.7	7.3	14.9
当てはまらない	0.9	0.1	1.0	2.1	0.5	0.6	1.0	4.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Lowest SESで学力A層の生徒をみると、Lowest SESの他の学力層に比べ、家で、自分で計画を立てて勉強する、宿題をする、など、家庭学習の習慣が身についている傾向が見られる（図表5-14～図表5-15）。ここではこの2項目のみ表を示しているが、予習・復習、苦手な教科の学習などについても同じ傾向は確認できる。特に中学校において、宿題についてはA層とD層との間に大きな差がみられる（図表5-15）。また、Lowest SESで学力A層の子どもは「学校での規則を守っている」という回答が多い（図表5-16）。

（6）学校での学習指導

学校での学習指導に関して、Lowest SESで学力A層の子どもは、「普段の授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている」と感じている。A層とD層とを比べると非常に大きな差があることがわかる。

図表5-17 「自分の考えを発表する機会が与えられていると思うか」と学力の関係（Lowest SESのみ）（%）

	算数B				数学B			
	A層	B層	C層	D層	A層	B層	C層	D層
当てはまる	53.4	41.4	35.9	29.7	39.9	34.0	29.7	24.8
どちらかといえば、当てはまる	36.0	42.9	40.5	33.1	45.8	47.8	47.3	41.3
どちらかといえば、当てはまらない	8.6	12.9	18.4	24.9	11.2	14.4	17.6	23.7
当てはまらない	2.0	2.8	5.2	12.3	3.1	3.8	5.4	10.2
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（7）本章のまとめ

社会経済的背景（SES）がLowestだからといって、すべての子どもの学力が低いわけではない。本章では、Lowest SESという背景にあり、かつ学力A層を達成している子どもに注目し、その生活習慣、学習習慣、保護者の働きかけや学校外教育投資、保護者自身の行動、学校での学習指導について見てきた。その結果、Lowest SESで学力A層の子どもには、次の7つの特徴が見られた：①朝食を毎日とる、同じくらいの時刻に寝る、同じくらいの時刻に起きる、テレビを見過ぎない、テレビゲームをやり過ぎない等、基本的な生活習慣・生活規律が確立している。②保護者が「子どもに本や新聞を読むようにすすめている」「子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした」「子どもと一緒に図書館へ行く」など、読書に関する働きかけをしてきてくる。③保護者がふだん子どもと勉強や成績のことについて話をする。④保護者が子どもに対して高い学歴を期待し、学校外教育投資も行う。⑤保護者が授業参観や運動会など学校行事によく参加している。⑥児童生徒に家庭での学習習慣と学校規則を守る態度が身についている。⑦児童生徒が自分の考えを発表する機会が与え

られていると感じている。

これらの結論はごく平凡な内容かもしれない。「ごく当たり前のこと」と言えないこともなかろう。確かに、基本的な生活習慣や学習習慣、保護者からの読書のすすめや絵本の読み聞かせなど、これまでも学力形成に重要とされてきたことがあらためて確認されたに過ぎない。しかしながら、これらの「ごく当たり前のこと」ができている児童生徒は意外に少ない。例えば、家で自分で計画を立てて勉強を「している」生徒は、数学BのD層においては1割にも満たない（図表5-14）。本章でとりあげた「ごく当たり前のこと」が「できる」「できている」ということが、社会経済的背景による学力格差を克服するうえで鍵となることを、本章の分析結果は示唆しているといえよう。

第6章 高い成果を上げている学校の抽出

垂見裕子・中西啓喜

近年、学校に通う児童生徒の家庭の社会経済的背景が、子どもの学力に大きく影響することが明らかにされてきた。しかし一方で、不利な家庭環境にある児童生徒を、公教育がどのようにサポートをすれば、そのような不利を克服し、高い学習成果をあげることができるのかにも注目する必要がある。

児童生徒の社会経済的背景を考慮した上で学校の成果を測る試みは、「効果のある学校」論の中で様々な定義、手法で研究されてきた（志水宏吉編著、『「力のある学校」の探求』大阪大学出版会、2009年；Teddle, C., Reynolds, D., & Sammons, P., 2000, “The methodology and scientific properties of school effectiveness research.” In C. Teddle & D. Reynolds (Eds.), *The International Handbook of School Effectiveness Research*, pp. 55-133, Falmer)。本章では、児童生徒の家庭の社会経済的背景から統計的に予測される学力を大きく上回る学校を「高い成果を上げている学校」と定義し、そのような学校がどのような社会的文脈に置かれ、どのような教育実践を実施した結果、「高い成果」を上げるに至ったのかを検討する。つまり本章でいう「高い成果を上げている学校」とは、同程度の社会経済的背景の児童生徒が通う学校と比較して、学校の（平均）学力が高い学校である。

本調査では、統計的手法により学校を抽出し、最終的には、地域的なバランス、学校段階、調査の実施可能性などを総合的に検討し、訪問調査の対象となる8校（小学校4校・中学校4校）を選定するプロセスを提示していく。

（1）高い成果を上げている学校の抽出方法

このセクションでは、高い成果を上げている学校の具体的な抽出方法を紹介する。

1 社会経済的背景（SES）尺度の構成

学校の置かれた環境の把握には、在籍児童生徒の社会経済的背景（SES）尺度を用いた。本尺度は、各児童生徒の家庭の所得・父親学歴・母親学歴を合算し、得点化したものである（尺度の具体的な構成方法は第1章を参照）。指標値が高いほど、生徒の社会経済的背景が恵まれていることを表す。本章では、分析対象が学校単位なため、各学校に在籍する児童生徒の社会経済的背景の平均値を、各学校の社会経済的背景（SES）として位置づけた。

2 残差の算出

残差の算出には、児童生徒レベルで、学力を従属変数、上述の社会経済的背景（SES）を独立変数とした回帰分析を行い、各児童生徒の残差（推計式から算出される予測値と観測値の差）を算出した。残差とは、言い換えれば、児童生徒の社会経済的背景から推定される点数（正答率）と、その児童生徒の実際の点数（正答率）がどれほど乖離しているのかを表す値（プラスであれば推定より高い点数、マイナスであれば推定より低い点数）で

ある。

学力は、まずは算数／数学 A、算数／数学 B、国語 A、国語 B を合成せず、それぞれを従属変数とし、回帰分析を 4 回行った。本章では学校を単位として分析するため、各学校に在籍する児童生徒の残差の平均値を算出した。なお、学校により保護者の標本サイズにばらつきがあるため、残差に保護者標本サイズの平方根を乗じることにより、調整した（以下、調整済み残差と呼ぶ）。

3 学校の抽出手順

調査対象校の抽出は次の手順で行っている。まず、それぞれの問題（算数／数学 A、算数／数学 B、国語 A、国語 B）で、調整済み残差が最も大きい学校を 40 校抽出した上でそれらを順位づけし、3 つ以上の問題で上位だった学校を最終抽出校とした。その際に、小学校抽出にあたっては、結果の汎用性を考慮して、「学年学級数が 2 以上」の学校（中大規模校）を抽出条件とした。（学年 1 学級の）一人の担任の力による効果ではなく、学校の効果と解釈できることから、汎用性が高いであろうと判断した。ただし、上記の条件を設けることにより、対象校が 165 校と、全体の 42% の学校に大幅に絞られていることは、留意が必要である。また、社会経済的背景 **Lowest SES** グループの学校に関しては、9 割強が小規模校で対象外となってしまうため、代わりに「学年児童数 20 名以上」を条件とした。一方で、中学校の抽出は、小学校と同様に、「学年学級数が 2 以上」かつ「第 3 学年の生徒数が 41 人以上」の学校（中大規模校）を抽出条件とした。中学校の場合は、この条件を満たす学校が全体の約 55% となる。

以上の結果、最終的に小学校の場合は分析可能な 391 校中 41 校、中学校の場合は分析可能な 387 校中 40 校を抽出した¹⁾（図表 6-1、6-2 参照）。

4 最終抽出訪問校

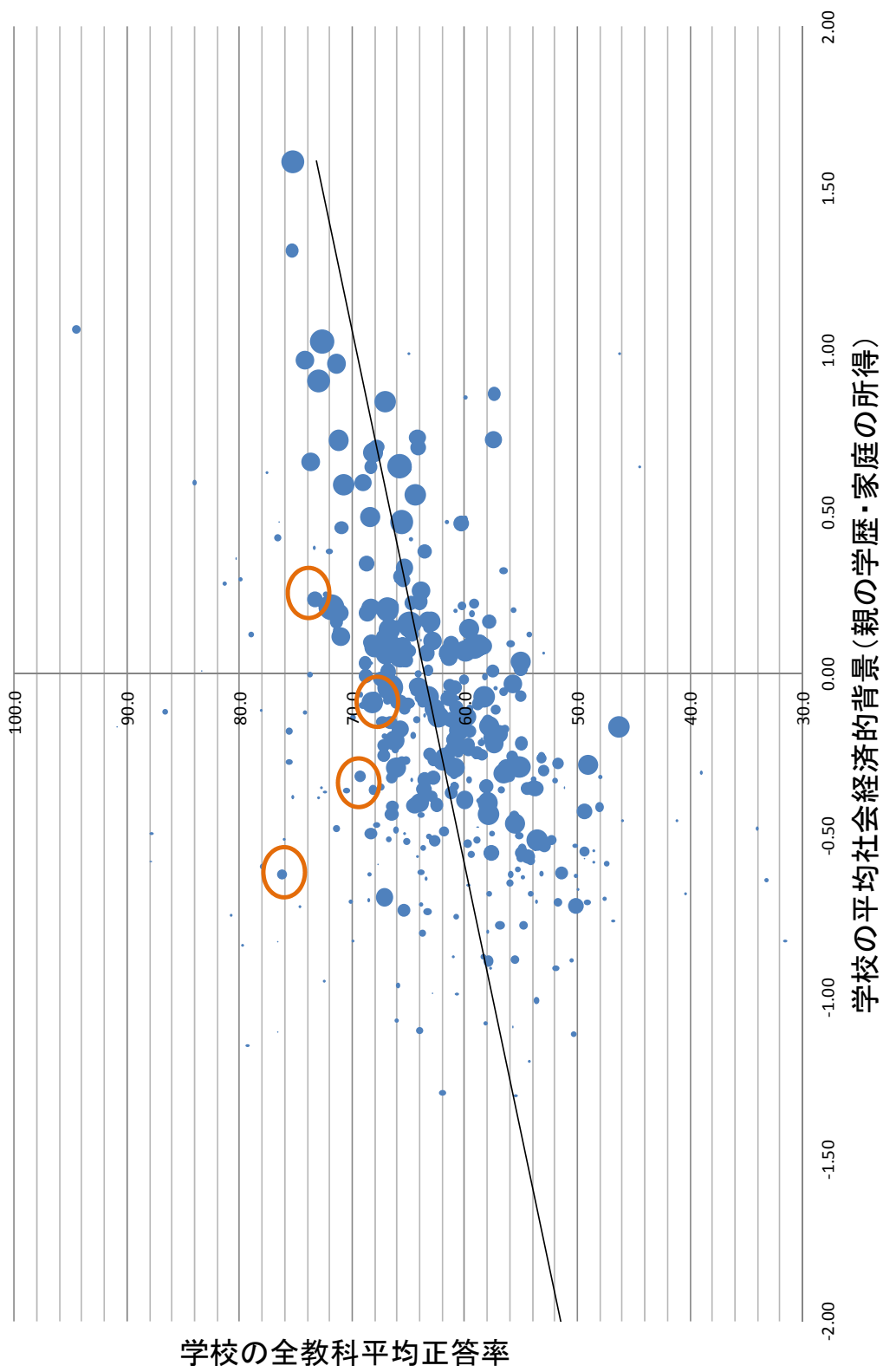
最終抽出訪問校を決定するにあたっては、小学校に関しては、多様な社会経済的背景の学校を抽出するために、4 つの問題を合成した全問題平均残差が最も高かった学校を、それぞれの社会経済的背景グループから 1 校ずつ抽出した。一方で、中学校の場合は、社会経済的背景 **Lowest SES** グループが、高い残差を記録することがきわめて難しい（図表 6-2 参照）。そのため、全問題平均残差（調整値）の平均値の高さを優先しつつ、なるべく各社会経済的背景グループが分散するように対象校を抽出した。結果、小学校と中学校ともに、地域的なバランス、調査の実施可能性などを総合的に考慮して、それぞれ 4 校の訪問校を選定した（図表 6-3、6-4、6-5、6-6 で○がついている学校が訪問校である）。

なお、中学校 1 校からは調査拒否があったため、最終的な事例研究は小学校 4 校、中学校 3 校となった。

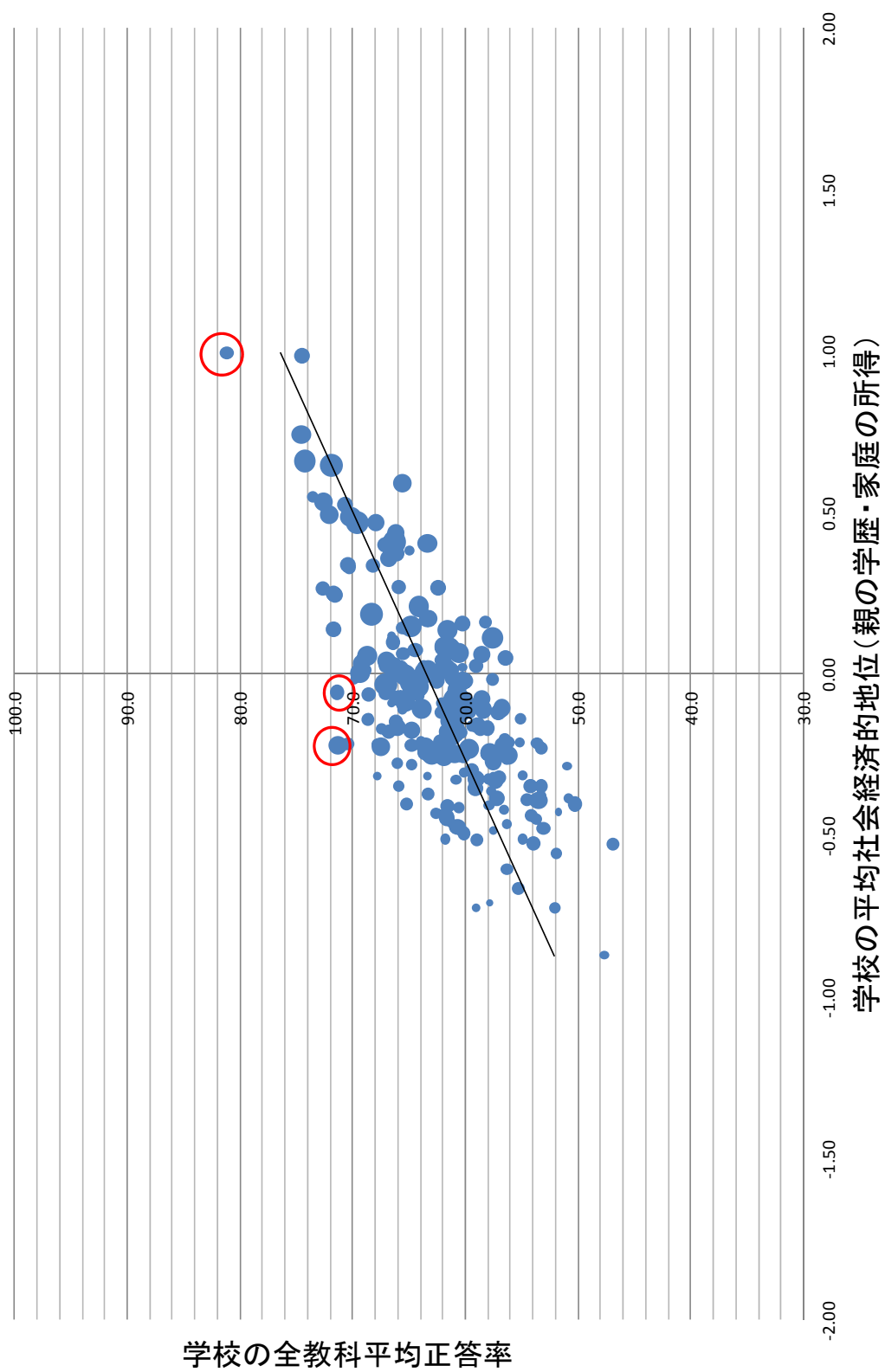
図表 6-3 学校の学力と社会経済的背景の関係―抽出対象校（165 校）（小 6）



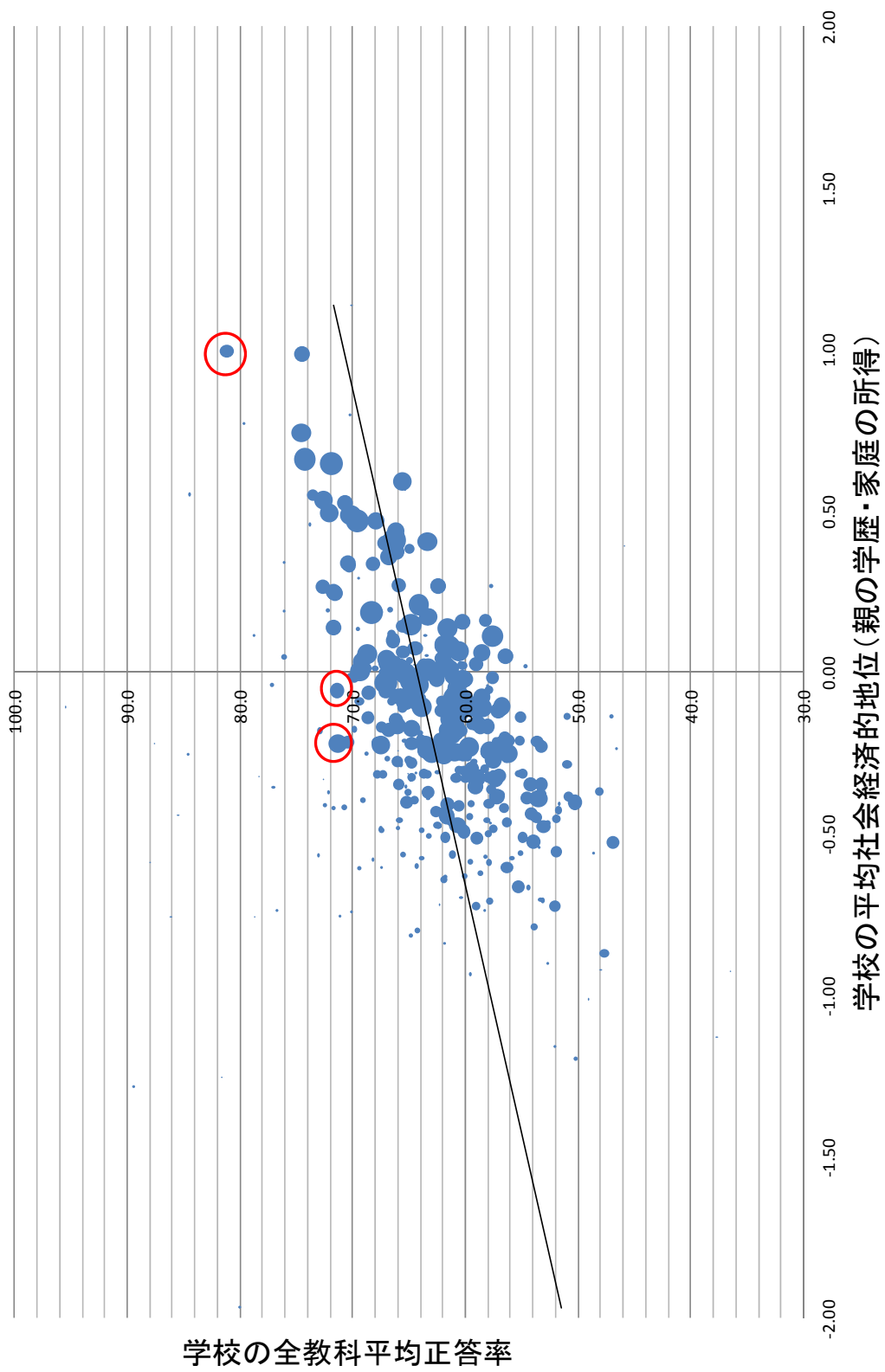
図表 6-4 学校の学力と社会経済的背景の関係—調査参加全校（391 校）（小 6）



図表 6-5 学校の学力と社会経済的背景の関係—抽出対象校 214 校（中 3）



図表 6-6 学校の学力と社会経済的背景の関係—調査参加全校（387 校）（中 3）



(2) 高い成果を上げている学校の指導面における特徴

このセクションでは、上記(1)節3項で「高い成果を上げている学校」として抽出された学校(小学校41校、中学校40校)が、統計的にみると、どのような特徴があるのかを確認していく。

まず、図表6-7、図表6-8から、児童生徒の社会経済的背景を考慮すると、「高い成果を上げている学校」に抽出された学校に通う児童生徒の方が学力が高く、その他の学校に通う児童生徒の学力と、統計的にも有意な差が確認できる。例えば、小学校で高い成果を上げている学校として選出された41校の児童の学力の平均は、算数B問題でいえば、彼ら・彼女らの社会経済的背景から推定される正答率より6.5%高い一方、その他の学校の児童の学力の平均は、社会経済的背景から推定される点数より1.0%高いにとどまる。

図表 6-7 高い成果を上げている学校の平均学力残差 (小 6)

学力	高い成果を上げている学校		その他の学校		F value	P value
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
平均残差 算数A	5.18	2.75	1.48	8.28	8.073	.005
平均残差 算数B	6.54	3.08	1.02	10.28	11.667	.001
平均残差 国語A	6.25	3.99	1.10	9.65	11.416	.001
平均残差 国語B	5.58	3.77	.50	10.85	8.863	.003

図表 6-8 高い成果を上げている学校の平均学力残差 (中 3)

学力	高い成果を上げている学校		その他の学校		F value	P value
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
平均残差 数学A	5.65	2.27	0.82	8.69	12.242	.001
平均残差 数学B	7.17	3.08	0.65	10.08	16.525	.000
平均残差 国語A	3.87	1.86	1.00	6.04	8.878	.003
平均残差 国語B	5.06	2.55	1.02	9.10	7.768	.006

次に、高い成果を上げている学校の指導方法や学習規律の特徴を見てみよう。分散分析を行い、高い成果を上げている学校が、その他の学校より多く行っている指導方法を抽出する。すべての質問項目は学校質問紙で尋ねられており、数字が大きいほど、より頻繁に行われていることを示す。網掛けの指導方法に関しては、高い成果を上げている学校とその他の学校との差異が統計的に有意であったことを示す。

図表6-9から、高い成果を上げている小学校では、基本的な指導方法(授業の最後の振り返りや、分かりやすい文章の書き方の指導)、および発展的な指導方法(思考を深めるような発問や、話し合いの時間や、探求の過程を意識した指導など)、双方を多面的に行っていることが見てとれる。また個に応じた少人数指導(習熟別やチームティーチングなど)を取り入れていることも分かる。

次に図表6-10を見ると、高い成果を上げている中学校とそうでない学校との指導方法の差は、「前年度、国語の授業におけるチームティーチング」の1項目でしか見られない。中学校においては、小学校ほど指導方法や学習規律の特徴が学力に対して必ずしも効果を発揮するわけではないのかもしれない。

ただし、これらの結果で留意しなければならないのは、統計的に有意でなかった指導方法は高い成果を上げていないわけではなく、あくまでも高い成果をあげている学校群とその他の学校群の間で頻度に差異がなかったことを表すという点である²⁾。

図表 6-9 高い成果を上げている学校の指導方法や学習規律の特徴（小 6）

指導方法	Range	高い成果を上げている学校		その他の学校		F value	P value
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		
放課後を利用した補充的な学習サポート	1-6	2.41	1.52	2.80	1.52	2.342	0.127
授業の冒頭で目標(めあて・ねらい)を示す活動	1-4	3.71	0.51	3.56	0.58	2.407	0.122
授業の最後に学習したことを振り返る活動	1-4	3.71	0.46	3.36	0.61	12.328	0.000
様々な考えを引き出したり、思考を深めるような発問や指導	1-4	3.51	0.51	3.28	0.59	5.885	0.016
発言や活動の時間の確保	1-4	3.66	0.48	3.44	0.57	5.463	0.020
将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導	1-4	3.02	0.79	2.94	0.66	0.540	0.463
学習規律の維持の徹底	1-4	3.71	0.46	3.58	0.56	1.849	0.175
学習方法(ノートのとり方、テストの間違いの振り返り学習)に関する指導	1-4	3.68	0.47	3.54	0.56	2.339	0.127
学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマの提供	1-4	3.39	0.49	3.31	0.62	0.621	0.431
学級やグループで話し合う活動	1-4	3.80	0.40	3.35	0.65	19.006	0.000
本やインターネットを使った資料の調べ方の指導	1-4	3.24	0.58	3.17	0.58	0.533	0.466
資料を使った発表の指導	1-4	3.24	0.66	3.08	0.64	2.312	0.129
自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導	1-4	3.41	0.50	3.14	0.58	8.187	0.004
総合的な学習の時間における探求の過程を意識した指導	1-4	3.29	0.68	3.07	0.66	4.276	0.039
学校や地域で挨拶をする指導	1-4	3.93	0.26	3.80	0.43	3.218	0.074
国際交流や外国語でのコミュニケーション能力育成のための取組	1-4	1.56	0.74	1.59	0.84	0.055	0.815
算数の授業における、習熟の遅いグループに対する少人数指導	1-5	2.85	1.64	2.12	1.52	8.358	0.004
算数の授業における、習熟の早いグループに対する少人数指導	1-5	2.34	1.48	1.93	1.40	3.129	0.078
国語の授業におけるチームティーチング	1-5	1.17	0.50	1.28	0.77	0.749	0.387
算数の授業におけるチームティーチング	1-5	2.78	1.71	2.19	1.51	5.469	0.020

図表 6-10 高い成果を上げている学校の指導方法や学習規律の特徴（中 3）

	Range	高い成果を上げている学校		その他の学校		F value	P value
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		
放課後を利用した補充的な学習サポート	1-6	2.80	1.30	2.89	1.38	0.163	0.686
授業の冒頭で目標(めあて・ねらい)を示す活動	1-4	3.38	0.67	3.34	0.63	0.092	0.761
授業の最後に学習したことを振り返る活動	1-4	3.00	0.64	3.18	0.60	3.215	0.074
様々な考えを引き出したり、思考を深めるような発問や指導	1-4	3.20	0.46	3.11	0.54	1.100	0.295
発言や活動の時間の確保	1-4	3.25	0.54	3.20	0.58	0.242	0.623
将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導	1-4	3.30	0.61	3.25	0.57	0.296	0.587
学習規律の維持の徹底	1-4	3.65	0.53	3.63	0.55	0.073	0.787
学習方法(ノートのとり方、テストの間違いの振り返り学習)に関する指導	1-4	3.48	0.55	3.46	0.54	0.035	0.852
学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマの提供	1-4	3.13	0.56	3.07	0.65	0.243	0.623
学級やグループで話し合う活動	1-4	3.18	0.55	3.14	0.69	0.090	0.765
本やインターネットを使った資料の調べ方の指導	1-4	2.88	0.69	2.93	0.65	0.287	0.592
資料を使った発表の指導	1-4	3.03	0.62	2.93	0.63	0.913	0.340
自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導	1-4	3.13	0.61	3.03	0.59	0.830	0.363
総合的な学習の時間における探求の過程を意識した指導	1-4	3.10	0.74	3.09	0.70	0.013	0.908
学校や地域で挨拶をする指導	1-4	3.80	0.41	3.76	0.45	0.243	0.623
国際交流や外国語でのコミュニケーション能力育成のための取組	1-4	1.73	0.91	1.74	0.87	0.017	0.895
前年度、数学の授業における、習熟の遅いグループに対する少人数指導	1-5	2.53	1.74	2.12	1.56	2.390	0.123
前年度、数学の授業における、習熟の早いグループに対する少人数指導	1-5	2.15	1.67	1.89	1.40	1.185	0.277
前年度、国語の授業におけるチームティーチング	1-5	1.78	1.35	1.33	0.93	7.335	0.007
前年度、数学の授業におけるチームティーチング	1-5	2.58	1.72	2.54	1.69	0.017	0.895

<注>

- 1) 図表 6-2 のいくつかの学校は、全問題平均残差が大きかったためここに位置している。
- 2) 統計的な有意差が認められていないものの、図表 6-9 と図表 6-10 の数値を確認する

えで注意しなければならないのは、高い成果を上げている学校の方が、その他の学校よりも頻度が低い項目がいくつかあるという点である。例えば、「放課後を利用した補充的な学習サポート」については、高い成果を上げている学校ほど実施して「いない」ということである。これには逆の因果関係が想定できる。例えば、「放課後を利用した補充的な学習サポートを行っていない学校ほど高い成果を上げている」のではなく、「高い成果を上げている学校は、放課後を利用した補充的な学習サポートを行う必要がない」ということかもしれない。

第7章 高い成果を上げている学校 事例研究

富士原 紀絵

(1) 事例研究の概要

本章では高い成果を上げている小学校4校、中学校3校の学校の特徴や取り組みについて、学校への訪問調査と管轄市教育委員会のインタビュー調査をもとに分析を行う。訪問調査対象校と期間は以下の通りである。

図表 7-1 訪問調査の実施日程と訪問先

日程	訪問先
2014年2月 3日	A市Ⅰ中学校
2月19日	A市教育委員会
2月 4日	B市教育委員会
2月 5日	B市立Ⅱ中学校
2月12日	C市教育委員会
2月13日	C市Ⅲ小学校
2月18日	D市教育委員会
2月19日	D市Ⅳ小学校
2月13日	E市立Ⅴ中学校
2月14日	E市教育委員会
2月13日	F市教育委員会
2月27日	F市立Ⅵ小学校
2月27日	G市教育委員会
2月28日	G市立Ⅶ小学校

インタビュアーが必ずしも同一人物で無いため個別の聞き取り時間や追究の程度に違いはあるものの、聞き取りたい内容は調査者全員で事前に確認し、作成した項目表を中心にインタビューを行った。また調査対象校と教育委員会には事前に資料の用意をお願いした。

教育委員会には訪問する学校の特色（なぜ高い成果が上がったと推測するのか）、学力向上に関わる教育委員会の施策（事業や予算）、学校規模の設定の基準とそれに関する教員配置や加配といった条件整備の施策状況、市の教育研究全般や教員研修の状況、家庭に対する教育指導、住民の学校参加といった内容について聞き取りを行った。

学校訪問については、年度末の行事が重なる時期で各学校の受け入れ体制が異なっているものの、総じて校長・教頭・教務主任といった管理職と本調査対象となった小6・中3の担任、中学では国語・算数・数学主任がインタビューに応じ、国語と算数・数学の授業をそれぞれ1時間参観した。各学校共通のインタビュー内容の要点は、学校の存在する地域の特色、学校の概要（児童数、教職員数、教員の加配の状況、学級編成等）、校内の研究

体制、教育課程の工夫や特色、教授・学習形態の特色、主として国語と算数・数学の授業の特徴、学力捕捉の方法、全国学力・学習状況調査を含めた諸調査の活用法、小6と中3の児童生徒の特徴、家庭学習の状況、学校外リソースの活用状況、家庭との連携、異校種間連携、教育委員会の利用等である（詳細は第10章の個別インタビュー結果を参照のこと）。

わずか一日の訪問調査であることから、必ずしもその学校の特徴の全貌を捉えきれておらず、さらに訪問期間が2月ということで、小6と中3は卒業式を控えていること、中3に関しては高校受験を控えているというもあり、通常形態の授業が必ずしも参観できてはいないことをあらかじめ断っておく。

実際に訪問してみたところ、学校の状況は地域の特徴や児童生徒の実態に応じて、当然のことながら、相違点が多かった。顕著なのは学校外リソースや地域人材の活用と家庭との連携状況であり、活用（連携）と非活用（非連携）、活用（連携）の場合の内容も学校所在地の特色に応じて実態が大きく異なっている。

その一方で、複数の学校に共通する特徴も見いだされた。以下ではそれら複数の学校に共通の特徴を可能な限り洗い出し、検討してゆく。

（2）高い効果を上げている学校の共通の特徴

1 家庭学習の指導

小学校は4校すべて、中学校ではLowest SESの学校に位置する学校において、家庭学習の指導に力を入れていた。中学校については市教委指定の小中連携事業に取り組む中で、生徒が小学校から培っていた家庭学習の習慣を意図的に継承していた。

学校で指導する家庭学習というと、まずは教師によって全ての子どもに共通に課される宿題が思い浮かぶ。5校はいずれもそうした宿題だけでなく、自主学習（名称は自学、自勉、テ勉、宅勉、一人勉強と学校により呼び名は様々）に取り組ませていた。自主学習には子どもの興味や関心を取り上げさせる場合と、自分の弱点を自分で発見し補充を求める場合がある。これに加えて日記を毎日書かせる学校もある。自主学習で発見された子どもの疑問や弱点を授業に組み込んだり、日記を学習や生活指導に利用する場合もある。

自主学習を、特に小学生が行うのは難しいと思われたが、自学の方法について小学校2校では校内で発達段階に応じて系統的に指標化し、特に低学年ほど丁寧に指導することに共通理解をしていた。

自主学習で子どもが取り上げる内容面に注目する必要があるが、自主学習も日記も子ども自身の自己評価能力、自己管理能力が問われる性格のものであり、5校では毎日これらを提出させ、チェックしコメントを書き、返却するというサイクルを繰り返すことで、こうした能力の内面化を図っているとみられる。

重要なのは、これらの課業を子ども任せに「させっぱなし」にしておくのではなく、学校への提出を義務づけ、教師が日々手を入れて目を通し子どもに返却するという作業を繰り返すことである。この指導が子どもにとって大きな励みになり、家庭学習規律の定着化を促進させる上での鍵となっているに違いない。その際、気になるのは教師の負担である。

宿題のドリルやプリントの採点（丸付け）程度であれば教師の負担はさほど大きくないと想定されるが、自主学習ノートと日記のコメント挿入にはかなりの手間がかかり、これ

らの指導には大きな時間が割かれることになる。しかし、小学校3校と中学校1校では教師の作業として内面的に義務化されており、インタビューでは「当然のこととしているだけで、負担と思ったことは無い」という類いのコメントが返ってきた。また、ある小学校では担任教師の手が回らないと管理職が判断した場合、複数の管理職が代わりにコメントを書いている学校もあった（C市Ⅲ小学校）。そこまで校内で工夫をしてでも子どもの家庭学習へのモチベーションを下げないように努力しているのである。また、ある小学校では学級全体で共有した自主勉強ノートを児童で回覧し、それぞれの保護者にチェックをさせている。級友の勉強の様子が分かれると好意的に受け入れられており、個別学習よりも力を入れて取り組むそうである（F市Ⅳ小学校）。高学年の児童間で自学ノートの交換を行い、相互評価させている学校もあった（C市Ⅲ小学校）家庭学習を推進するための独自の工夫といえるだろう。

家庭学習は学習規律的側面が強いものの、家庭という時空で行われる行為であり、家庭での時間の過ごし方、生活規律にも結びつく。家庭学習に保護者の管理を期待している学校もあれば、保護者の管理は期待していない学校もある。家庭環境の差違に関係なく子どもに学習規律や生活規律を身につけさせる上で、教師が家庭学習を毎日チェックして返却することが重要であるとみられる。

2 管理職のリーダーシップと同僚性の構築、実践的な教員研修の重視

今回調査した全学校が、管理職を含め、同僚との関係が良好であった。1で上げた、家庭学習に担任教師の手が回らないと判断した場合に管理職が代替する小学校は同僚性の良好さを伺わせるエピソードの一つである。

今回の調査では、とりわけ中学校において意図的に同僚性を育むための取り組みがなされている。研究授業は教師の力量を伸ばすことが第一義的な目的であり、小学校では全教員が参加することは珍しいことでは無いが、教科担任の中学校が全教員参加でそれを行うのは難しい。今回訪問した2つの中学校では校内で教科を超えて授業を「見せ合い」、「教え合う」（A市Ⅰ中学校、B市Ⅱ中学校）ことが企図されていた。ここでは授業面での力量形成を図る中で、同僚性が育まれてゆくものと期待されている。その際、管理職（校長や教頭、あるいはミドルリーダーとしての教務主任、教務部長）が適切で適度なリーダーシップを発揮していた。決して高圧的ではなく、教師の過度な負担にならないように配慮しつつ、一方では明確なビジョンや方針を示し理解を図りつつ同僚性の構築に取り組んでいる。ある中学校では「校内研修こそが教師にとって最大の力量形成の場であり、同僚性を育む場だ」と校長が断言していた。今回訪問した全学校の校長も、学校の外に発信するような派手な研究体制を組むのではなく、自校の子どもや教師の実態にこそ忠実に、学校運営を行っている。一見すると内向きのようなものであるが、これが同僚性の構築に効果を発揮しているとみることができる。

その一方で、複数の校長は自校の教員に対し、出来るだけ外の学校参観をするように、積極的に促している場合もあった（C市Ⅲ小学校、D市Ⅳ小学校）。その際、伝達講習会的な研修では無く、「学校」や「授業」を見に行くように勧めている。うち一校の校長は担任の空いた日には自らが学級に入ることも厭わないと語っていた。その際の問題は出張の費用であり、遣り繰りに苦労しているということである。県内外問わず教員が外に研修に行

くための予算化を切望していた。

3 小中連携教育の推進、異学年交流の重視

1 では小学校での家庭学習を中学校が継承している例を挙げた。今回調査した学校のうち、いわゆる「中1ギャップ」対応目的、あるいは活動ベースでの児童生徒の交流や教員の授業交換といった形では無く、9年間を見通した実質を伴う連携、すなわち、教育課程や学習・生活規律面での系統性を図る小中連携事業に取り組んでいる学校が6校であった（中学校1校を除く）。うち、市教委からの研究開発指定を契機としている場合が5校（小学校4校、中学校1校）、1中学校は市全体で小中一貫教育を推進している。各教科の内容の系統を図るといった教育課程作成の取り組みのみならず、全教科共通の学習規律や生活規律の系統化や継続化の共同研究に力を入れている。ある中学校の3年生は市教委指定の小中連携研究の開始時に小学校一年生だったということもあり、今回の好成績に結びついているのでは、と語っていた。

なお、小学校3校で教科外の諸領域や生活場面で積極的に縦割り活動を導入し、上級生が下級生の面倒をよく見るという特徴を上げていた。異学年交流の意味は大きいと捉えているようである。

4 言語に関する授業規律や学習規律の徹底

授業を参観した小学校3校と中学校1校に特徴的なのは、授業中の子どものノートが見やすく整理されていること、文字を丁寧に書いているということであった。ノート指導を積極的に行っている学校はとりわけLowest SESとLower middle SESの小学校・中学校にみられた。「教師の黒板よりも子どものノートの方が見やすい」という教師もあり、教師の方こそ黒板を見やすく、わかりやすく書くことを迫られるということであった。また、教師による授業のノートチェックを積極的に行っている小学校と中学校がそれぞれ2校ある。黒板には必ず「めあて（目的）」を書き、子どもにもノートに書かせ、授業一時間毎のねらいを明確化させる小学校が3校、中学校が2校あった。

小学校4校、中学校2校では子どもの実態に応じて、教科を問わず、「表現力」の向上、とりわけ「書くこと」と「話すこと」の能力を高めることに重点を置いた学習指導形態を取っていた。「話すこと」の力を高めるためには自分の考えを根拠を持って示す必要があることから「書くこと」を重視している学校もあり、内気な子どもが多いため「話すこと」に重点を置いて授業を行っている（各教科において少人数グループでの話し合い活動を行わせる等）という学校もある。また、2つの小学校が国レベル、あるいは市教委レベルでの外国語活動に関する研究開発指定を受けた経験を持ち、そこで培われた「コミュニケーション活動」の実績を全教科で活かし続けている場合もある。こうした研究指定を受けたかどうかにかかわらず、「話すこと」については「話し方」の共通ルールを教室の壁に貼るなど（小学校3校、中学校1校）して子どもに明示している学校が多い。

以上のことは、国語という一教科に依存するのでは無いことはもちろん、全教科、そして教科外といった教育課程全般で「話すこと」や「書くこと」に力を入れていることが共通であるだけで無く、小学校3校と中学校1校では「自校の児童生徒はよく人の話を「聞く」あるいは「聴く」習慣はとてできています」と語っており、ここから「話すこと」と

「書くこと」を課題とすることに繋がっていると見られる。すなわち、既に子ども相互や教師の語ることをよく「聞くこと」の力が育っているのが特徴といえる。朝読書でも「読書」だけでなく「読み聞かせ」を全校で意識的に導入している学校も小学校で 2 校あり、こうした経験の影響も「聞く」力の充実に影響を与えているのかもしれない。

言語活動に関して言えば、小学校 3 校では「学級文庫」が充実しており、子どもが持ってきたり、教師が寄付したり、学校で毎月予算化していたりと工夫して運営している。総じて調査対象校は学校図書館や市の負担による司書関係の支援員の配置がなされており、読書習慣の形成に力を入れている。

5 都道府県、市レベルの学力・学習調査の積極的な活用

7 校全てが都道府県レベルや市レベルで実施される学力調査（CRT や都道府県独自で開発した調査）や学校独自で行う CRT の結果を、調査した全ての学校が学力向上の基礎資料として有効に取り入れている。

ただし、調査対象のどの学校でもそうした諸調査の結果には振り回されず、という態度で一貫していた。市教委から全国学力・学習状況調査の結果分析が各学校に配布され、それを受けて学校の課題を明確化し、課題克服を計画化するという指示を受けている学校もあったが、それは自校の課題を知るための一つの機会として理解している。

以上のことが、諸学力調査対策に自覚的に力を入れていると語る学校が1校も存在しなかった理由であるとみられる。

6 基礎・基本の定着の重視と少人数指導、少人数学級の効果

Lowest SES、Lower middle SES、Upper middle SES に属する学校のいずれもが、発展的な学習よりも、全ての子どもに基礎・基本を徹底するという方針を採っていた。朝の始業前や昼休み、帰宅前に 10 数分のドリルを行う時間を設定したり、宿題にもドリルを課すという学校が 7 校全てに共通していた。単元末テストは一端家庭に持ち帰らせ、保護者にチェックしてもらった後、学校に持ち帰らせ「テストファイル」として蓄積し、一定の時期に自己評価させ自分の弱点を補強する学習を行わせるという小学校もあった。形成的なテストを家庭に持って帰らせたままにせず、学校で子どもにファイルとして蓄積させる学校は 2 校存在した。4 で指摘したノート指導も子どもの日々の学習状況を教師が正確に捕捉する手段である。これらが基礎・基本の確実な習得のために行われている授業の特徴であるが、既に全国の多くの学校で採用されていると見られる。

今回調査した 7 校全てが強調していたのが TT や少人数指導のよさ、であった。

Lowest SES に属する小学校と中学校で、算数・数学や英語で TT を採用していた学校は、いずれも、能力の個別化に応じるのは TT と断言した。

同じく Lower middle SES に属する小学校と中学校は、算数・数学や英語等で効果を発揮するのは少人数指導であると語っていた。小学校の場合、県（国）と市レベルでの加配措置に恵まれ、少人数指導を行っているという学校が 2 校存在し、そのいずれもが、子どもの能力差と学習の深まりにおいて少人数指導が効果があると話している。少人数は教師の目が行き届くという側面のみで無く、子ども間で学び合いが起きることの効果に注目している。よって、少人数と言ってもあまり些少では無く、10 人～20 人程度が妥当という

ことだった。ある小学校では、算数では敢えて能力混交にして少人数指導をしていた。

一方、Highest SES に属する小・中学校は算数・数学の少人数指導を習熟度別クラス編成として展開していた。インタビューでは単に「少人数指導をしている」と語りつつ、実態としては能力別少人数指導を行っていた。ただし、習熟度別といっても、教師が分けるのでは無く、プレテストの結果を踏まえて子どもが自己判断して分かれるという点、能力の高いグループも低いグループも別々の課題に取り組むのでは無く、基本的に同一課題や教材で授業が行われ、課題にかける時間が異なるだけである（その分、進度が早いグループは多少発展的な課題に取り組むこともある）という点を共通に強調していた。

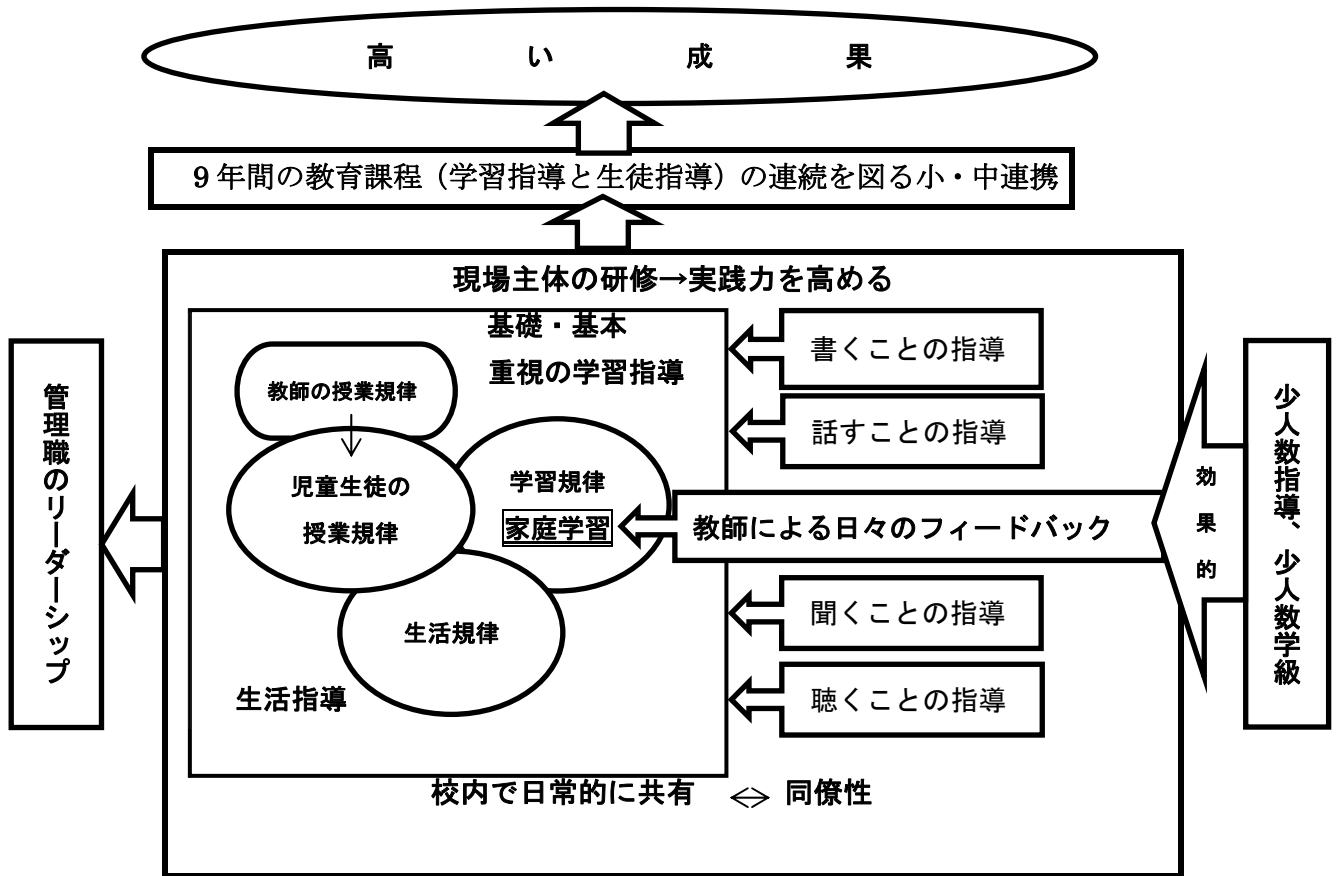
なお、今回調査した中で、特に Lowest SES、Lower middle SES の小学校が一様に、平成 25 年度の 6 年生の少人数学級編成が子どもの指導を充実させたと実感している。例えば、ある小学校では、現在の 6 年生は 1 年生から 20 名の少人数分割をしており、現在の学校でこうした経験をした唯一の学年であるからこそ、教師があらゆることに目が行き届き、高い成果を上げることができた（裏返せば、少人数指導の恩恵を受けていない他の学年には期待できないということ）と語っていた。この学校では 20 名が子どもの目が細かいところまで行き届く限度、家庭学習のチェックも 20 名だから可能だった、と語っている（D 市Ⅳ小学校）。またある小学校でも 15～16 人程度で無いと、本当に細かな指導は出来ない、家庭学習のチェックはこれでも精一杯と語っていた（C 市Ⅲ小学校）。中学校の中にも一学級 30 人～35 人であるがこれでも多く、20 名くらいになれば、と語っているケース（B 市Ⅱ中学校）もあった。

1 では家庭学習の教師によるフォローの重要性を指摘したが、宿題と自主学習、場合によっては日記の 3 点全てに教師が毎日目を通し、授業の合間に充実したコメントを書く作業は少人数学級であったからこそ実現していたといえるだろう。

なお、今回の調査対象校には小学校（一学年単学級を除く）では全学年ほぼ一学級の児童が 30 名台という学校も一校あり、中学校は全てが 30 名以上であり、そうした学校でも充実した指導はなされていた。その場合でも、TT や様々な形での加配教員、支援の人手が授業に取り入れられていた。こうした人的条件に恵まれていなければ、きめ細やかな指導は相当厳しいことがわかる。

以上（2）の特徴をまとめると以下の通りである。

図表 7-2 高い成果を上げた学校の取り組みの特徴の関係性



（3）その他の注目点

訪問した時期が2月ということもあり、光村図書を教科書に採用している2小学校はいずれも「海の命」（立松和平）の教材を使用した学習を行っていた。授業のスタイルは全く異なっており、児童の実態に応じてであろうが、教師の指導も個性的であった。また、ある中学校では一つの学年で4学級が国語は「少年の日の思い出」、数学では図形を扱う授業をしており、どの学級も「課題」は同一であり、学校として共通理解が図られている授業規律は守られているものの、指導法はやはり個々の教師によって違っていた。この中学校の教師に教科内で同じ指導法は採らないのかと尋ねた際、子どもが違えば教師の教え方も違って当然という答えが返ってきた。7校すべてが授業レベルで教師に特定の定型化された指導法を強制していなかった。

授業規律や学習規律そして生活規律は校内で共通理解を図り、その定着を徹底させようとする一方、授業の指導法は個々の教師の判断に委ねられているといえる。

そして訪問した全学校とも生活指導と学習指導の両面に力を入れており、特に中学校では2校が生活指導面での指導が学校改革、ひいては生徒の高い学力形成に繋がったと理解していた（Highest SESに属する中学校は、地域柄、そもそも生徒指導・生活指導に問題が無い学校であった）。中学校は生活指導の改革による生徒の変化が目に見えやすい。

一方、今回訪問した全小学校でも（既に）生活指導にはきめ細やかな指導を行っており、

今回訪問した 7 校中 6 校が 9 年間の実質を伴う小中連携に積極的に取り組んでいたことからすると、小中連携による生活指導の充実は、子どもが学習・学力面で高い成果を上げることに寄与するものと考えられる。

第8章 ウェイトづけ

土屋隆裕

(1) 保護者調査の回収状況

保護者調査の母集団は、平成25年度全国学力・学習状況調査で調査当日に調査を実施した学校の回答児童・生徒の保護者である。標本は、学校種ごとに、地域規模と学校規模を層とし学校を抽出単位とした層化集落抽出法（層内の抽出法は単純無作為集落抽出法）により選ばれている。母集団および標本の具体的なサイズは図表8-1-1のとおりである。なお、層の間で学校の抽出率が異なるのは、地域規模ごとに目標精度を定めたためである。

図表 8-1-1 保護者調査の母集団・抽出標本・有効回答

小学校

地域規模	学校規模	保護者調査母集団		抽出標本		有効回答	
		学校数	回答児童数	学校数	回答児童数	学校数	有効回答保護者数
大都市	小	667	16,735	7	147	5	96
	中	1,370	80,726	18	929	18	778
	大	1,720	189,240	22	2,438	22	2,165
中核市	小	528	10,467	17	317	15	263
	中	672	38,336	21	1,139	18	867
	大	938	103,270	30	3,284	30	2,962
その他の市	小	3,955	75,413	31	586	26	464
	中	3,062	167,311	20	1,210	19	1,038
	大	3,130	324,910	20	2,245	20	1,899
町村	小	1,242	22,987	41	664	37	569
	中	630	32,308	21	1,007	21	960
	大	384	36,406	12	1,189	11	972
へき地	小	1,819	15,507	158	1,250	139	1,005
	中	133	4,158	7	257	6	206
	大	23	1,631	4	246	4	139
全 体		20,273	1,119,405	429	16,908	391	14,383

中学校

地域規模	学校規模	保護者調査母集団		抽出標本		有効回答	
		学校数	回答生徒数	学校数	回答生徒数	学校数	有効回答保護者数
大都市	小	592	45,589	16	1,225	15	900
	中	686	101,218	24	3,321	23	2,713
	大	410	95,816	12	2,691	12	2,124
中核市	小	346	22,621	19	1,271	18	1,093
	中	341	48,540	18	2,441	18	2,233
	大	308	68,963	16	3,700	16	3,239
その他の市	小	2,334	137,071	38	2,463	36	2,202
	中	1,517	212,527	18	2,621	18	2,234
	大	831	181,603	8	1,715	8	1,460
町村	小	746	38,518	37	1,806	36	1,613
	中	252	33,415	16	1,959	15	1,609
	大	82	17,043	6	1,202	6	1,086
へき地		1,016	20,330	182	3,639	166	3,092
全 体		9,461	1,023,254	410	30,054	387	25,598

保護者調査の有効回答状況は図表8-1-2のとおりである。保護者調査における有効回答とは、児童・生徒との対応がつく保護者の回答データのことを言い、未回収を含めたそれ以外

の保護者を無効回答と言う。したがって回収はされても、児童・生徒との対応がつかない保護者の回答データは無効回答とし、本研究では扱わないこととしている。図表 8-1-2 における有効完全回答学校とは、その学校の児童・生徒の保護者が全て有効回答であった学校を言う。つまり、全ての児童・生徒に対応する保護者データがある学校のことである。有効不完全回答学校とは、一人以上の保護者が有効回答ではあるが、有効完全回答学校ではない学校のことを言う。つまり、一部の児童・生徒に対応する保護者データがない学校のことである。

図表 8-1-2 保護者調査の有効回答状況

小学校

	母集団	抽出標本	有効回答学校		
			全体	有効完全回答学校	有効不完全回答学校
学校数	20,273	429	391	157	234
在籍児童数	1,140,003	17,231	16,423	1,647	14,776
回答児童数	1,119,405	16,908	16,116	1,620	14,496
完全当日実施	1,102,216	16,669	15,885	1,612	14,273
不完全当日実施	11,264	158	154	2	152
完全後日実施等	5,925	81	77	6	71
有効回答保護者数			14,383	1,620	12,763
完全当日実施			14,281	1,612	12,669
不完全当日実施			77	2	75
完全後日実施等			25	6	19

中学校

	母集団	抽出標本	有効回答学校		
			全体	有効完全回答学校	有効不完全回答学校
学校数	9,461	410	387	104	283
在籍生徒数	1,066,119	31,402	30,707	1,550	29,157
回答生徒数	1,023,254	30,054	29,380	1,489	27,891
完全当日実施	1,014,685	29,795	29,128	1,484	27,644
不完全当日実施	6,937	199	192	5	187
完全後日実施等	1,632	60	60	0	60
有効回答保護者数			25,598	1,489	24,109
完全当日実施			25,490	1,484	24,006
不完全当日実施			91	5	86
完全後日実施等			17	0	17

有効回答保護者は、調査協力を可とし、回答児童生徒との対応がつく回答保護者

有効回答学校は、一人以上の有効回答保護者がいる学校

有効完全回答学校は、全ての回答児童生徒の保護者が有効回答保護者である学校

有効不完全回答学校は、保護者が有効回答保護者ではない回答児童生徒がいる学校

完全当日実施は、4教科と質問紙を全て当日実施した回答児童生徒

完全後日実施等は、4教科と質問紙を一つも当日実施していない回答児童生徒

不完全当日実施は、それ以外の回答児童生徒

有効完全回答学校と有効不完全回答学校を合わせて有効回答学校とし、それ以外の標本学

校を無効回答学校すると、抽出標本サイズに対する有効回答学校の割合は

$$\text{有効回答学校の割合（小学校）} = 391 \text{ 校} / 429 \text{ 校} = 91.1\% \quad (1)$$

$$\text{有効回答学校の割合（中学校）} = 387 \text{ 校} / 410 \text{ 校} = 94.4\% \quad (2)$$

であり、抽出標本における児童・生徒数に対する有効回答保護者の割合は以下のとおりである。

$$\text{有効回答保護者の割合（小学校）} = 14,383 \text{ 人} / 16,908 \text{ 人} = 85.1\% \quad (3)$$

$$\text{有効回答保護者の割合（中学校）} = 25,598 \text{ 人} / 30,054 \text{ 人} = 85.2\% \quad (4)$$

（２）保護者調査データのウェイト作成方法

１ 最終ウェイト

前節で見たとおり、保護者調査の標本は層によって抽出率が異なる。また有効回答率は100%ではない。そこで、本研究の分析では全てウェイトを用いることでこれらの状況に対応することとする。第 i 保護者のウェイトを $W_{F,i}$ とすると、例えば変数 y_i の母集団平均の推定量 $\hat{\mu}_y$ は次式となる。

$$\hat{\mu}_y = \sum_i W_{F,i} y_i / \sum_i W_{F,i} \quad (5)$$

ウェイト $W_{F,i}$ は、次式で求める。

$$W_{F,i} = W_i \times G_{NR1,i} \times G_{NR2,i} \times G_{C,i} \times G_{T1,i} \times G_{T2,i} \quad (6)$$

各項の意味は以下のとおりである。

W_i : 標本抽出方法を反映した抽出ウェイト

$G_{NR1,i} \times G_{NR2,i}$: 無効回答の調整ウェイト

$G_{C,i}$: キャリブレーションのためのウェイト

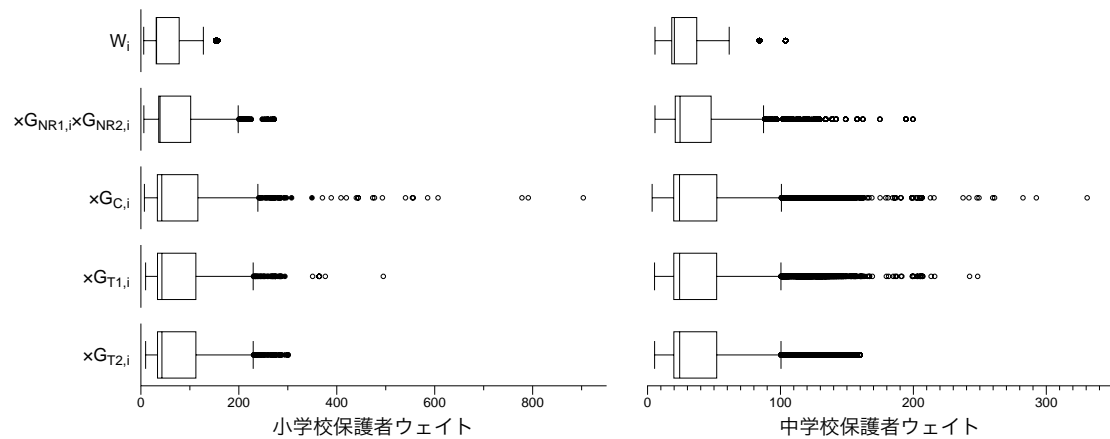
$G_{T1,i} \times G_{T2,i}$: トリミングのためのウェイト

各ウェイトの具体的な算出方法は以下で詳述するが、各段階でのウェイトの分布は図表 8-2-1 に示すとおりである。

２ 抽出ウェイト

抽出ウェイト W_i は保護者調査の対象校の抽出方法を反映するためのウェイトで、地域規模と学校規模を組み合わせた層ごとに学校の抽出率の逆数によって求める。

$$W_i = \frac{\text{母集団学校数}_h}{\text{標本学校数}_h} = V_m, \quad i \in \text{第 } m \text{ 学校} \ \& \ m \in \text{第 } h \text{ 層} \quad (7)$$



図表 8-2-1 ウェイトの箱ひげ図

3 無効回答の調整ウェイト

無効回答の調整は、有効不完全回答学校における保護者の無効回答と、標本学校における無効回答学校の二種類について行う。

まず有効不完全回答学校における保護者の無効回答のための調整を行うため、有効不完全回答学校における有効回答と無効回答を基準変数とした分類木によって、保護者をいくつかのウェイト調整群に分割する。分類に用いた変数は、児童・生徒の四つのテスト結果による学力層と児童生徒質問紙の全ての項目に対する回答に加え、学校の都市規模、学校規模、地域特性¹（次章参照）であり、ウェイトとして抽出ウェイト W_i を用いた。結果は図表 8-2-2 および図表 8-2-3 のとおりである。例えば小学校では、「Q040 家で、学校の宿題をしていますか」に対して“している”と回答し、国語 B の学力層が A あるいは B である児童の保護者の加重有効回答率は 90.14%であるのに対し、「Q040 家で、学校の宿題をしていますか」および「Q046 学校で友達に会うのは楽しいと思いますか」に対して“どちらかといえばしている”から“全くしていない”のいずれかを選び、「Q063 学校のきまりを守っていますか」に対して“どちらかといえば当てはまらない”あるいは“当てはまらない”を選んだ児童の保護者の有効回答率は 60.47%である。

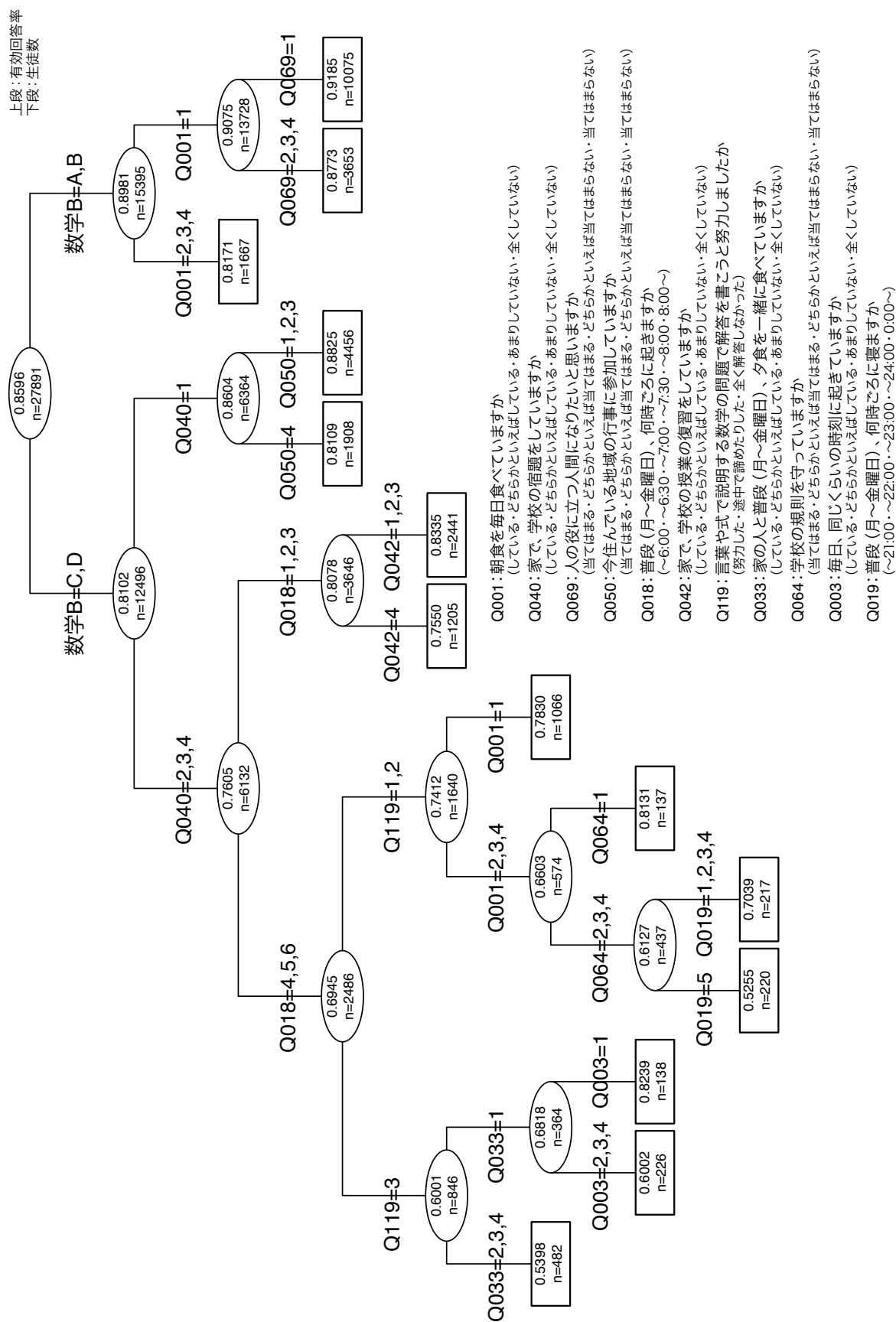
保護者の無効回答の調整は、これらの各ウェイト調整群の有効回答率の逆数によって行う。

$$G_{NR1,i} = \begin{cases} 1 & \text{if } i \in \text{有効不完全回答学校以外} \\ \frac{S_{R_a} + S_{NR_a}}{S_{R_a}} & \text{if } i \in R_a \\ 0 & \text{if } i \in NR_a \end{cases} \quad (8)$$

ただし S_{R_a} は第 a ウェイト調整群の有効回答保護者 R_a のウェイト合計 $S_{R_a} = \sum_{i \in R_a} W_i$ であり、 S_{NR_a} は第 a ウェイト調整群の無効回答保護者 NR_a のウェイト合計 $S_{NR_a} = \sum_{i \in NR_a} W_i$ である。

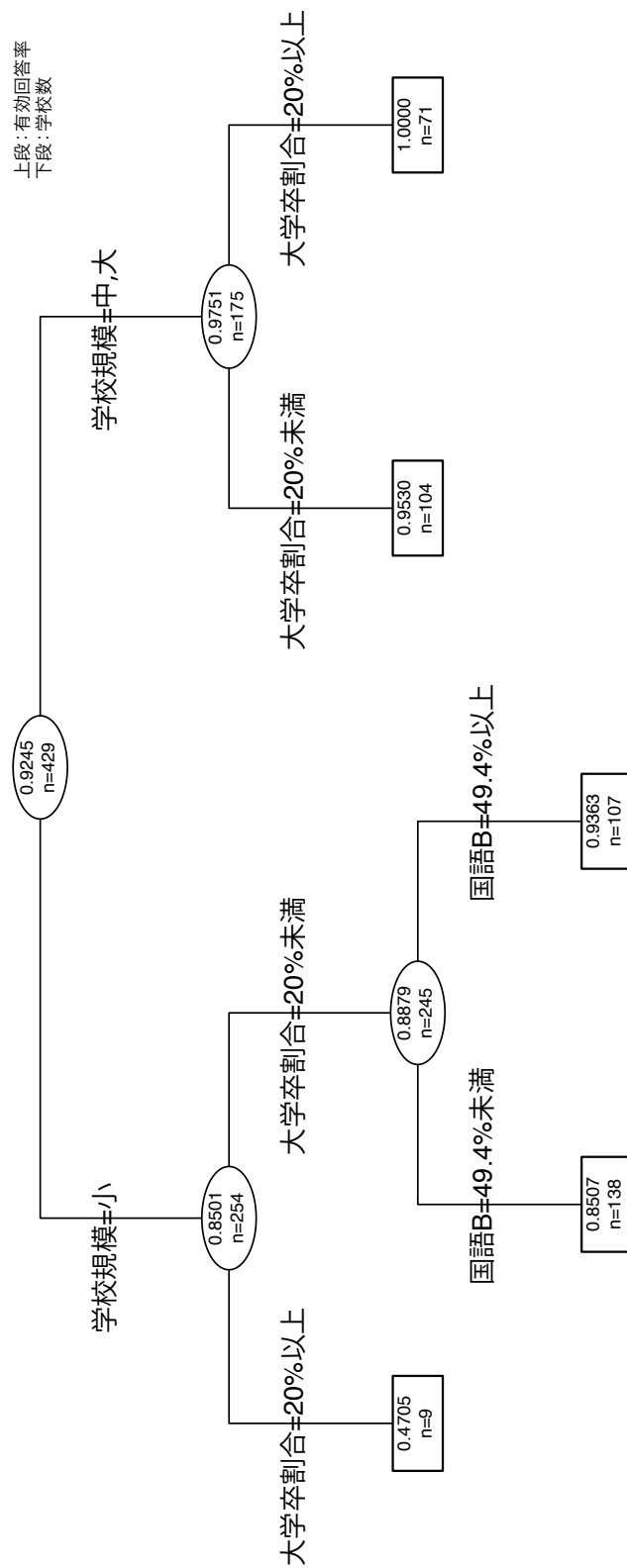
¹ここで用いたのは、特定サービス産業就業者割合、大学卒業者割合、専門・事務・販売職業就業者割合の三つである。

有効不完全回答学校における保護者の有効回答・無効回答(中学校)



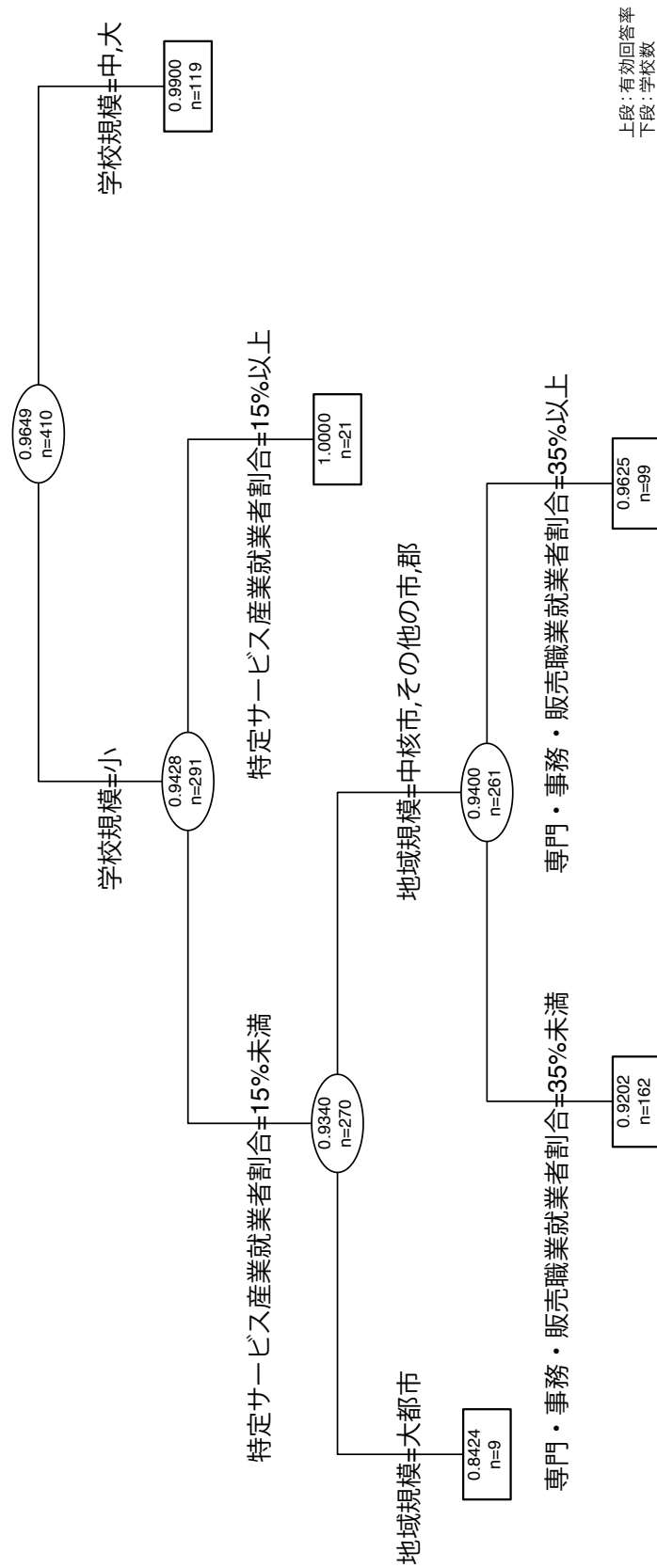
図表 8-2-3 有効不完全回答学校における分類木（中学校）

保護者調査対象学校の有効回答・無効回答（小学校）



図表 8-2-4 標本学校における分類木（小学校）

保護者調査対象学校の有効回答・無効回答（中学校）



図表 8-2-5 標本学校における分類木（中学校）

次に標本学校における学校の無効回答のための調整を行うため、保護者の場合と同様に、標本学校における有効回答と無効回答を基準変数とした分類木によって標本学校をいくつかのウェイト調整群に分割する。分類に用いた変数は、四つのテストの学校平均（全国平均と比べた大小）と学校質問紙の全ての項目に対する回答に加え、学校の都市規模、学校規模、地域特性であり、ウェイトとして抽出ウェイト W_i を用いた。結果は図表 8-2-4 および図表 8-2-5 のとおりである。小学校、中学校ともに小規模校の有効回答率が低いことが分かる。

学校の無効回答の調整は、分類木によって得られた各ウェイト調整群の有効回答率の逆数によって行う。

$$G_{NR2,i} = \begin{cases} \frac{T_{R_b} + T_{NR_b}}{T_{R_b}} & \text{if } m \in R_b \\ 0 & \text{if } m \in NR_b \end{cases} \quad (9)$$

ただし T_{R_b} は第 b ウェイト調整群の有効回答学校 R_b のウェイト合計 $T_{R_b} = \sum_{m \in R_b} V_m$ であり、 T_{NR_b} は第 b ウェイト調整群の有効回答学校以外 NR_b のウェイト合計 $T_{NR_b} = \sum_{m \in NR_b} V_m$ である。

4 ウェイトのキャリブレーション

学力テスト結果などのいくつかの重要な変数に関して、標本による推定値と母集団における真値とを一致させるよう、母集団情報をベンチマークとしたウェイトのキャリブレーションを行う。一致させる変数は層別回答児童生徒数、4教科の当日実施正答数合計、4教科の当日実施児童生徒数、性別児童生徒数とした。キャリブレーション用の調整ウェイトは次式によって求める。

$$G_{C,i} = \frac{L(U-1) + U(1-L)\exp(Ax'_i\beta)}{(U-1) + (1-L)\exp(Ax'_i\beta)} \quad (10)$$

ただし $A = (U-L)/\{(U-1)(1-L)\}$ であり、 $G_{C,i}$ の下限は $L=0$ 、上限は $U=5$ (小学校) あるいは $U=3$ (中学校) とした。

5 ウェイトのトリミング

極端に大きなあるいは小さなウェイトは推定量の分散を拡大させるため好ましくない。図表 8-2-1 に示されるように、キャリブレーションによって極端に大きなウェイトが生じたため、それらをトリミングすることとした。なお、このトリミングによってキャリブレーションさせた変数であっても推定値と真値は一致しなくなるが、両者の差はごくわずかであることを確認しながらトリミングの範囲を定めた。

ウェイトのトリミングは二段階で行う。一段階目のトリミングはキャリブレーションのた

めの調整ウェイト $G_{C,i}$ に対して行う。

$$G_{T1,i} = \begin{cases} K_1 & \text{if } C_{1,L} \leq G_{C,i} \leq C_{1,U} \\ \frac{C_{1,L}}{G_{C,i}} & \text{if } C_{1,L} > G_{C,i} \\ \frac{C_{1,U}}{G_{C,i}} & \text{if } G_{C,i} > C_{1,U} \end{cases} \quad (11)$$

K_1 は、トリミング後のウェイト合計が $\sum_i W_i G_{NR1,i} G_{NR2,i} G_{C,i} G_{T1,i} = N$ となるよう調整する係数であり、トリミングのための上下限は $C_{1,L} = 0.8$, $C_{1,U} = 2.0$ (小学校) あるいは $C_{1,L} = 0.8$, $C_{1,U} = 1.3$ (中学校) とした。

二段階目のトリミングは、一段階目のトリミングを施したウェイト全体に対して行う。

$$G_{T2,i} = \begin{cases} K_2 & \text{if } W_i G_{NR1,i} G_{NR2,i} G_{C,i} G_{T1,i} \leq C_2 \\ \frac{C_2}{W_i G_{NR1,i} G_{NR2,i} G_{C,i} G_{T1,i}} & \text{if } W_i G_{NR1,i} G_{NR2,i} G_{C,i} G_{T1,i} > C_2 \end{cases} \quad (12)$$

K_2 は、トリミング後のウェイト合計が $\sum_i W_i G_{NR1,i} G_{NR2,i} G_{C,i} G_{T1,i} G_{T2,i} = N$ となるよう調整する係数であり、トリミングのための上限は $C_2 = 300$ (小学校) あるいは $C_2 = 160$ (中学校) とした。

(3) 保護者調査における標準誤差の算出方法

保護者調査における分析では (6) 式に示すウェイトを用いることとしている。ウェイトの算出方法は単純ではないため、推定量の標準誤差はもはや理論式で示すことはほぼ不可能である。そこで本研究ではジャックナイフ法を用いて推定量の標準誤差を算出することとする。具体的には推定量 $\hat{\theta}$ の標準誤差 $SE(\hat{\theta})$ を次式で求める。

$$SE(\hat{\theta}) = \sqrt{\frac{G-1}{G} \sum_{g=1}^G (\hat{\theta}_{(g)} - \hat{\theta})^2} \quad (13)$$

ただし小学校では $G = 429$ であり、中学校では $G = 410$ である。また $\hat{\theta}$ は全ての標本学校を用いたときの推定値であり、 $\hat{\theta}_{(g)}$ は第 g 標本学校の保護者の抽出ウェイトを $W_i = 0$ 、それ以外の標本学校の保護者の抽出ウェイトを $G/(G-1) \times W_i$ として、前項の方法により作成したウェイトを用いたときの推定値である。なお、この方法は標本が層化抽出されていることを考慮に入れていないが、(13) 式における係数が単純になること、層化抽出を考慮しないことにより標準誤差は大きめに推定されるが、その程度は試算したところごくわずかであったことから、(13) 式を用いることとした。

第9章 学校の地域特性

土屋隆裕

(1) 国勢調査結果に基づく学校の地域特性

前節のウェイト調整に用いる変数の候補としては、学力調査結果や児童生徒質問紙結果、学校質問紙結果の他に、学校の地域的な特性も考え得る。そこで学校の所在地をもとに、平成22年国勢調査結果に基づく地域特性を各学校に付与することとした。ただし、各学校の“地域”をどのように定義すればよいかという問題が生じる。本来であれば、学区に相当する地理的な範囲を各学校の“地域”と定めるのが望ましい。しかし全ての学校の学区を調査するのは困難である上、国勢調査の結果は字・丁目が最も細かい集計レベルであり、それらは学区とは必ずしも対応しない。

図表 9-1-1 保護者調査の標本学校における学校の地域特性と平均正答率との相関係数

小学校					中学校				
T12_21	国語A	国語B	算数A	算数B	T12_21	国語A	国語B	数学A	数学B
市区町村	0.217	0.325	0.181	0.326	市区町村	0.175	0.266	0.257	0.284
大字・町	0.366	0.466	0.317	0.438	大字・町	0.217	0.295	0.297	0.328
字・丁目	0.328	0.426	0.309	0.407	字・丁目	0.166	0.219	0.209	0.246
5,000人	0.388	0.487	0.347	0.472	5,000人	0.292	0.368	0.360	0.386
10,000人	0.371	0.479	0.326	0.461	10,000人	0.295	0.373	0.371	0.398
15,000人	0.374	0.473	0.323	0.464	15,000人	0.287	0.369	0.369	0.393

T14_9	国語A	国語B	算数A	算数B	T14_9	国語A	国語B	数学A	数学B
市区町村	0.201	0.326	0.179	0.337	市区町村	0.195	0.281	0.324	0.354
大字・町	0.378	0.492	0.334	0.467	大字・町	0.255	0.322	0.352	0.395
字・丁目	0.354	0.469	0.326	0.448	字・丁目	0.224	0.286	0.290	0.336
5,000人	0.378	0.493	0.344	0.481	5,000人	0.306	0.380	0.424	0.453
10,000人	0.370	0.493	0.331	0.483	10,000人	0.313	0.383	0.434	0.466
15,000人	0.368	0.485	0.322	0.482	15,000人	0.314	0.388	0.438	0.469

T17_13	国語A	国語B	算数A	算数B	T17_13	国語A	国語B	数学A	数学B
市区町村	0.216	0.324	0.178	0.341	市区町村	0.184	0.268	0.285	0.311
大字・町	0.359	0.451	0.307	0.428	大字・町	0.175	0.236	0.244	0.289
字・丁目	0.305	0.408	0.285	0.396	字・丁目	0.118	0.163	0.145	0.196
5,000人	0.379	0.481	0.334	0.476	5,000人	0.273	0.333	0.348	0.374
10,000人	0.370	0.474	0.322	0.468	10,000人	0.290	0.353	0.374	0.403
15,000人	0.375	0.471	0.321	0.472	15,000人	0.287	0.357	0.382	0.406

そのためここでは図表 9-1-1 に示すように、“地域”の定義として6通りを考えることとした。まず最も広い範囲として、その学校の所在地を含む市区町村とした場合、それよりも狭い範囲として当該校を含む大字・町とした場合、さらに狭い範囲として字・丁目のみとした場合の3通りを考えた。現実には、市区町村では各学校の“地域”としては広すぎであり、後二者では狭すぎであると考えられる。そこで、学校の所在地から近い字・丁目を順に当該校の“地域”に加え、その“地域”の人口が5,000人あるいは10,000人、さらには15,000人を超えるまで“地域”を拡大した場合も考えることとした。なお、追加する字・丁目は同じ

市区町村内に限ることとしたため、小さな町村などでは“地域”の人口が基準に満たない場合もある。

図表 9-1-1 は、“地域”における変数 T12_21、T14_9、T17_13（これらの意味は後述する）と、保護者調査の標本学校における平均正答率との（人数による重みつき）相関係数である。小学校では、地域特性と学力調査結果との相関係数が最も高くなる 5,000 人規模を各学校の“地域”と定めるのがよさそうである。また中学校では 10,000 人規模あるいは 15,000 人規模とするのがよさそうであり、全国の中学校数は小学校数のほぼ半分であることから、小学校の“地域”の 2 倍である 10,000 人規模を“地域”と定めることとする。

図表 9-1-2 は、以上のようにして定義した学校の“地域”ごとに国勢調査結果に基づいて様々な指標を求め、それらと保護者調査の標本学校における学力調査結果との（人数による重みつき）相関係数を求めたものである。表中の変数の詳細な説明は割愛するが、変数名の T に続く数値は国勢調査の小地域集計結果の表番号を表す。また、表中で相関係数の絶対値が 0.3 を超えるものについては色をつけてある。図表 9-1-2 によれば、地域の年齢構成や配偶関係、世帯の種類や家族類型、住居の種類や住宅の建て方、労働力状態は学力調査結果との相関は高くなく、産業、最終卒業学校の種類、職業との相関が高いようである。特に、正の相関が高い変数をもとに作成した以下の 3 つの変数を地域特性として用いることとする。

・ T12_21 ： 特定サービス産業就業者割合

（国勢調査結果の表 12 において「総数（産業）」に対する「G 情報通信業」、「J 金融業、保険業」、「K 不動産業、物品賃貸業」、「L 学術研究、専門・技術サービス業」、「O 教育、学習支援業」の合計の割合）

・ T14_9 ： 大学卒業者割合

（国勢調査結果の表 14 において「小学校・中学校卒業者」、「高校・旧中卒業者」、「短大・高専卒業者」、「大学・大学院卒業者」の合計に対する「大学・大学院卒業者」の割合）

・ T17_13 ： 専門・事務・販売職業就業者割合

（国勢調査結果の表 17 において「総数（職業）」に対する「B 専門的・技術的職業従事者」、「C 事務従事者」、「D 販売従事者」の合計の割合）

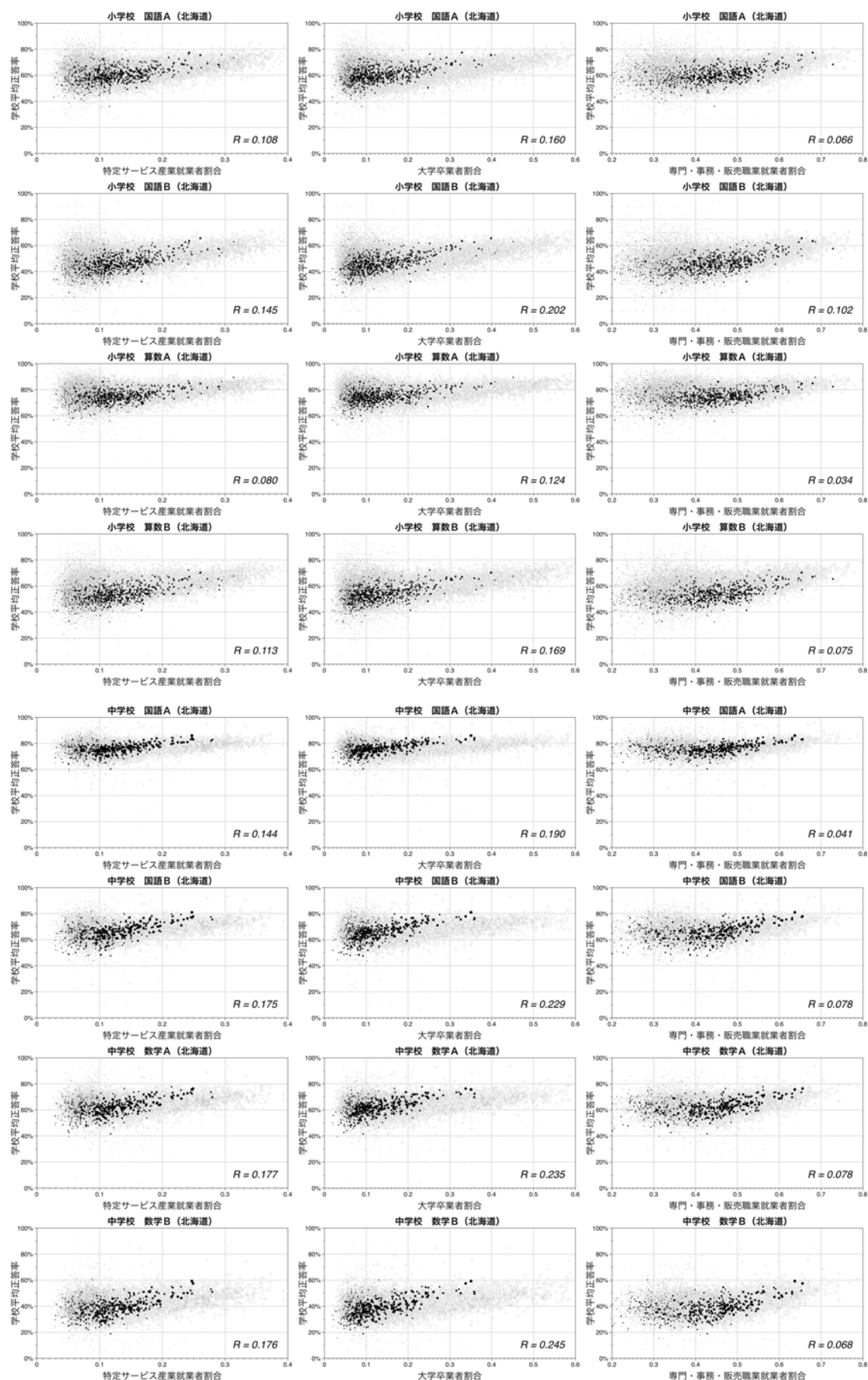
図表 9-1-2 保護者調査の標本学校における学校の地域特性と平均正答率との相関係数

		小学校 (5,000人)				中学校 (10,000人)			
変数名	説明	国語A	国語B	算数A	算数B	国語A	国語B	数学A	数学B
T3_1	T3年齢3/T3年齢1	0.057	-0.001	0.084	-0.006	-0.100	-0.148	-0.170	-0.157
T3_2	T3年齢3/(T3年齢1 + T3年齢2)	0.008	-0.066	0.048	-0.073	-0.126	-0.191	-0.214	-0.203
T3_3	T3年齢3/T3年齢2	-0.000	-0.077	0.040	-0.084	-0.131	-0.197	-0.220	-0.210
T3_4	T3年齢1/(T3年齢2 + T3年齢3)	-0.123	-0.086	-0.137	-0.093	0.107	0.123	0.144	0.120
T4_1	T4未婚 / T4配偶総数	0.097	0.177	0.058	0.201	-0.079	0.045	0.011	0.022
T4_2	T4有配偶 / T4配偶総数	-0.052	-0.084	-0.047	-0.104	0.289	0.209	0.245	0.248
T4_3	T4未婚 / T4有配偶	0.117	0.173	0.089	0.197	-0.150	-0.032	-0.073	-0.071
T5_1	T5 1 人世帯数 / T5 人員世帯総数	0.186	0.247	0.169	0.250	-0.142	-0.098	-0.082	-0.081
T5_2	T5 1 人世帯数 / T5 人員総数	0.202	0.258	0.181	0.262	-0.122	-0.077	-0.058	-0.060
T5_3	(T5 1 人世帯数 + T5 2 人世帯数) / T5 人員世帯総数	0.159	0.208	0.157	0.210	-0.166	-0.141	-0.112	-0.105
T5_4	(T5 1 人世帯数 + 2*T5 2 人世帯数) / T5 人員総数	0.166	0.209	0.160	0.212	-0.143	-0.119	-0.082	-0.076
T6_1	T6単独 / T6家族類型総数	0.202	0.258	0.181	0.262	-0.122	-0.077	-0.058	-0.060
T6_2	T6夫婦のみ / T6核家族	0.095	0.047	0.126	0.034	-0.021	-0.103	-0.099	-0.091
T6_3	T6核家族 / T6親族のみ	0.045	0.140	0.023	0.155	-0.036	0.034	0.128	0.129
T7_1	T7持ち家 / T7住居総数	0.078	-0.010	0.074	-0.022	0.113	0.048	0.036	0.044
T7_2	T7公営借家 / T7住居総数	-0.245	-0.209	-0.190	-0.196	-0.104	-0.084	-0.061	-0.073
T7_3	T7給与住宅 / T7住居総数	0.143	0.161	0.132	0.156	0.060	0.036	0.062	0.071
T8_1	T8一戸建 / T8建て方総数	-0.009	-0.129	-0.014	-0.129	-0.039	-0.128	-0.182	-0.179
T8_2	T8共同住宅 / T8建て方総数	0.022	0.143	0.022	0.142	0.055	0.143	0.196	0.191
T10_1	T10労働力 / (T10労働力 + T10非労働力)	-0.138	-0.079	-0.145	-0.083	0.051	0.106	0.102	0.101
T10_2	T10男労働力 / (T10男労働力 + T10男非労働力)	-0.113	-0.041	-0.116	-0.058	0.073	0.131	0.154	0.148
T10_3	T10女労働力 / (T10女労働力 + T10女非労働力)	-0.124	-0.099	-0.133	-0.080	0.043	0.080	0.059	0.058
T11_1	T11雇用者 / T11地位総数	0.003	0.075	0.001	0.079	0.136	0.185	0.175	0.193
T12_1	T12産業A / T12産業総数	-0.051	-0.131	-0.025	-0.125	-0.020	-0.072	-0.112	-0.124
T12_2	T12産業B / T12産業総数	-0.053	-0.078	-0.047	-0.114	-0.021	-0.057	-0.047	-0.067
T12_3	T12産業C / T12産業総数	-0.056	-0.115	-0.061	-0.121	-0.012	-0.084	-0.087	-0.120
T12_4	T12産業D / T12産業総数	-0.252	-0.332	-0.271	-0.387	-0.202	-0.234	-0.325	-0.336
T12_5	T12産業E / T12産業総数	-0.153	-0.155	-0.138	-0.129	-0.011	-0.060	0.023	0.031
T12_6	T12産業F / T12産業総数	0.112	0.106	0.105	0.117	0.011	0.011	0.053	0.034
T12_7	T12産業G / T12産業総数	0.235	0.344	0.217	0.312	0.170	0.282	0.259	0.287
T12_8	T12産業H / T12産業総数	-0.319	-0.302	-0.321	-0.334	-0.205	-0.123	-0.162	-0.163
T12_9	T12産業I / T12産業総数	0.075	0.128	0.066	0.113	0.072	0.095	0.134	0.145
T12_10	T12産業J / T12産業総数	0.399	0.469	0.374	0.464	0.348	0.387	0.431	0.445
T12_11	T12産業K / T12産業総数	0.261	0.346	0.237	0.337	0.078	0.172	0.217	0.234
T12_12	T12産業L / T12産業総数	0.325	0.428	0.281	0.403	0.256	0.325	0.314	0.347
T12_13	T12産業M / T12産業総数	-0.022	-0.017	0.002	0.006	-0.079	-0.076	-0.122	-0.099
T12_14	T12産業N / T12産業総数	-0.126	-0.128	-0.079	-0.124	-0.040	-0.031	-0.072	-0.070
T12_15	T12産業O / T12産業総数	0.367	0.388	0.315	0.411	0.299	0.286	0.257	0.267
T12_16	T12産業P / T12産業総数	0.178	0.087	0.140	0.127	-0.021	-0.059	-0.116	-0.111
T12_17	T12産業Q / T12産業総数	-0.108	-0.192	-0.073	-0.204	-0.004	-0.078	-0.118	-0.135
T12_18	T12産業R / T12産業総数	-0.116	-0.069	-0.143	-0.068	-0.172	-0.056	-0.127	-0.146
T12_19	T12産業S / T12産業総数	0.017	0.006	0.068	-0.002	-0.039	-0.048	-0.088	-0.131
T12_20	T12産業T / T12産業総数	0.046	0.124	0.025	0.131	-0.045	0.021	0.089	0.080
T12_21	(T12産業G+T12産業J+T12産業K+T12産業L+T12産業O) / T12産業総数	0.388	0.487	0.347	0.472	0.295	0.373	0.371	0.398
T12_22	(T12産業G+T12産業J+T12産業K+T12産業L+T12産業O - T12産業D) / T12産業総数	0.391	0.495	0.364	0.502	0.301	0.374	0.402	0.427
T13_1	T13居住1 / T13居住総数	-0.145	-0.229	-0.131	-0.224	-0.013	-0.045	-0.119	-0.123
T13_2	(T13居住2) / T13居住総数	0.109	0.147	0.099	0.163	-0.074	-0.032	-0.030	-0.038
T13_3	(T13居住2+T13居住3) / T13居住総数	0.163	0.244	0.164	0.246	0.018	0.086	0.095	0.076
T13_4	(T13居住2+T13居住3+T13居住4) / T13居住総数	0.135	0.229	0.135	0.231	0.081	0.144	0.184	0.170
T14_1	T14在学 / T14学歴卒業	0.165	0.226	0.159	0.263	0.211	0.255	0.271	0.261
T14_2	T14中学 / T14学歴卒業	-0.190	-0.303	-0.156	-0.321	-0.194	-0.270	-0.309	-0.326
T14_3	T14高校 / T14学歴卒業	-0.239	-0.334	-0.226	-0.319	-0.143	-0.217	-0.273	-0.278
T14_4	T14短大 / T14学歴卒業	0.203	0.323	0.179	0.323	0.259	0.340	0.331	0.351
T14_5	T14大学 / T14学歴卒業	0.383	0.502	0.349	0.488	0.346	0.410	0.461	0.498
T14_6	T14中学 / (T14中学 + T14高校 + T14短大 + T14大学)	-0.234	-0.346	-0.197	-0.358	-0.238	-0.309	-0.338	-0.361
T14_7	T14高校 / (T14中学 + T14高校 + T14短大 + T14大学)	-0.338	-0.423	-0.323	-0.392	-0.240	-0.296	-0.334	-0.355
T14_8	T14短大 / (T14中学 + T14高校 + T14短大 + T14大学)	0.187	0.313	0.161	0.316	0.202	0.297	0.303	0.313
T14_9	T14大学 / (T14中学 + T14高校 + T14短大 + T14大学)	0.378	0.493	0.344	0.481	0.313	0.383	0.434	0.466
T14_10	(T14短大+T14大学) / (T14中学 + T14高校 + T14短大 + T14大学)	0.346	0.470	0.313	0.460	0.295	0.374	0.415	0.442
T17_1	T17職業A / T17職業総数	0.303	0.310	0.257	0.271	0.167	0.125	0.153	0.163
T17_2	T17職業B / T17職業総数	0.447	0.503	0.382	0.520	0.302	0.344	0.327	0.361
T17_3	T17職業C / T17職業総数	0.285	0.408	0.261	0.382	0.269	0.336	0.370	0.393
T17_4	T17職業D / T17職業総数	0.221	0.313	0.200	0.306	0.181	0.238	0.283	0.303
T17_5	T17職業E / T17職業総数	-0.097	-0.136	-0.052	-0.098	-0.188	-0.191	-0.266	-0.248
T17_6	T17職業F / T17職業総数	-0.096	-0.098	-0.047	-0.103	-0.108	-0.078	-0.077	-0.132
T17_7	T17職業G / T17職業総数	-0.071	-0.152	-0.044	-0.161	-0.027	-0.083	-0.115	-0.132
T17_8	T17職業H / T17職業総数	-0.241	-0.281	-0.222	-0.261	-0.090	-0.162	-0.116	-0.116
T17_9	T17職業I / T17職業総数	-0.379	-0.460	-0.378	-0.472	-0.287	-0.275	-0.346	-0.367
T17_10	T17職業J / T17職業総数	-0.289	-0.387	-0.312	-0.438	-0.237	-0.267	-0.353	-0.370
T17_11	T17職業K / T17職業総数	-0.422	-0.440	-0.376	-0.430	-0.322	-0.293	-0.343	-0.362
T17_12	T17職業L / T17職業総数	0.047	0.124	0.028	0.132	-0.046	0.019	0.088	0.079
T17_13	(T17職業B+T17職業C+T17職業D) / T17職業総数	0.379	0.481	0.334	0.476	0.290	0.353	0.374	0.403
T17_14	(T17職業B+T17職業C+T17職業D-T17職業I-T17職業J-T17職業K) / T17職業総数	0.426	0.528	0.389	0.532	0.329	0.377	0.419	0.449

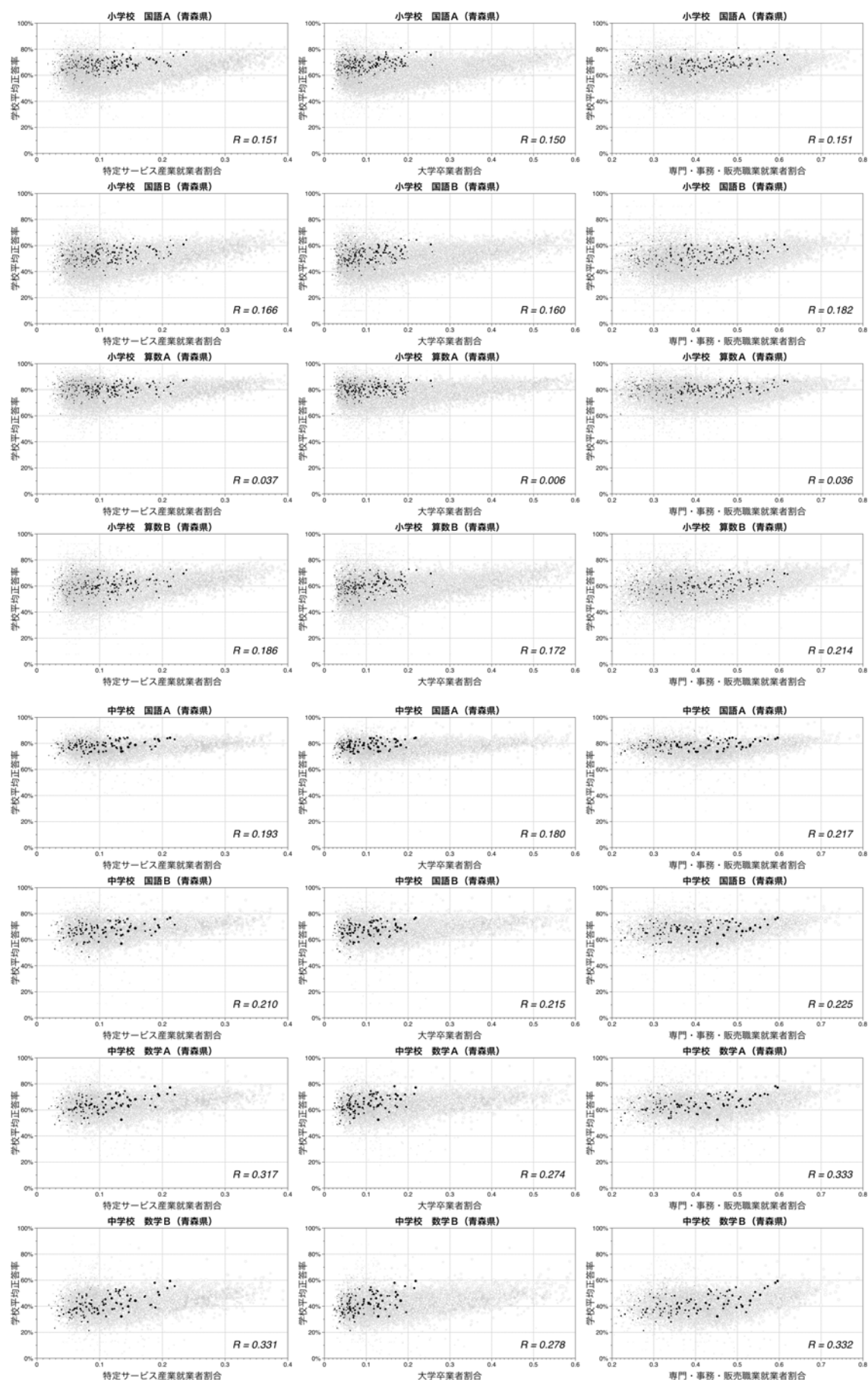
(2) 学校の地域特性と学校平均正答率

次ページ以降のグラフは、都道府県ごとに、学校の地域特性と平均正答率とを用いて保護者調査の母集団学校をプロットしたものである。グレーの点は全国の学校を表し、当該都道府県の学校を黒丸で示す。また点の大きさは学校の人数に比例させてある。さらに R の値は当該都道府県における地域特性と学校の平均正答率との (人数による重みつき) 相関係数である。

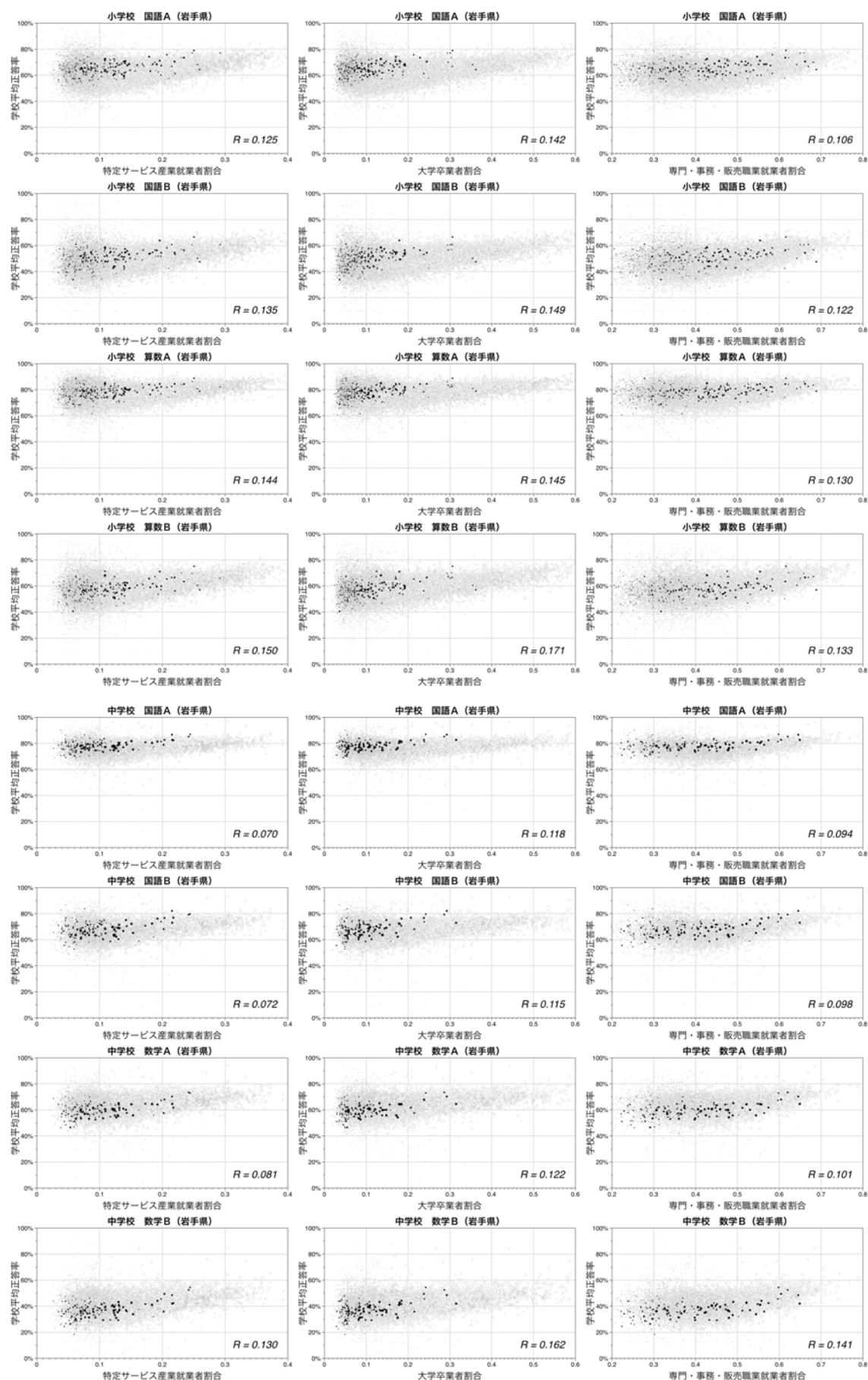
東京都や神奈川県などでは、地域特性と学校の平均正答率との相関は高い一方で、秋田県などでは相関は負となっている。つまり全国的に見れば、地域特性と学校の平均正答率とは関連があるものの、その関連の程度や方向は都道府県によって異なる。都道府県の間でそのような差異が生じる理由については今後の研究課題である。



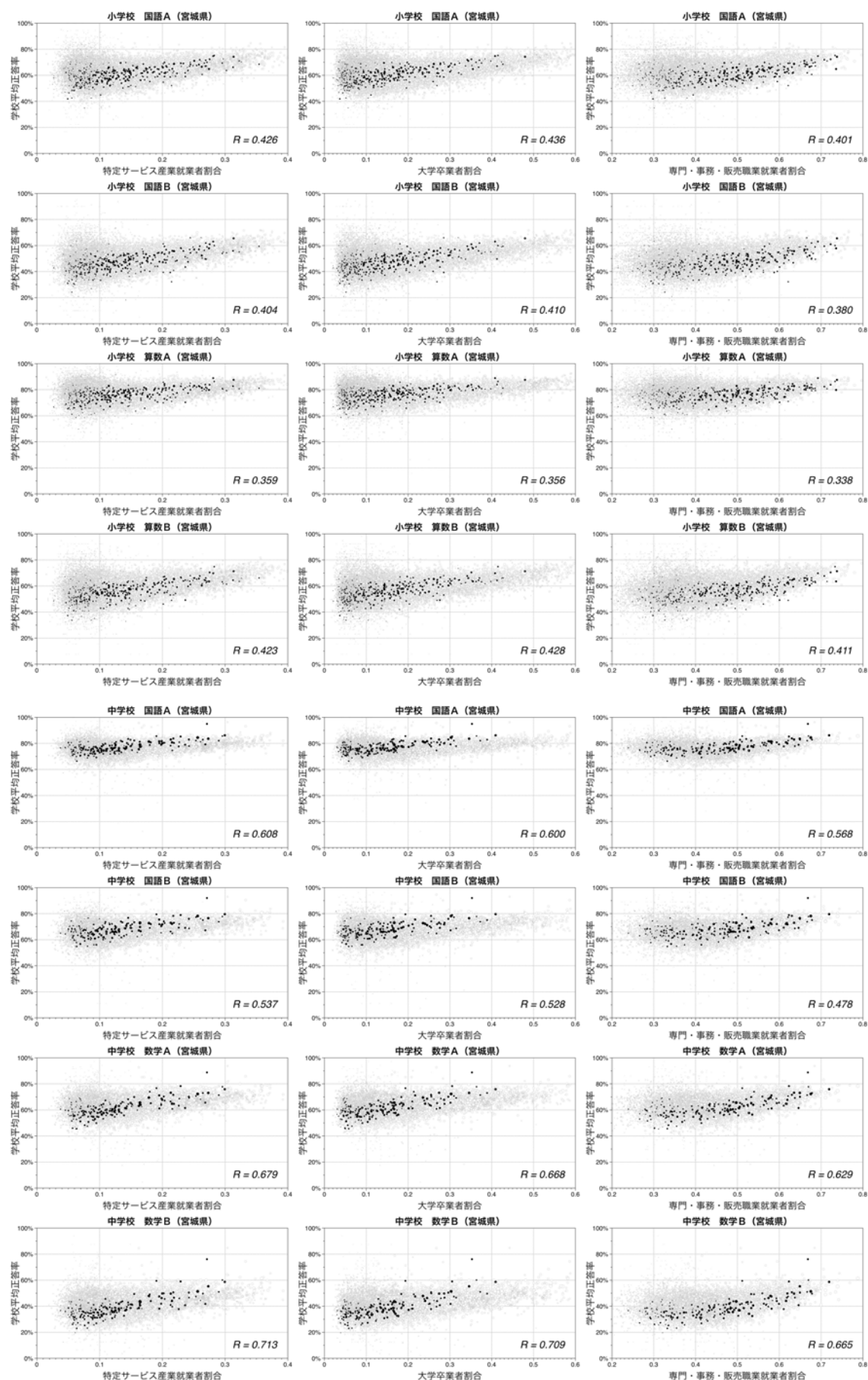
図表 9 - 2 - 1 学校の地域特性と学校平均正答率（北海道）



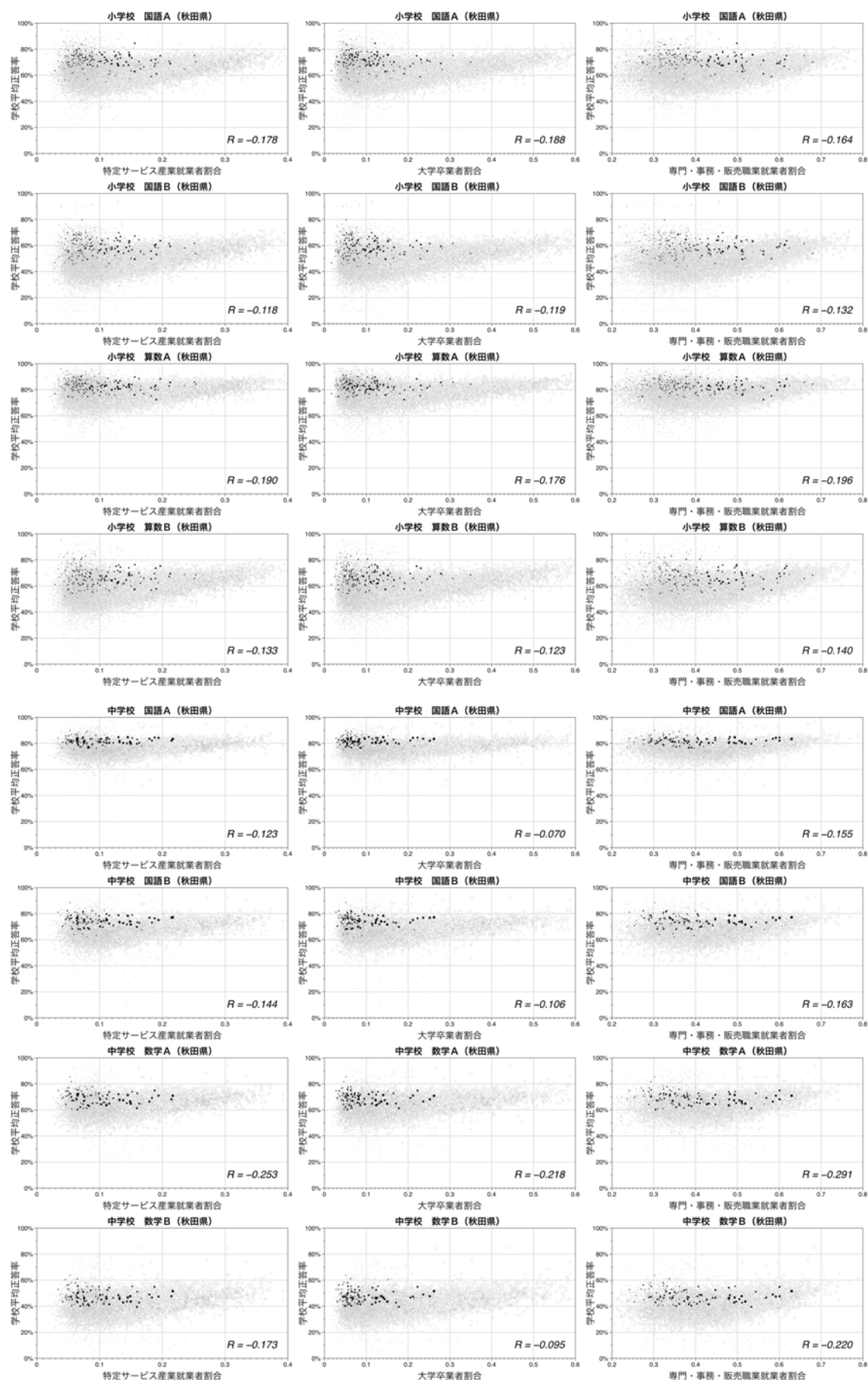
図表 9 - 2 - 2 学校の地域特性と学校平均正答率（青森県）



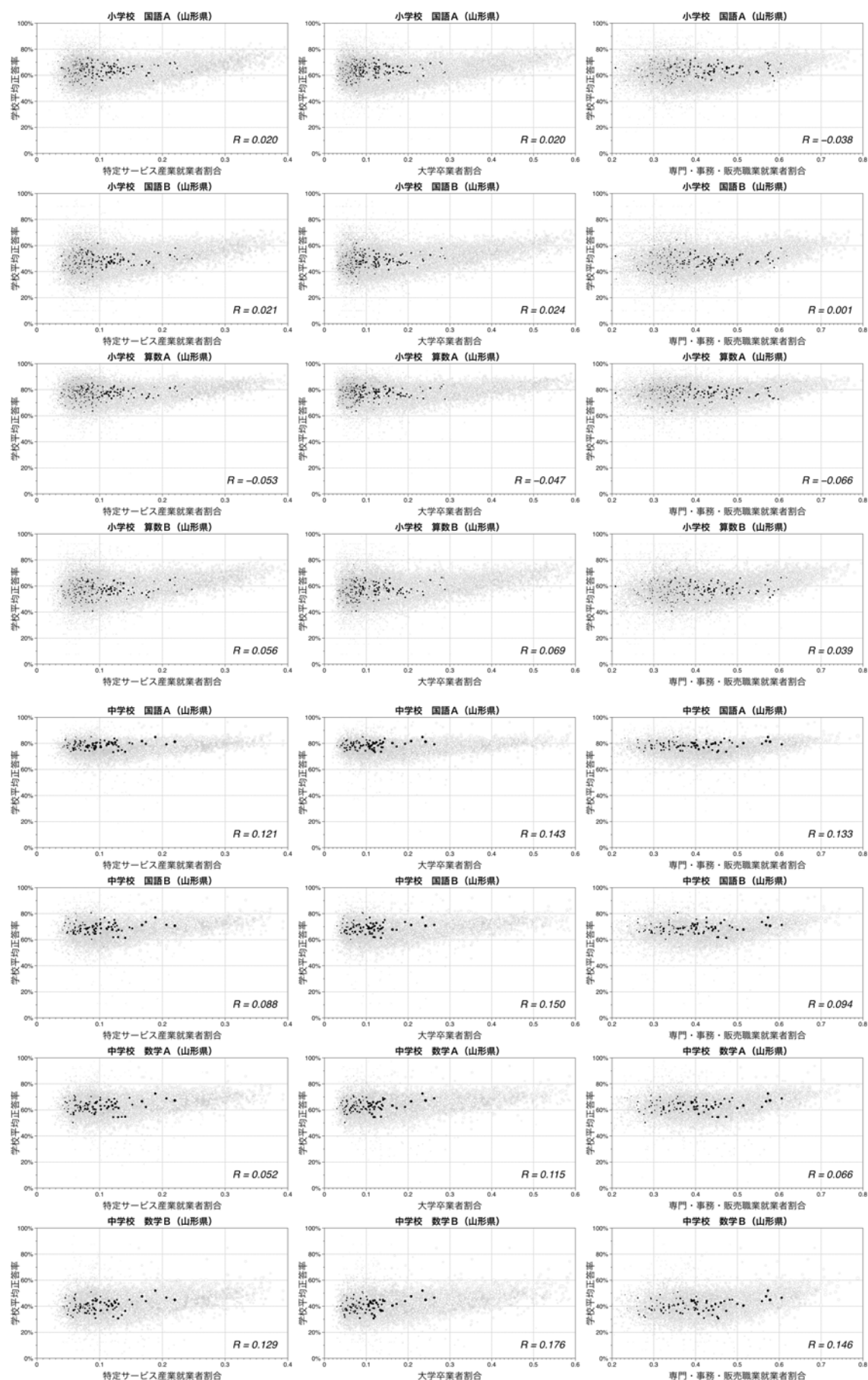
図表 9 - 2 - 3 学校の地域特性と学校平均正答率（岩手県）



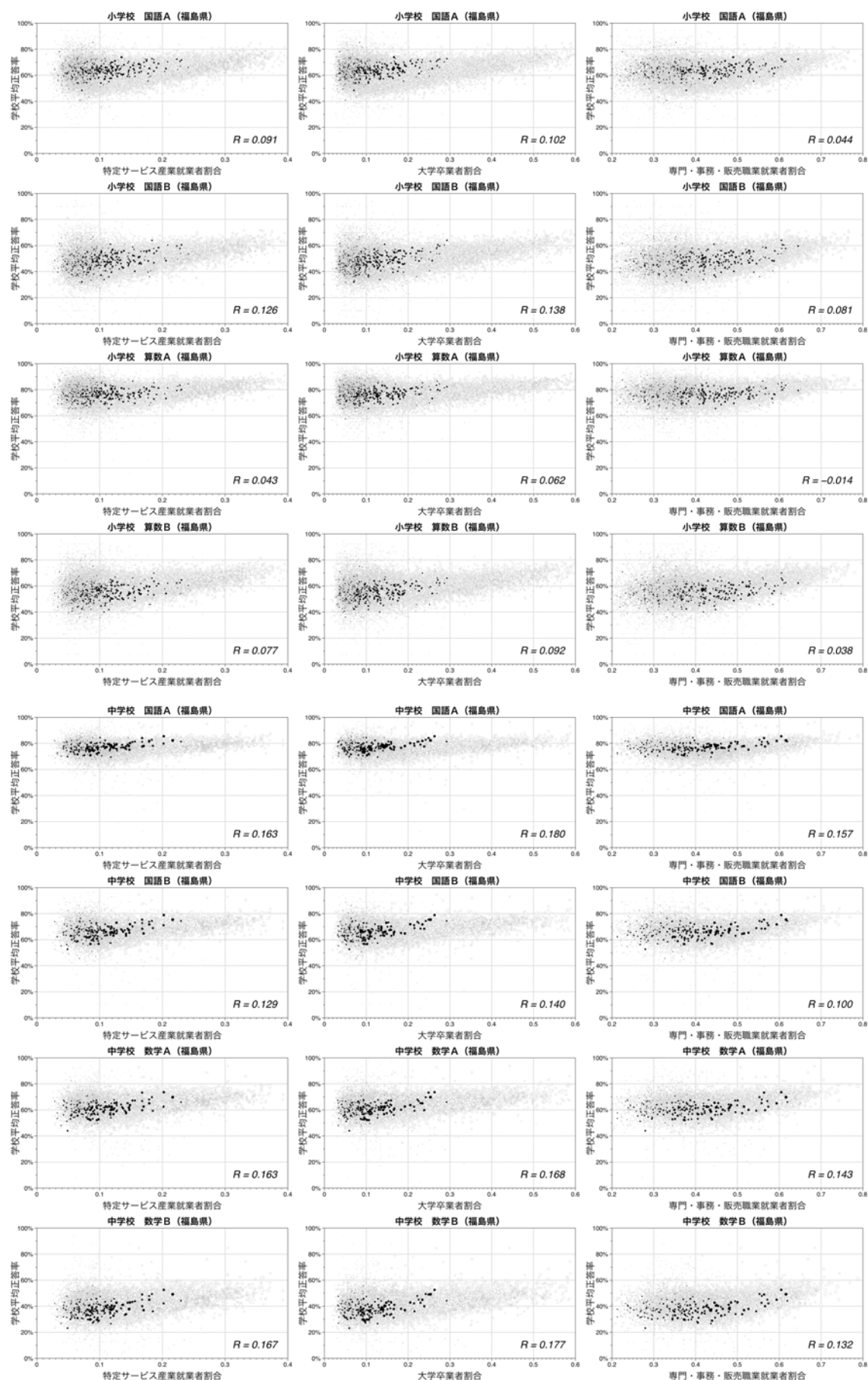
図表 9 - 2 - 4 学校の地域特性と学校平均正答率（宮城県）



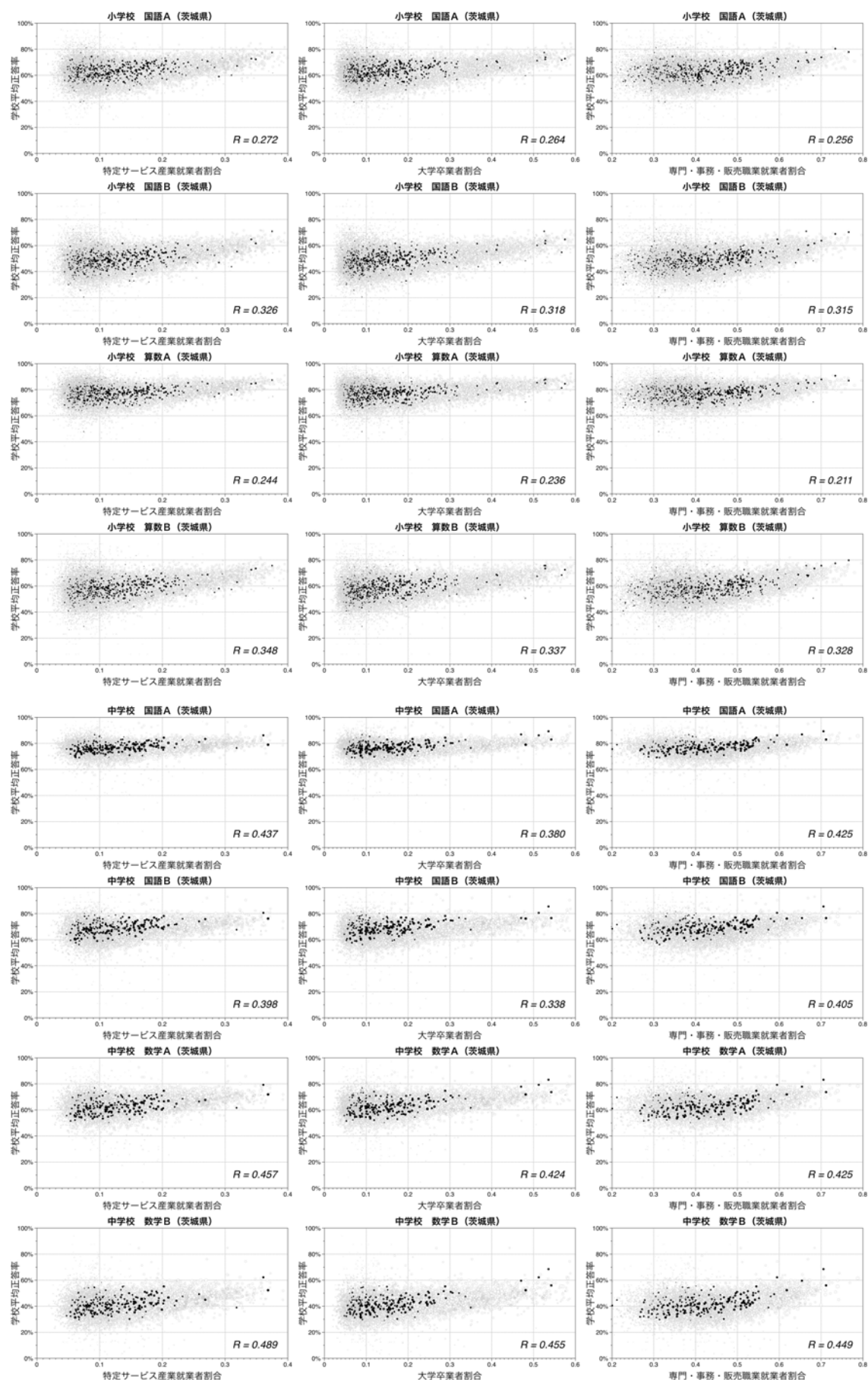
図表 9 - 2 - 5 学校の地域特性と学校平均正答率（秋田県）



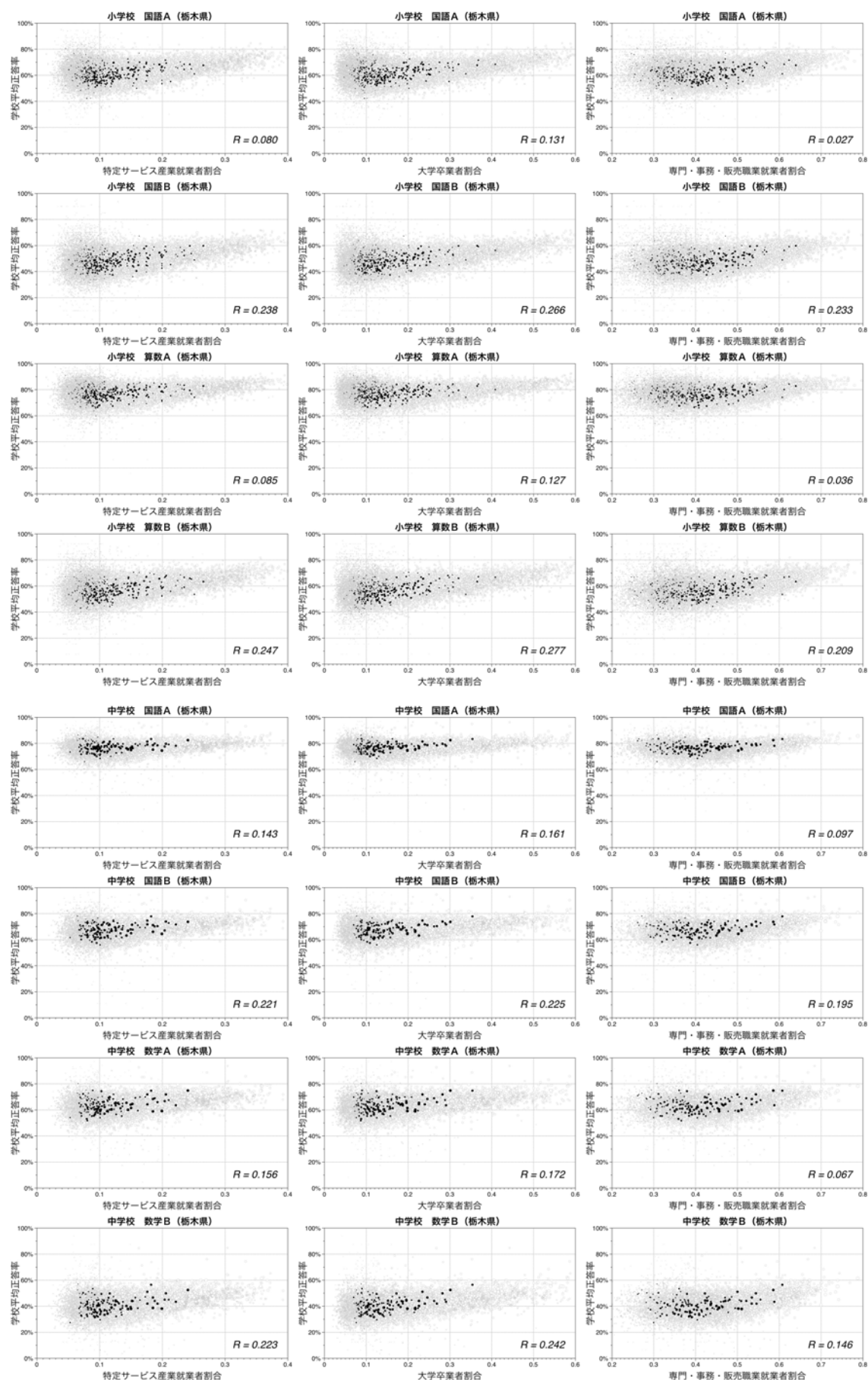
図表 9 - 2 - 6 学校の地域特性と学校平均正答率（山形県）



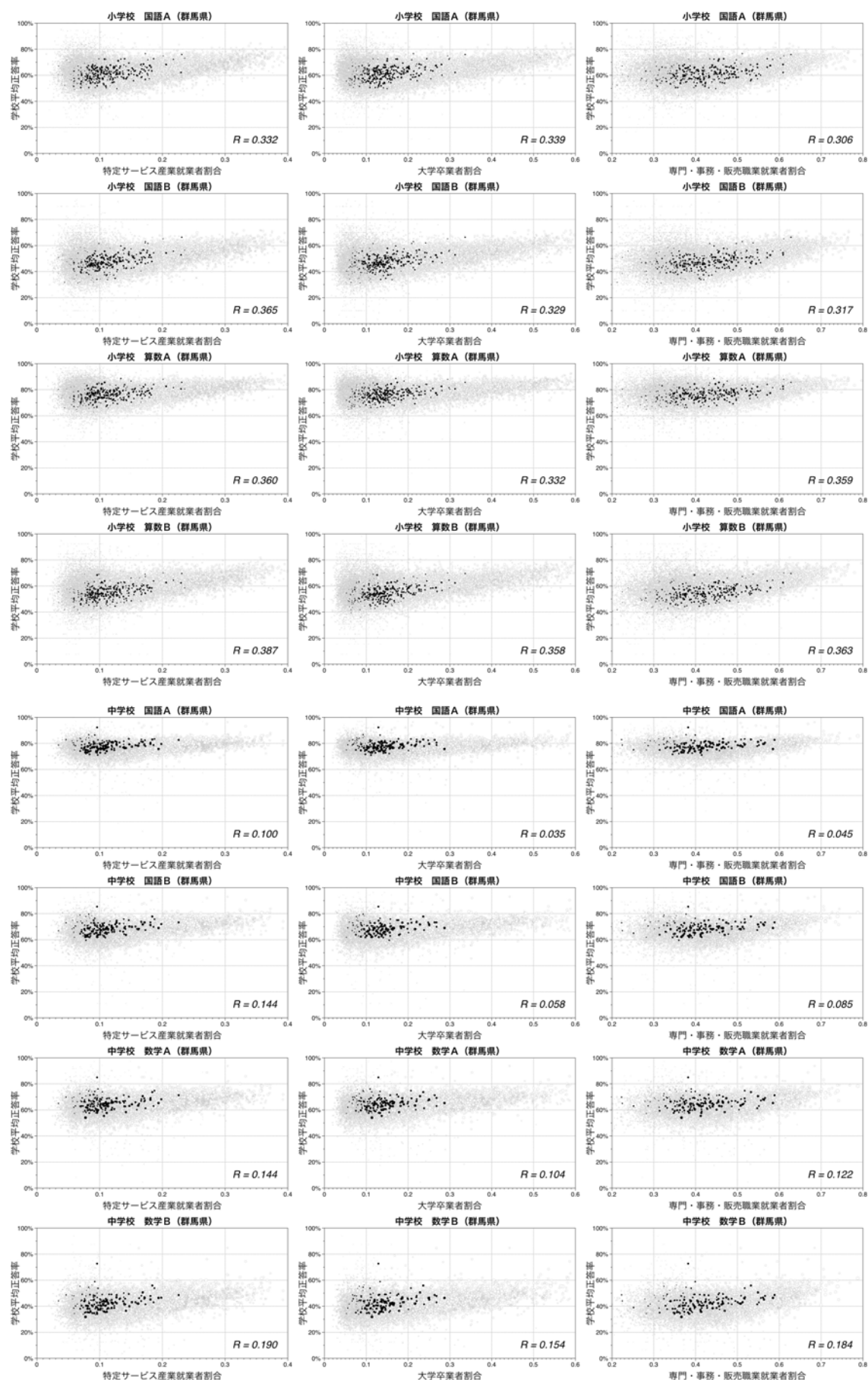
図表 9 - 2 - 7 学校の地域特性と学校平均正答率（福島県）



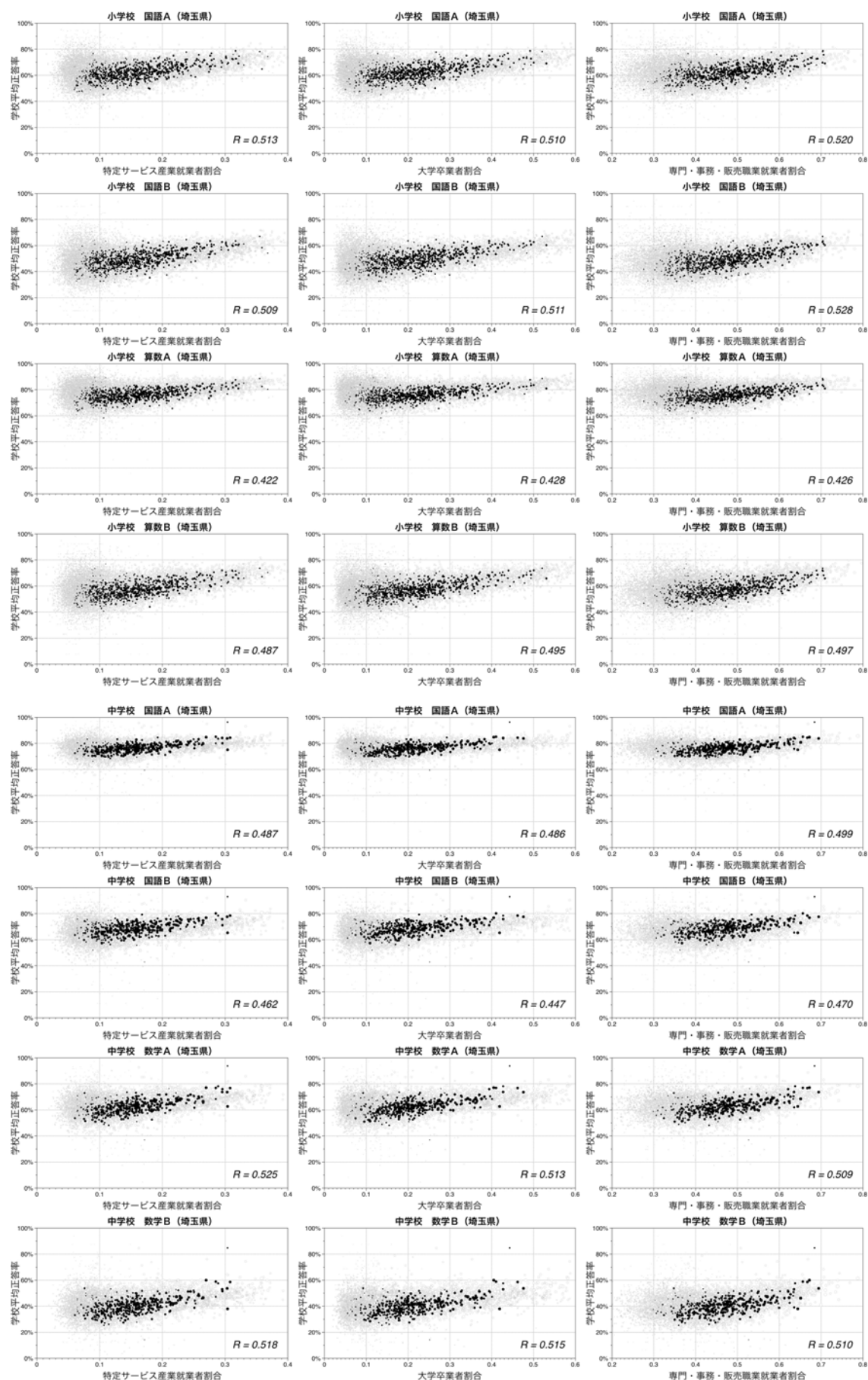
図表 9 - 2 - 8 学校の地域特性と学校平均正答率（茨城県）



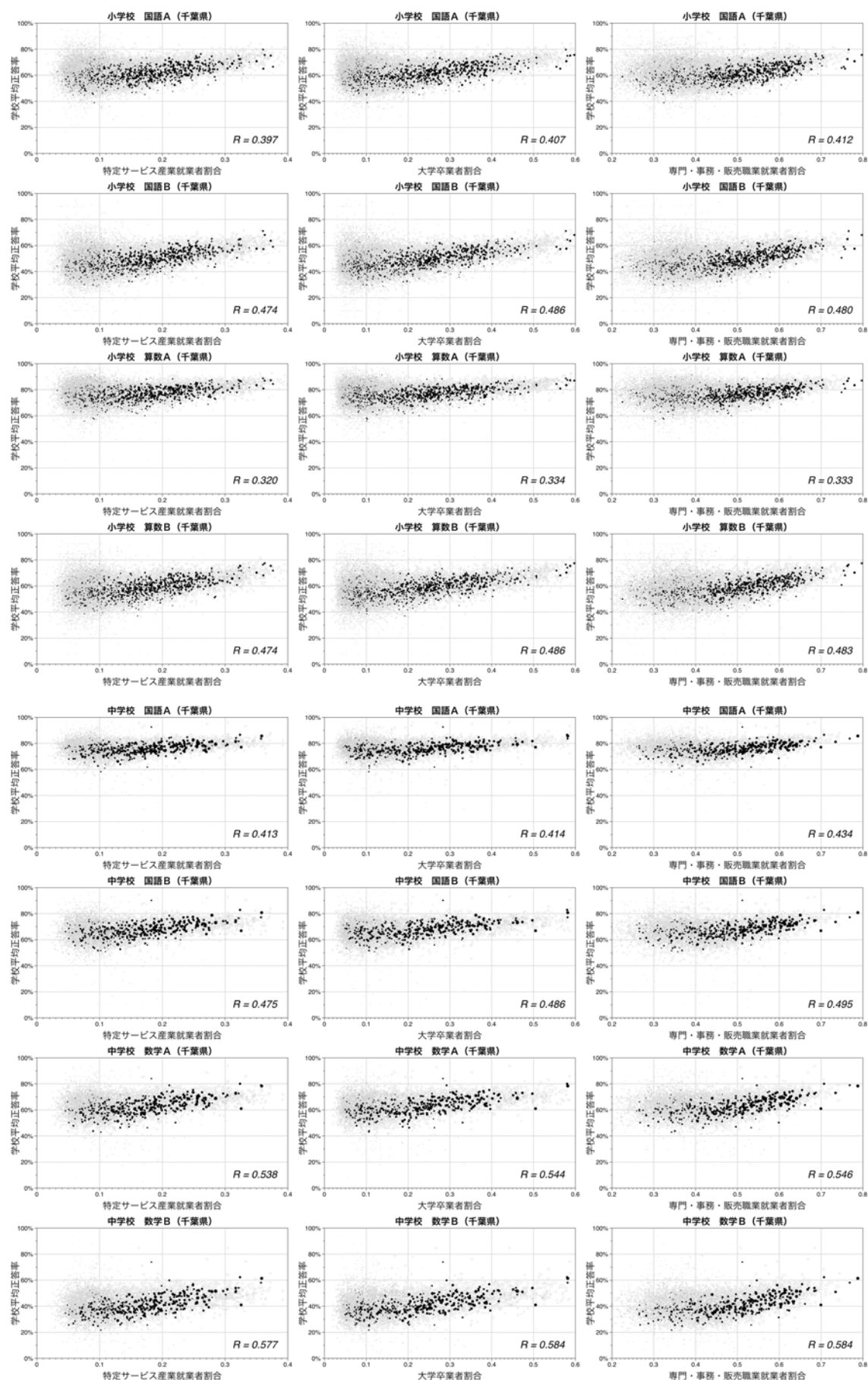
図表 9 - 2 - 9 学校の地域特性と学校平均正答率（栃木県）



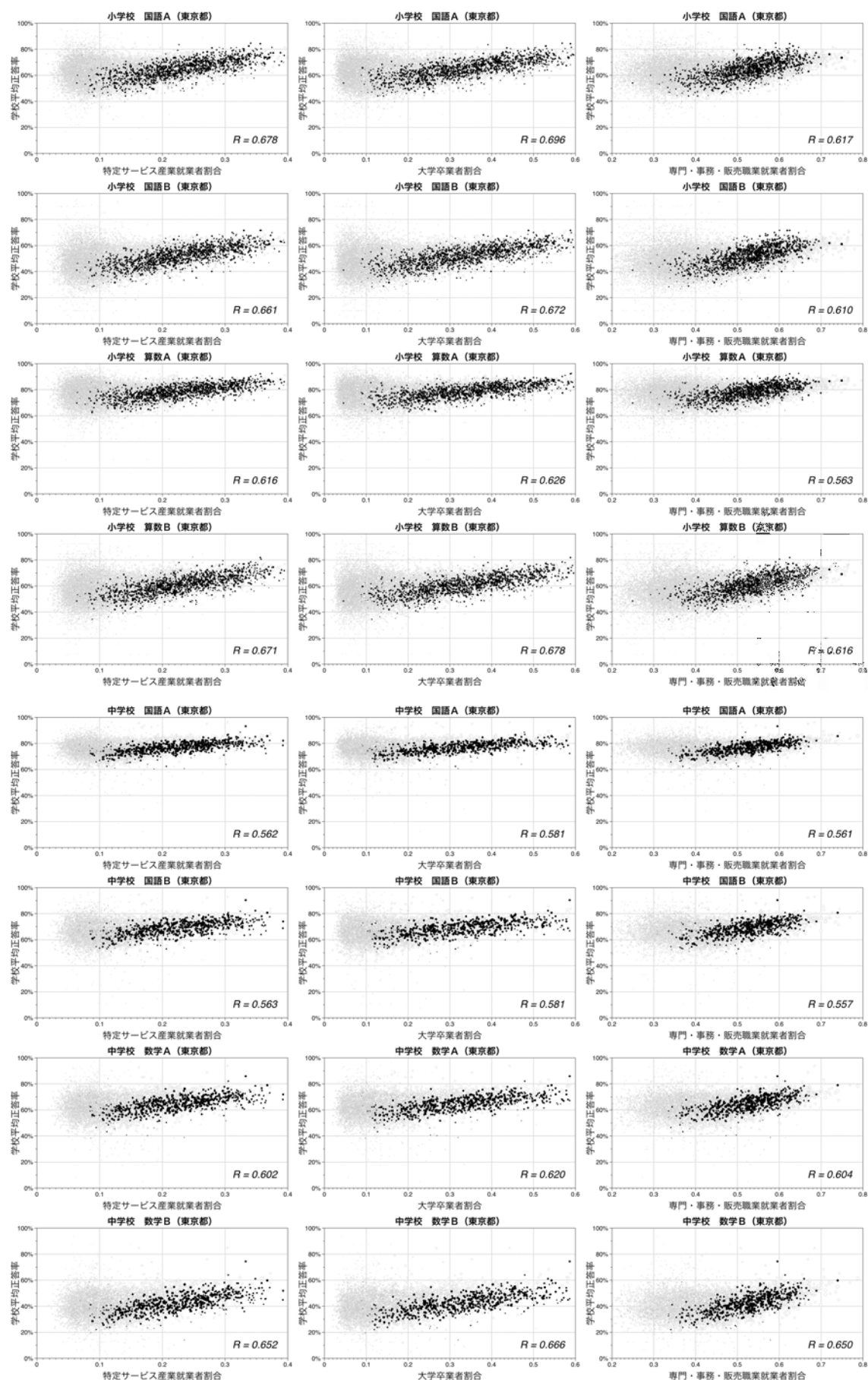
図表 9 - 2 - 10 学校の地域特性と学校平均正答率（群馬県）



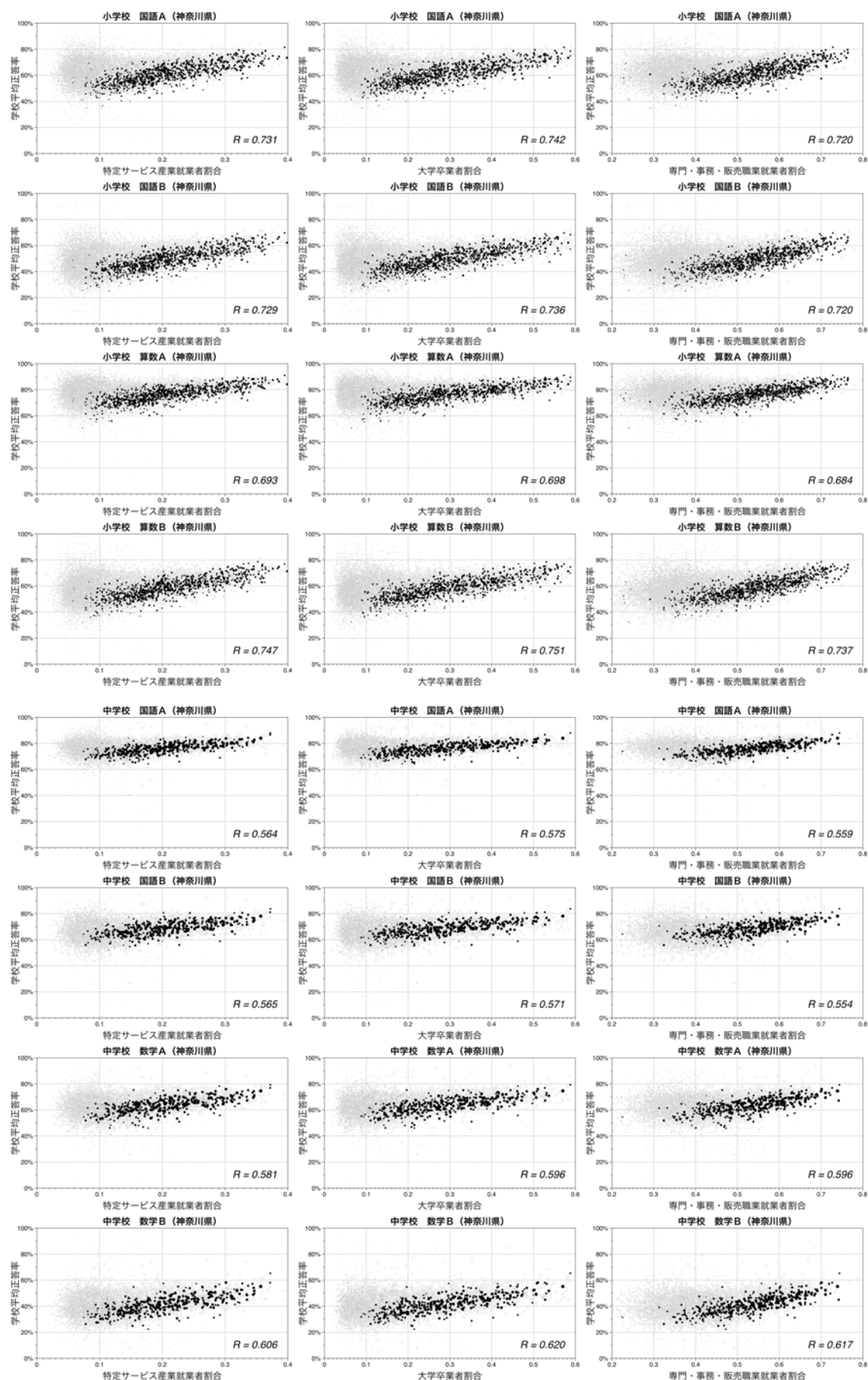
図表 9 - 2 - 11 学校の地域特性と学校平均正答率（埼玉県）



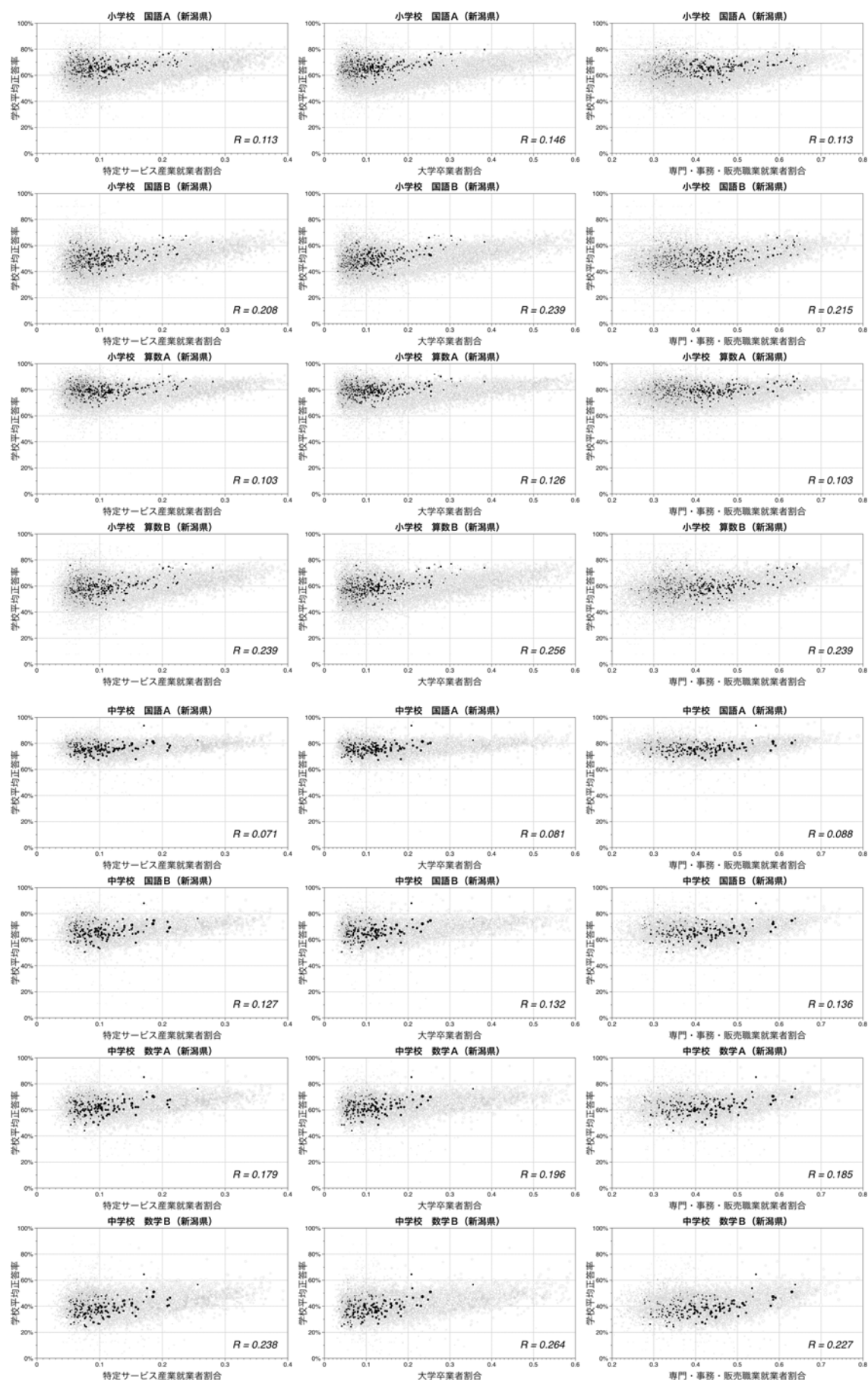
図表 9 - 2 - 12 学校の地域特性と学校平均正答率（千葉県）



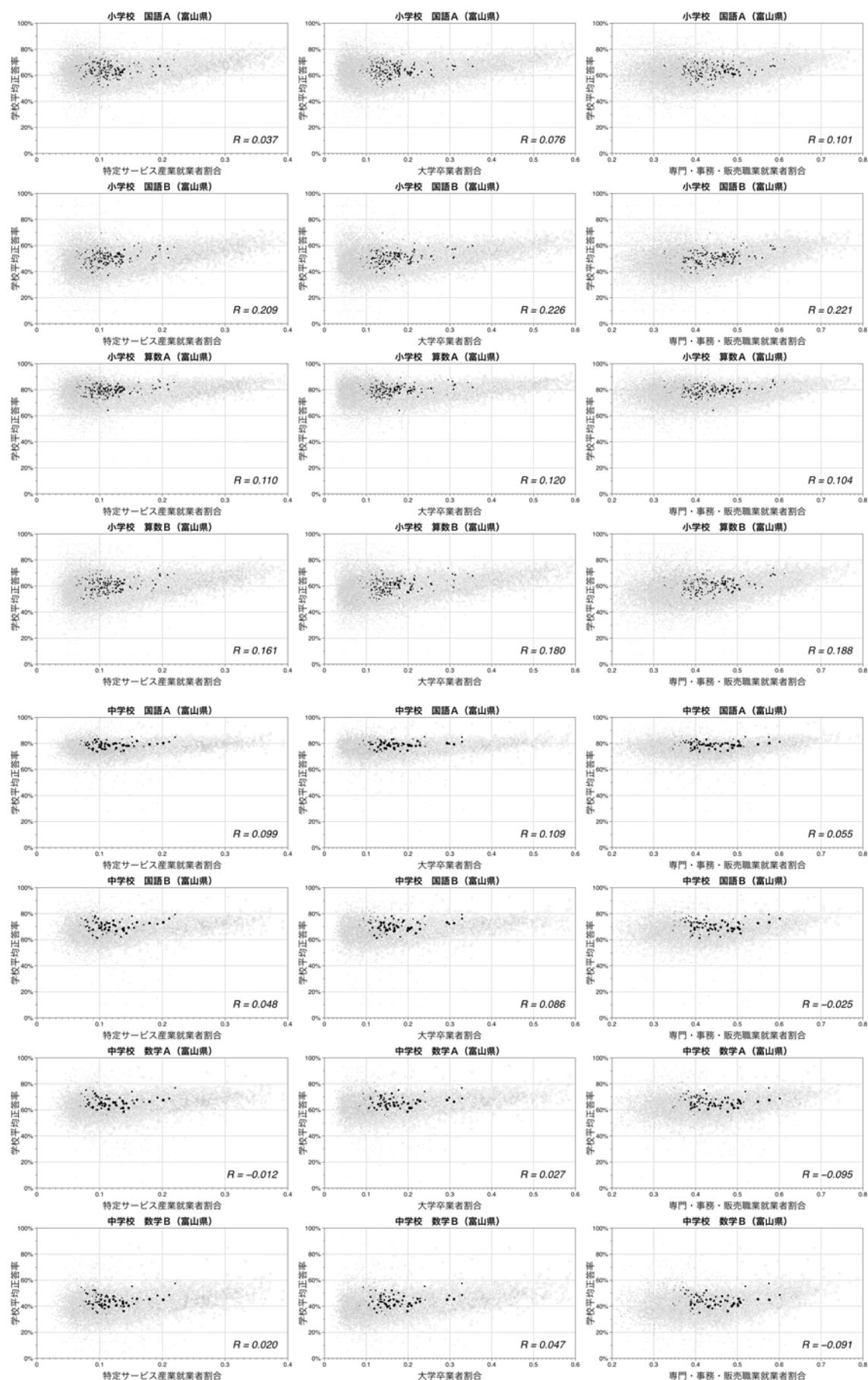
図表 9 - 2 - 13 学校の地域特性と学校平均正答率（東京都）



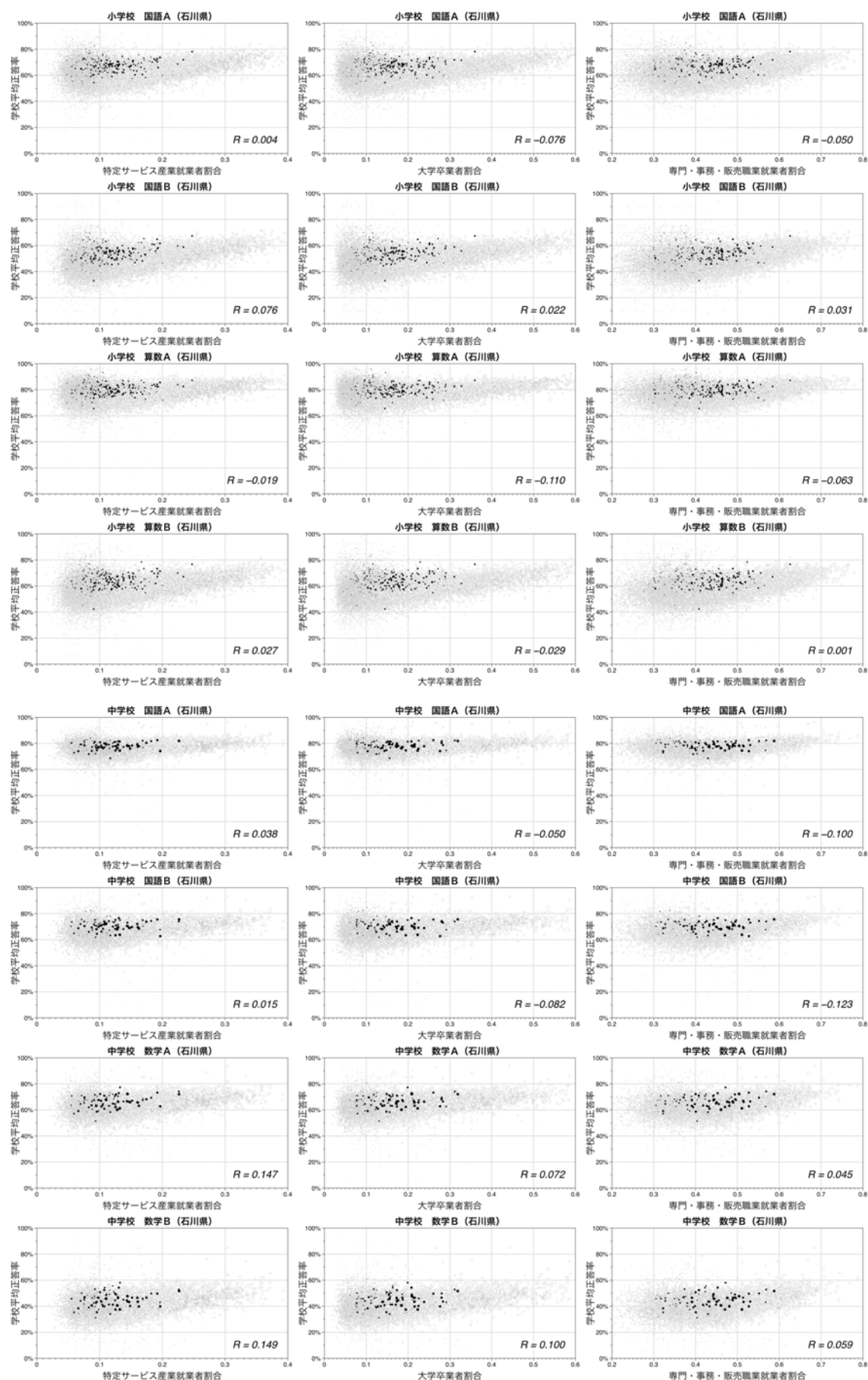
図表 9 - 2 - 14 学校の地域特性と学校平均正答率（神奈川県）



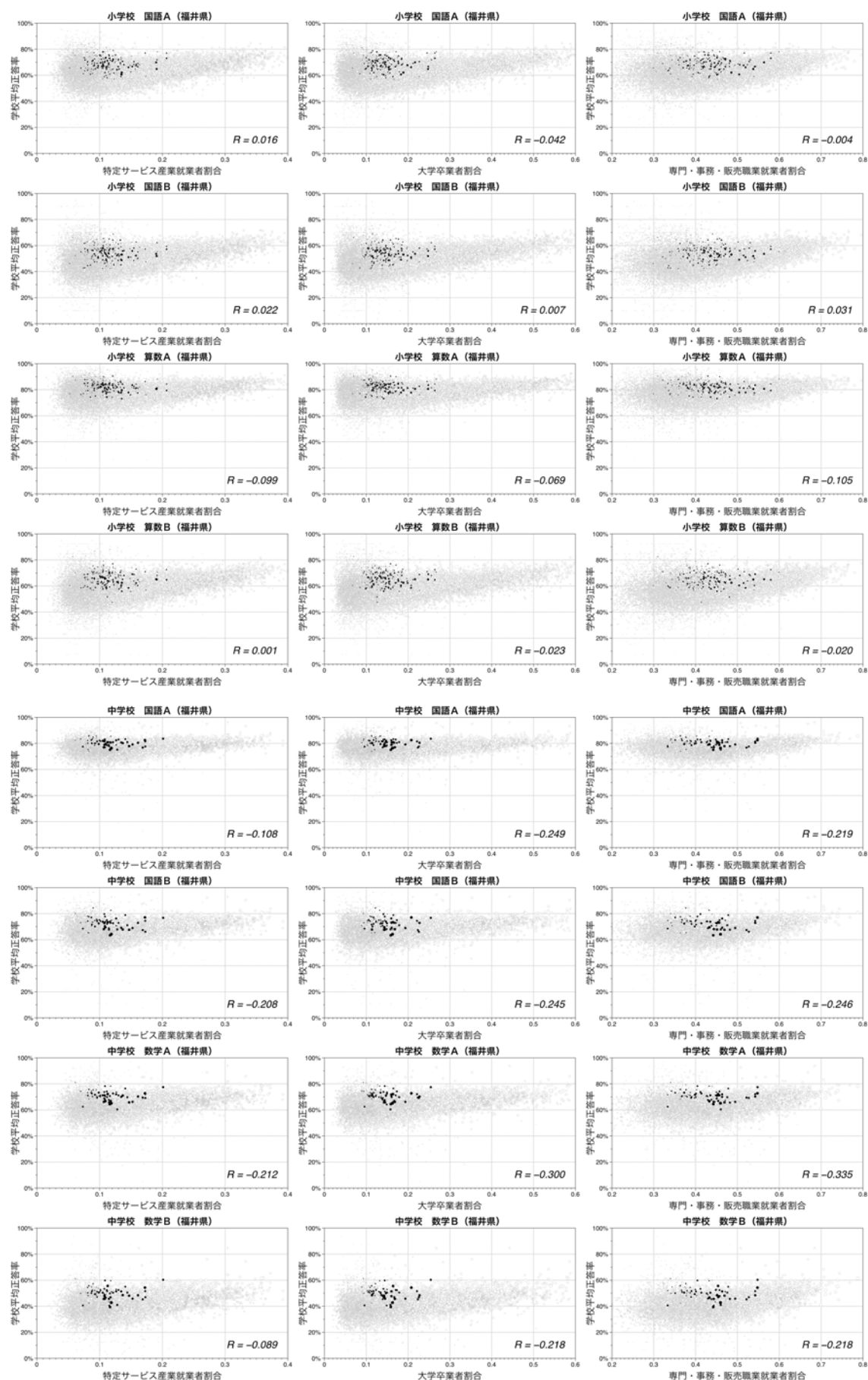
図表 9 - 2 - 15 学校の地域特性と学校平均正答率（新潟県）



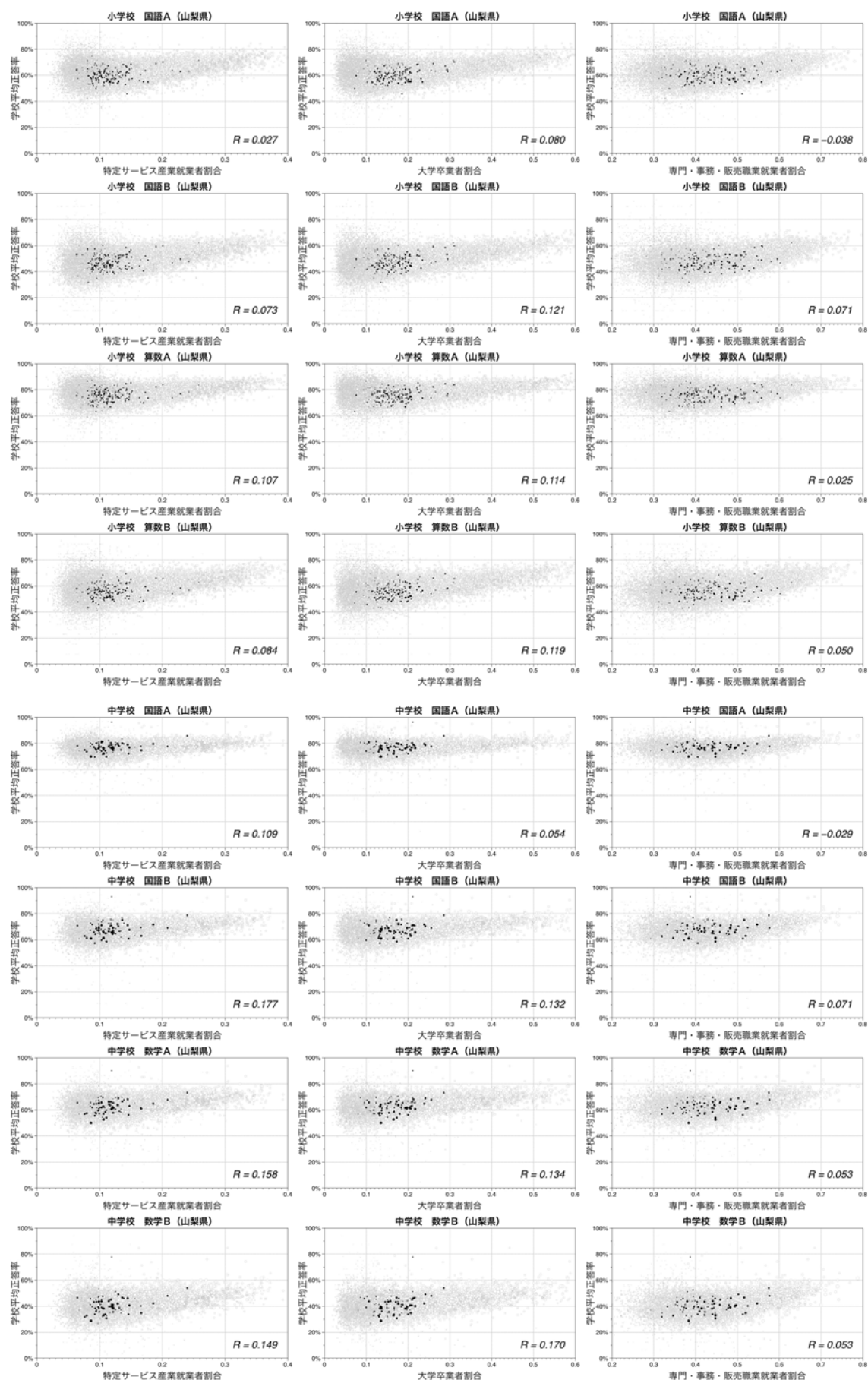
図表 9 - 2 - 16 学校の地域特性と学校平均正答率（富山県）



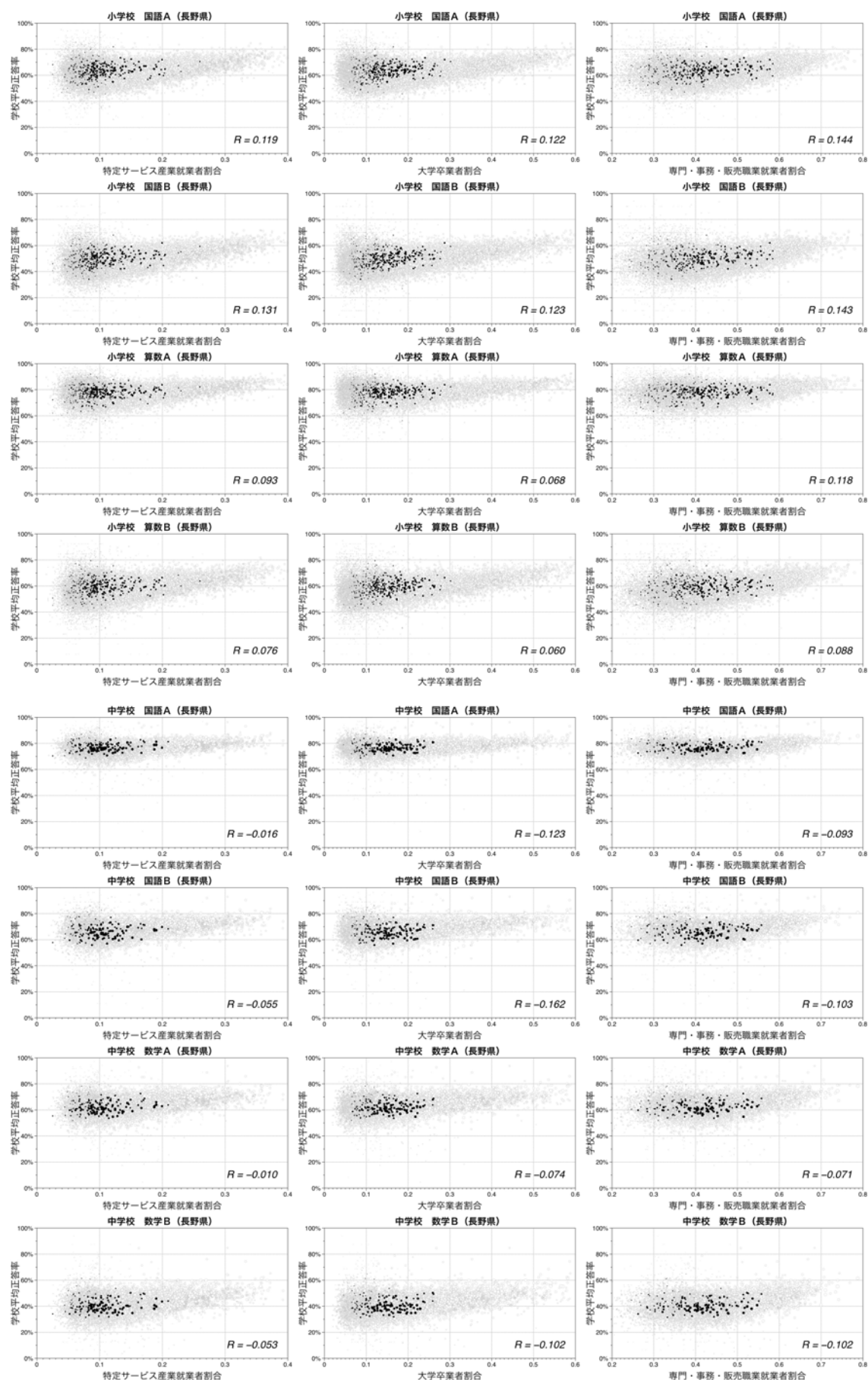
図表 9 - 2 - 17 学校の地域特性と学校平均正答率（石川県）



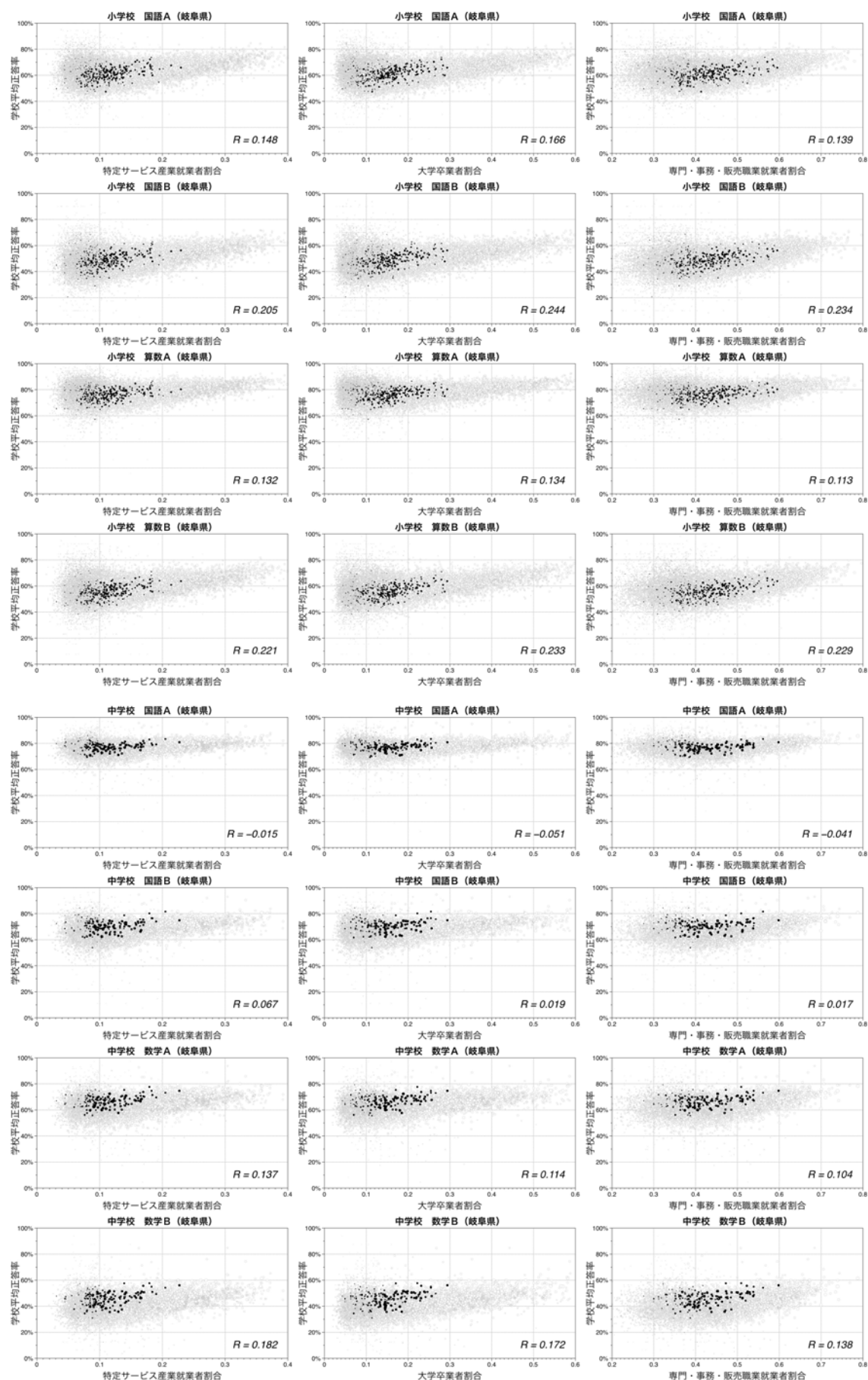
図表 9 - 2 - 18 学校の地域特性と学校平均正答率（福岡県）



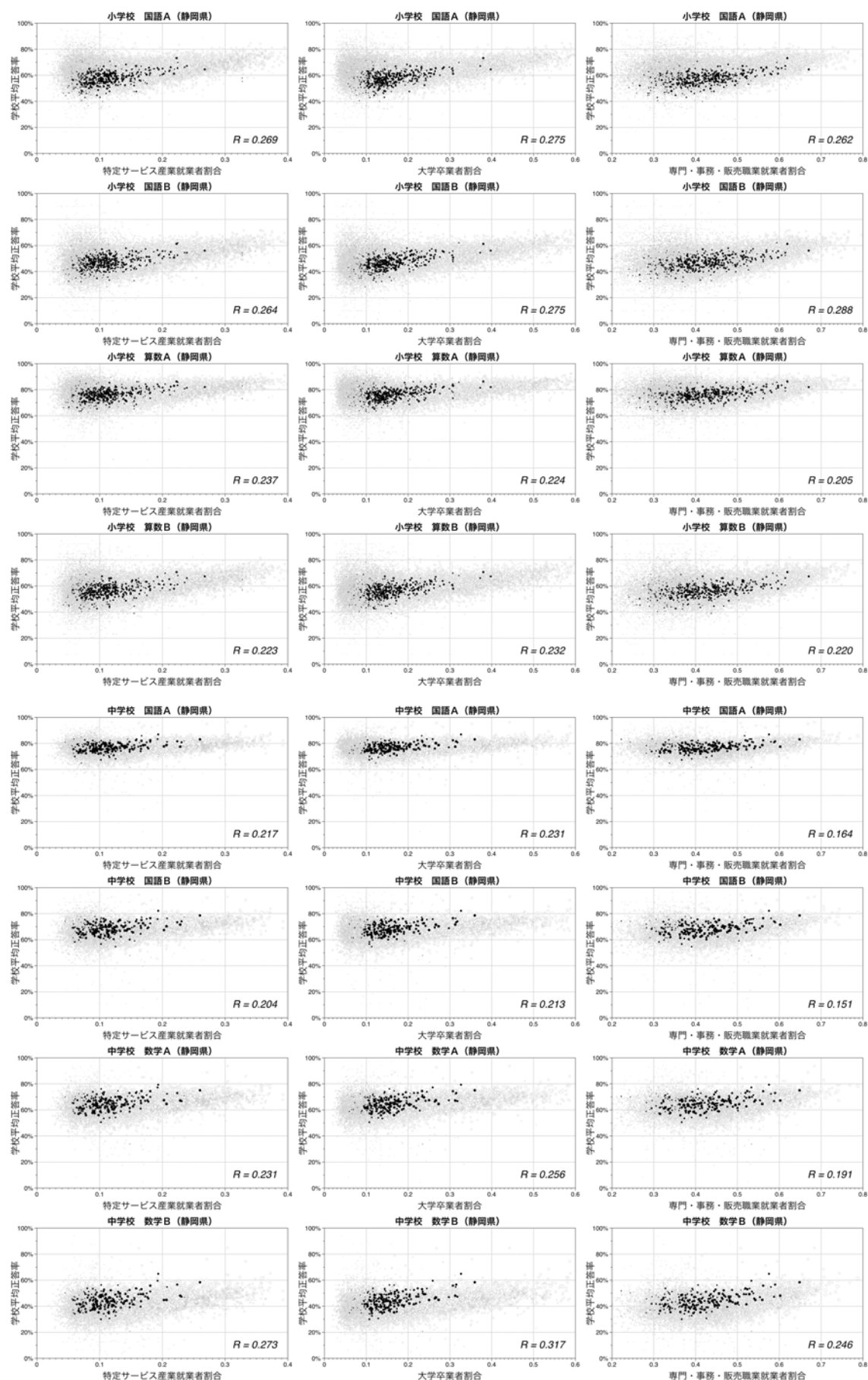
図表 9 - 2 - 19 学校の地域特性と学校平均正答率（山梨県）



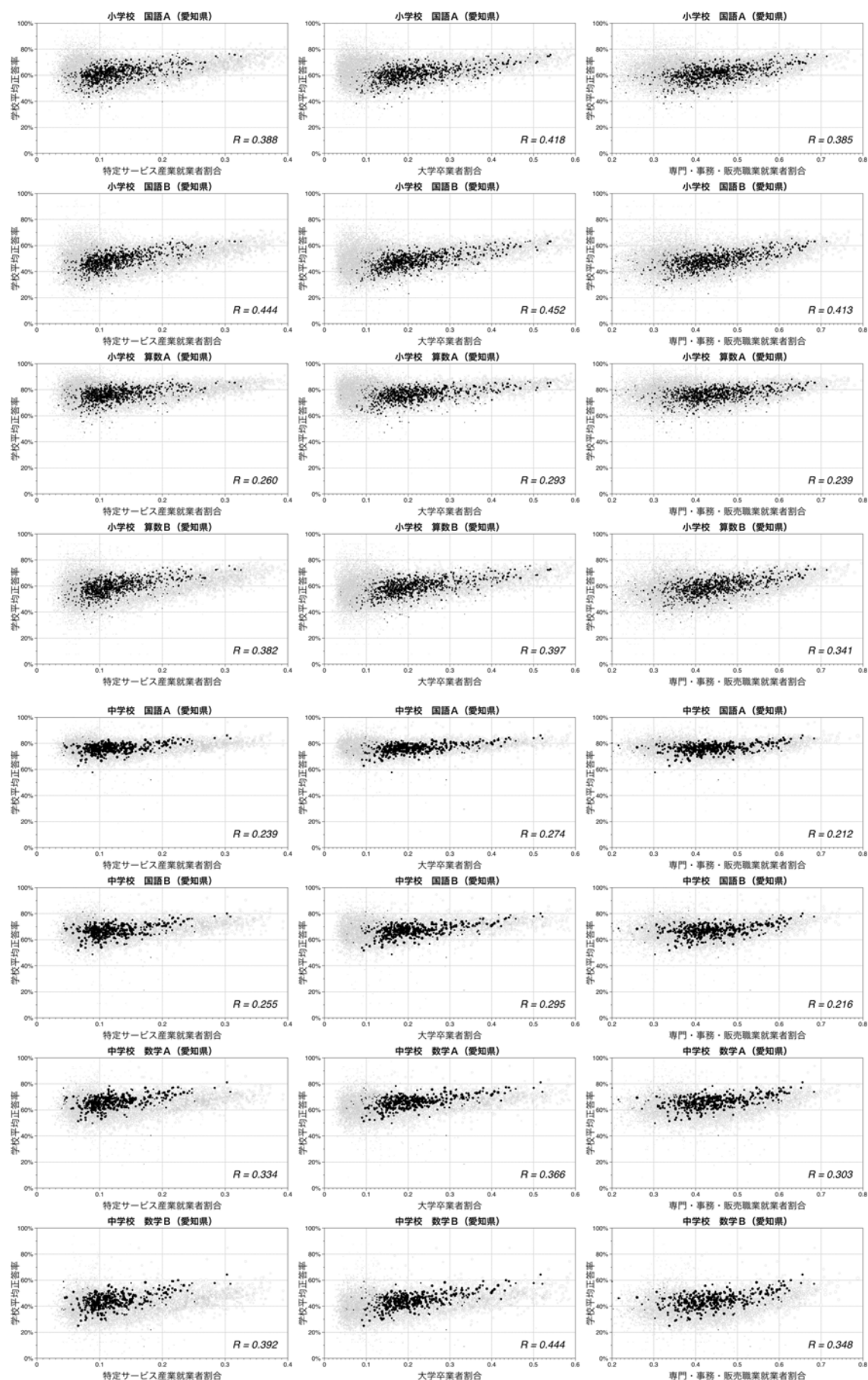
図表 9 - 2 - 20 学校の地域特性と学校平均正答率（長野県）



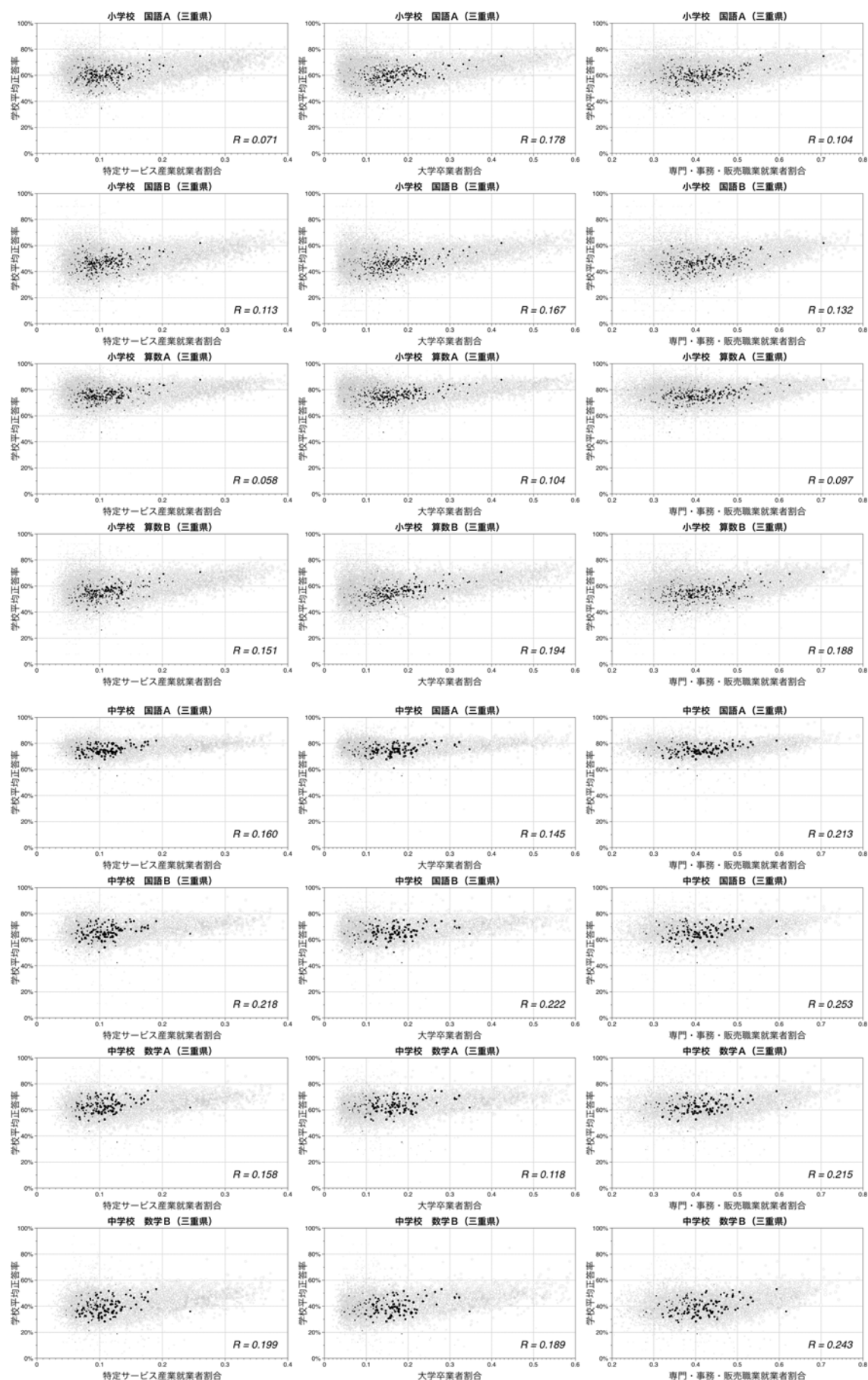
図表 9 - 2 - 21 学校の地域特性と学校平均正答率（岐阜県）



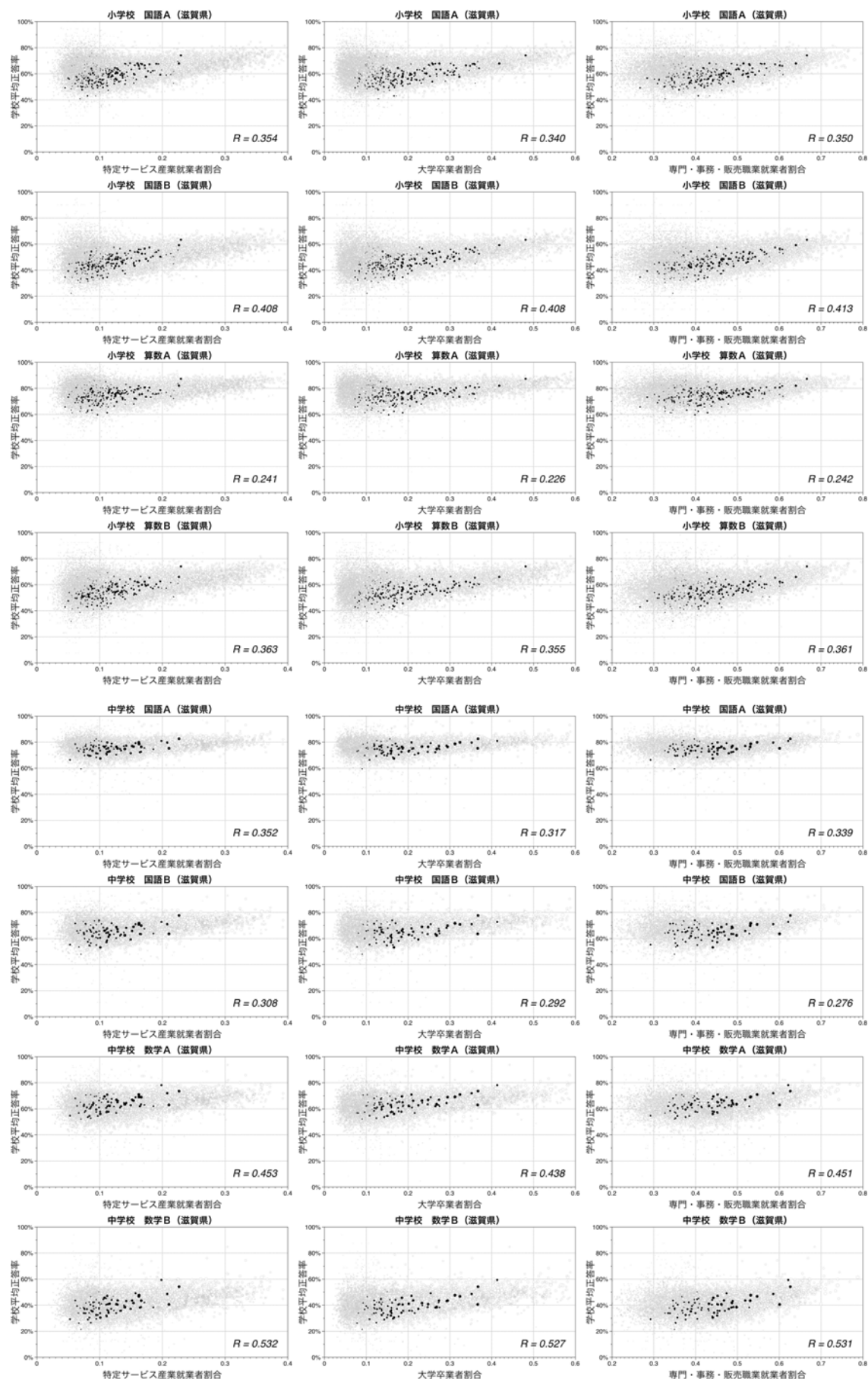
図表 9 - 2 - 22 学校の地域特性と学校平均正答率（静岡県）



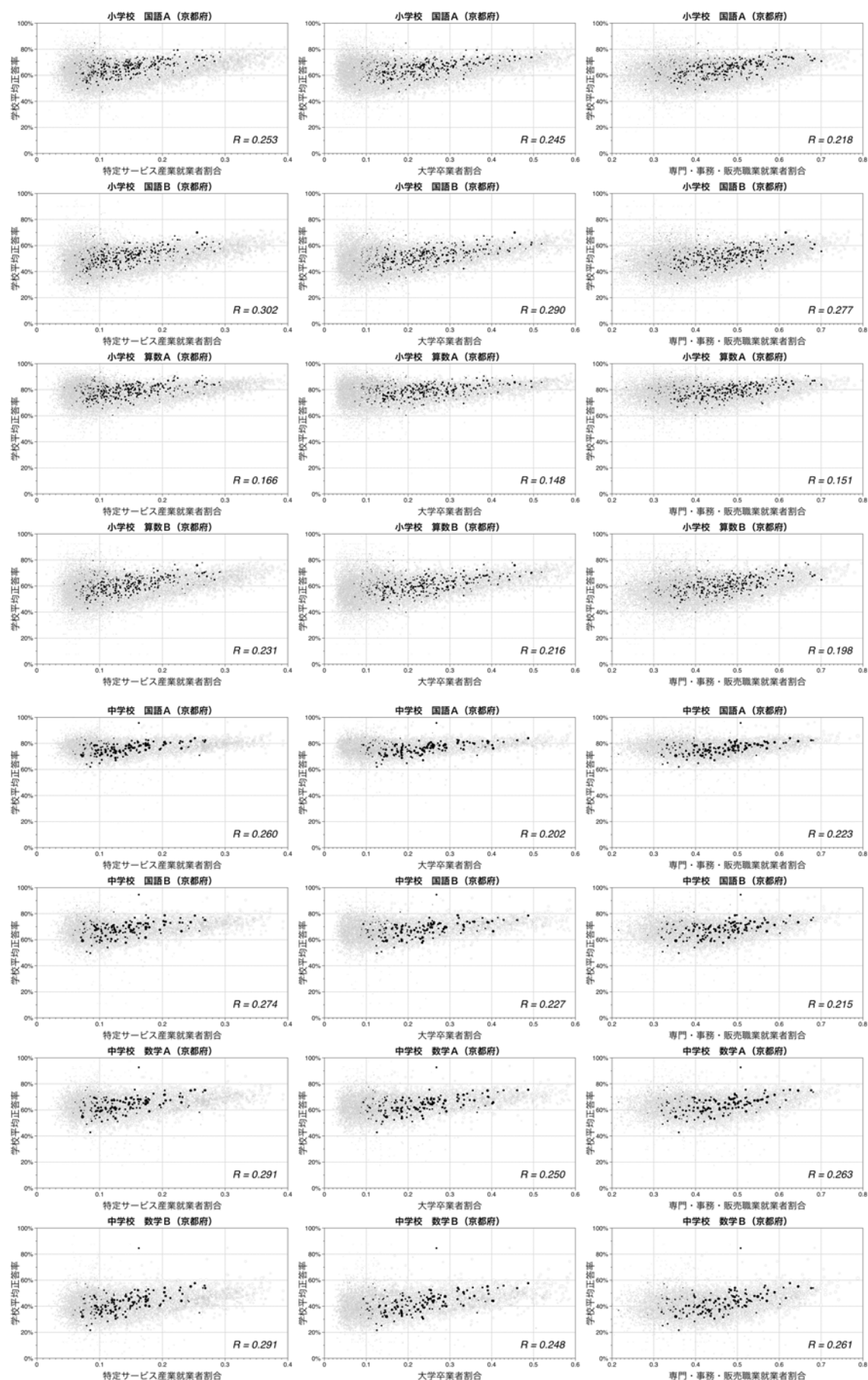
図表 9 - 2 - 23 学校の地域特性と学校平均正答率（愛知県）



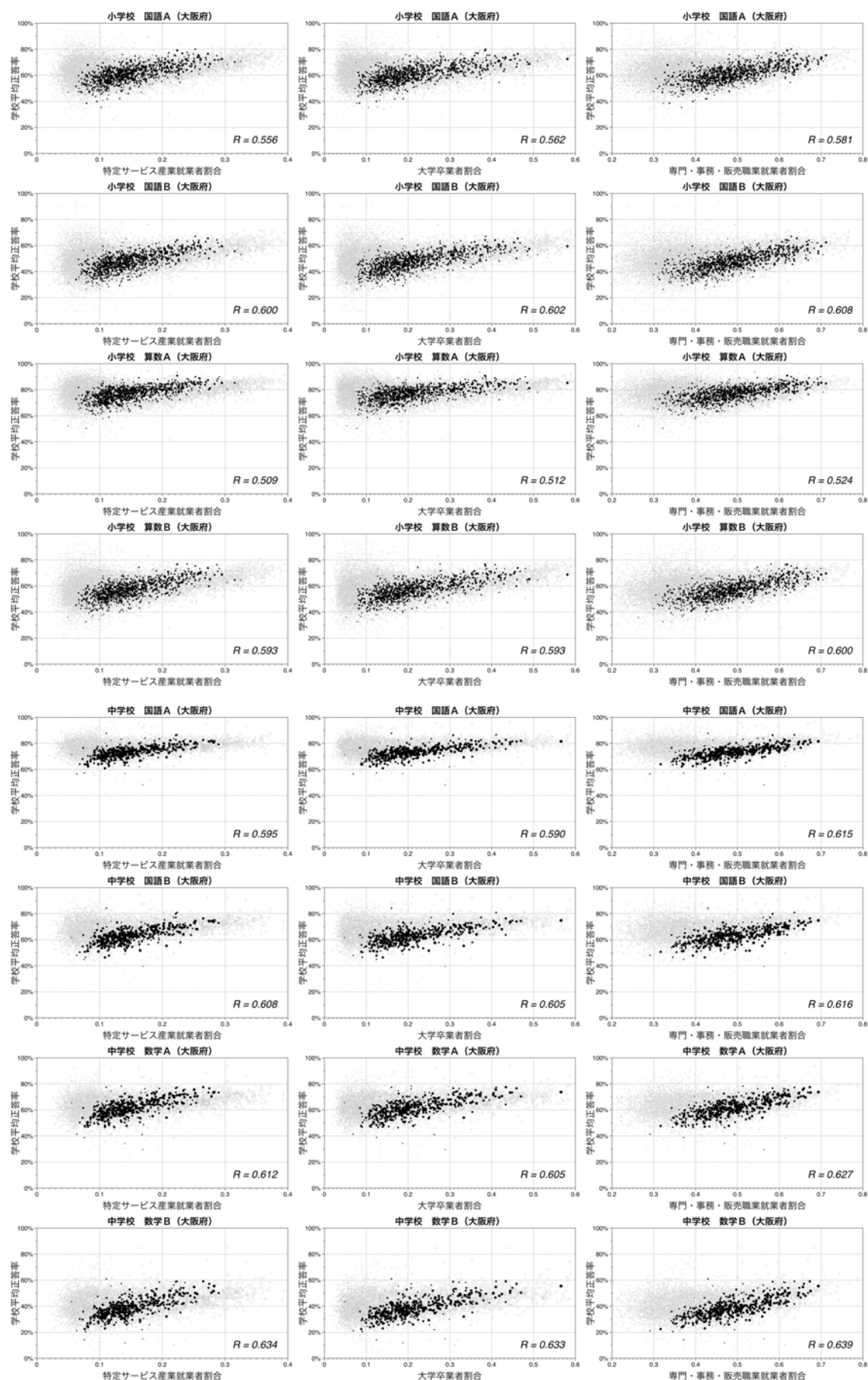
図表 9 - 2 - 24 学校の地域特性と学校平均正答率（三重県）



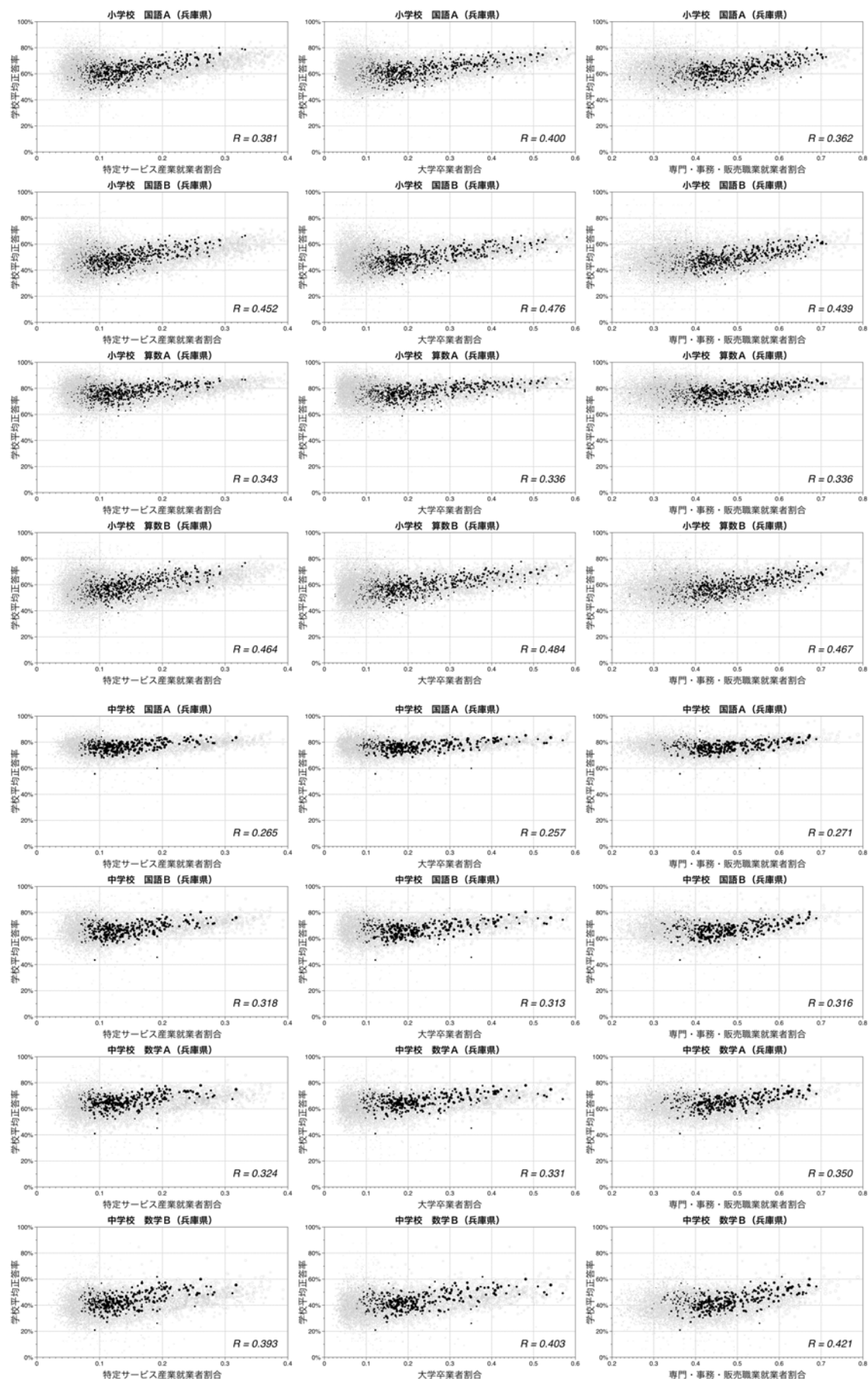
図表 9 - 2 - 25 学校の地域特性と学校平均正答率（滋賀県）



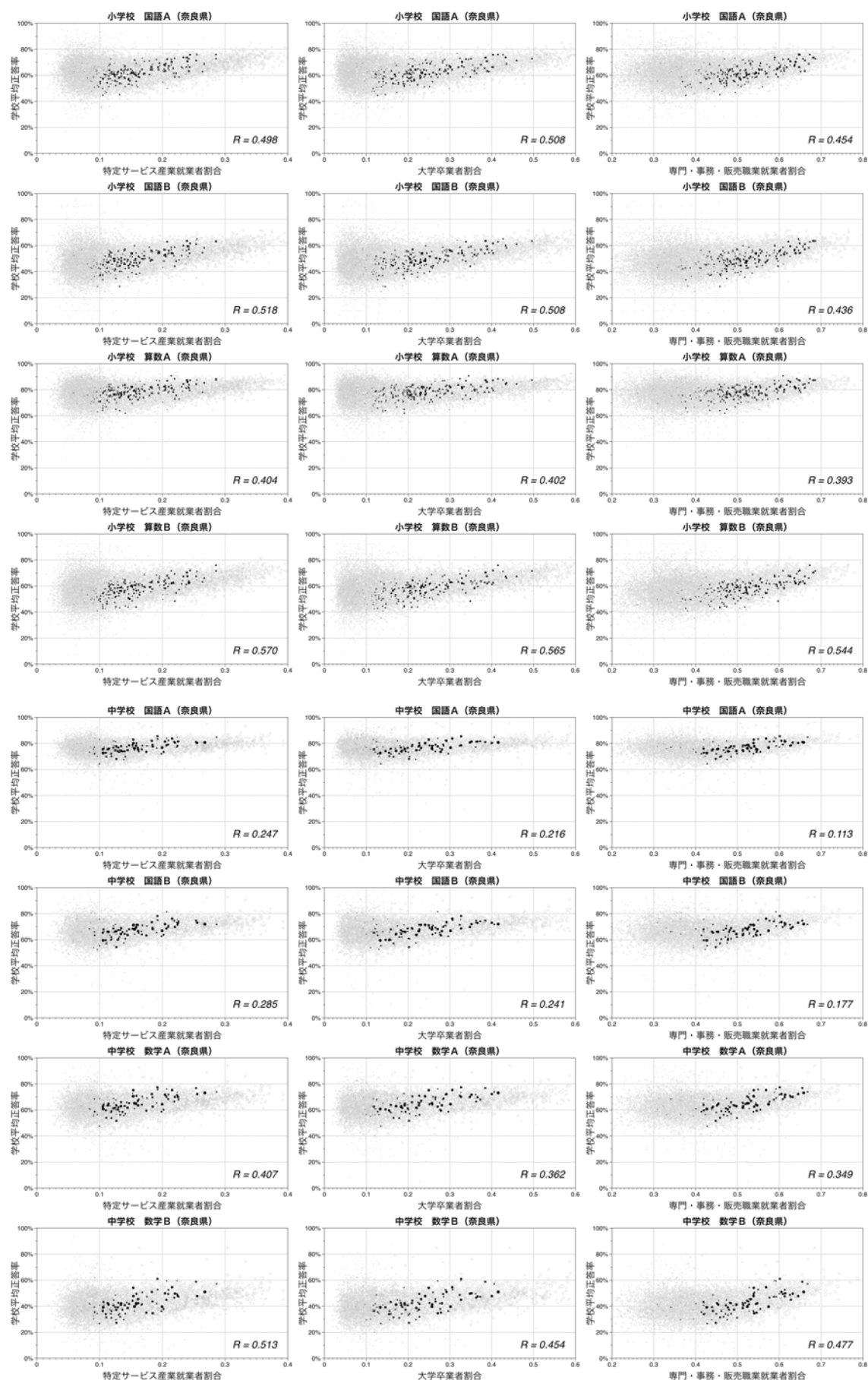
図表 9 - 2 - 26 学校の地域特性と学校平均正答率（京都府）



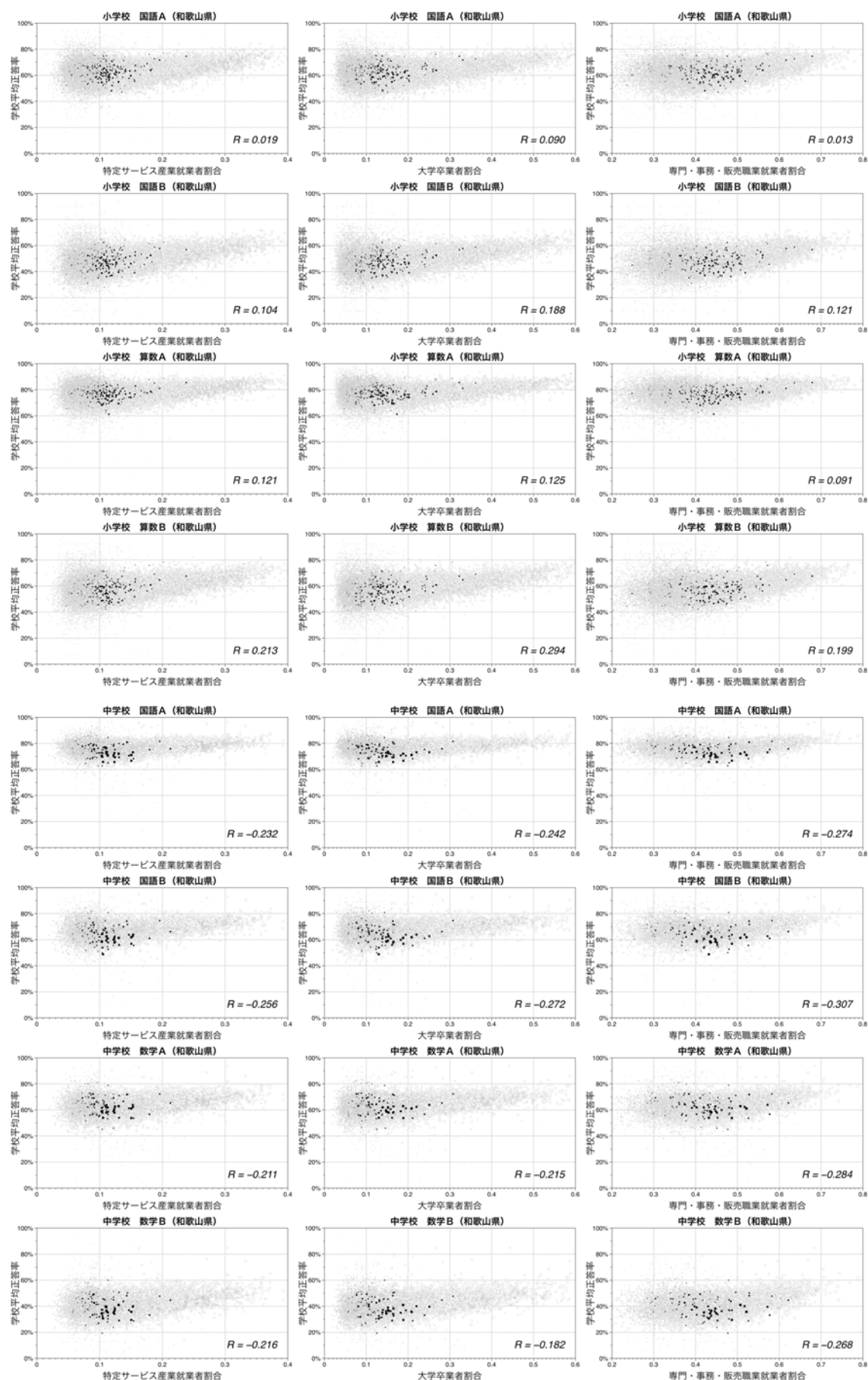
図表 9 - 2 - 27 学校の地域特性と学校平均正答率（大阪府）



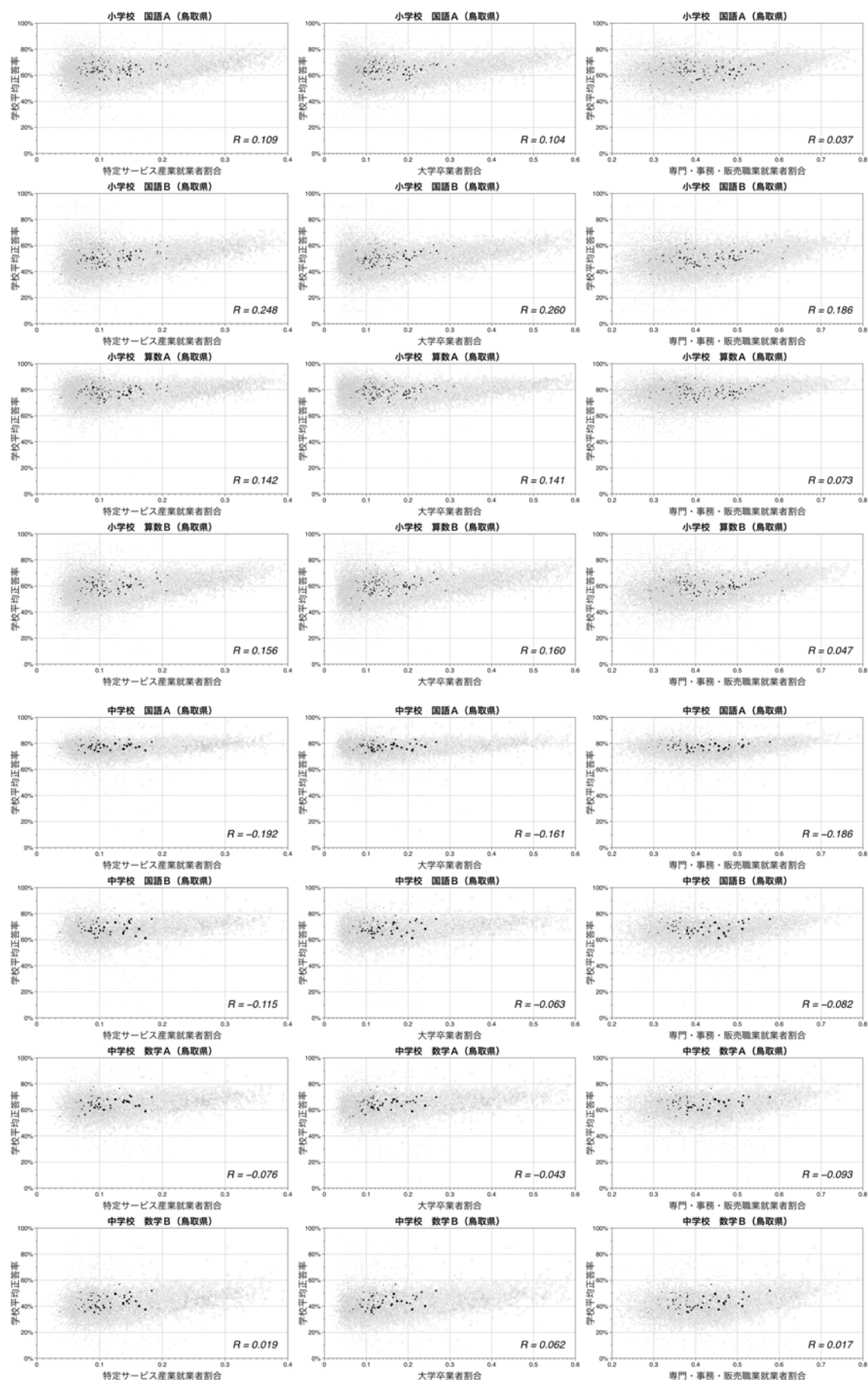
図表 9 - 2 - 28 学校の地域特性と学校平均正答率（兵庫県）



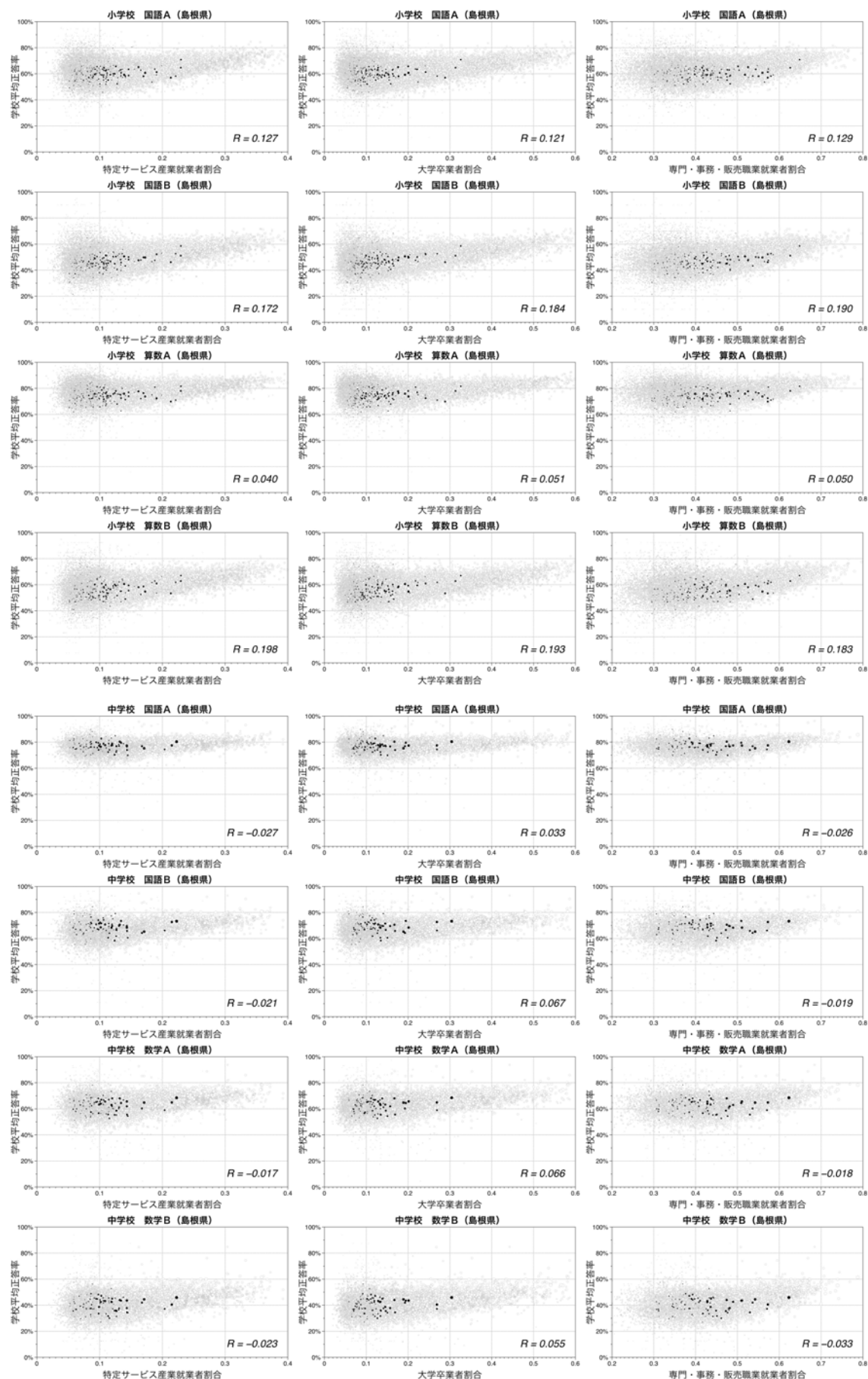
図表 9 - 2 - 29 学校の地域特性と学校平均正答率（奈良県）



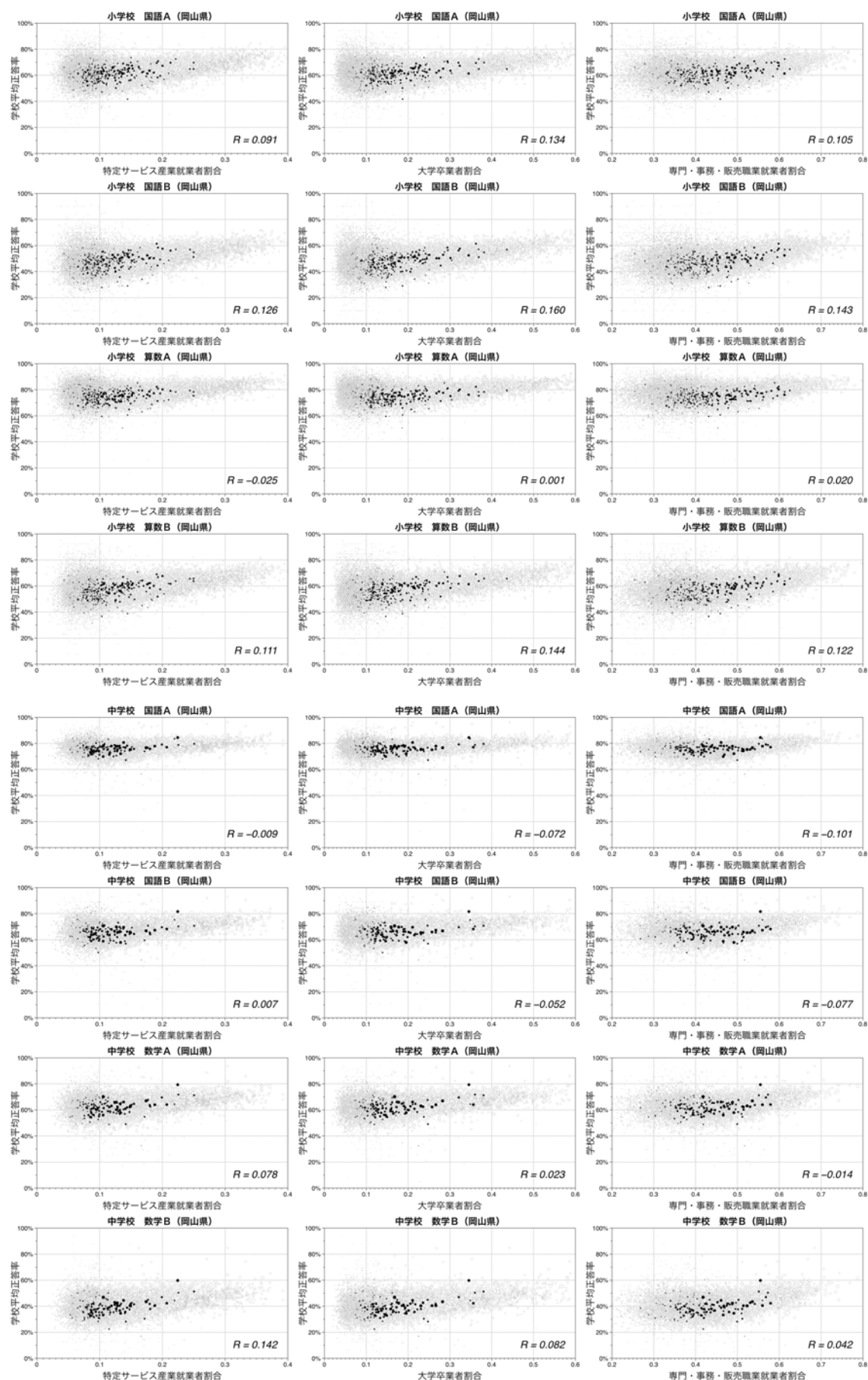
図表 9 - 2 - 30 学校の地域特性と学校平均正答率（和歌山県）



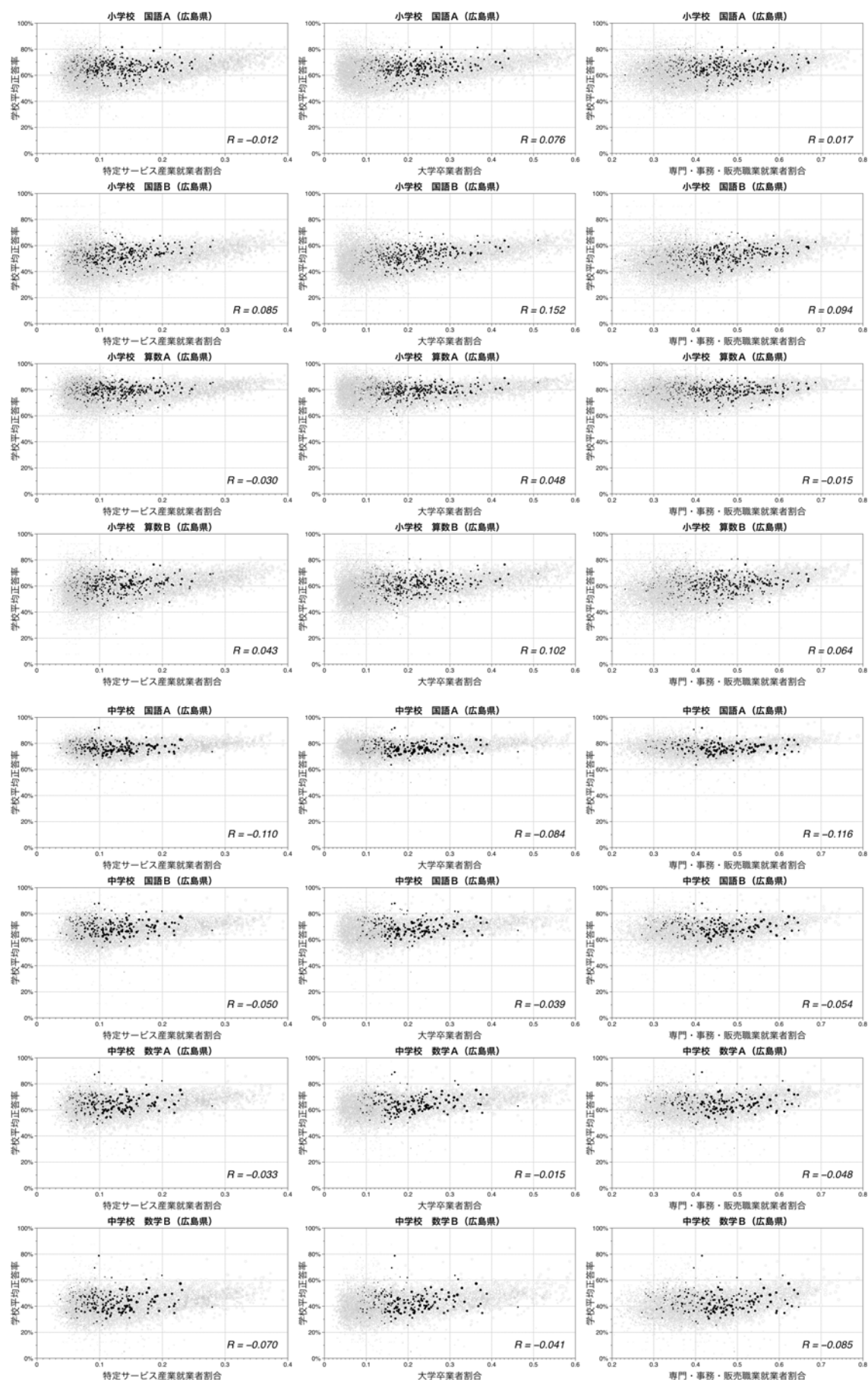
図表 9 - 2 - 31 学校の地域特性と学校平均正答率（鳥取県）



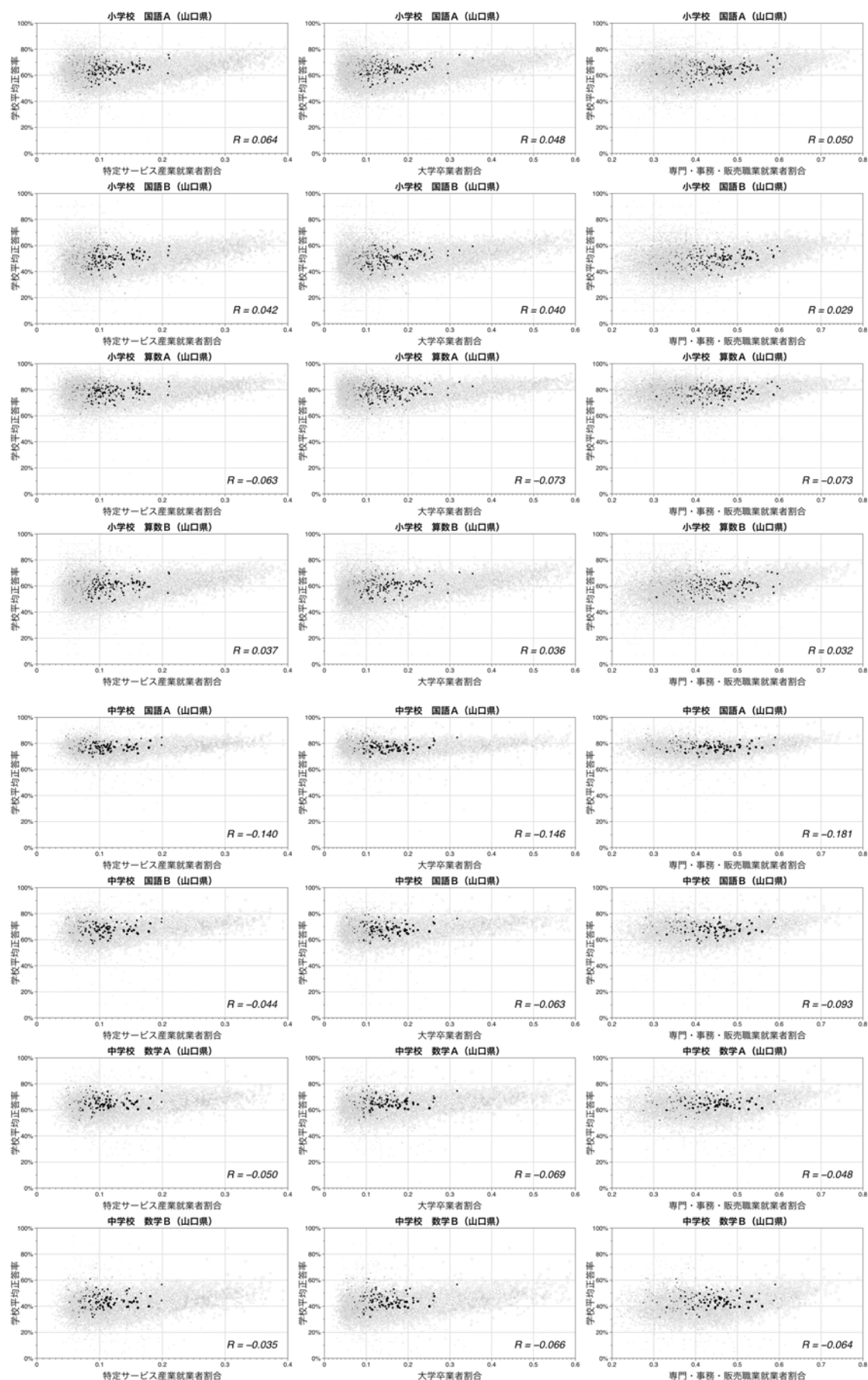
図表 9 - 2 - 32 学校の地域特性と学校平均正答率（島根県）



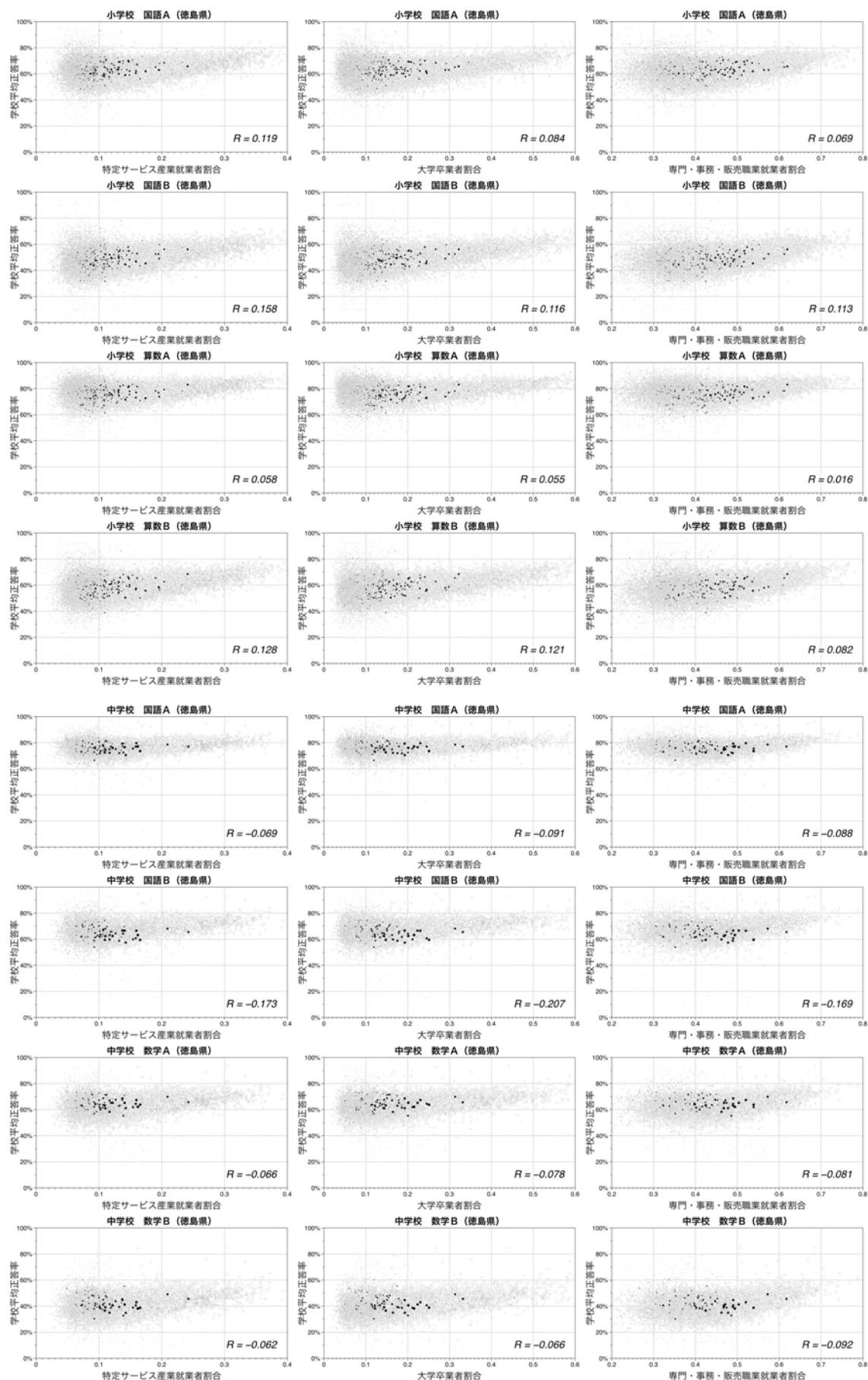
図表 9 - 2 - 33 学校の地域特性と学校平均正答率（岡山県）



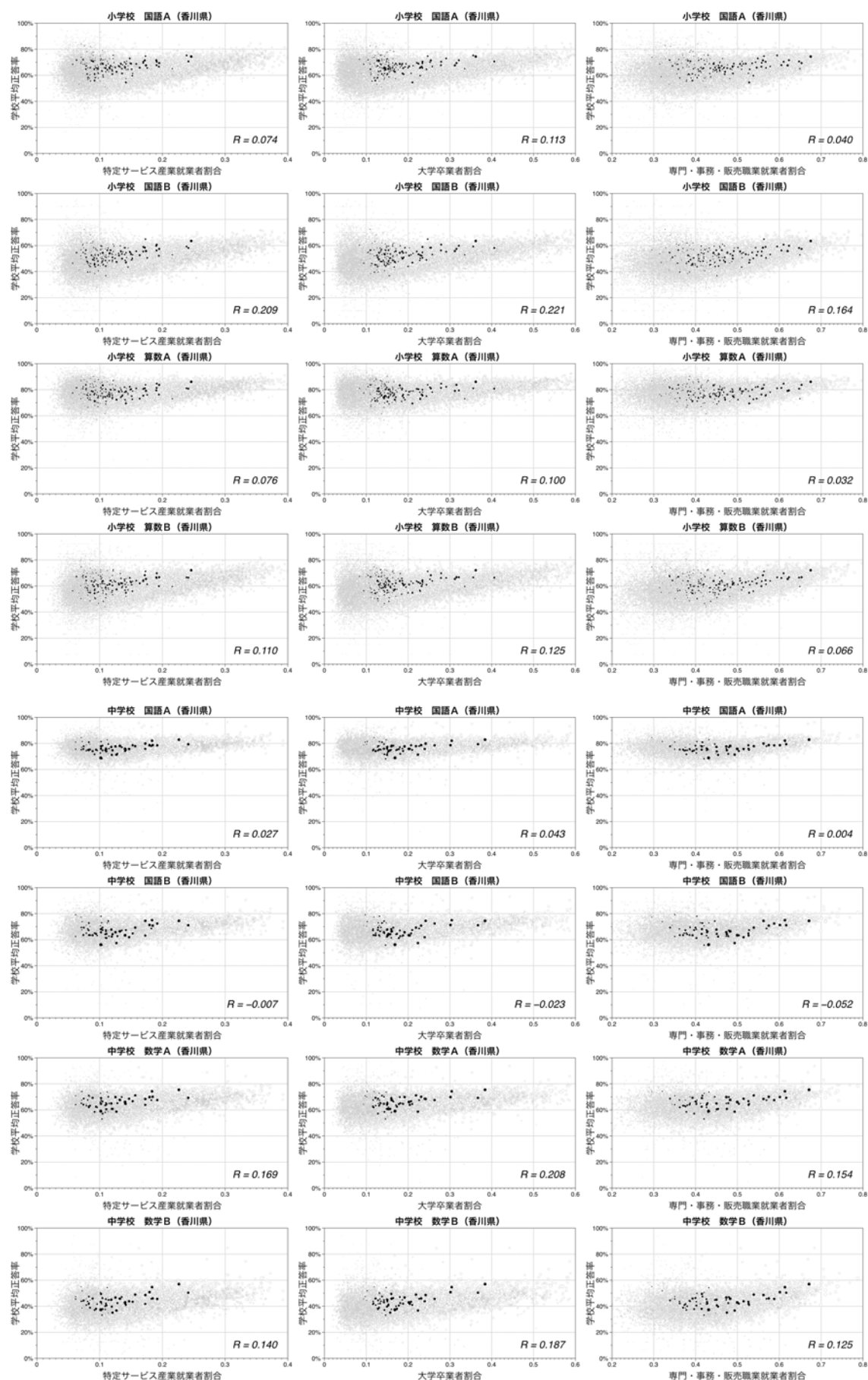
図表 9 - 2 - 34 学校の地域特性と学校平均正答率（広島県）



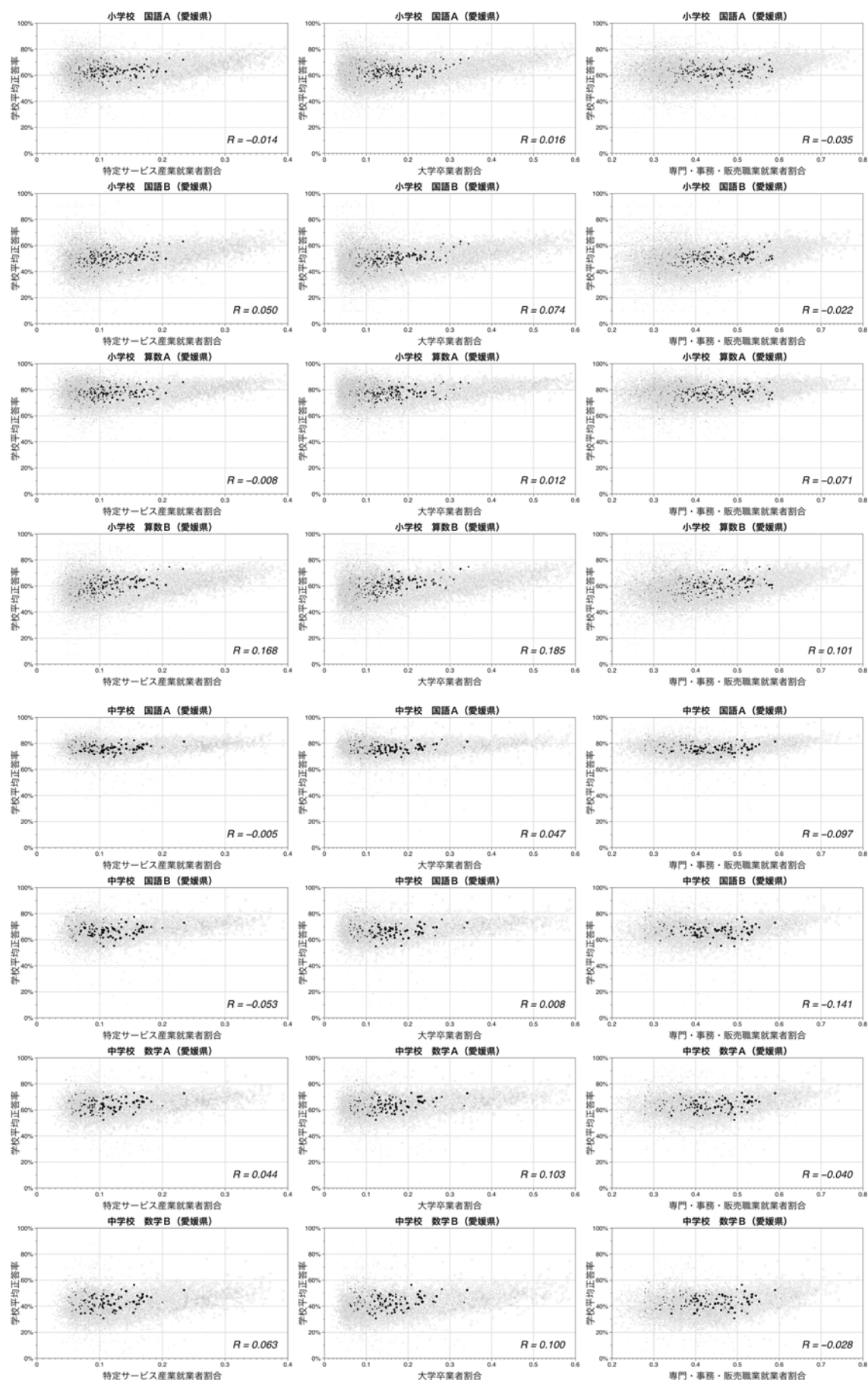
図表 9 - 2 - 35 学校の地域特性と学校平均正答率（山口県）



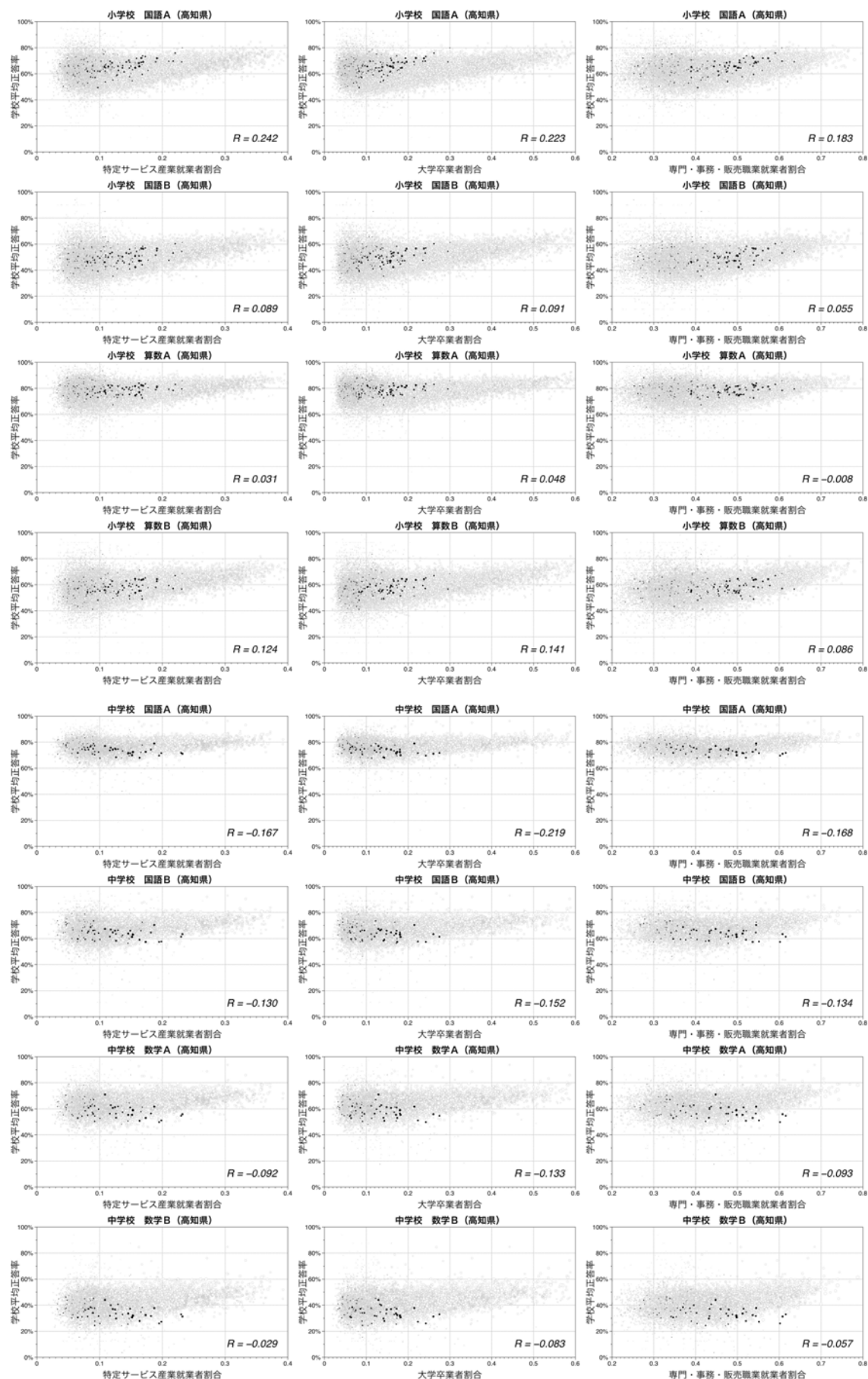
図表 9 - 2 - 36 学校の地域特性と学校平均正答率（徳島県）



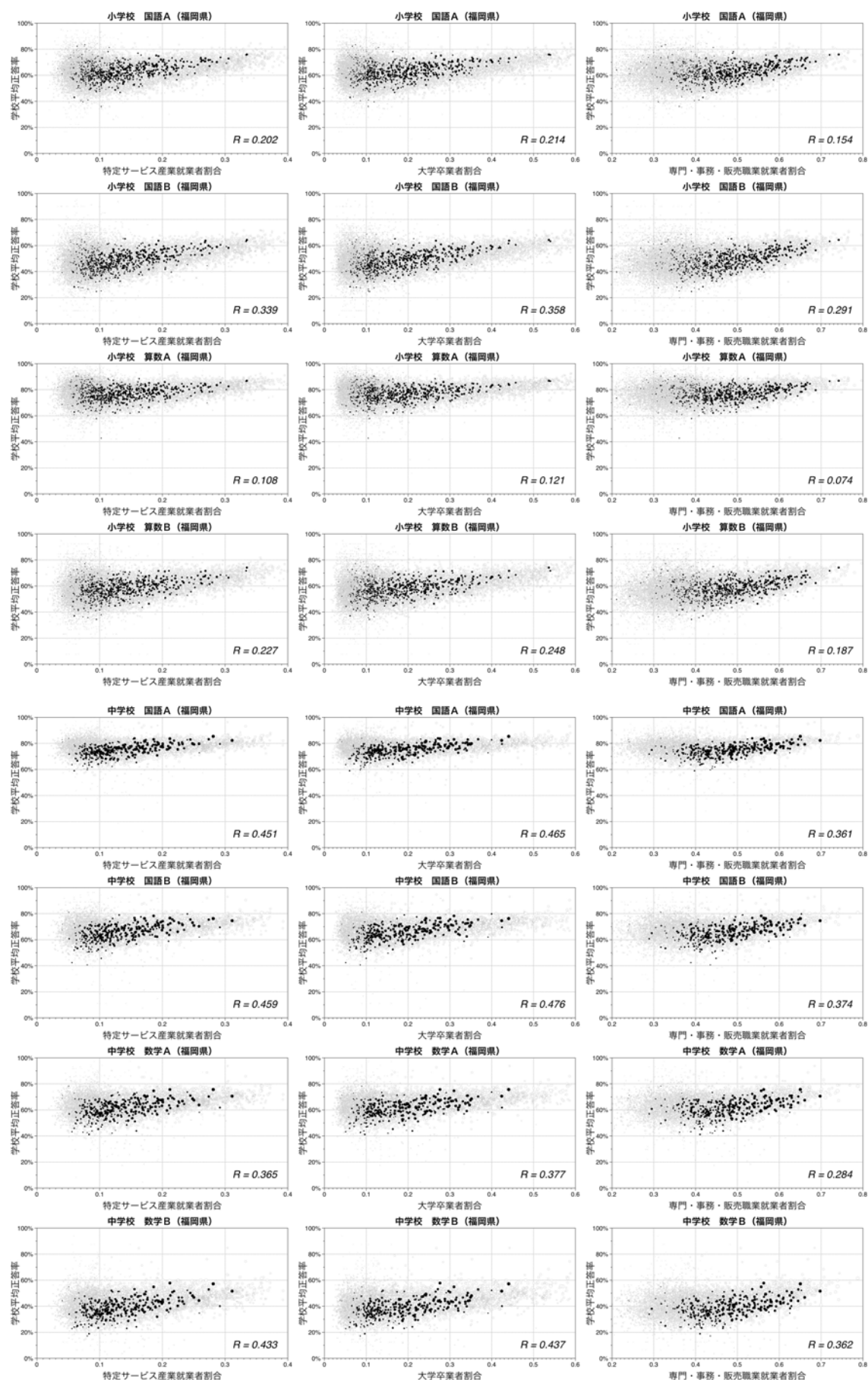
図表 9 - 2 - 37 学校の地域特性と学校平均正答率（香川県）



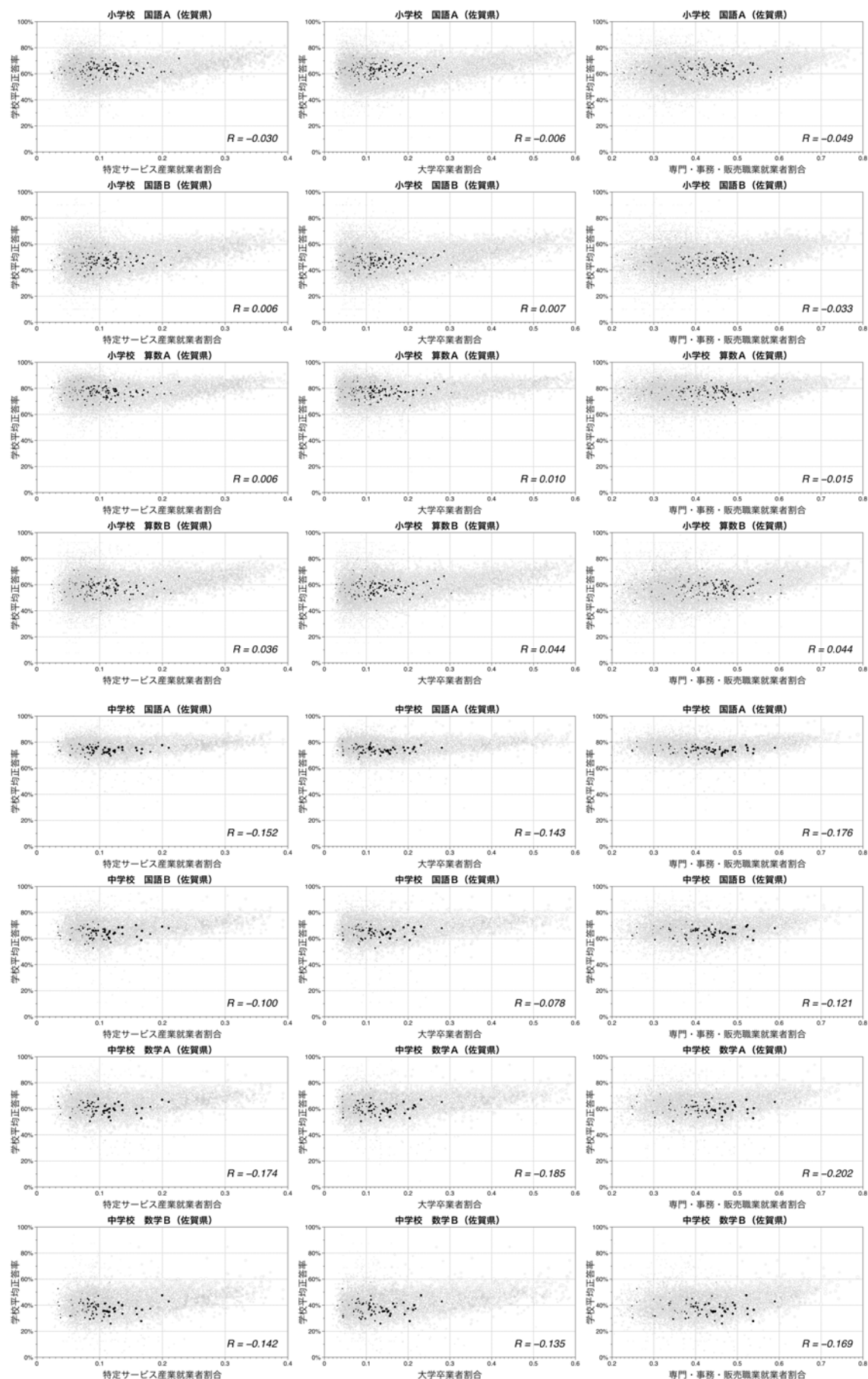
図表 9 - 2 - 38 学校の地域特性と学校平均正答率（愛媛県）



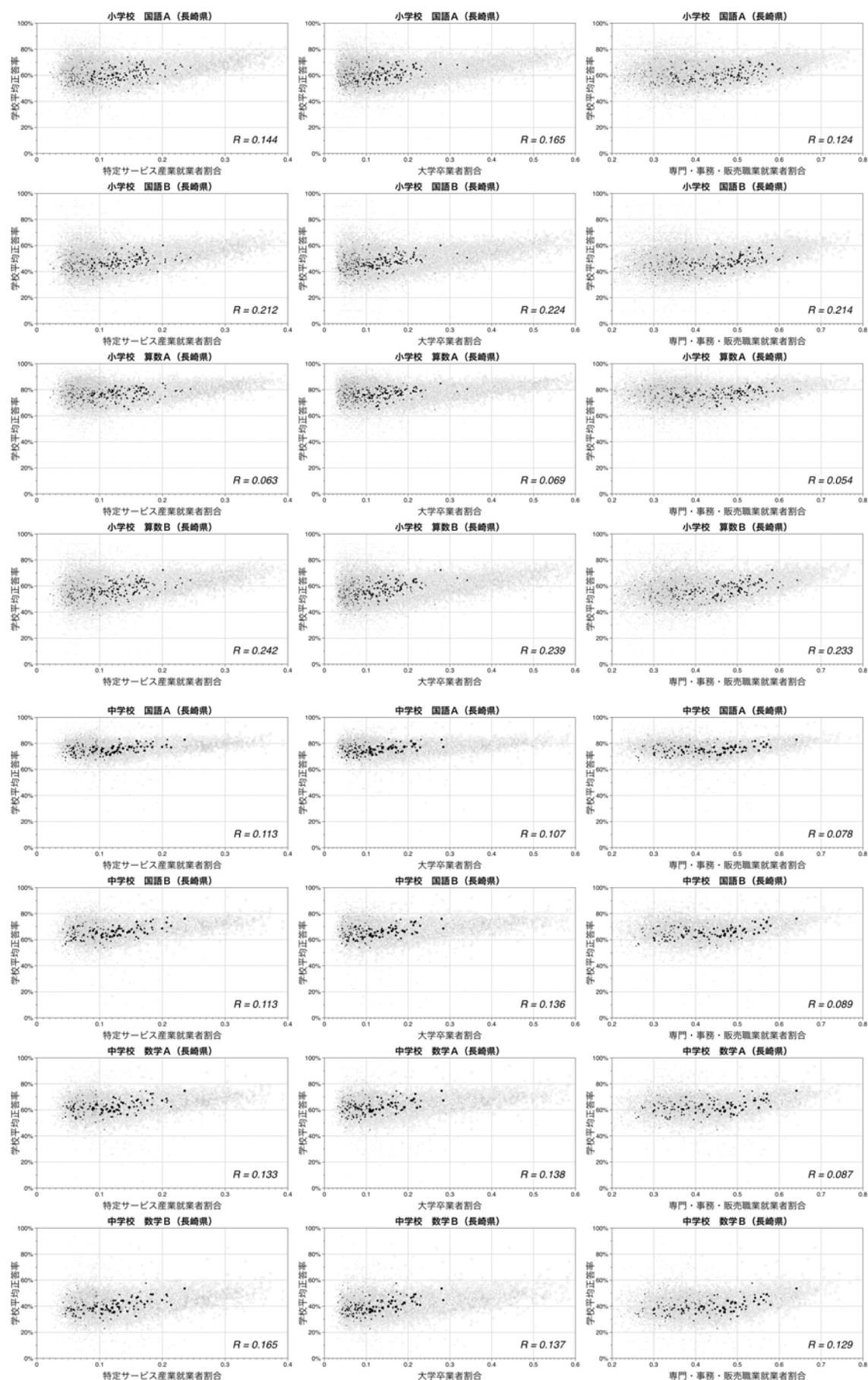
図表 9 - 2 - 39 学校の地域特性と学校平均正答率（高知県）



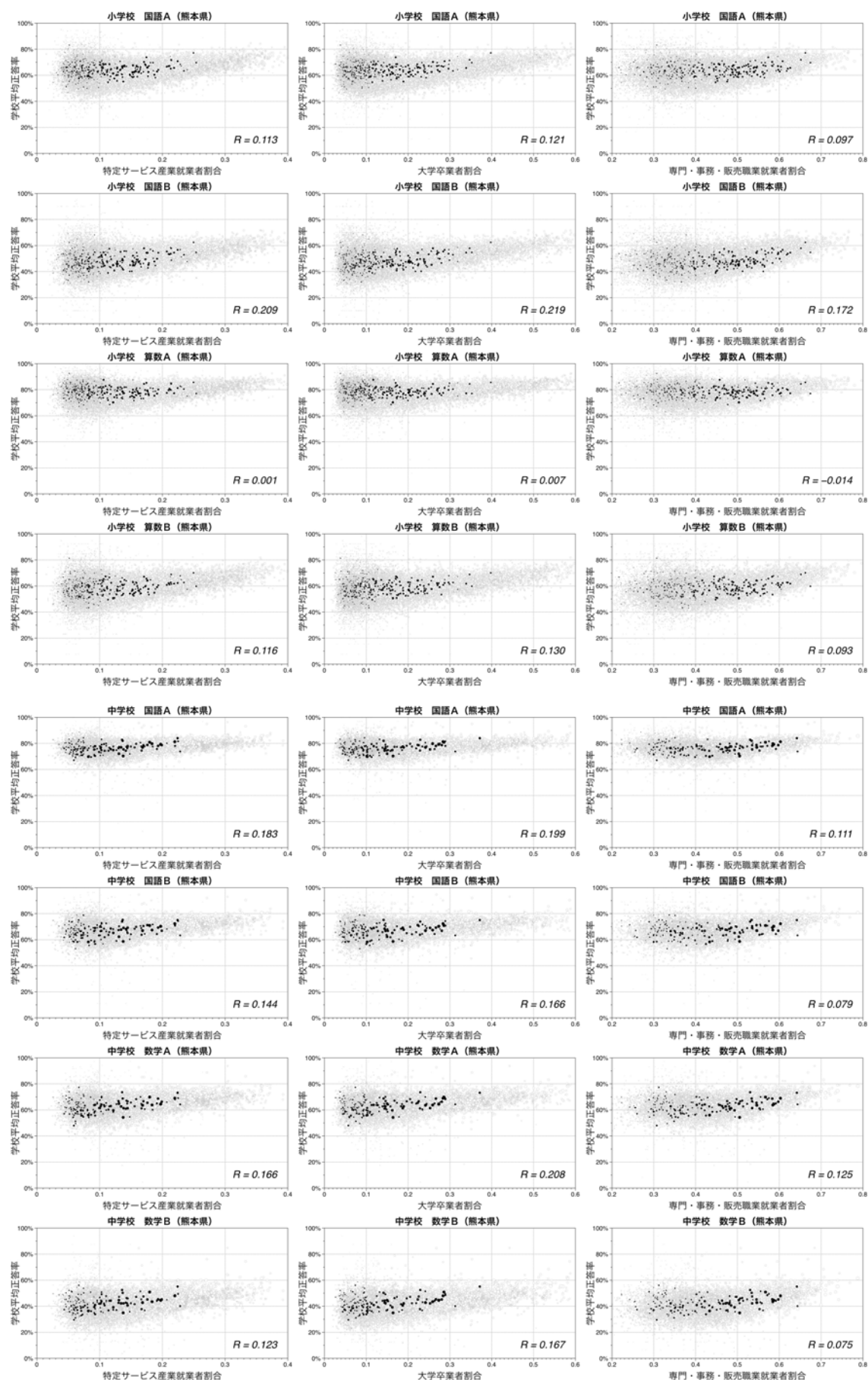
図表 9 - 2 - 40 学校の地域特性と学校平均正答率（福岡県）



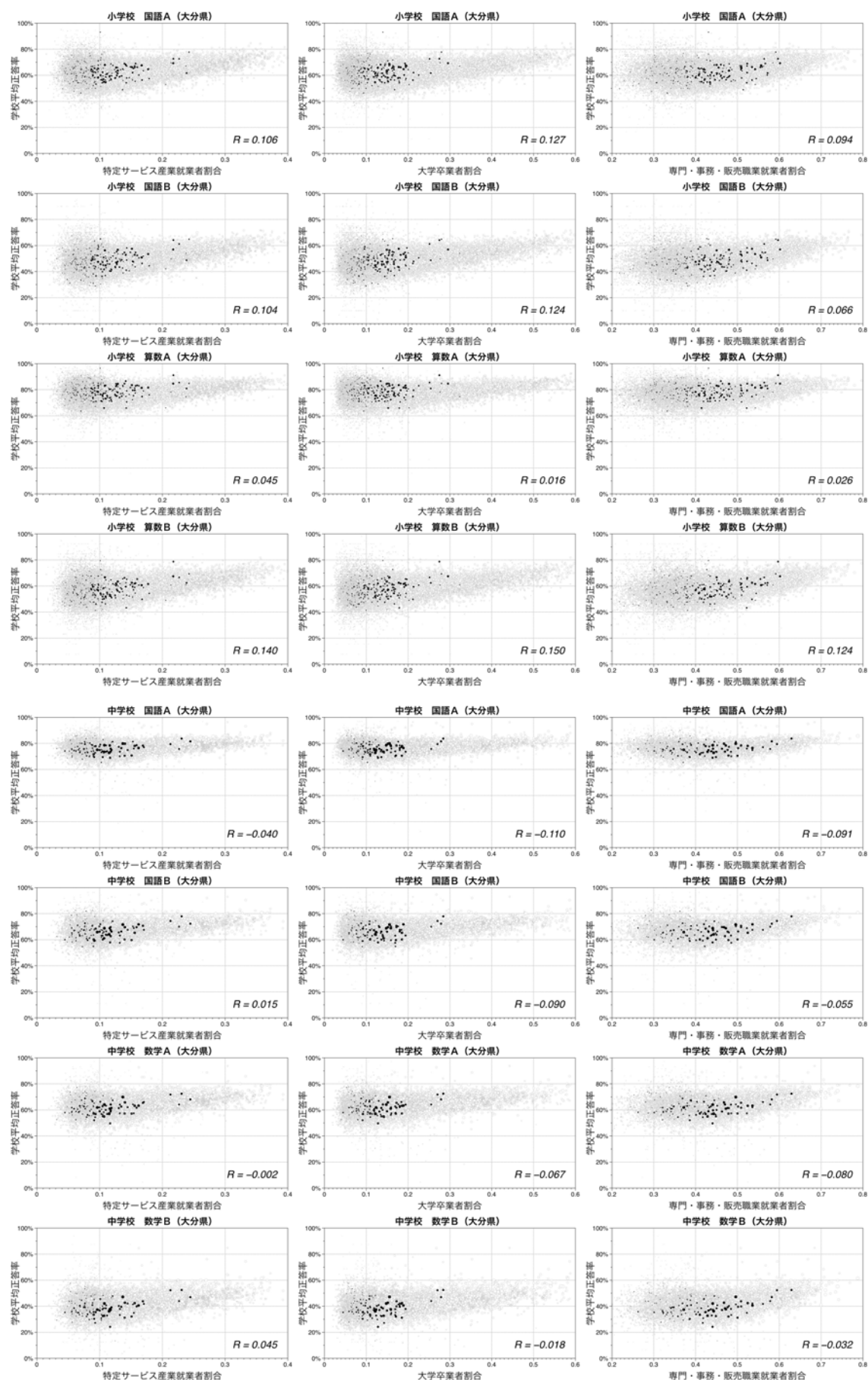
図表 9 - 2 - 41 学校の地域特性と学校平均正答率（佐賀県）



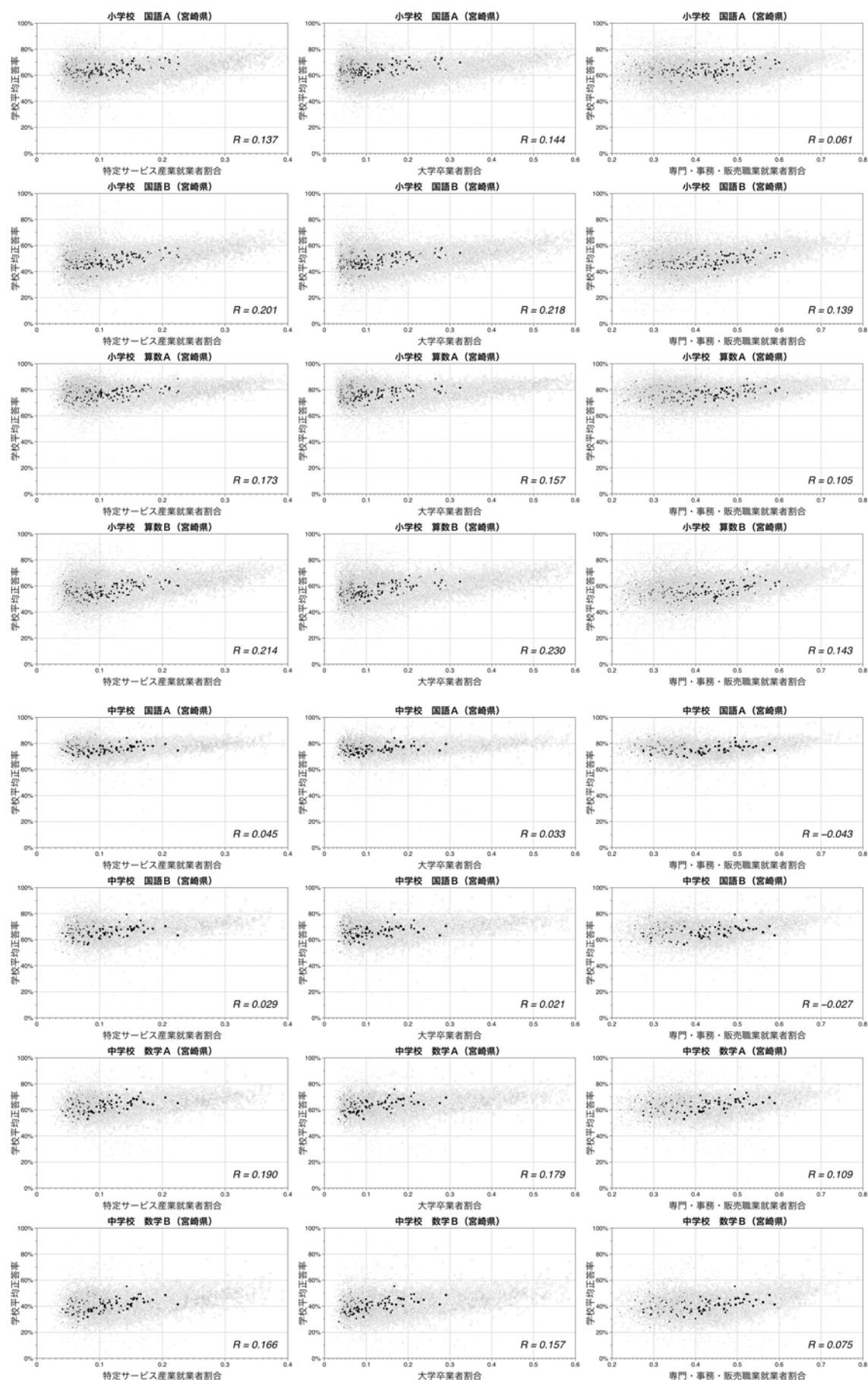
図表 9 - 2 - 42 学校の地域特性と学校平均正答率（長崎県）



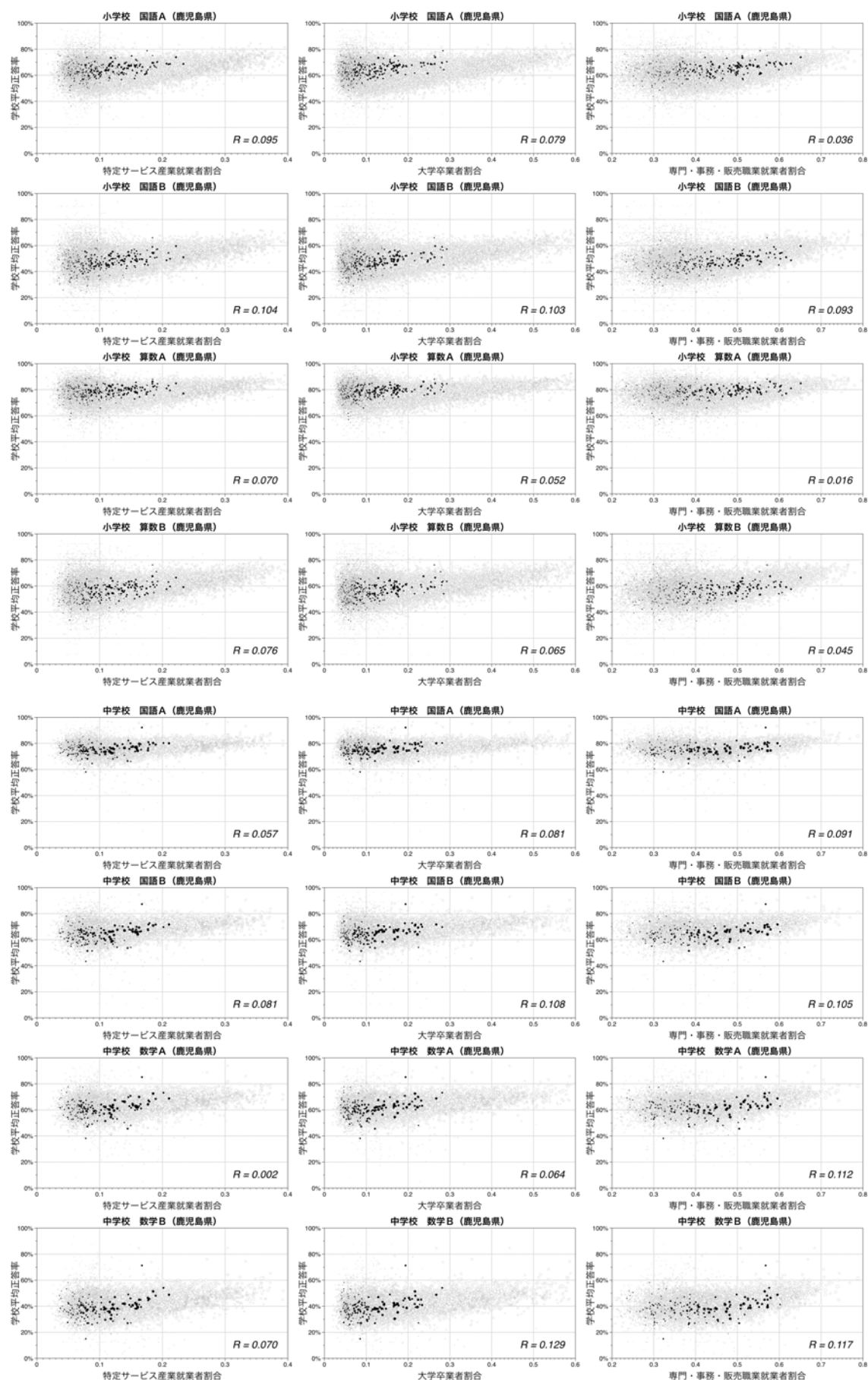
図表 9 - 2 - 43 学校の地域特性と学校平均正答率（熊本県）



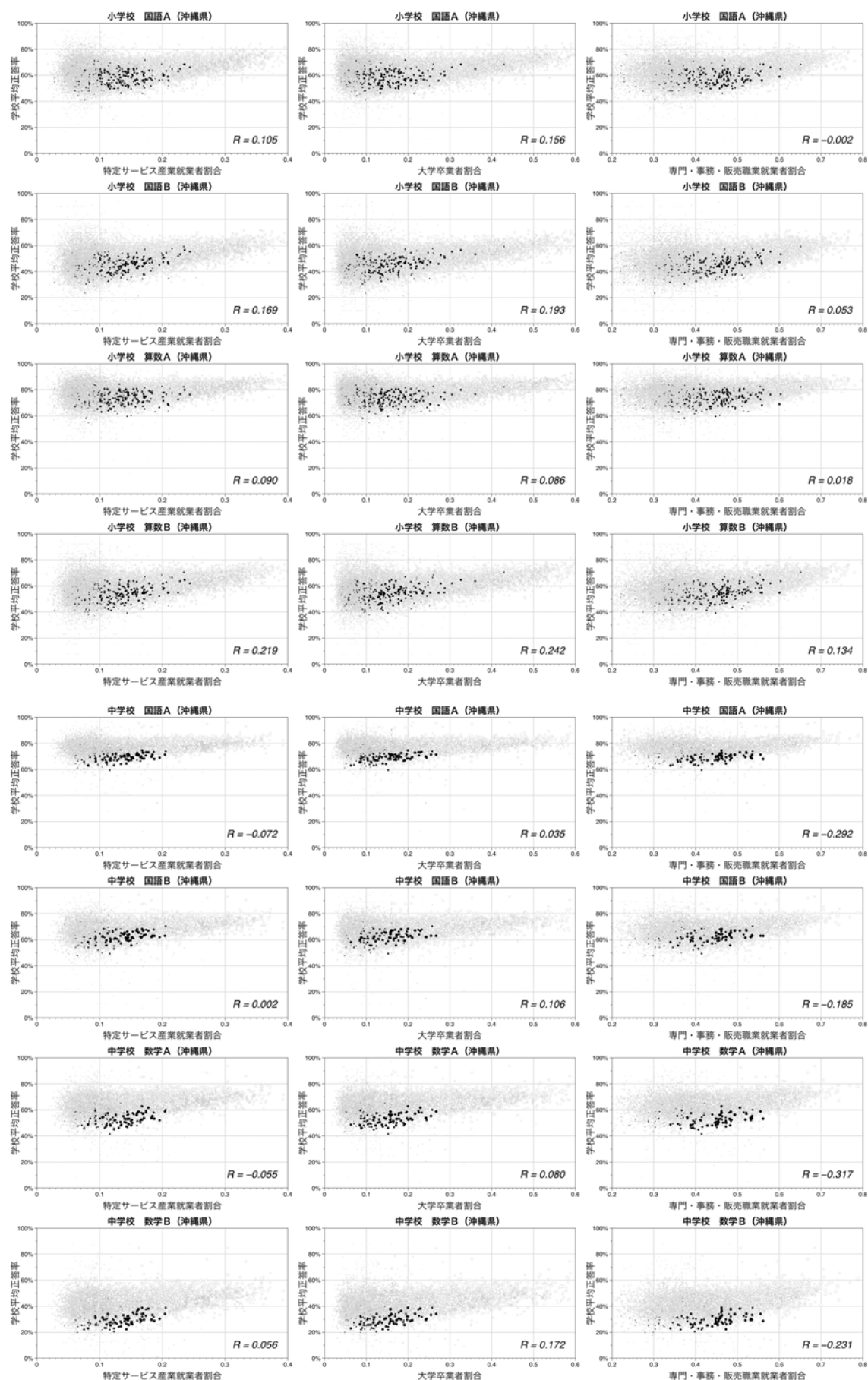
図表 9 - 2 - 44 学校の地域特性と学校平均正答率（大分県）



図表 9 - 2 - 45 学校の地域特性と学校平均正答率（宮崎県）



図表 9 - 2 - 46 学校の地域特性と学校平均正答率（鹿児島県）



図表 9 - 2 - 47 学校の地域特性と学校平均正答率（沖縄県）

第10章 高い成果を上げている学校、教育委員会の 訪問レポート

1. A市I中学校

2014年2月3日にA市I中学校における訪問調査を行った。校長、教頭、2名の教諭へのインタビューを行い、国語と数学の授業を参観した（垂見裕子、富士原紀絵が担当）。19日にA市教育委員会のインタビューを行った（浜野隆が担当）。

（1）学校のプロフィール

I中学校はA市の中央部西側に位置し、周辺には港やフェリーターミナル、複数の博物館などの大規模な施設がある。市営住宅といった集合住宅も多い。全校生徒539名、1学年は6学級（各学級28～29名）、2・3学年は5学級（各学級35～39名）、特別支援学級二学級の編成、教職員数等43名である。生徒の卒業後の進路は県内の県立・私立高校進学が殆どである。保護者の職業で多いのは公務員であり、サラリーマン家庭が大部分を占める一方、要保護・準要保護家庭が約3割に及んでおり一様に生活水準が高いわけでは無いが、総じて高校への進学要望は高い。学校はその希望に添うための努力をしており、受験勉強も含め学習は学校で責任を持つ風土が根付いており、塾通いも少なくは無いが一般的では無い。

校長は平成23年度に着任してから学校改革に強いリーダーシップを発揮して臨んできた。地域から荒れていると捉えられていた学校を建て直すため、特に学習指導と生徒指導をリンクさせることに力を入れている。PTAとも積極的な連携を結びつつ、地域や保護者の学校に対する認識を変えることに努力してきた。現在の3年生は学校が落ち着き、自分の学校に誇りを持って通い始める雰囲気が形成されつつある状況の中、入学してきた学年である。6月と10月の迷惑行為等調査結果に基づく生徒主体での全校いじめ防止集会や、いじめ防止宣言の取り組み、一ヶ月に一回の道徳強調デイ、生徒リーダー育成など、生徒の自主性・主体性を伸ばすことを目的とした生徒指導に関して独自の取り組みが多々なされている。また、校長は「リソースは教員自身である」との信念のもと、学校の組織力向上に向けて、それぞれの学級にはその学年が目指す目標を達成するための協働実践を求めている。

教師集団は「いつも生徒とともに」を合い言葉に、登校時、休み時間、昼休み等にも生徒のそばでコミュニケーションを取っていて、職員室の姿はみかけない。かといって、教師が生徒を徹底的に管理統制しているという雰囲気は無く、良好な関係を築いていた。また、校長は「組織としての学校」づくりをかかげ、教員の同僚性・協働性・一体感を育むシステムの構築にも努力をしており、校務分掌においては組織の機能化と活性化（例えば「報（告）・連（絡）・相（談）・確（認）」シートの活用）を図っている。「学び合い、支

え合う集団」として管理職と教員間、教員相互の関係も良好である。校長は職員向けに最低でも一月に一回は「校長室通信」を出し、業務に関して教員へのねぎらいを記したり、教育研究・教育論の様々な最新動向を紹介したり、校内の状況や課題・その解決の方途などを示したりしている。学年通信や生徒が作成する学級新聞の他、学校通信の「有志途開」は教頭が保護者版と地域版を発行しており、生徒指導部では子どもと保護者向けに「生徒指導通信」を、後述する小中連携事業の一環としての「I 中学校区小・中連携便り」を発行したりと、中学校の様子を様々な形で身近な地域に発信することに熱心に取り組んでいる。これも、生徒自身や保護者、地域への学校や教師の方針や取組への理解を得ることに繋がっているとみられる。学校では現在、地域や保護者の学校に対する信頼と期待が大きくなっていると実感している。

（２）特色ある取組や重点課題

市教委より平成 22 年度～24 年度にかけて「学校課題解決のための小・中連携推進事業」の研究指定を受け、I 中学校と学区内 2 小学校と 9 年間を見通した学習指導、生徒指導、特別活動、特別支援教育の研究を行っていた。平成 23 年度には中学校の「学習の約束」の小学校版を作成し教室掲示を行い、平成 24 年度には中学校での話し合い活動の進め方の「I 中モデル」の小学校版を作成し教室掲示をしている。学校の組織として学習態度や学習規律のモデルを先行していた中学校に置き、小学校から系統的にその育成を図っているということである。また、「家庭学習の手引き」の小学校版と中学校版を作成し、小学校で培われた家庭学習の習慣を維持させることにも力を入れている。さらに、「つなぎ教材」として小学校卒業後の春休みに生活習慣の確立を促す目的で毎日の生活記録をつけさせ、学習習慣の確立を図る目的で国語と算数の小学校での学習内容の復習課題を与え、そしてこれらに対する保護者のコメントを書かせる教材を配布している。教員の授業交流や子どもの交流も盛んに行われているものの、こうした学習や生活習慣面での連続性を強く意識した連携研究が行われているのは特徴的であろう。

家庭学習について中学校では教師の出す宿題の他、小学校から培われてきた自分の課題に取り組む「一人勉強」（一人勉強ノート）の習慣を引き継いでいる。ある学年の学級では「ひと勉レース」という提出回数を記す掲示物もあった。さらに「毎日の記録」ノートもあり、学校の予定を書き込むことや家庭との連絡機能の他、「家庭学習の記録」を付けるページとその自己評価（反省）の欄もある。教科によって家庭学習の方法、復習の仕方についての記載もある。これら 3 種の提出物の点検は教師が毎日行っているが、習慣化しており、その意義と重要性を考えると負担感は無いということであった。

朝の読書活動は読書の内容も重視するが、生活指導の一部としても位置づけており、読書に集中している落ち着いた態度、静謐な環境を、授業に持ち込むことも目的とされている。授業を参観した際には確かに生徒が集団として凝縮して集中している印象であった。

総じて、小学校からの継続性を意識した生活習慣と学習習慣の確立に力を入れており、生徒にそれが定着しているとみることができる。

（３）学習指導上での取り組みの特徴

現状としては発展的な課題への取り組みよりも、基礎・基本の確実な習得と定着に力を

注いでいる。毎日、下校前の 10 分間に ST (study time) を設定し、方法や内容は学年裁量とし、例えば定期テスト前の 3 日間は学習補強期間として 30 分と延長するなどして学習に取り組ませている。「最低の到達ラインに全ての生徒を」という意識が強い。国語科では教師は予習よりも復習に力を入れ、ノートの点検を単元終了毎、数学科では定期テストの後に行い、生徒の学習の定着を細かく把握している。

これまで教科では黒板に学習課題を示し、生徒の学習のめあてを明確化させるため、ノートにも定規で線を引かせてはっきりと囲ませるといった取組をしてきた。ノートに書き留めることによる振り返りを重視していることが、生徒のノートの丁寧さ、学校便りの頻度の高さ、板書計画の教員の共通理解、教師の講話を書き留めたポスター等から伺えた。これまで「書くこと」の活動を重視してきた中で、現在は「話すこと」の指導に力を入れている。国語では 4 人班の話合い活動を、数学でもグループで話し合う活動を取り入れている。その際、「自分の考え」を確立した上で話合いに臨ませようとしており、考えの根拠として、例えば数学では既習事項との関連性に注意させている。国語の 4 人班というのは、全員が考えの根拠を示して話合いに参加できるように配慮した人数ということであった。集団による話合い活動は、生徒の聴く力や他者に向きあおうとする意欲を高める点で効果的であるという。

英語と数学で TT を導入している。県（国）の少人数加配 2 名を受けており、英語科と数学科の教員を 1 名ずつ増員し、教科のすべての教員が分担して TT を行っているということであった。個の能力に応じるためには習熟度別指導よりも TT のシステムの方がよいということである。全ての生徒が活躍できる授業を意識しているということであった。

なお、初任者を TT の授業で T1、T2 の役目をもたせ、先輩教員の授業を見たり、見せてもらったりするのは学校独自に行っている取り組みであり、初任者に一年間の授業のサイクルを学ばせる機会を与えることを目的としている。初任者と限らず、I 中学校では市教委や県教委、県外の学校外部の研修の機会を積極的に活用するというよりも、学校内部での研究こそが一番の研修機会ということであった。例えば学習指導で課題とされている話し合う力の育成についても、校内研修では話合いに重点を置いた言語活動を導入した授業の「見せ合い」が行われている。

（４）全国学力・学習状況調査を含めた各種学力調査の実施と活用状況

中学校では定期テストの他、4 月に 1 年生と 2 年生を対象に標準学力テスト、3 年生は全国学力・学習状況調査、8 月に 2 年生を対象に県の学習状況調査がスケジュール化されている。4 月上旬には 3 学年で知能検査も行っている。これらの分析と活用は校務分掌として学習指導部が行っており、他の学習指導部の業務と平行して行っている。

実態として全国学力・学習状況調査の結果は前年度の 3 年生や他中との比較に用いたり、県の学習状況調査の自校の結果を分析し考察を加えたものを市教委主催の研修に持ち寄せたりしているため確実に分析は行っている。調査やテスト結果の個票は保護者との面談にも活用している。上述の「毎日の記録」には教科によっては「テスト勉強の仕方」が載せられており、教室にはテストを受ける際の諸注意や心構えを示した「テストを受けるときの注意」の掲示がある。

しかし、調査やテストに振り回されず、最終的には「生徒の実態から浮かび上がる課題」

に応じて行くというスタンスのようであった。

（５）教育委員会の方針と学校との関わり

A市教育委員会では市内全中学校区を３カ年毎サイクルで「学校課題解決のための小・中連携推進事業」に研究指定しており、I中学校区の平成17～19年度、22年～24年度の「学習習慣の定着・生活習慣の改善」の研究成果が生徒によい影響をもたらしているのでは無いかとみている。連携の最初の年の平成17年度の小学校1年生がI中の平成25年度の中学校3年生で、連携研究を数年を除いてほぼ継続的に受けていた学年であることも判断の根拠となっている。生徒指導の熱心な取り組み、「見せ合い授業」といった校内研修の充実、そうした改革を組織的・計画的に進める上で、校長のリーダーシップが要であったことも指摘している。

市教委では独自の研修講座（90講座）を開催しているが、I中では若手の教員が行くということであった。また任意の教育団体である市中学校教育研究会での授業を持ち寄っての検討会に参加する機会やA市教育委員会主催の特別活動研修講座で授業公開発表校を行ったりしているが、I中としては、教員がチームとして、そして学校として協働して取り組み、生徒を伸ばすチャンスと受け止めている。

上述のように、I中が市教委指定の小中連携研究で改革・改善した点は大きい。そこでその成果を踏まえつつ、中学校としては校長のリーダーシップのもと自主的な校内研究を深めており、市教委もそれを尊重しているといえるだろう。

〔文責：富士原 紀絵〕

2. B市Ⅱ中学校

2014年2月4日にB市教育委員会における指導主事3名への聞き取り調査、5日にⅡ中学校の訪問調査を行った（両日とも山田哲也、中西啓喜が担当）。Ⅱ中学校では校長、教頭への聞き取りに加え、教務主任（数学科担当）、生徒指導担当（国語科担当）、校内研修担当（英語科担当）の3名に聞き取りを行った。また、2年生の国語と数学の授業を参観した。

（1）学校のプロフィール

B市立Ⅱ中学校は、1987年に開校した創立27年の比較的新しい学校である。平成25年度の全学年の生徒数は383人で、全国学力・学習状況調査の対象学年であった第3学年の在籍は129人である。1学年4学級で、B市内では、ほぼ平均的な規模の学校である。

教員数は28人であるが、その教員経験年数の内訳は、5年未満：7人、5年以上10年未満：4人、10年以上20年未満：3人、20年以上：14人と中堅年齢の教員が少ない（臨時的任用教員及び非常勤講師の人数は0人）状況である。

特徴的なのはその立地である。当該中学校は、市の中心部から地下鉄で約10分の距離である。そのため、近年再開発が進み、古くからの住民がいる一方で、数多くのマンション等が建設され、新しい住居者も多い地域となっている。また、両親共働き家庭が多く、保護者が夜間の勤務のため、子どもだけで家で過ごす環境にある家庭も少なくない。このため、子どもの家庭での過ごし方は一様でない状況が見られるようだ。

このような背景をもつⅡ中学校においては、教務主任を中心に全校体制で教員研修、授業実践、生徒指導が有機的に進められており、それにより、全国学力・学習状況調査の調査結果を含め、高い成果（教育効果）を上げていることが推察される。

（2）「ミドルリーダー」としての教務主任の存在

B市の小中学校においては、教務主任などのミドルリーダーが校内でのリーダーシップを取りながら、教育活動を促進している。具体的にいえば、B市教育センターの研修において、「ミドルリーダー」の育成が重視されている。当該校においても、学校長が校内のミドルリーダーを集めて、自主的な研修を行っているとのことである。また、B市教育委員会の指導主事らによれば、Ⅱ中学の教務主任（数学科担当）は、実践力の高い教員であり、校内のみならず、校外の研究団体でも若手教員の指導的立場として活躍しているとのことである。

当該校で参観した授業は、教科内容の指導に加えて、生徒同士が「教え合う」ことを重視したものであった。当該校の研究主題である「言語活動が生きる授業のあり方」に「言語活動の充実」というアプローチを行い、いかに「思考力・判断力・表現力」を育むかという視点を大切に構成されていた。数学でいえば、提示された課題を各自が解き、それを隣の席の生徒に説明する。その様子を教師が丁寧に観察し、クラス全体が共有すべきだと判断した思考をしている生徒を指名し、その生徒のノートを実物投影機に写し、クラス全体に説明させる。その説明を補足する形で教師が授業を進めていくというスタイルで

あった。

また、Ⅱ中学校は、ミドルリーダーを中心として、校外での研修会への参加や自発的な勉強会などの学校文化が醸成されている学校であった。校内研修においても、研究授業における指導案を「事前に」検討し合うことを大切にし、それぞれの教員が当事者意識をもって研修に参加している。研究授業を観察した後に協議を行うスタイルが一般的な授業研究の進め方であるが、本校では、授業を実施する前の協議に時間をかけている。授業前の協議を通じて、授業意図や生徒の実態などを共通理解することができ、授業観察の視点が焦点化され、効率的な事後検討に結びつくという。

加えて、事前の協議は、「教科の枠を超えた」授業研究の実現にも一役買っている。教科の枠を超えた視点として、「考える、表現させる」ことを学校全体として授業の柱に据え、授業作りを行っているが、この視点に基づいて事前に協議しておくことで、担当教科に関わらず、広い視点から授業観察を行うとともに、協議を行える利点があるとのことである。

実際に取り組んでみて、現段階では、日常的に教員間で授業を話題にする機会が増えたと実感しているという。

さらに、生徒指導の側面についても「事前」の対応を心がけているという。例えば、連絡帳のような形で毎日、生徒に近況を報告させて、担任が必ず一言コメントを入れるようにしている。普段から話をする機会を確保するよう努力しているのである。教員からは、「忙しい」との声もあるが、ここを疎かにすると、結局もっと手間がかかるようになる、と教務主任は言う。

（３）学力について

まず、全国学力・学習状況調査については、教育委員会は市内の各学校に対しデータを整理して調査結果と今後の指導方針に関する資料を配布している。当該校においては、全国学力・学習状況調査の結果を受け取るのが２学期であることもあって、分析や指導改善の材料として、より積極的に学力等の把握を進めるため、学校独自に、標準学力検査（CRT（Criterion Referenced Test））と授業アンケートを行っている。これを基に生徒の実態を把握しながら、生徒たちにどういう指導が必要なのかのアセスメントを行っている。そして、教員がどう授業改善していかなければならないかという部分を明らかにしながら、それぞれ授業計画を練り上げていく。また、研究授業もそれに合わせて行っているという。

（４）教育委員会、地域住民、小学校との連携状況

市教育委員会との関係であるが、B市研究開発事業「思考力・判断力・表現力」を培う学習指導の在り方についての実践研究の研究指定校として実践的な研究に取り組むなど、教育委員会と本校とが具体的な取組を共有していることが見て取れた。教育委員会としては、「大きな方針」や「目指してほしいこと」について示すが、個別に学校を指定して、学力の改善策を示すなどということまでは行っていないという。学校の自発的な取組に期待していることがうかがえたが、一方で、教育委員会として、教員が参加する研修会などがかなり豊富に実施しており、大規模自治体であるがゆえに広域での支援に努めている様子が確認できた。こうした取組により、教員が指導方法などをスキルアップする機会が高い水準で保障されているといえよう。

地域住民との連携については、地域の保護者などが見回りを行うなど、協力的な保護者はいる。ただし、先に述べたように、保護者が多様な生活スタイルにあるため、昔からの居住者は学校の活動に対して大変協力的・積極的である一方で、新しく転居してきた保護者の中には、そこまでの積極性が見られない場合もあるようだ。

小学校との連携については、「中一ギャップ」対策として行っている。これは小学校のほうからの要望で、中学校の授業を見るだけではなく、実際に授業を体験したいということで開始された。実施時期は、中学校と小学校の夏季休業日期間のずれを利用して、中学校の休業日に、小学生を中学校に招いて授業体験を行っている。

（５）その他の課題

以上で見てきたように、Ｂ市では、「ミドルリーダー」の育成を中心とした教育が進められている。しかし、その一方で、教員の年齢構成では 40 歳代が少なく、そのため、次世代の「ミドルリーダー」の育成と指導方法等の継承が難しいという現状がある。

〔文責：中西 啓喜〕

3. C市Ⅲ小学校

2014年2月17日にC市教育委員会における指導主事2名へのインタビュー、18日にⅢ小学校の訪問調査を行った(両日とも垂見裕子、富士原紀絵が担当)。Ⅲ小学校では校長、教頭、教務主任、2名の教諭がインタビューに応じた。6年生の国語と算数の授業を参観した。

(1) 学校のプロフィール

Ⅲ小学校はC市の中心部からは離れた農地が広がるのどかな田園地域にある。学校の前には国道の幹線道路が通っており、その両側に集落が拓けている。学区は広くスクールバスで通学する児童もいる。全校児童168名、単学年単学級編成で、特別支援学級は一学級の小規模校である。『学校要覧』には教職員数等19名とされているが、うち教諭相当職は14名で、内、県の「指導方法の工夫改善にかかる加配」が1名(算数のTT。非常勤講師)、市の負担による「教科指導支援」が1名(国の緊急雇用政策を引き継ぎ市政として事業化。単年度契約。授業や校務分掌等の補助の役割)、同じく市による「特別支援教育支援員」が2名(障がい等がある児童の支援を専門とする)加配されており、兼任教諭として市内小学校2校と中学校1校を兼担する「教育専門鑑」1名(県の事業。理科担当)の合計5名が含まれている。

地域の産業であるりんごを活かした生活科や「総合的な学習の時間」やふるさと学習、キャリア教育を体系的に推進しており、児童の主体的な体験活動を尊重した活動が展開されている。JRC(青少年赤十字)活動とともに、1年生から6年生までの全校児童を20の班に分けた学年の縦割り活動は学校行事や児童会活動、クラブ活動に積極的に導入されており、子ども相互の自主的・主体的関わり合いを促し、仲間に対してやさしく思いやりのある子どもを育てている。挨拶指導も丁寧に行われており、総じて教科外の指導や活動は充実している。

こうした活動が展開できる背景には地域人材による支えが大きいこととPTAをはじめとする保護者からの支援が得られていることによる。保護者の学校への信頼感は高く、非常に教育熱心で、協力的である。家庭背景が厳しい児童も存在するものの、教師の間でそれが学校生活に影響を与えている感じを受けていない。これは家庭が教育を重視し、子どもの教育を優先とし学校生活を支えていることによる。児童の大半が一つの保育園から持ち上がることもあり、保護者のネットワークが構築されていることも、学校に対する保護者の信頼・協力の一因となっているかもしれない。地域と保護者、PTAの教育に対する関心が高いことで子どもが充実した学校生活をおくっているとみられる。

(2) 特色ある取り組みや重点課題

小学校は平成21年度文部科学省による「ファン・イングリッシュ推進事業」の指定を受け、平成22年度はC市教育推進委員会主催の外国語活動公開研究会を開催している。平成24～25年度は市の学力向上推進事業として「言語活動の充実」による確かな学力の育成」研究の指定を受けている。これら一連の言語活動に関する研究活動の実績は引き継

がれ、学習環境の充実や学習活動の展開に影響を及ぼしている。特に書いて学ぶことへの高い意識付けと話し合い活動は学習指導と教科外、生活指導ともに積極的に取り入れられている。朝の活動では、ミニテスト・漢字・計算もあるが、「読み聞かせ」や「音読」を導入し、集中して聞く態度や子どもに声を出させるといった言語によるコミュニケーションの基礎を培うことを重視している。さらに、13時35分から13時50分には読書の時間を設定している。言語活動を全教育活動の基礎として、全般にわたり重視していることがわかる。なお、学級文庫は全学級にある。学校図書館の充実にも力を入れており、児童が休み時間には頻繁に出入りしていた。学級文庫や学校文庫の充実の成果とみられるが、読書好きの児童が多いということである。

平成24～25年度の市の指定事業は「W 中学校区」として受けており、Ⅲ小を含む管内の3小学校と1中学校で連携して研究を進めている。連携を単に中学校への円滑な移行を目的とするのではなく、小学校1年生から中学校3年生までの9年間を見据えた指導を連携して行い、教科、教科外ともに9年間に身につけさせたい力を明らかにし、その力を確実に定着させることを大きな目的としている。現在の研究対象は主として国語（読む、書く、聞く、話すといった言語活動）中心ではあるが、これは全教科のベースとなる教科であるという認識の上にあり、9年間の「Wの子の学びの姿」として結実している。小学校での取り組みを中学校側できちんと踏まえて欲しいという願いもあり、小学校と中学校で授業を参観し合うという取り組みも行っている。

Ⅲ小では日記指導が充実している。これは「書くこと」の指導であるとともに、生活指導の役割も果たしている。また、日記の内容を教科の学習指導に活かすこともある。高学年ほど学習を振り返る日記学習になるということであった。日記の中から日々の授業の児童の意欲や態度を把握することもある。日記は学級担任が毎日チェック・コメントを記入するが、担任が多忙な際には教頭や教務主任が手を入れる場合も頻繁にある。担任以外の者が見ることで、児童を幅広く理解することにも繋がっている。日記の書く分量が少ないと、多く書くように指導することもあり、Ⅲ小の児童が「書くこと」を厭わないのは日記指導の成果もあると学校では理解していた。日記集会も開かれている。Ⅲ小の熱心な日記指導の充実は1950年代から引き継がれているということであった。

自学（自勉ノート）はC市全体で長年共有されている実践でありⅢ小でも取り組んでいる。これは子どもが自分の課題に気づき、取り組む家庭学習である。高学年では自分の課題を発見し取り組むことが多くなるが、課題発見は難しいため、低学年から「自学の仕方」を丁寧に、個別に指導しているということであった。これも毎日提出することになっており、基本的に教師がコメントを入れている。6年生では児童相互に自学ノートを交換し、相互評価でコメントを書かせたりする場合もあるが、子どもに抵抗感はないということであった。日記指導と同様自学から教師が課題を発見し利用することもある。家庭学習では宿題のプリント学習もあり、これは親が採点をすることもある。

日記指導、自学、プリント学習といった家庭学習を児童が毎日こなすには努力が必要であるが低学年からの丁寧な指導で習慣化され定着しており、また家庭もそれを支援しているということであった。また、それを毎日チェックする教員の努力も必要であろうと思われたが、日記指導では管理職のフォローもあり、それを当然のこととして理解している。

教師の指導力向上のため、毎年一回、全教員が授業公開を行っており、教員全員参加で

教員同士でざっくばらんに活発に意見交換を行っている。管理職による指導助言を与えるトップダウン型の研修ではない。平成 25 年度は「授業を見る視点を決めてみる」というテーマで授業参観を行っており、その際には県教委で発行している「授業評価シート」を活用している。なお、校長は教員に学校外での研修（視察等）を積極的に勧めている。

（３）学習指導上での取り組みの特徴

学習のめあてを明確化し、課題解決に向けて子どもが書くこと、話し合うことを重視している。言語活動の充実は上述の通りで「分かったことを書く」というスタンスで臨んでいる。

基礎・基本の確実な習得と定着に重点を置き、発展学習よりも補充学習を重視し、必要があれば時間を増やしたりもしている。TT は算数と体育と理科（理科は特に教育専門鑑の役割が大きい）で導入されており、算数では管理職も加わり少人数指導を行っている。教育上必ずしも好ましくないと言うことで、授業内で積極的に習熟度別指導を取り入れてはいない。現在、一学年は 20 数名から 30 数名であり、TT だけでは手が回らないこともあり、かといってあまりに子どもの数が少なくなると、積極的な学び合いが行われなくなること、多様な学びが展開されないことから、15～16 人程度の少人数指導が本当は望ましいということであった。日記指導でもあるが、管理職が授業に積極的に入り込んでいることは特徴であろう。

児童の学習定着の理解のために、総括テストも行っているが、形成的評価に力を入れており、これは授業の学習ノートのこまめなチェック、TT との情報交換、家庭学習を利用しているということであった。ノート指導は丁寧に行っており、ノートに書くことの目的によって色ペンを使い分けるなどしている。実際の子どものノートはよく整理されていた。なお、算数では単元に入る前にレディネステスト（導入テスト）を行い、児童の実態を把握した上で授業を展開することになっている。

教科の指導上では教科書の流れに沿うことにしており、単元の中に内容を盛り込みすぎないように注意している。むしろ、別な素材をいれることによる教科書のやり残し、飛ばしは行わず、教科書で丁寧に指導している。教科ではあえて授業時数の弾力化は行っておらず、その目的は、決めたスケジュールを忠実に守り、子どもに学ぶ体制を作りたいということである。総じて発展的な学習に力を入れるのではなく、家庭学習を始め、基礎・基本の徹底と学校の責任においてその取りこぼしの無いことに大きく力を注いでいるといえる。

（４）全国学力・学習状況調査を含めた各種学力調査の実施と活用状況

全国学力・学習状況調査と県学習状況調査の結果の分析と課題の明確化、そして実践後の検証を「校内研修」の営みに位置づけ、計画化を図っている。

校内研修を中心となってリードするのは校務分掌の中で研究指導部－学習指導部－その下部の各教科・領域部会と拡大国語部会、拡大理科部会、と運営部である。全国学力・学習状況調査の結果は保護者に対して学年通信で報告するほか、個票は保護者面談で伝えている。県の学習状況調査の方が難しく、12 月に行われるこの調査をやっていれば、全国学力・学習状況調査に十分耐えられるということである。また、県では「学力向上支援ウェブ」として「単元評価問題」を配信しており、小学校向けに算数・数学、理科を展開して

いるが算数に関しては積極的に活用している。この算数の単元評価問題は基礎・基本が中心であるが難しい問題も含まれているということであった。県の学力向上の施策が全国学力・学習状況調査の結果の押し上げに繋がっているとみられる。

（５）教育委員会の方針と学校との関わり

日記指導の充実、地域との連携による体験活動が盛んであること、人的措置、不適應の子どもがいない、といったⅢ小の特徴が学力形成に効果を発揮していると理解していた。前述の通り、Ⅲ小と限らずＣ市では家庭学習、特に課題を自分で発見する「自主学習」は普通にやるものとして子どもが自己管理することとして根付いており、家庭学習の推進に学校が主体的に取り組んでいると認識していた。Ｃ市中心部に塾が集中しているため、その周辺に在住している家庭の子どもが中学校３年生後半から塾通いをするということであったが、これはむしろ補習の意味であって、小学校からの家庭学習の定着により自己学習力がついているのが一般的であるということである。

市教委としては学校図書館の充実に取り組んでおり、市として１０名の司書補助員を雇用している。言語活動の充実のためには語彙力や表現力を読書によって高める必要があり、この基盤としての学校図書館の整備をしているということであった。Ⅲ小のみならず、市内の学校は学級文庫も充実しており、子どもが借りて行きたくなる図書コーナーの充実に力を注いでいる。また「授業改善に資する学校図書館の運営、活用に関する研修会」の実施を行っている。

市の研究指定は小・中の連携を重視して、小学校、中学校単独では行っていない。平成２４年度から必ず中学校区単位で指定している。全国学力・学習状況調査、県の学習状況調査とも市教委で活用の仕方は提供するが、分析は学校が主体的に行っており、関連する情報も提供している。市教委は情報提供の「ハブ」とであると語っていた。

指導主事訪問は事業として規定の回数以外に、学校からの要望でも実施している。とりわけ教科指導の要望が多く、教科等授業研究会の要請訪問、指導案検討会等、学校で研究する文化が根付いており、そこに指導・関与しているということであった。Ⅲ小の教職員とも友好的関係を築いていることが、学校側の印象からも窺われた。

[文責:富士原 紀絵]

4. D 市立Ⅳ小学校

2014 年 2 月 18 日に D 市教育委員会における指導主事 1 名へのインタビュー、19 日にⅣ小学校の訪問調査を行った（両日とも中西啓喜、富士原紀絵が担当）。Ⅳ小学校では校長と教諭 1 名、指導主事 1 名がインタビューに応じた。6 年生の国語と算数の授業を参観した。

（1）学校のプロフィール

Ⅳ小学校は D 市の中心部からはずれた山間地に立地している。昭和 53 年に○小学校、△小学校、△小学校□分校が統合して発足したことから、校区の広さは東西に約 4 キロ、南北に約 9 キロと広い。学校は丘の高台にあり、目の前は山と畑と住宅に囲まれた自然豊かで静かな環境である。全校児童 213 名、1・2・3・5 学年は一学級（28～36 名の間）、4・6 学年は二学級（各学級約 20 名）、特別支援学級二学級の編制である。教職員数等は 23 名、教諭は 17 名のうち、県からは「指導方法工夫改善加配」（2 年生と 5 年生の算数・体育・理科・外国語活動等で TT と少人数指導を主とする）、「学習支援推進教員」（算数・国語の学習課題の大きい子どもの取り出し指導を主とする）、「生徒支援教員」、「学力アップ非常勤講師」として 4 名、特別に支援を要する子どものために市から 3 名の合計 7 名の加配を受けている。加配が手厚い背景として、長年にわたり地域的に生活基盤に困難を抱える家庭が多く、学校が地域の中核となって人権教育と子どもの学力保障に力を注いできたという経緯がある。加配教員を柔軟に活用しており、今年度は結果的に、単学級学年でも少人数授業が実現しており、全校一学級平均児童数は 25.6 名となっている。また、教員に初任者はおらず、中堅やベテランの教員が多い（50 台が 10 名）のも特徴である。

学校には PTA とは別に「Ⅳ応援隊」という保護者組織があり、校内美化や図書整理といった支援にほぼ毎週活動している。D 市では社会教育課による家庭教育支援チームが組織されており、地域と学校と家庭を結びつけ家庭生活の啓蒙的諸活動を行っており、Ⅳ小でも夏期休業期間に三日間活用している。また、市の福祉課のこども課、民生委員との連携もあり、学習支援的な意味での積極的な地域人材の活用は見られないものの、地域全体で子どもの生活を見守っているという印象である。

平成 25 年度の 6 年生 41 名中 15 名は県立中等学校や私立中学校への進学を希望し、7 名合格しているが、彼らは必ずしも通塾しているわけでもない。家庭は学校を信頼しており協力的で、教師はやりたいことをやりやすい雰囲気であるということであった。

（2）学習指導上での取り組みの特徴

「基礎・基本の徹底」を重視し、毎日 8 時 25 分から 35 分の「朝の学習」では「たしかめプリント」（ドリル）に繰り返し取り組ませたり、プリントやテスト結果を蓄積した「学習ファイル」を個々に作成させ子ども自身が活用して弱点の補強を行っている。この「学習ファイル」は、特に学年が変わるときには前学年での取りこぼしを発見するのに活用したり、夏期休業期間中の補充学習に活用したりと、継続的に使われているのが特徴である。日頃からの形成的な評価を重視しており、担任教諭は日々子どもの学習状況を細やかに的

確に把握することに努めている。

家庭学習としては「自学予習ノート」（自学、自主勉と教師によって呼び方は異なる）を中学年から導入しており、実際には復習的に、自分の苦手なところを克服するドリル的な活用をしたり、授業での疑問点を書いたりしている。子ども自身の自己評価力の形成に力を入れているといえる。提出は義務ではないものの、提出しない子どもはいないということであった。この家庭学習の定着も子どもの基礎・基本の定着に役立っているとみられる。ノートは担任が毎日チェックしコメントを書き込んでおり、これを当然の行為と理解している。学校における子どもの学習成果と家庭学習の成果をともに、的確な子どもの実態把握の上、教師が細かくフォローしているといえる。

Ⅳ小学校での基礎・基本の定着に大きく寄与しているのが少人数指導体制である。特に算数での少人数指導は着実に成果を挙げているということであった。例として挙げられた5年生の算数での少人数指導は学年児童全員を10名程度の少人数に分けており、それも習熟度別では無く、意図的に様々な能力の子どもが混じる、能力均等編成にしている。習熟度別に分けず、またTTよりも少人数指導にする方が細かく子どもの学習を指導することが可能であるとともに、理解度が多様な子どもが一定数纏まっている方が、子ども同士の関わり合い・学び合いも増えるということであった。子どもの編成は固定であるが、単元が終わる毎に教員がローテーションで変わるというシステムをとっており、一人の子どもを複数の教師で理解することにしている。指導教員として担任の他、加配教員と管理職も加わっており、その際、校長は教師の指導をチェックする目的では無く、子どもの様子を把握することに努めている。算数の授業の終わりには確かめプリントを3分間行い、出来ていない子どもは担任と加配教員2名の計3名で放課後に取り出し指導をし、確実にできるまで指導するということである。これら少人数指導と加配教員の有効活用が、Ⅳ小の子どもたちの学習結果にプラスに影響しているのは確かであろう。担任を持つ教員の一人は家庭学習のフォローも含め「これが30人、40人だと難しい」と話している。

また、学習習慣の形成として6年間を見据えた「ノート指導」にも力を入れており、学習のめあて（課題）の明確化と、学習のプロセス、結果として理解したこと（「自分の考えを書く」）、感想、反省を意識的に書かせるようにしている。実際、どの子どものノートも文字は丁寧で見やすく整っていた。

（3）重点課題と校内研修体制での特徴

基礎・基本の定着を重視した学力面での取り組みのみならず、生活指導・人権教育にも力を入れていることで、学校の努力により子どもの生活が安定し、子どもの関係性も良好になっていると見られる。困難な家庭を抱える地域性であるにも関わらず、不登校とカウントされる児童はゼロである。とりわけ平成25年度の6年生はⅣ小では一般的では無い、1年生の時から20名の少人数学級編成であり、このことで子ども同士の関わりが深く仲がよい人間関係が構築されており、生活・生徒指導上の課題に労力が割かれず、学級経営が極めて円滑に運んだ珍しい学年であるということであった。

こうした学年の特徴の把握は校内の教員全体で共有されており、職員会議等の機会をわざわざ設けなくとも、日常的に職員室の中で子どもの情報が共有されており、同僚関係が極めてよい学校であるということであった。重点課題は校務分掌として研究部が主導権を

持って策定・提案するが、押しつけ的では無く、どの学年・学級にも十分意義が共有され、理解されているということである。また、研究部の提案で全学年全学級も学級公開を行うことになっており、教員相互の学び合いが行われている。

今年度の重点課題の一つとしての、上述した「ノート指導」は書くことの力を育てることで自分の考えを明確にし、その上で話すことや聞くことといった言語活動・表現活動を充実させようとする意図のもとで展開されており、着実に実践されていた。学力向上の取り組みの一環としての重点課題である「ノート指導」が言語・表現活動の充実が子どもの豊かなコミュニケーション、人間関係作りにも繋がり、安定的な学校・学級集団作りに連関して寄与している。多くの事細かな重点課題を掲げず、子どもの実態に応じ必要な課題を精査して取り組んでいるという印象である。

教員の研修として、他校の実践を学びに外にでることを校長は積極的に奨励しており、実際、他校の実践から学ぶことは多いということである。研修費用の遣り繰りに困っても、出来るだけ教員に外で学ぶ機会を与えたいということであった。市教委の負担する研修には研究主任が出ているが、そこで学んだ成果（例えば「ノート指導」）は校内の研究実践に着実に活かしている。担任が不在の際には管理職が替わりに入るまでしても、教師に積極的に学校外で学ぶ機会を保障しようとしているのはIV小学校の特徴の一つであろう。

市教委の取り組みとして市内の全小・中学校が力を入れていることの一つに小中一貫教育がある。平成23年度から市内7中学区の全小中学校が取り組み始め、連携型教育課程の研究を進めている。IV小では児童の中学校でのクラブ体験や教員の授業交換（外国語活動と体育）といった、教育課程および学習指導や生徒指導面での定期的な連携活動を推進している。IV小は他にも保育園や幼稚園との連携にも積極的であり「前段階の教育への不満がどんどん減ってきている」と話している。保・幼と中学校との連携も、教員が外に出る機会と見ることが出来る。

なお、市では算数・数学研究会と国語教育研究会という市の教職員への委託事業が展開されており、これまでIV小からは算数で1名、国語で2名（現在の研究主任）指定されているということであった。課題として小中をつなぐためのカリキュラム作りの研究として「書く力」の9年間のカリキュラムの系統表を作るということで平成20年度から23年度まで取り組んでいた。これも現在のIV小の研究に引き継がれ重点課題にも活かされているとみられる。

（４）全国学力調査を含めた各種学力調査の実施と活用状況

全国学力・学習状況調査の他、県では4・5・6年生を対象として学習到達度調査が行われている。これらを組織的・計画的に分析・活用するという校内組織、年間サイクルは組まれていない。全国学力・学習状況調査について、教師主体で学校独自で分析は行い、その結果を受け「今後の取組」を決定し、校長が取りまとめ、秋の定例の職員会議で示している。全国学力・学習状況調査は「子どもに今、必要とされている力」が分かると話しており、分析され活用されてはいるものの、子どもの実態から見いだされる学校の課題と合致するところで活かされているという印象である。

（５）教育委員会の方針と学校との関わり

市教委としてもⅣ小の6年生の全国学力・学習状況調査の結果が「ずばぬけて」良好であることは周知しており、その理由として、この学年の子どもの家庭や生活が比較的安定していたこと、加配がありベテラン教員の指導が有効であったこと等を挙げている。学校の認識とはほぼ一致している。

市教委では平成20年度から市内教員に全国学力・学習状況調査の分析方法の指導を行っていた。教員に分析力がついたところで、それを踏まえて具体的な手立てをどう打てばよいのかの指導に踏みだし、現在は「学力アッププラン」を学校毎に提出させている。これは全職員が教科・領域を問わず、学校全体で取り組むべき学力向上対策を検討させる目的であり、最終的には学校評価の一貫として位置づけている。また、市教委独自の分析は各学校に伝え、学校毎に協議する材料に活用させている。

市教委の指導主事は定期的な訪問の他（6～11・12月に各学校一回。総合的な学習の時間の視察に年一回）、学校の要請に応じて校内研修の講師を引き受けている。また、市教委の取組として「教師の資質向上のための研修会」や放課後や夏期休業期間を活用した「ブラッシュアップ講座」を企画している。

現場にとって効果的とみられるのは、学校の要請で指導主事が電話一本で駆けつけるという関係性である。Ⅳ小学校の研究主任は再々指導を請うそうである。Ⅳ小では指導主事と、とりわけ今年度はノート指導や「書くこと」に焦点化した内実を伴う研究で自発的に結び合い、さらに市教委が進める小中一貫教育の研究で協力し合い、ともに課題に熱心に取り組むことで実践上での効果を上げているとみることができる。

[文責:富士原 紀絵]

5. E 市立 V 中学校

E 市立 V 中学校への訪問調査は 2014 年 2 月 13 日（浜野隆、中島ゆり担当）、校長、副校長、国語科 2 名、数学科 2 名の教諭がインタビューに応じた。3 年生の国語と数学の授業を 2 クラスずつ参観した。翌 14 日に E 市教育委員会における指導企画課長および指導主事 2 名へのインタビューを行った（中島ゆり、富士原紀絵担当）。

1) 学校と子どものプロフィール

V 中学校は生徒数 294 名、各学年 3 クラス、個別支援級 2 クラスの小規模の学校である。

1、2 年は各クラス 30 人前後、3 年は 35～36 人程度である。

教職員は 25 名おり、その他、非常勤講師、スクールカウンセラー、AET が 6 人いる。若い教員が多い。主幹教諭を中心とした 7 人程度の教科の枠を越えたメンターチームを作り、3～4 ヶ月に一度は会議をすることで若い教員を育成している。

V 中学校のある街は鉄道会社が開発した計画都市で、コンビニエンスストアは計画により駅前に数件ある程度である。V 中学は大きな家が建ち並ぶ住宅街の中にある。駅前には塾やその看板が多く見られ教育熱心な街である印象がある。比較的裕福な家庭の子どもが多い中学校である。

近隣の 2 つの小学校からは半数が私立中学校に進学し、公立の V 中学校には残りの半数が入学するという問題がある。生徒を公立学校に呼び込むため、前校長のときから、学力支援等を重点的な課題としている。

地域との連携は、学校・地域コーディネーター、学校運営協議会、PTA の三者を通して行っている。たとえば、キャリア教育の一環としての職場体験、職場インタビュー（ライター、すし屋、豆腐屋、獣医など）、入学試験の面接練習に地域の人が参加しているという例がある。

（2）どのような取り組みに重点をおいているか。

特別支援教育、キャリア教育、地域連携、保健管理の 4 つを重点取組分野として設定している。

学力底上げのためには環境整備のため、学級経営、ユニバーサルデザインに力を入れ、「心の居場所づくり」に力を入れている。昨年度・今年度は市教委の自閉症教育研究実践校として、ユニバーサルデザインの視点を取り入れたわかる授業づくりを研究テーマとして行っている。E 市型小中一貫を行っており、V 小学校と〇小学校に V 中から教員が授業を見に行ったり、両方の小学校からも教員が見に来たりしている。

（3）特徴ある取り組みと教科外、家庭学習の状況

「わかる授業づくり」を目標に、授業の冒頭に「めあて」を明確にするようにしている。見学した授業においても、授業の最初にその時間のねらいが明確に示されていた。

数学と英語で教員加配をしている。数学では現在の 3 年生には 2 年生のときから少人数指導を行い、スタンダードコースとベーシックコースに分かれて授業行っている。ベーシ

ックは基礎基本を重視し、スタンダードはいろいろな角度から問題を考えさせるようにしている。分け方は生徒の希望に沿い、クラスのおよそ3分の2から4分の3がスタンダード、3分の1から4分の1がベーシックコースに参加している。現在の1、2年生は少人数教育ではなくTTを付けている。その他、数学が苦手な生徒に対して昼と放課後15分くらいずつ月に20回程度、計算問題を解かせるような時間を設けている教員もいる。

夏休みに3時間程度、補習学習を行っている。3教科まで選べる希望制にしている。家庭にも補習があることを伝えることで、家庭からのプッシュがあるようになった。その他、数学では夏休みの宿題として20ページ程度の問題を課すが、復習を目的としているもので、それほど難しいものは出していない。

授業中にワークブックを活用することで、発展学習もできるようにしている。数学は、章末テストを一ヶ月半に1度程度行っている。すべて正答率を出し、正答率が悪かったものを期末テストに改めて出題するようにしている。国語については、漢字テストを毎週行っている。また、ノートを提出させ、意欲をはかっている。また、スピーチの機会を作るようにしている。

（４）学校が押さえている現在の中3の特徴とその背景

生徒指導上の問題はないと学校は理解している。V中の生徒はもともと「穏やかな集団」で他の人を受け入れることができる。秩序意識が高く、TPOをわきまえ、教師とも礼儀正しく距離感をとる。夜早く寝たり睡眠時間が長かったりするというわけではないが、生活のリズムがあるように感じる。集中力が高く、合唱コンクールなどの行事も互いに頑張る。このような生徒の特徴は、育ちと地域環境の影響であり、家庭の教育力が高いと学校は理解している。学力については、生徒の9割以上が塾に通っており、学力が高いのは、塾の効果も大きいと述べる。また、生徒は勉強をしなければならないと考えているように見えるという。

とはいえ、学力に全く問題がないわけではなく、A問題に比してB問題は不得手であるという印象がある。このため、表現力、論理的な思考を身につけさせるためミニプレゼンテーションの機会など、公的な発言をする場を作っている。また、学習に対し、個別に配慮を要する子どももあり、底上げをすることでよくなると考えている。

（５）全国学力調査を含めた各種調査の状況とその活用について

全国学力・学習状況調査のほか、E市学力・学習状況調査を平成17年度より実施している。平成21年度からは児童生徒の生活意識調査も行っている。

教育委員会は学力調査の結果を詳細に確認できる分析チャートを発し、各学校に配付している。それをもとに各学校は学力向上アクションプランを作成するよう指示している。

（６）教育委員会が管内学校支援として力を入れていること

E市の規模は大きく、小・中・高・特別支援学校あわせて512校と多くの公立学校が設置されている。市内の地域によって学力水準が「ふたこぶ」に分かれる状況も見られるため、一元的な支援は不適用であり、市では各学校による学力向上への計画（学力向上アクションプラン）が重要だと考えている。小中学校のカリキュラムの接続を大事に考え、E

市型小中一貫として市内の近隣小中学校の交流を促している。

平成 22 年 3 月に策定された「E 市子ども学力向上プログラム」という指針に従い、平成 22 年度より授業力向上（学力向上）の市内に 20～50 校程度の推進校を毎年、設置している。E 市の校長は特色ある学校づくりを実現するために、教員（TA: Talented Teacher Application）を公募し 1 名まで採用できるようにしているが、授業力向上推進校では 2 名を採用することができる。

また同年より E 市の東西南北に四つの学校教育事務所を開所し、指導主事を各小中学校に年に 3 回以上派遣し校長と教員の支援を行っている。その他、IT を活用した「学習ドリル・検定システム」を市教委のイントラネットに作り、小 1 から中 3 までの児童生徒が算数／数学、国語、外国語の学習ドリルを無料で利用し、自分の学力に応じた学習ができるようにしている。

E 市は研究会を充実させてきた歴史があり、この延長として、平成 17 年度に授業力・教師力のアップを目指した授業改善支援センターを市内 4 つの方面に設立した。ここでは、教育情報、相談の機会、講座などを教員に提供している。

教員配置・加配については上記 TA の配置と理科支援員配置を平成 22 年度までは国費、平成 23 年度から国費と市費の両方で配置している。また、今年度からは学校司書配置事業として、28 年度までに全小・中・特別支援学校に配置する予定でいる。その他、児童支援専任、スクールサポートで加配することはあるが、学力支援のための加配は特に行っていない。

家庭教育については、平成 21 年に「学習ガイド」、平成 24 年に「家庭学習応援 BOOK」、平成 25 年に「家庭において大切にしたいこと」を作成し、子どもを通して各家庭に配付している。

（7）教育委員会側での当該学校の理解について

平成 19 年度の全国学力・学習状況調査時には、学力は平均よりは上ではあったが、突出してよかったわけではなかった。しかし、前任の校長が「私立に負けない公立中学校を作る」という意志をもち、学力・授業力向上に熱意をもって、平成 22～24 年度の学力向上推進校となった。この期間、上記のように学力向上の推進を中心になって担う教員を 8 名から 9 名程度採用することで学校が変わったのではないかと教育委員会では推測している。とくに V 中は小規模校であるため、教員が学校の変化を早く反映できたのではないかとということであった。

その他、教育委員会から V 中の特徴として報告されたのは、前校長のときから授業評価アンケートを生徒と保護者に実施していた点、学校運営協議会を毎月開催している点であった。

まとめると、V 中はもともと比較的落ち着いた学校であり生徒指導上の問題はさほどなかった上、地域には講師になり得る人材が豊富であり、潜在的に力が高い地域の中で、前校長及び現校長のリーダーシップと教員の意識が変わったことにより、学力がアップしたのではないかと考えているようであった。

[文責: 中島 ゆり]

6. F市立VI小学校

2014年2月13日にF市教育委員会における学校教育課の担当者2名へのインタビュー、2月27日にVI小学校の訪問調査を行った（13日は山田哲也・中西啓喜、27日は山田哲也・中島ゆりが担当）。VI小学校では、校長、教頭、教務主任、6学年の主任・教諭がインタビューに応じた。6年生の国語と算数の授業を参観した。

（1）学校と子どものプロフィール

VI小学校は、1971年創立・駅から車で10数分の住宅地に位置する児童数759名の大規模校である。町は田畑が住宅地として開発された地域であり、VI小は人口急増に伴い設立された経緯がある。隣接学区には大規模な公営住宅もある。駅からそれほど遠くない便利な場所にあり、戸建ての住宅や団地が立ち並ぶ一方で、学校の近くには川が流れ、農地や神社など古い面影がしのばれるエリアも残っている。総体的には村落の雰囲気を残したのどかな地域である。

近年は少子高齢化を背景に児童数が減少する学校が増えるなか、VI小学校の学区ではその影響は限定的で、いまなお多数の児童が通っている。旧住民と新住民、持ち家・賃貸など多様な社会層が混住する点が学区の特徴である。実際、学校関係者はVI小の学区を様々な社会層が混住する地域と捉えている。経済的に厳しい状況にある家庭は他地域に比べると多く、ひとり親世帯も1クラスに何名かいるという状況である。

他方で、保護者は総じて教育熱心で、経済的に多少厳しくても通塾させる家庭が多いということである。公立の中高一貫校受験者・合格者も多い。6年生の児童の保護者も総じて教育熱心であり、中学受験者・合格者も例年に比べて多いということであった。よい意味で保護者の熱心さが学年全体で共有されているのではないかというのが学年の教師集団による見立てである。

教員数は管理職を含め約30名程度（市費による少人数指導加配教員、学力向上支援員・スクールサポーターも在籍している）。中堅・ベテラン教員の比率が多く、突出したリーダーが存在するというよりは、それぞれが持ち味を発揮してチームで取り組むことが重視されていた。

F市教委は市内25の中学校区を5グループに分け、平成24年度より1グループ（5中学校区）ずつ、2年間で単位に小中学校が連携して学力向上に関する研究開発を行う取り組みを進めている5年間で、25中学校区のすべてで研究が行われる計画である。

平成25年度・26年度は、○中・VI小・△小が「小中一貫教育（学力向上）」の指定を受けて、来年度の発表にむけて研究を進めている。特に力を入れている点は、①家庭学習習慣の周知、②小中で連携し、学校種を越えて継続して学習態度の形成を促す取り組みの充実、である。

校種間連携については、研究指定を受けたことで中学校との関わりが増えた点が近年の変化である。○中はVI小学校と隣接しているが、研究活動を行うまでは「壁が高く」、なかなか交流する機会がなかった。現在も日程調整が難しく一緒に議論する機会は限られているが、研究活動の場で、中学校の先生が子どもをどのように捉えているのか気づく機会が

多く、さまざまな示唆を受けている。おそらく中学校の先生も同様のことを考えているのであろう、とインタビューに応じた教員が連携の効果を振り返っていた。

そして、6年生の児童は「聞く姿勢」が身についており、学年の教師たちは、集団登校で下の学年の面倒をよく見る様子が印象的だと発言していた。

地域との関係は密で、校務分掌に「地域連携部」を設けていることから両者の緊密な関係がうかがえる。クラブ活動に地域の方が指導に入ったり、長期の休みに「昔の遊び」講座を開いたりするなど、地域人材を積極的に活用している。

（２）学校の重点事項

１ 学校の重点的な取り組み

全国学力テスト、県独自のテスト（加えて市の予算で実施されている CRT）の結果から、VI小の児童は記述式問題の正答率が低く、自分の考えを言葉で表現する力が弱いことが明らかになっている。こうした課題を受けて、現在のVI小学校では「表現する力」を重視する授業実践、図書館教育の充実を意識した取り組みがなされている。また、現在の校長が着任してから（管理職は２人とも今年度に着任）、IT 機器の充実にも力を入れており、市から配備された実物投影機を積極的に活用した授業を心がけるようにしている。見学した授業では、国語の教科書を投影する／グループ作業を行う際にキッチンタイマーを投影し課題の時間を示す／算数のプリントを写して解法を共有するなどの工夫が見られた。

２ 重点は校内の誰によって推進されているのか

学校訪問とインタビューを通じて、校長・教頭の管理職が基本的な方針や姿勢を示し、具体的な取り組みの進め方は学年に委ねられている様子を把握できた。6年生の学年主任は女性のベテラン教員で、調整型のリーダーシップを発揮しているように見受けられた。教務主任の男性教員も同じようなタイプのリーダーシップを持ち合わせているようであった。教員インタビュー時に同席していた6年生のクラスを担当する中堅の男性教員は自分の意見をはっきり表明する方で、授業も良いと思ったことは積極的に取り入れる姿勢（たとえば、コの字形に机を配置して学び合いを促す工夫を取り入れるなど）が印象に残っている。お互いの持ち味を発揮しつつ、共通理解を大切にしながら重点課題にチームで取り組む姿勢が特徴的であった。

（３）教科・教科外指導と家庭学習の状況、現在の小学校6年生の学力の特徴

１ 何が学力を上げている要因であると自覚しているのか

今年の6年生は例年と比べると「聞く姿勢」が顕著で、そのことによって教師の指導が効果を発揮し、それが学力向上につながっているのではないかと保護者の教育熱心さも、学校の効果を後押ししているように思われる。6年生の教師たちはそのように学力向上の要因を捉えていた。

F 県では「宅習」（家庭学習の意味）を課すことが一般的で、宿題以外の自主勉強ノートを作成させるように指導している。最近は個別の「宅習」ノートとは別に、クラス全体で共有した宅習ノートを児童で回覧し、それぞれの保護者がサインする試みを行っている。他の人の勉強の様子が分かれると好評で、普段よりも力を入れてノートを作成しているよう

である。

小中連携の研究指定では、保護者向けに自宅学習の手引きを作成・配布し、家庭と連携して学力向上に取り組む試みを開始したが、現段階では手引きを作成したものの、家庭に学校からのメッセージが確実に伝わっているとはいえない状況で、じっくり読んでもらう段階には至っていない。とはいえ、これははじめたばかりの取り組みなので、メッセージを届ける工夫を積み重ねながら連携を密にしてゆきたい。

なお、VI小では4年生から算数の少人数指導を導入しており、単元ごとにプレテストを行って児童自身に学習進度を意識させたうえで、自己申告で「ぐんぐん」コースと「じっくり」コースを選択させている。

訪問時には国語と算数の授業を参観したが、学習目標・内容を明示し、この時間に何を身につけるのかを児童にしっかりと伝えること、子どもたちが自分の考えを表明し、グループやクラス全体で共有する活動が重視されている点、少人数指導にみられるように、それぞれの学習の進度に応じた教材を用いる点などが共通していた。

以上のことが学力向上と関わっているように思われるが、特別なことをしている自覚はなく、表現力を大事にしたいというこちらの指導方針が子どもや保護者とマッチして、成果を上げているのではないかというのが、6学年の教師集団の解釈であった。

（４）全国学力調査を含めた各種学校調査の状況とその活用について

全国学力調査の他に、県では小学校5年生（国語・社会・算数・理科）と中学校2年生（国・社・数・理・英）を対象とした学力調査が実施されている。F市では小4と中1でCRTを実施しており（小学校は国語と算数、中学校は国語・数学・英語）、これらの結果をもとに学力面の課題を把握するなど、学力向上のための基礎資料として活用している。

（５）教育委員会が学校支援として力を入れていること

F市では一般財源や国などの事業（緊急雇用対策事業など）を活用し、平成14年から市費で加配教員（非常勤）を配置している。小学校では算数、中学では数学と英語でTTや習熟度別学習を行っている（教科が指定されている以外の活用方法は学校に委ねられている）。県の他の自治体と比べると、かなり力を入れているという事であった。また、前述の通り「小中一貫」の教育活動を意識して、中学校区を単位とした学力向上の研究指定を行っており、限られた予算で校種間連携を活発にする工夫がなされていた。

（６）教育委員会側での当該学校の理解と関係性について

VI小は特別な学校ではなく、「効果のある学校」として選択されたのは意外であったという認識であった。市教委として特定の学校を手厚く下支えする施策はとっておらず、所管する学校を平等にサポートした結果、様々な要因が重なって良い結果が出たのではないかと解釈していた。市費による少人数加配教員や学力向上支援員、スクールサポーター、司書教諭など、学校に人を手厚く配置する施策を続けてきたことが、こうした成果を生み出す背景にあるようにみられた。

[文責:山田 哲也]

7. G市Ⅶ小学校

2014年2月27日にG市教育委員会における指導主事2名へのインタビュー、28日にⅦ小学校の訪問調査を行った（両日とも浜野隆、富士原紀絵が担当）。Ⅶ小学校では校長、教頭、5名の教諭がインタビューに応じた。6年生の国語と算数の授業を参観した。

（1）学校のプロフィール

Ⅶ小学校はG市の中心部、県立高校や複数の大学が学校の目の前にある、所謂文教地区に立地している。市内中心部でありながら、商業地域といった騒がしい環境では無く、落ち着いた環境にある。全校児童462名、1・2・3・6学年は三学級（各学級20名台）、4・5年は二学級（各学級約35名）、特別支援学級三学級の編成である。『学校要覧』には教職員数等44名とされているが、うち教諭職は29名であり、残り15名の中には校務員やALT等の他、大学の学生による「学習アシスタント」（市が費用を負担、一学年130時間程度配当）が7名含まれており、主として国語や算数の教科でTTや少人数指導で授業支援を行う体制が、さらに大学からは「学習ボランティア」（無料）も派遣されており、大学に近いという立地を十分活用している。校舎の一部に地域包括支援センターが設置されており、高齢者の「生きがい交流センター」が存在することで学社融合が図られ、地域コーディネーターの職員を中心に児童と定期的・頻繁に交流活動を行っている。大学も含め地域に開かれることで、児童が多様な大人に囲まれて育つ環境が整っている。教職員の在任期間は5年以上が6名、うち7～8年勤務も4名おり、学校と地域とのつながりが継続しやすい状況にある。総じて家庭は学校に協力的であり、PTAの他にも保護者ボランティア組織も存在し様々な形で学校を支援している。学習塾に通う児童数は157名、習い事は285名で家庭が子どもの教育に熱心であることがわかる。

（2）特色ある取り組みや重点課題

学校として力を注いでいるのが「縦割り班活動」（集団登校、給食、交流遊び、清掃活動）や4年生からの「愛校活動」（飼育当番、あいさつ運動、朝清掃）を計画的に行うことである。上学年が下学年とともに活動するとともに、愛校活動では各学年間で児童が主体となって活動を継承するプログラムが「校風」として定着している。校内は清潔で児童の態度は礼儀正しく落ち着いており、遅刻も恒常的にほぼ無いとのことで、登校時からの落ち着きが、そのまま授業の雰囲気を持ち込まれている。朝8時から20分間、月・金は朝読書や読み聞かせ、火・水は国語と算数の補習目的のプリント学習を行う「学習タイム」が設定されており、参観した金曜日は登校時からの活動の落ち着きそのままに、どの学級も静かに集中して読書や読み聞かせに臨んでいた。なお、一年生から全学級に学級文庫が設置されている。

平成20年度には文部科学省英語活動等国际理解活動推進事業、平成21・22年度はG市外国語活動研究モデル校、平成23～25年度はG市外国語活動研究推進指定校になり、外国語活動の研究実践に継続して取り組んでいる。その際、単に外国語の知識をつけるのではなく、コミュニケーション能力の質そのものを高めることに重点をおき、外国語活動

のみならず、全教科・領域で他者を意識した表現指導、コミュニケーション活動を導入している。この研究活動の中から話し合い・聞き合いの独特の学習活動のスタイルを生み出し、各教科等において、目的に応じてペアやグループ、全体による話し合い活動を導入している。自分の考えを書く活動にも力を入れており、これらの活動は教育課程全授業時数の半分以上に導入されている。外国語活動の研究を行う中で全教育活動において言語活動の充実を図ろうとしたことがわかる。

こうした学校での生活習慣の定着と外国語活動の校内研究に端を発したコミュニケーション重視の学習スタイルに至った指導改善の取り組みは、学級作りにも活かされ、子ども相互、子どもと教師の良好な関係を築くことに活かされているといえる。

（３）学習指導上での取り組みの特徴

基礎・基本の確実な習得と定着に重点を置き、朝の「学習タイム」では国語と算数のプリント学習の他、児童各自が単元のテストを蓄積した「テストファイル」を持っており、これを活用して大体学期に一度（６月と１１月）は自己評価を行わせ、自分の学習の定着や課題を把握させている。つまり、単元テストは自宅に持ち帰らせたままにしているのではなく、学校に保管されて、自己評価を行う素材になっている。算数では３・４年生ではＴＴ、５年生より習熟度別の少人数指導を導入している。参観した少人数指導の授業では３０人と５人に分かれており習熟度の低い子どもは少なかったが、分け方は子どもの意志も確認して緩やかにしているということであった。夏期休業期間の始まりの三日間を学習相談日とし、基礎・基本の定着に難が見られる子どもを教師が呼び出し個別指導を行っている。

家庭学習として教師の与える毎日の国語と算数の宿題（県教育会が教科書に準拠して編纂している、所謂ドリル）の他、自主学習（テ勉あるいは自主勉と教師によって呼び方は違う）を奨励しており、自主学習ノートを作成・提出させている。これは学習課題を自分で決めて取り組むもので全教科対象、強制では無く努力義務であるものの、５年生は平均年３冊作成しているということであった。子どもには毎日の学校の時間割を書き込む「計画帳」があり、この中には家庭学習で何を行ったかを記す欄があり、保護者に毎日確認してもらうことになっている。保護者に「テストファイル」を見せることもあり、家庭学習をはじめ、子どもの学習状況を保護者も見ることになっている。学校からは４月中旬に全学年の児童向け（低・中・高学年別）、そして保護者向けに「家庭学習の手引き」を出しており、家庭学習の定着に力を入れている。一年生のうちから子どもは宿題を担任に毎朝提出することが定着しており、教師は毎日、全児童の宿題と自主学習のノートをチェックし、コメントを書き込んでいる。教師の間ではこれらの家庭学習の毎日のチェックは特別では無く当然の営みとして認識されている。

また、全授業で「学習課題の明確化」を行い、子どもに授業の目当てを示しているが、これは自主学習を行う際にも自分の学習課題を明確にする上でも活かされているということである。

「学習の過程がわかる」ことを目的とした整ったノートの取り方、文字を美しく丁寧に書く指導も徹底して行われていることが伺われ、参観した授業ではどの児童のノートも見やすく整理されていた。

総じて発展的な学習に力を入れるのではなく、家庭学習を始め、基礎・基本の徹底と、

学校の責任においてその取りこぼしの無いことに大きく力を注いでいることが伺われた。

（４）全国学力・学習状況調査を含めた各種学力調査の実施と活用状況

校務分掌として「学力向上推進主任」を置き「学力向上推進会議」を設置している。なお、県教育委員会では県内全学校に年２回（平成 24 年 2 月から平成 25 年 7 月期、平成 25 年 8 月から平成 26 年 1 月期）の「学力向上推進計画」の提出を義務づけている。「学力向上推進会議」には全教諭がいずれかに属する国語科部会、社会科部会、理科部会、算数科部会からなる「4 教科部会」の主任や研修主任、授業研究部主任、学年主任等と連動し、各種学力調査の分析と、それに基づく「学力向上推進計画」の立案と実施、評価、改善を行っている。

G 市内の小学校は、4 月に市による標準学力検査（CRT。平成 25 年度は 4 年生で国語と算数。平成 16 年度より導入）、全国学力・学習状況調査（6 年生）、7 月に 5、6 年生を対象とした県による「定着度確認テスト」、12 月に 6 年生を対象とした県主催の同テスト、5 年生を対象とした「学力診断調査」が実施されている。これらのテストの結果を学校毎に分析し、学力向上計画を作成、評価、改善する一年間の詳細な予定・サイクルが出来ている。課題の明確化、指導改善の方向性を、これら諸調査を活用して図っている。各調査毎に「課題」や「改善点や対応策」を書き込む「分析シート」のフォーマットができあがっており、ほぼ全教員が調査の分析に関わり確認をする体制が出来ている。調査の多さに負担感を感じている様子は無く、課題が明確になると前向きに受け入れているようであった。

（５）教育委員会の方針と学校との関わり

教育委員会では全国に先駆けて小学校の外国語活動の研究に力を入れていた。Ⅶ小学校はその拠点であり、市の研究指定を受け続けることで研究に必要な充実した環境整備が進んだこと、コミュニケーションや言語能力の質の充実を図った授業改善が進んだことが子どもの学力向上に効を奏した一端として理解しているようであった。また、地域包括支援センターが設置されているといった、子どもが様々な大人と関わる環境がコミュニケーション能力の向上に繋がり、全国学力調査で特に B 問題の結果により影響をもたらしている指摘している。

市教委では個別指導の充実の目的で、「学習支援アシスタント」の予算化した制度を設けて教科の学習支援に力を入れているのも特徴であり、（１）で述べたようにⅦ小学校もその恩恵を受けている点で例外では無い。他、ALT、学校図書館運営支援員（年間 400 時間）、学校生活支援員（障がい児等の支援や外国人・帰国子女への支援）の配置も行っており、Ⅶ小にはそのいずれもが在職している。

また、G 市教委では 2000 年位から特色ある学校作りをしている学校に予算を付けている。申請制であり、学校の規模等で評価するのではなく、あくまで「取り組み」を評価して付けるということである。主として「総合的な学習」等の充実のために使用されることが多く、Ⅶ小でも体験活動で補助を受けているということであった。なお、市教委としては「学力」として決して教科だけでなく、いじめをなくすための心づくり（いじめゼロのミーティング）、学校を活性化する児童生徒のリーダーの育成といった、心の教育にも力を

入れている。

他、市教委では 46 の様々な研修の機会を延べ 172 日実施しており、市の教員全体としてそれらに熱心に参加する教師の割合が高いこと、各校ほぼ 5 年に一回の市教委訪問、今教科等訪問により学校に過度の負担のかからない範囲で学校改善の指導を行っていること、学校の要請に応じて指導主事が学校を訪問する「サポートビジット」制度を作り校内研修や授業計画の作成等、気軽に学校が市教委を活用できるシステムを作っていること、市内でⅦ小が受けている外国語活動研究指定校他、教育課程研究指定校や幼保小中連携推進事業指定校といった研究指定を行っていることなどから、積極的な研修や研究活動の推進により学校の研究能力を高めようとしていることが窺われた。

[文責:富士原 紀絵]

第11章 保護者調査単純集計結果

【集計結果の見方】

- 以下に示すのは、有効回答保護者データの全サンプルウェイトによる集計結果である。
- 表中の数値は母集団割合（百分率）の推定値を表す。
- 表中の数値は小数点以下第2位を四捨五入しているため、択一項目であってもその合計は必ずしも100%とはならない。
- 表中の — はその選択肢に該当する者がいなかったことを表し、0.0 は選択肢に該当する者はいたが、小数点以下第2位を四捨五入した結果0.0%となったことを表す。また、*は当該選択肢が設定されていなかったことを表す。

問1 このアンケート用紙の調査対象となっているお子さんについておたずねします。

(1) お子さんとあなたの続柄を教えてください。

	父親	母親	祖父	祖母	その他	誤記入	無回答	全体
小学校	7.2	91.5	0.1	0.5	0.2	0.2	0.3	100.0
中学校	8.0	90.1	0.1	0.6	0.3	0.3	0.6	100.0

(2) お子さんからみた場合の兄弟姉妹の人数を□内に記入してください。

：兄

	0人	1人	2人	3人以上	誤記入	無回答	全体
小学校	70.1	24.7	3.9	0.6	0.1	0.7	100.0
中学校	68.8	25.3	4.5	0.5	0.0	0.9	100.0

：姉

	0人	1人	2人	3人以上	誤記入	無回答	全体
小学校	71.8	23.5	3.3	0.4	0.1	0.8	100.0
中学校	70.5	24.2	3.7	0.5	0.0	1.0	100.0

：弟

	0人	1人	2人	3人以上	誤記入	無回答	全体
小学校	70.3	25.1	3.4	0.3	0.1	0.7	100.0
中学校	69.1	25.7	3.8	0.4	0.0	1.0	100.0

：妹

	0人	1人	2人	3人以上	誤記入	無回答	全体
小学校	71.4	24.1	3.3	0.3	0.1	0.8	100.0
中学校	70.9	24.7	3.1	0.3	0.0	1.0	100.0

(3) 現在、お子さんと一緒に住んでいる方すべてに○をつけてください。

複数回答	父親	母親	祖父	祖母	兄	姉	弟	妹	その他の親族	親族以外の同居者	誤記入	無回答	全体
小学校	86.4	96.6	15.5	21.1	27.2	25.9	28.5	27.2	3.9	0.4	—	0.4	100.0
中学校	83.4	95.6	15.6	23.1	24.7	24.1	29.4	27.6	3.3	0.5	—	0.6	100.0

(4) あなたは、一緒に住んでいる方と、普段、お子さんの様子について話をしますか。

	よく話をする	時々話をする	あまり話をしない	まったく話をしない	誤記入	無回答	全 体
小学校	75.1	20.2	2.6	0.8	0.0	1.4	100.0
中学校	67.8	25.9	3.7	0.8	0.0	1.8	100.0

(5) ご家庭で、お子さんの教育に積極的に関わっていらっしゃる方はどなたですか。

複数回答	父親	母親	祖父	祖母	兄	姉	その他	誤記入	無回答	全 体
小学校	51.1	93.5	4.7	12.1	2.7	3.5	1.5	0.0	0.7	100.0
中学校	46.5	92.8	2.8	7.7	2.7	4.0	1.6	0.0	1.1	100.0

問2 お子さんの普段の様子について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

1 よく本を読んでいる

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	22.1	29.0	32.8	15.5	0.0	0.6	100.0
中学校	17.2	26.4	34.8	20.5	0.1	1.1	100.0

2 親が言わなくても、自分から勉強している

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	24.1	38.5	27.1	9.9	0.1	0.4	100.0
中学校	19.7	34.3	30.2	14.9	0.1	0.8	100.0

3 学校に行くことを楽しみにしている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	48.8	40.8	8.3	1.5	0.1	0.5	100.0
中学校	37.6	44.9	13.7	2.8	0.2	0.9	100.0

4 学校の先生を信頼している

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	37.4	48.7	10.8	2.3	0.1	0.7	100.0
中学校	18.1	55.2	20.9	4.2	0.1	1.4	100.0

5 仲の良い友達がいる

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	73.2	22.7	3.2	0.5	0.1	0.3	100.0
中学校	69.0	25.6	3.8	0.9	0.1	0.7	100.0

問3 あなたのご家庭では、お子さんに対して、次のことをしていますか。

1 子どもが決まった時刻に起きよう（起こすよう）にしている

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	73.6	23.2	2.3	0.7	0.0	0.2	100.0
中学校	68.0	26.5	3.8	1.4	0.0	0.3	100.0

2 子どもを決まった時刻に寝かせるようにしている

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	39.4	42.4	15.5	2.5	0.0	0.2	100.0
中学校	16.0	41.2	32.2	10.1	0.1	0.4	100.0

3 毎日子どもに朝食を食べさせている

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	89.6	7.8	2.0	0.4	0.1	0.1	100.0
中学校	83.6	11.0	3.8	1.1	0.1	0.4	100.0

4 平日、夕食を一緒に食べている

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	74.7	16.9	5.8	2.4	0.1	0.1	100.0
中学校	61.6	25.1	9.8	3.0	0.1	0.4	100.0

5 家事を手伝わせるなど家族の一員としての役割を与えている

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	40.1	37.9	18.4	3.3	0.0	0.2	100.0
中学校	28.7	34.9	28.7	7.3	0.1	0.4	100.0

6 自分で出来ることは自分でさせている

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	58.4	36.5	4.7	0.2	0.0	0.2	100.0
中学校	50.5	40.1	8.3	0.7	0.0	0.3	100.0

7 子どものプライバシーを尊重している

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	28.4	57.9	12.3	0.9	0.1	0.5	100.0
中学校	32.3	58.7	7.8	0.6	0.1	0.5	100.0

8 テレビゲーム（コンピューターゲーム、携帯式のゲームも含む）で遊ぶ時間を限定している

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	テレビゲームを持たせていない	誤記入	無回答	全 体
小学校	24.8	33.9	26.6	9.5	4.7	0.1	0.3	100.0
中学校	13.7	27.1	33.4	17.3	7.7	0.2	0.6	100.0

9 携帯電話やスマートフォンの使い方についてルールや約束をつくっている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	携帯電話やスマートフォンを持たせていない	誤記入	無回答	全 体
小学校	24.0	14.9	4.0	1.4	55.0	0.3	0.3	100.0
中学校	24.4	28.2	10.8	4.3	31.6	0.2	0.6	100.0

10 子どものよいところをほめるなどして自信を持たせるようにしている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	35.8	53.6	9.6	0.4	0.0	0.5	100.0
中学校	29.2	56.1	13.2	0.9	0.1	0.7	100.0

11 子どもが悪いことをしたらきちんと叱っている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	77.9	21.0	0.6	0.2	0.0	0.2	100.0
中学校	70.6	27.5	1.2	0.2	0.1	0.4	100.0

12 子どもに本や新聞を読むようにすすめている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	29.0	40.1	25.7	4.9	0.0	0.3	100.0
中学校	22.3	39.4	30.4	7.4	0.1	0.4	100.0

13 子どもと読んだ本の感想を話し合ったりしている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	10.2	28.4	44.8	16.2	0.0	0.5	100.0
中学校	8.1	21.6	45.9	23.6	0.0	0.6	100.0

14 子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	39.6	33.7	20.8	5.4	0.2	0.3	100.0
中学校	39.8	33.0	21.0	5.7	0.1	0.4	100.0

15 普段、子どもの勉強をみている

	あてはまる	どちらかとい えば、あては まる	どちらかとい えば、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	17.1	41.8	33.4	7.3	0.1	0.3	100.0
中学校	5.5	21.6	48.2	24.1	0.1	0.5	100.0

16 子どもに「勉強をしなさい」とよく言っている

	あてはまる	どちらかとい えば、あては まる	どちらかとい えば、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	23.3	36.3	28.6	11.4	0.1	0.3	100.0
中学校	22.5	37.4	27.5	12.0	0.1	0.5	100.0

17 計画的に勉強するよう子どもにうながしている

	あてはまる	どちらかとい えば、あては まる	どちらかとい えば、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	22.8	47.0	22.7	6.8	0.1	0.5	100.0
中学校	20.8	49.6	21.7	7.4	0.1	0.5	100.0

18 子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している

	あてはまる	どちらかとい えば、あては まる	どちらかとい えば、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	16.4	23.4	40.6	19.2	0.1	0.4	100.0
中学校	9.9	20.8	45.6	23.3	0.0	0.5	100.0

19 子どもが自然に触れる機会をつくっている

	あてはまる	どちらかとい えば、あ てはまる	どちらかとい えば、あ てはまらな い	あてはまら ない	機会をつく らなくても、自然に 触れている	誤記入	無回答	全 体
小学校	23.1	38.7	27.0	4.5	6.2	0.1	0.4	100.0
中学校	12.8	31.9	37.2	11.1	6.2	0.1	0.6	100.0

20 お子さんに生き物や植物の世話をさせていますか。

	させている	時々させてい る	あまりさせて いない	させていない	誤記入	無回答	全 体
小学校	27.8	26.9	20.5	24.5	0.0	0.2	100.0
中学校	20.1	21.3	20.0	38.2	0.0	0.4	100.0

21 お子さんにお小遣いを渡していますか。

	決まった額 を定期的に 渡している	必要なとき に、必要な 金額を渡し ている	学校の成績 が良かった ときやお手 伝いをし てくれたとき などに、ご ほうびとし て渡してい る	現金を渡す ことはない	その他	誤記入	無回答	全 体
小学校	34.7	39.7	13.1	5.6	4.3	2.4	0.1	100.0
中学校	48.7	40.8	3.8	1.8	2.7	1.9	0.2	100.0

問4 あなたのご家庭では、お子さんと一緒に次の施設にどれくらい行きますか。

1 美術館や劇場

	月に1回以上	2～3か月に1回程度	半年に1回程度	1年に1回程度	2～3年に1回程度	ほとんど行かない	行ったことがない	近隣に美術館や劇場がないため行くことができない	誤記入	無回答	全体
小学校	0.4	5.1	12.0	16.6	8.8	33.1	16.5	7.1	0.3	0.3	100.0
中学校	0.2	2.7	7.2	13.7	9.2	39.6	17.6	9.0	0.3	0.5	100.0

2 博物館や科学館

	月に1回以上	2～3か月に1回程度	半年に1回程度	1年に1回程度	2～3年に1回程度	ほとんど行かない	行ったことがない	近隣に博物館や科学館がないため行くことができない	誤記入	無回答	全体
小学校	0.3	3.9	11.1	22.8	15.9	29.9	8.9	6.8	0.2	0.3	100.0
中学校	0.1	0.6	3.3	11.6	15.6	44.7	12.7	10.6	0.3	0.5	100.0

3 図書館

	月に1回以上	2～3か月に1回程度	半年に1回程度	1年に1回程度	2～3年に1回程度	ほとんど行かない	行ったことがない	近隣に図書館がないため行くことができない	誤記入	無回答	全体
小学校	10.3	16.4	15.8	13.7	4.4	28.9	8.3	1.8	0.1	0.2	100.0
中学校	3.1	6.2	8.3	10.9	6.4	50.1	12.6	1.8	0.1	0.5	100.0

問5 あなたは日頃の生活の中で、お子さんと次のような話をしますか。

1 子どもから学校での出来事について話を聞いている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全体
小学校	59.6	34.9	4.8	0.5	0.0	0.2	100.0
中学校	46.8	41.1	10.2	1.2	0.1	0.5	100.0

2 子どもと勉強や成績のことについて話をする

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全体
小学校	39.6	45.8	13.3	1.1	0.0	0.3	100.0
中学校	45.5	45.6	7.5	0.7	0.0	0.5	100.0

3 子どもと将来や進路についての話をする

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	30.1	44.9	22.2	2.3	0.0	0.5	100.0
中学校	43.9	46.8	8.1	0.5	0.0	0.6	100.0

4 子どもと友達のことについて話をする

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	55.5	39.8	3.9	0.3	0.1	0.4	100.0
中学校	44.6	43.8	9.8	1.0	0.1	0.7	100.0

5 子どもと社会の出来事やニュースについて話をする

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	25.5	48.1	23.0	2.9	0.1	0.3	100.0
中学校	23.8	48.2	24.3	2.9	0.0	0.7	100.0

6 子どもの心配事や悩み事の相談によく乗っている

	あてはまる	どちらかとい えは、あては まる	どちらかとい えは、あては まらない	あてはまらな い	誤記入	無回答	全 体
小学校	32.2	50.8	14.9	1.6	0.0	0.4	100.0
中学校	24.2	48.2	24.0	2.9	0.1	0.7	100.0

問6 あなたがお子さんと一緒に何かをしたり、相手をしたりしている時間は、1日あたり平均すると、だいたいどれくらいになりますか。

平日

	0～15 分未満	15分～ 30分未 満	30分～ 1時間未 満	1時間～ 2時間未 満	2時間～ 3時間未 満	3時間～ 4時間未 満	4時間以 上	誤記入	無回答	全 体
小学校	3.6	11.8	23.0	25.7	18.0	9.6	7.1	0.1	1.1	100.0
中学校	6.6	15.3	26.9	26.4	14.0	5.7	3.6	0.1	1.4	100.0

休日

	2時間未 満	2時間～ 4時間未 満	4時間～ 6時間未 満	6時間～ 8時間未 満	8時間～ 10時間 未満	10時間 以上	誤記入	無回答	全 体
小学校	18.5	24.6	20.9	12.8	7.5	10.8	0.1	4.8	100.0
中学校	35.2	27.6	16.0	7.6	3.3	3.3	0.1	7.0	100.0

問7 お子さんの土曜日の過ごし方についておたずねします。

(1) あなたのお子さんは、土曜日に何をして過ごすことが多いですか。

複数回答	学校の部活動に参加している	学習塾など学校や家以外の場所で勉強している	習い事やスポーツ、地域の活動に参加している	家で勉強や読書をしている	家でテレビやビデオ・DVDを見たり、ゲームをしたりしている	家族と過ごしている	友達と遊んでいる	その他	誤記入	無回答	全 体
------	---------------	-----------------------	-----------------------	--------------	-------------------------------	-----------	----------	-----	-----	-----	-----

：午前

小学校	*	4.0	37.1	34.9	53.4	53.7	25.3	4.4	0.4	0.2	100.0
中学校	71.2	4.5	8.2	18.7	42.6	31.5	22.8	5.7	0.6	0.5	100.0

：午後

小学校	*	7.5	37.9	19.4	49.4	57.0	46.9	3.7	0.5	0.3	100.0
中学校	44.4	19.9	11.5	22.6	50.3	37.8	44.1	3.5	0.9	0.6	100.0

(2) お子さんに、土曜日にどのような過ごし方をしてほしいと思いますか。

複数回答	学校で授業を受ける	学校の部活動に参加する	学習塾など学校や家以外の場所で勉強する	習い事やスポーツ、地域の活動に参加する	家で勉強や読書をする	家で休養する	家族と過ごす	友達と遊ぶ	その他	誤記入	無回答	全 体
------	-----------	-------------	---------------------	---------------------	------------	--------	--------	-------	-----	-----	-----	-----

：午前

小学校	37.6	*	6.0	39.3	35.7	20.9	38.2	25.7	1.7	0.1	0.5	100.0
中学校	38.2	55.1	7.7	13.8	30.5	21.1	22.8	17.7	1.6	0.4	1.1	100.0

：午後

小学校	4.9	*	6.7	42.8	23.8	27.1	56.0	55.5	1.9	0.2	0.6	100.0
中学校	8.5	38.2	15.5	17.3	34.8	29.2	37.7	42.3	1.8	0.5	1.3	100.0

問8 お子さんの将来のことについておたずねします。

(1) あなたは、お子さんにどの段階の学校まで進んでほしいと思っていますか。

	中学校まで	高校まで	専門学校・各種学校まで	短期大学・高等専門学校まで	大学まで	大学院まで	その他	分からない	誤記入	無回答	全 体
小学校	0.1	16.0	15.3	6.2	54.1	1.9	2.0	3.7	0.4	0.3	100.0
中学校	0.1	19.8	16.7	6.1	50.0	1.7	1.6	3.1	0.4	0.5	100.0

(2) あなたが(1)のようにお考えになる理由は何ですか。

	子どもがそう希望しているから	一般的な進路だと思うから	子どもの学力から考えて	保護者としての希望	家庭に経済的な余裕がないから	その他	特に理由はない	誤記入	無回答	全 体
小学校	17.0	17.4	7.4	36.8	4.9	8.6	5.0	0.5	2.4	100.0
中学校	29.0	13.9	10.2	27.8	5.5	6.7	3.1	0.7	3.1	100.0

問9 あなたは、次のことについて、どのように考えていますか。

1 学校生活を楽しめれば、良い成績をとることにはこだわらない

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全体
小学校	13.3	42.8	34.5	8.7	0.0	0.7	100.0
中学校	8.6	38.7	41.0	10.6	0.1	1.0	100.0

2 子どもの将来を考えると、学習塾や習い事に通わせないと心配である

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全体
小学校	19.2	41.3	28.4	10.3	0.0	0.7	100.0
中学校	22.6	41.6	24.9	9.9	0.1	0.9	100.0

3 子どもにはできるだけ高い学歴を身につけさせたい

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全体
小学校	16.3	40.2	32.7	9.9	0.1	0.8	100.0
中学校	15.0	39.6	34.0	10.2	0.1	1.1	100.0

問10 あなたのご家庭では、お子さんの教育について、次のことをどれくらい重視していますか。

1 子どもが自立できるようにすること

	重視している	どちらかといえば、重視している	どちらかといえば、重視していない	重視していない	誤記入	無回答	全体
小学校	61.3	35.5	2.5	0.2	0.0	0.6	100.0
中学校	60.7	35.6	2.7	0.1	0.0	0.8	100.0

2 人の気持ちが分かる人間になること

	重視している	どちらかといえば、重視している	どちらかといえば、重視していない	重視していない	誤記入	無回答	全体
小学校	80.5	18.6	0.3	0.0	0.0	0.6	100.0
中学校	75.8	22.6	0.7	0.0	0.0	0.9	100.0

3 自分の意見をはっきり言えるようになること

	重視している	どちらかといえば、重視している	どちらかといえば、重視していない	重視していない	誤記入	無回答	全体
小学校	63.4	34.0	1.8	0.1	0.0	0.7	100.0
中学校	57.3	38.9	2.7	0.1	0.0	1.0	100.0

4 将来の夢や目標に向かって努力すること

	重視している	どちらかといえば、重視している	どちらかといえば、重視していない	重視していない	誤記入	無回答	全体
小学校	61.2	34.4	3.6	0.2	0.0	0.6	100.0
中学校	62.2	34.6	2.2	0.1	0.0	0.9	100.0

問11 お子さんの教育費についておたずねします。

(1) このアンケート用紙の調査対象となっているお子さん1人について、学校以外の教育(学習塾や習い事)にかける1か月あたりの平均の支出はどれくらいですか。

	支出は まったく ない	5千円 未満	5千円 以上～ 1万円 未満	1万円 以上～ 1万5 千円未 満	1万5 千円以 上～2 万円未 満	2万円 以上～ 2万5 千円未 満	2万5 千円以 上～3 万円未 満	3万円 以上～ 5万円 未満	5万円 以上	誤記入	無回答	全 体
小学校	13.2	13.9	23.3	17.1	11.0	7.2	4.5	5.5	3.8	0.0	0.4	100.0
中学校	16.4	6.4	12.3	9.1	10.4	13.0	12.6	16.2	2.8	0.1	0.8	100.0

(2) このアンケート用紙の調査対象となっているお子さん1人の教育にかかる支出が家計に与える負担はどれくらいですか。

	とても負担に 感じる	やや負担に感 じる	あまり負担に 感じない	まったく負担 に感じない	誤記入	無回答	全 体
小学校	9.9	38.3	38.7	12.0	0.0	1.0	100.0
中学校	19.8	42.8	27.3	8.7	0.0	1.4	100.0

問12 あなたは、お子さんが通われている学校の教育について、どのように考えていますか。

(1) あなたは、学校の教育目標やその達成に向けた方策を知っていますか。

	知っている	知らない	誤記入	無回答	全 体
小学校	59.4	39.8	0.0	0.8	100.0
中学校	50.6	47.9	0.0	1.5	100.0

(2) (1) で1と回答した方のみにおたずねします。(2と回答した方は、次の質問に進んでください。)

学校の教育目標やその達成に向けた方策について、共感できていますか。

	共感できている	どちらかとい えば、共感で きている	どちらかとい えば、共感で きない	共感できない	誤記入	無回答	全 体
小学校	38.3	58.8	2.0	0.3	—	0.6	100.0
中学校	30.0	64.9	3.5	0.8	0.0	0.8	100.0

(3)あなたが、お子さんの通っている学校に期待する教育や指導は何ですか。

複数回答	教科の 学力を のばす	学習意 欲を高 める	他人と のコミ ュニケ ーショ ン能力 を高め る	規範意 識や他 人を思 いやる 心を育 む	将来の 進路や 職業を 考えさ せる	体力や スポー ツの能 力を向 上させ る	健康や 食につ いて教 える	コンピ ュータ を活用 する能 力を育 てる	上記の 項目以 上	誤記入	無回答	全 体
小学校	43.2	74.2	82.1	76.1	22.4	49.0	25.9	17.0	1.6	—	1.2	100.0
中学校	49.9	73.3	74.2	68.7	47.0	40.7	16.6	13.9	1.8	—	2.0	100.0

(4) (3) で○をつけたことについておたずねします。
学校は、全体として期待に答えてくれていると思いますか。

	そう思う	どちらかとい えば、そう思 う	どちらかとい えば、そう思 わない	そう思わない	誤記入	無回答	全 体
小学校	11.5	66.7	16.6	2.7	0.0	2.6	100.0
中学校	7.7	58.3	25.1	4.5	0.1	4.3	100.0

問13 お子さんが通われている学校の取組などについておたずねします。

1 学校や学級の教育活動に関する情報提供（学校のホームページ、学校だよりや学級だよりなど）は役に立っている

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	36.2	49.7	11.4	2.0	0.0	0.7	100.0
中学校	24.2	52.9	17.8	3.6	0.0	1.4	100.0

2 学校は、学力調査の結果などを使って、学校の学力の状況について説明してくれる

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	13.5	42.0	34.1	8.9	0.1	1.4	100.0
中学校	12.3	46.6	32.4	6.7	0.1	2.0	100.0

3 学校は、家での学習の仕方を教えてくれる

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	6.3	34.8	46.0	11.3	0.1	1.6	100.0
中学校	3.9	31.5	49.4	12.9	0.1	2.3	100.0

4 学校は、保護者や地域の要望に適切に対応してくれる

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	11.4	61.2	21.3	3.8	0.1	2.1	100.0
中学校	6.6	54.7	29.8	5.5	0.1	3.4	100.0

5 子どもの教育について、学校の先生に相談したり、要望を伝えたりしやすい

	あてはまる	どちらかといえば、あてはまる	どちらかといえば、あてはまらない	あてはまらない	誤記入	無回答	全 体
小学校	17.8	49.0	25.9	5.9	0.1	1.3	100.0
中学校	9.9	43.6	35.1	9.2	0.1	2.2	100.0

問14 あなたは、次のようなことをどの程度していますか。

1 授業参観や運動会などの学校行事への参加

	よくする	時々する	あまりしない	まったくしない	誤記入	無回答	全 体
小学校	79.7	17.1	2.7	0.2	0.0	0.4	100.0
中学校	49.0	36.1	11.9	2.4	0.1	0.7	100.0

2 ボランティアでの学校の支援

	よくする	時々する	あまりしない	まったくしない	誤記入	無回答	全 体
小学校	12.7	36.9	37.4	12.0	0.1	0.9	100.0
中学校	8.6	30.6	41.3	18.0	0.0	1.4	100.0

問15 次のことは、あなたにどれくらいあてはまりますか。

(1) 地域の行事にお子さんと一緒に参加していますか。

	よく参加している	時々参加している	あまり参加していない	まったく参加していない	誤記入	無回答	全 体
小学校	22.8	43.0	25.2	8.6	0.0	0.4	100.0
中学校	8.7	30.3	38.8	21.1	0.0	1.0	100.0

(2) 子育てや教育についての悩みを相談できる友人・知人はいますか。

	たくさんいる	ある程度いる	あまりいない	まったくない	誤記入	無回答	全 体
小学校	16.0	67.2	14.2	1.6	0.0	1.0	100.0
中学校	13.5	67.2	16.3	2.3	0.0	0.7	100.0

(3) 地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもたちの教育に関わってくれる人が多いと思いますか。

	そう思う	どちらかといえば、そう思う	どちらかといえば、そう思わない	そう思わない	誤記入	無回答	全 体
小学校	23.7	51.7	19.5	3.7	0.0	1.4	100.0
中学校	14.0	48.9	29.7	5.5	0.0	1.9	100.0

問16 次のことは、あなたにどれくらいあてはまりますか。

(1) 普段、仕事や家庭に関すること以外で取り組んでいることはありますか。

複数回答	PTA活動などの学校に関わる活動	自治会・子ども会・青少年健全育成などの地域活動	1、2以外のボランティア活動	スポーツや趣味を楽しむ活動	資格や免許を取得するための学習	その他	誤記入	無回答	全 体
小学校	47.9	39.4	5.3	32.0	9.4	9.4	—	12.0	100.0
中学校	42.8	26.3	5.9	29.2	10.3	11.9	—	17.4	100.0

(2) あなたは、規則正しい生活を心がけていますか。

	心がけている	どちらかといえば、心がけている	どちらかといえば、心がけていない	心がけていない	誤記入	無回答	全 体
小学校	37.8	52.7	7.4	1.2	0.0	1.0	100.0
中学校	38.3	52.2	7.8	1.1	0.0	0.6	100.0

(3) 地域や社会で起こっている問題や課題、出来事に関心がありますか。

	関心がある	どちらかといえば、関心がある	どちらかといえば、関心がない	関心がない	誤記入	無回答	全 体
小学校	37.8	52.7	7.6	0.7	0.0	1.1	100.0
中学校	37.1	53.4	7.9	0.8	0.0	0.8	100.0

問17 あなたは、次のことをどの程度しますか。

1 本を読む（漫画や雑誌は除きます。「本」には電子書籍も含みます。）

	よくする	時々する	あまりしない	まったくしない	誤記入	無回答	全体
小学校	18.6	34.5	34.0	11.4	0.0	1.4	100.0
中学校	18.9	34.2	33.3	12.3	0.0	1.2	100.0

2 テレビやインターネットで政治経済や社会問題に関するニュースを見る

	よくする	時々する	あまりしない	まったくしない	誤記入	無回答	全体
小学校	47.3	39.8	10.0	1.7	0.0	1.1	100.0
中学校	46.5	40.3	10.2	2.0	0.0	0.9	100.0

3 新聞の政治経済や社会問題に関する記事を読む

	よくする	時々する	あまりしない	まったくしない	誤記入	無回答	全体
小学校	24.9	36.5	25.3	11.9	0.1	1.3	100.0
中学校	26.2	38.2	24.3	10.3	0.0	1.0	100.0

問18 ご家族のことについておたずねします。

(1) お子さんの父親（または父親にかわる方）の年齢を教えてください。

	24歳以下	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～59歳	60歳以上	誤記入	無回答	全体
小学校	0.0	0.3	4.0	19.1	33.8	22.3	9.7	0.9	0.0	9.9	100.0
中学校	0.0	0.1	1.1	8.3	27.3	29.9	19.7	1.5	0.0	12.2	100.0

(2) お子さんの母親（または母親にかわる方）の年齢を教えてください。

	24歳以下	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～59歳	60歳以上	誤記入	無回答	全体
小学校	0.0	0.5	7.1	28.9	40.2	16.8	2.9	0.3	0.0	3.2	100.0
中学校	0.0	0.1	1.8	15.4	40.3	29.3	8.8	0.4	0.0	3.9	100.0

(3) お子さんの父親（または父親にかわる方）の現在の仕事について教えてください。

	常勤職員	非常勤職員	自営業・家業手伝い	パート・アルバイト	無職	その他	誤記入	無回答	全体
小学校	71.5	1.1	14.6	0.9	0.9	0.7	0.1	10.4	100.0
中学校	68.7	1.0	14.7	0.9	1.1	0.8	0.2	12.8	100.0

(4) お子さんの母親（または母親にかわる方）の現在の仕事について教えてください。

	常勤職員	非常勤職員	自営業・家業手伝い	パート・アルバイト	無職	その他	誤記入	無回答	全体
小学校	21.3	3.6	7.7	41.8	20.9	0.7	0.3	3.5	100.0
中学校	21.6	4.0	8.1	45.0	15.9	0.8	0.3	4.2	100.0

(5) あなたのご家族全体の世帯収入（税込年収）は次のどれにあてはまりますか。

	200万円未満	200万円以上～300万円未満	300万円以上～400万円未満	400万円以上～500万円未満	500万円以上～600万円未満	600万円以上～700万円未満	700万円以上～800万円未満	800万円以上～900万円未満	900万円以上～1000万円未満	1000万円以上～1200万円未満	1200万円以上～1500万円未満	1500万円以上	誤記入	無回答	全 体
小学校	6.2	7.6	11.6	13.7	12.9	10.9	9.6	5.8	4.6	4.9	2.4	1.9	0.0	7.9	100.0
中学校	6.9	7.9	10.8	12.1	12.6	11.1	9.3	6.4	5.0	5.5	2.5	1.3	0.1	8.5	100.0

(6) お子さんの父親（または父親にかわる方）の最終学歴についておたずねします。

	小学校・中学校	高等学校	専門学校・各種学校	短期大学・高等専門学校	大学	大学院	その他	誤記入	無回答	全 体
小学校	5.5	36.1	12.6	3.4	28.5	3.1	0.2	0.1	10.5	100.0
中学校	5.3	38.6	10.5	3.1	27.4	2.0	0.1	0.1	12.9	100.0

(7) お子さんの母親（または母親にかわる方）の最終学歴についておたずねします。

	小学校・中学校	高等学校	専門学校・各種学校	短期大学・高等専門学校	大学	大学院	その他	誤記入	無回答	全 体
小学校	3.1	39.2	17.5	22.7	12.7	0.7	0.1	0.1	3.9	100.0
中学校	3.5	43.8	16.6	20.9	10.0	0.3	0.1	0.1	4.6	100.0

執筆者一覧（執筆順）

耳塚 寛明（お茶の水女子大学）	序章、第4章（1）
浜野 隆（お茶の水女子大学）	序章、第2章（1）、第5章
垂見 裕子（早稲田大学）	第1章、第2章（2）、第4章（2）、第6章
山田 哲也（一橋大学）	第3章（1）
中島 ゆり（お茶の水女子大学）	第3章（2）
中西 啓喜（お茶の水女子大学）	第4章（1）、第6章
富士原紀絵（お茶の水女子大学）	第7章、第10章
土屋 隆裕（統計数理研究所）	第8章、第9章